反逆の勇者と道具袋

ストック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
反逆の勇者と道具袋

【Ｎコード】
Ｎ３９７８Ｘ

【作者名】
ストック

【あらすじ】
前の勇者が集めた金銀財宝や装備品を、いきなり奪われて魔王討伐の旅をしろだって?手元に残ったのは道具袋のみ。これでどうやれっていうんだよ・・・。
一般人からまったく成長しないでいきなり魔王の前に立たされる勇者。使えるのは道具袋のみです。

召喚

あれ・・・？ここはどこだ？

目が覚めたら、いつのまにか知らない部屋だった。
おかしい。
いつものように自分の部屋で寝ていたのに。

寝ぼけた頭で現状確認する。
俺は菅井真一。１７歳。
両親と妹の４人暮らし。ごくごく平凡な高校二年生。
１５歳の妹晴美はアイドルとして大人気ブレイク中。ここだけが一般と違うとこだが、俺は何の能力もないし。

しかし、ここはどこだ？
俺の部屋はこんなに広くないし豪華でもない。
ベットなんか天蓋つきのキングサイズだし。

考え込んでいたら、ドアが開いて白いドレスを着た美少女と、メイド服を着た少女が入ってきた。
「お寝覚めになりましたか？　初めてお目にかかります。勇者様」
満面の笑みで話しかけてきた。

「勇者様？」
「はい。貴方様は、この世界を救う運命の勇者様。私は貴方に忠誠をささげます。申し遅れました。私はこのフリージア皇国第四王女、メルトと申します。貴方様のようなすばらしい方を召喚できて誇りに思います」
「フリージア皇国？第四王女？そんな国聞いた事もないけど？」

「はい。それは当然です。異世界から魔力が強く、勇者として才能がある方を召喚させていただきました。失礼ですが、この袋を開けていただけませんでしょうか？」

メルトは薄汚れた巾着袋を差し出す。ちょうど持ち歩けるくらいの大きさだが、中には何も入っていそうにない。

「何も入ってないみたいだが・・うわ！！」

袋を開けたとたん、空中に魔方陣が浮かび上がった。

「おお・・やはり勇者様。その勇者の袋は主と認めた者にしかその中身を取り出せないようになっております。その魔方陣に手を入れて、勇者にふさわしい装備を取り出すよう念じて見てください」

言われるままに念じてみる。すると、金色のフルプレートがでて、真一の体に装着された。

「なんだか夢を見ているようだな・・いや、これはきっと夢だ。寝よう」

現実逃避をしてベッドにもぐりこもうとしたが、鎧が邪魔で苦しい。

「ねえ、この鎧なんとかならないの？重くて邪魔なんだけど」

「あっ。はい。すぐ外させていただきます。ミル、お願い」

側に控えていたミルと呼ばれた少女の手を借りて鎧を脱ぐ。

「あの・・勇者様。お手数ですが、アルを全額と念じて袋から出てくるか試していただけませんか？」

「アル？まあいいけど。それじゃ」再び魔方陣に手を突っ込んで触れたものを取り出してみる。

次の瞬間、金貨で部屋が埋め尽くされた。

「すばらしいです。これでわが国も救われます。次はですね・・・」

さまざまな名前を挙げて取り出すことを要求される。言われるがままに従う真一。

鋭く輝く剣・きらびやかな鎧・美しい宝石・金銀財宝が出てくる。

途中から真一も面白くなり、何が出てくるか期待するようになった。

数時間ほどそうして、やっと終了した。

なにか体から力が抜けていくようで、相当疲労していた。

「お疲れ様でした。それでは明日、父である国王陛下と謁見していただきます。今日はごゆっくりお休みください」

メルトの指図で豪華な料理が運ばれる。美しい侍女が給仕をする。しきりに恐縮していたが、優しくいなされ、酒と料理を堪能してしまった。

食事の後は侍女達と広い風呂に入り、ぐっすりと眠った。

謁見室

「メルト、勇者の様子はどうだ」玉座から威厳のある声で問われた。

「はい。ヘラート陛下。今日のところは歓待させましたから、今はいい気持ちで寝ておりますわ」

メルトがこの国の王であるヘラート四世に返答する。その顔は嘲る様に笑っていた。

「ふふふ。先祖が魔王を倒して用済みになった勇者を始末したはいいものの、あの道具袋の封印が勇者にしか解けないとはな。おかげで勇者が世界中から集めた伝説の武器防具や金銀財宝もとりだせぬままだ。これでは今の世に再び現れた魔王に対抗できぬ。どうしたものかと思っていたが」

「勇者召喚術を習得して再び勇者召喚するのは骨がおれましたわ・・兄や姉は頼りになりませんし」

「メルト。数日かけて袋の中身を取り出させたら、しばらく鍛えて魔王討伐に向かわせろ。きちんと処置をしてな。くくく。」

「わかりました。」

二人で顔を見合わせて笑う。真一はそんな事も知らずに眠っていた。

謁見

次の日、メルトが呼びに来て、王様と謁見することになった。

「何か緊張するな」

元の世界では王様どころか、市長ですら会った事はない。

「大丈夫ですよ。シンイチ様はわが国の救世主さまですから。」

メルトが優しく手を引いて案内した。

謁見室は広間になっていて、壇上に玉座がある。

周囲には沢山の紳士淑女がいた。この国の貴族たちらしい。

玉座には堂々とした態度の中年男性が座っている。

メルトはその男性の前まで真一を連れて、膝を付く。真一もそれにならった。

「そなたが勇者シンイチか。余は皇国フリージアの王ヘラート４世じゃ。この度はよく我が娘メルトの召喚に答え、わが国に来た。勇者として存分に尽くすがいい」

人の上にたち命令しなれた口調でいう

「菅井真一ともうします。まず、事情を教えてください。勇者とは一体何をすればいいのでしょうか」

緊張して震えそうになる声を抑えて問いかける。

「わが国は北方に魔国といわれる魔族が支配する国に接しておる。魔族によりわが国の民が何人も不当に害されておる。その魔王は放って置けばこの世界を破壊しかねない存在であり、唯一対抗できるのは異世界にいる勇者の資質を持ったもののみじゃ。その為に召喚した。歴代の勇者は見事期待に応え、魔王を滅ぼし世の中を救ったのじゃ」

「今までに何回もそういったことがあったのですか？」

「そうじゃ。魔王は今までに何度も倒されている。勇者ならきっとできる」
煽るように王が言う。周りの紳士淑女からも拍手が巻き起こる。
「シンイチ様ならきっとできますわ。メルトは信じております」
頬を染めて言うメルト。
「はは、メルトも勇者様を信じているようじゃな。期待しておるぞ。それでは勇者の証として、勇者の冠を授ける」
王は玉座をたち、跪いているシンイチの頭に金で出来た輪をかぶせる。そうすると自動で輪が縮まり、ジャストサイズになった。
「こ、これは・・」
「勇者としての能力を引き出し、頭を守る聖具じゃ。役目を果たしたら自動で外れる」
「ま、待ってください。まだ俺は引き受けると決めたわけじゃ・・」
「シンイチ様。ぜひとも私達をお助けください。私達は貴方にすがるしかないのです。その冠は貴方様を守るもの。決して邪魔にはならないはずです」
「だ、だけど、いきなり嵌めるなんて・・」
「勇者殿！」王に強い視線を向けられる。周りの貴族からも強制するような視線を向けられる
「は・・はい。わかりました」シンイチは観念したように受け入れた。

「では、勇者シンイチの誕生と魔王討伐の旅の出発を祝って、乾杯」
大広間に移動して、パーティが始まる。
王族と貴族達はにこやかにシンイチに話しかけてくる
「勇者様のこれからの旅がお健やかでありますように」
「勇者様、期待しています。ぜひ魔王を倒して我等をお救いください」
身勝手な期待がかかる。

シンイチは段々腹が立ってきた。
（なんなんだよ・・人に勝手に魔王を倒せなんて期待して、自分達はその間パーティでお楽しみか？）
メルトが近づき、話しかけてきた
「勇者様、皆が期待しております。笑って安心させてやってください」
「そうはいっても・・」
「皆が貴方をお慕いしていますわ。もちろん私も」
シンイチの手を取るメルト
「え・・？あ、いや・・」
「さ、ダンスをおどりましょう。私がリードいたしますわ」
顔を真っ赤にするシンイチ。今まで彼女などできた事はない。絶世の美少女に手を取られて照れている
（単純な男。まあ途中でのたれ死ぬでしょうが、万一魔王を倒して帰ってきたら、当然世界中の財宝も集めてくるでしょうから、取り上げて暗殺すればいいわ。それまではこうやってあやしておきましょう）
腹の中でシンイチをみくだしながら、メルトはシンイチとダンスを踊っていった。

仲間

ダンスが終わると、メルトからパーティのメンバーになる予定の者を紹介された。

「勇者殿よろしく。私はアーシャ・カストールという者。皇軍獅子騎士団副長を務めている」

金髪碧眼の美形の青年が挨拶する。２０代前半くらいで、がっしりとした引き締った体つきをしている。

「よ、よろしくお願いします」

シンイチは握手する。どう見ても向こうの方が勇者っぽい。

「アーシャ殿はカストール伯爵家の次男で、皇国で最も強い騎士と名声が高いのです」

メルトが説明する。その目は憧れの人をみるように潤んでいた。

「いや、私など勇者殿の足元にも及びません。ですが、皇国のため、メルト様のため、必ず魔王を打ち倒してまいります」

アーシャはメルトの目を見て言った。

「期待しております・・アーシャ」

空気のようになるシンイチ。

「こほん・・それでボクの紹介もしてくれるかな?メルト姉さま」

振り返ると、中学生くらいの可愛い顔立ちをした少女が立っていた。

「あら、失礼しました。この子は私の腹違いの妹で、メアリーと申します。こう見えて、国一番の魔法使いになる素質があるそうですわ」

「よろしくね～勇者さん」

「よろしくお願いします・・でも、王女が魔王討伐の旅に同行するのですか?それもこんな子供が・・」

シンイチはいぶかる。

「子供っていうな。あんたも子供じゃん」
「まあまあ。実は、メアリーは公的には王族としては認められていないのです。彼女は王の庶子の上、身分の低い平民出身なので・・」
「別にいいけどね」
ふてくされたようにそっぽを向く。
「じゃ、これからよろしく」そういい捨てると、さっさと離れていった。
「・・・仲が悪いの？」おそるおそるシンイチが聞く。
「別に仲が悪いわけではありませんよ。普段はあまり接する事もありません。平民の母を持ちながら魔力が強いおかげでなんとか王宮に残れているような子ですからね」
冷たく笑うメルト。
シンイチその姿を見て、先ほどのダンスで高まった想いが少しずつ醒めていった。

「メルト姫さま、私も紹介をお願いします」
少ししてから、同い年くらいの怜悧そうな少年から声をかけられた。
「これはノーマン神官。シンイチ様、彼が最後のメンバーで、回復魔法の使い手です」
「よろしく。」値踏みするような視線を向けてくる。
「・・よろしくお願いします」握手するシンイチ。
何か虫の好かない奴のような気がした。

「勇者様はそれぞれのメンバーから戦闘の手ほどきを受けたあと、魔王討伐の旅に出発していただきます」
一方的に言うメルト。
シンイチはわけもわからないまま、とんでもない事に巻き込まれていく気がしてきた。
「す・・すこし外の空気を吸ってきます」
逃げるようにその場を離れるシンイチ。メルト達三人が冷たい目で

見送った。

王宮のベランダ

「はあ～。なんでこんな事になったのかな？てか、魔王討伐なんて軍の仕事だろ？なんで勇者とその仲間に任せるんだよ」

一人で愚痴をこぼす。

「まあ、それに関してはボクも同意見だけどね。しょうがない訳もあるんだよ」

後ろから可愛い声で話しかけられた。あわてて振り向くと、さっき紹介されたメアリーが立っていた。

「あ、メアリーさん。いえ、ただの独り言ですから」

焦って言い訳するシンイチ

「気にしなくていいよ。メアリーでいい。ボクもシンイチと呼ぶから。敬語も不要」

「わかった。それじゃメアリー、改めてよろしく」

「ん。これ飲む？」ワインが入ったグラスを渡してくる。

「ねえ、さっきの訳って？何で軍隊で戦争しないの？」

「魔法の存在が大きいよね。広域魔法を相手に使われたら、レベルが低い兵士はすぐ全滅。レベルが高くて魔法耐性を持つ個人の力に戦争は依存するの。雑魚が何万人でかかっても、一人の個人の方が強い」

シンイチは無言で考える

（巨砲主義と遊撃艦主義の永遠のテーマみたいだな。今のところ、個人の力で軍を敗れるくらい力が違うって事か）

「・・でも、俺は戦いの経験もないシロウトだよ？」

「そんなの知らないよ。姉さまの勇者召喚魔法は勇者として資質を持つものを選択して召喚する魔法だけど、何百年も前の失われた魔法を調べて、わかるところを断片的に繋ぎ合わせてやっと作り上げた魔法だもん。そこまで都合のいい事ができるか。勇者の財宝袋が反応したみたいだから、全くの失敗じゃないとはおもうんだけどね

ー。伝説の勇者みたいにすごい能力があるとは限らないし。現にこう話していても、魔力量が一般人程度しか感じられないし」

「マジで・・？そんな無責任な・・」

「まあ、がんばりなよ。ボクも正直気が進まないんだけどね。お母さんが死んで何か国に貢献しないと、王宮にもいられなくなっちゃうから参加するんだよ。自分の事で手一杯」

そういうと、メアリーは会場に戻っていった。

「マジかよ・・」

後には呆然とするシンイチが残された。

修行

それでは、今日から戦闘について修行していただきます。
パーティの次の日、メルトとアーシャが部屋に入ってきて言った。
「今日から兵士用の宿舎に移ってもらうぞ。鍛えねばならんからな。すぐに支度しろ」
「ハイ・・」
シンイチは逆らえるはずもなく、着替えを道具袋に入れて部屋を出た。

「遅い！！！。なんだそのザマは。もっと真面目に走れ」アーシャ
「ハァ・・ハァ。無理です」シンイチ
最初に基礎体力を見るといわれて、兵士用のグラウンドを走らせる。
シンイチはごく一般的な現代の高校生で、中世の一般人とくらべても大きく体力が劣る
「話にならんな・・それでも勇者か！！情けない」
１０周ほど全力で走らされた。アーシャは汗もかいてない。他の兵士達も平然としている。
シンイチは疲労でへたりこんでいた。

「おいおい・・あんなので勇者？大丈夫かよ」
「貴族のお坊ちゃんでももう少しマシだぜ」
「だらしねーなwなんか俺でも余裕でかてるんじゃね？」
兵士達の間で嘲りの声が上がった
（しょうがないじゃん。俺は文明人の一般人だぜ。野蛮人のプロの兵士に体力勝負で勝てるか！！）
心の中で叫ぶシンイチ

「まったく・・ほら立て!!次は剣術だ。」木剣を投げてよこすアーシャ
ようやく息を整えて、木剣を掴んでたつシンイチ。
「相手は・・そうだな。新兵ということで、ホライゾン。相手をしてみろ」
「は・・はい」
立ち上がったのは背の低い少年兵士。シンイチよりも華奢にみえる
「よかったな勇者様。さすがにアイツには勝てるだろ。まだ１２歳の新兵だからな」
「ホライゾン。俺たちが鍛えてやったんだ。負けたら承知しないからな」
周りからヤジがとぶ。

「開始!!」
木剣での勝負が始まった
（授業で剣道をしたことがあるが、防具をつけずにやるのなんて初めてだ。でも相手は子供だし・・なんとかなるか）
「面!!」
シンイチは木剣を上段から振り下ろし、打ち込んだ。

次の瞬間、いきなり足に激痛がはしり、もんどり打って倒れた。
ホライゾンと呼ばれた少年兵士が、脛に思い切り打ち込んできたのである
地面をころげまわるシンイチ。周囲は爆笑の渦
「あいつ馬鹿か?普通足を狙ってくるのは常識だろ?わざわざ足を止めて振りかぶるなんて何かんがえてんだ?」
「勇者様は俺たちの予想も付かないようなすごい技をみせてくれる予定だったのさ!!」
兵士は好き放題にいいつのる
「勝者。ホライゾン。まったく、これが勇者なのか?こんなド素人

をつれて魔法討伐とは・・もういい！！さがっていろ」
治療室に運ばれるシンイチ。
アーシャはこれからの事を思ってため息をついた。

治療室にて
「いてて・・やっぱり無理だよ。俺今まで戦いなんかした事ないもの」
治療室のベッドでぼやくシンイチ
「おかしいですね。勇者様は剣の才能もあるはずですし、その聖具は勇者としての能力も引き出してくれるのですが」
治療室に来たメルトが言う
「なあ、やっぱり俺には無理だとおもう。元の世界に返してくれないか？」
「それが、魔王を倒すまで、返送魔法が作動しないんです。私達も勇者様の希望はかなえてあげたいんですが・・」
すまなそうな顔をするメルト
「でも、魔法の才能はきっとありますよ。気落ちなさらないでくださいね」
優しくシンイチの手を握る。
「・・メアリーは俺の魔法量は一般人並だっていってたけど？」
ジト目でみるシンイチ
「いえ、あの、勇者でも最初は一般人と変わらないんです。戦いの経験をつんで、魔物が死ぬ時に落とす魔法玉を食べていけば、自然に魔法量は増えていきます」
「レベルアップか。そうだといいんだけど・・」
「さあ、気を取り直して、魔法の修行をしましょう。メアリーのお師匠様でもある宮廷魔術士フォンケル様が、午後から授業してくれます予定です」
「わかったよ・・・」

昼食後、魔術師フォンケルの修行を受けたが、そこでも問題が発生した。

魔術

「字が読めない・・じゃと?」
白いひげのいかにも魔術師といった風貌の老人がいう
「はい・・読めません」シンイチ
分厚い魔術書を開いても、書いている字は読めない
「そんな・・勇者召喚術には、言葉や文字の知識を植えつけるといった機能もあったのですが・・」メルト
「ふむ。我々が作り出した勇者召喚術は、失われた魔法技術の模倣じゃからの。完璧に再現するのは無理だったのじゃな」
首を振って諦めたようにいう宮廷魔術師フォンケル。
「しかし、どうするかのう。魔法とは概念じゃから、文字が読めないと話にならんぞ」
「少しずつ勉強していけば・・」シンイチ
「しかし、細かな概念まで理解するのにどれだけかかるか。このままでは魔法の習得に何年もかかりそうですね」
メルトが考え込む。
「わかりました。勇者様の役割は皆と相談しなければなりませんね。それでは、話してきますわ」
さっさと出て行く。後はポカンとした顔のシンイチが残された。

「す・・すいません。なんか一瞬で文字を習得するような魔法はないんですか?なんかこのままではマズい気がします」
シンイチはフォンケルに取りすがった。
「ふむ・・無いこともないがな。これがその魔道書じゃ」奥の本棚から薄い本を取り出す
「あ、ありがとうございます。早速使ってみますね」
「これ、待ちなさい。この本を使って文字解析魔法を習得しようとすれば、魔力量１２０００を消費するのじゃぞ。今のお前さんは魔

力量１５じゃ。魔力量をおぎなうために魔力玉を使うにしても、一体どれだけ集めればいいのやら。スライムだと１０万匹以上倒さないといかんな」
「そんなに・・・」
「だからその本は誰にも使われないのじゃ。文字を覚えるだけなら時間をかければなんとかなるからな」
「それじゃ、どうすれば」
「こればかりはワシものう。まあ、その本はあげるから、持っておきなさい」
「はい・・」道具袋にしまう。そのままとぼとぼと部屋に戻った。

会議室
「・・・というわけで、勇者には戦闘の才能も、魔法を習得する事もできない事がわかりました」
メルトがシンイチについて説明する。
出席者はメルト・国王・宰相・勇者メンバーパーティの一同。
「ふむ・・結局できる事は、財宝袋への収納と取り出しのみか。なんとも情けない」
宰相が首をふる。肥満した中年男だが、眼光は鋭い。
「まあわが国の国民でもないからのたれ死んでも構わんがな。どうせ魔王の脅威もこの国まで来るには時間がある。勇者に匹敵するような猛者は何人もいるし、前回の勇者の装備や魔法具も手に入った」
国王が言う
「私も見たところ、戦士としては役に立ちませんね。せいぜい荷物運びといったところでしょうか？」
アーシャが笑う。
「しかし、文字が読めないとはね」ノーマンがあざ笑う。

「みんな、ちょっと酷くないかな?勇者を呼んだのはボクたちの勝手なんだし、能力が無いならわざわざ魔王討伐の旅なんかに連れて

行かなくても・・」メアリーがシンイチに同情して言う。
「だが、考えてみれば、魔王の脅威にさらされている国々や、前回の魔王討伐時に結ばれている「勇者協力条約」に加盟している国にとっては、勇者の看板を出す事で協力してもらえるだろう。これからの旅を通じて各国秘蔵の装備や財宝を提供するよう呼びかける予定だからな」
「ふふ。勇者の名前を出せば、各国から好きなだけ財貨を引き出せますし、冒険者ギルドも逆らえませんからね。わが国が世界の支配者となるには、魔王討伐を名目で各国に影響をもたらさないと」
「しかし、魔王に対してはどうするかな。まさか本気で討伐するわけにもいかんし、そもそも無意味だ。魔王を倒しても次の魔王が生まれるだけだし、無用にわが国に敵意をもたらすだけだしな」国王。
「一つ提案があるのですが、魔国に使者を出してみれば？」ノーマンが言う。
「使者を出すのはかまわんが、どうするのだ？」宰相
「それはですね・・・・」
ノーマンが魔王に対しての提案を説明する

「なるほど。それならば、魔王に対して恩も売れる」国王
「ふふ、異世界の小僧には気の毒な事だがな」アーシャ
「みんな、いくらなんでもひどすぎるよ。ボク、シンイチに言ってくる」
席を立とうとするメアリー
「お黙りなさい。卑しくも王の血を引く娘ならば、国のことを第一に考えなさい」
メルトがピシャリという
「でも・・」
「メアリーや。お前の優しい気持ちは嬉しいが、あの小僧一人犠牲にすれば、世界中の人間が助かるのじゃ。我々は1人を犠牲にして残りの９９人を助ける決断を下さないといけない立場。そねば王族

というものじゃ。この旅が終われば、お前も第五王女として正式に認められる。死んだお前の母もその事を望んでいたじゃろう?」

「・・・わかりました。お父様」メアリー

「ではこれで方針は決定じゃ。大丈夫だとは思うが、勇者にはこのことを気づかれてはならんぞ」

全員が頷く。

その様な会議も知らずに、シンイチは治療室でうなっていた。

使者

「しかし、勇者のこの体たらくでは、各国を回って旅などおぼつかないのでは?」
宰相が言う
「確かに、それぞれの国を攻めている魔族を倒せなどと言われては、真っ先に死んでしまいそうだ。そうなれば、先に各国の不信感を招きかねん。」
国王の言葉に全員が考えこむ。

もともと、魔国と接している国は大陸全土ではフリージア皇国だけだった。
しかし、魔族は空を飛んで攻撃できるので、もともと強国であるフリージア皇国を直接襲うのをさけ、周辺の弱国を直接襲い国土を占領して一定のコロニーを築いている現状だった。
補給の問題で魔族のコロニーはすぐには拡大しないが、各国にとっては国土が侵されているので頭がいたい問題だった。

「その辺のことを踏まえて魔国と交渉すべきでしょうな。魔国に対しては妥協を、周辺国については支配を。」宰相
「我々が一致団結して本気で戦おうとすると、まず戦場になるのはわが国。そんな迷惑をこうむる必要はないでしょう」ノーマン
「では、周辺国に対しては勇者を召喚した事を触れ回り、魔王討伐をすると宣伝して各国所有の国宝級の装備や軍資金の提供を命令。そして魔国に対しては、現在の魔族コロニーを各国に自治区として承認させるかわりにこれ以上の拡大を自粛するように交渉しましょう。もちろん勇者を交渉の材料にして」メルト。
「決まりだな。では、各国に対して使者をだす。」
国王の採決により、方針は決定され、各国に使者が向かった。

魔国　魔王城にて

「フリージア皇国の使者殿か。よく参られた」

魔王アンブロジアが玉座から話す。

魔族といってもそれほど人と変わりない姿をしていて、耳が長く黒い翼がついているところが特徴である。ただし、魔力は人間よりはるかに高い。

「魔王陛下におかれてはご機嫌うるわしく。わが国と誠実な友好関係をいつも王は感謝しております」

使者が発言する。

実は、魔国とフリージア皇国は平和条約を結んでおり、かなり大規模に貿易もしていた。

「ふむ。しかし、最近わが国との友好に傷をつける噂があってな。おぞましき勇者を貴国が召喚したとか」

魔王がプレッシャーをかける。

魔国にとって、数百年前に魔王を倒した勇者は悪の元凶そのものとして伝えられていた。

「相変わらず耳が早い。しかし、それは決して貴国に対して不誠実な行為ではないのです」

使者も負けずに自信を持って話す。

「ほう。面白い。では、どういった理由で召喚したのかな?」アンブロジア

「はい、説明させていただきます。

?:前勇者が道具袋にしまいっぱなしになっていた伝説の装備や金銀財宝を回収するため。

?:最近、周辺国がフリージア皇国に対して不満を持っている。勇者

を召喚して盟主国としての権威を取り戻すため。
この二点のために勇者を召喚いたしました。召喚した勇者を魔王討伐の為と宣伝するのは周辺諸国に影響を及ぼすためで、本気で魔国に対して敵対するつもりはありません」
使者は説明を終える。

「しかし、魔国にとっては不快なだけだが。それに対してどう補償するのかな？」
「はい。貴国に対してはーーーーーー」

「ふむ。それが本当なら、我等にとっても勇者召喚はメリットがあるな。」
「術式と現物は必ずお届けさせていただきます。そして、今後は永遠に両国の平和を」
「言葉だけでは信用ならんな。『呪力条約』を結べるか？」

『呪力条約』とは、国同士の条約を結ぶ時に使われる魔法である。
どちらかが条約を破った場合、即座にやぶった方の条約主といわれる対象者が呪いを受けて死亡する。
その効力は双方の条約主が死ぬ時まで有効になる。

「わが国ではヘラート陛下を含む王族全員が条約主になる予定です」
「ふむ・・なるほど。こちら側は余を条約主に求める気だな」
「はい。それだけ我々は誠実でありたいのです」
「わかった。では呪力条約紙を与えよう。王族全員の署名をしてこちらにもってこい。使者の目の前で私が署名しよう」
「ありがとうございます。これで勇者がもたらした忌まわしき過去の過ちも償われ、魔族と人間の永遠の平和がもたらされましょう」
「期待しよう」

魔王と使者の会談は満足のうちに終了した。

森の国　ミールにて

「なんと!!わが国の国宝『森の杖』を差し出せと?あれを作り出すのに何人の神官が命を削ったか貴国はわかっているのか?」
ミール国王が怒鳴る
「存じております。３００人ほどが命をこめて寿命を縮めたとか」
使者が平然という
「確かにわが国にも魔族が襲来しておる。だが、大した規模でもないし、被害も些少だ」
「『勇者協力条約』をお忘れか?勇者に対して最大限に協力するという呪力条約。数百年前に結ばれた条約とはいえ、各国の王が即位する時に引き継ぐはず」
「ぐ・・・だが」
「それと、１００万アルの提供をお願いします」
「無理だ・・国家予算に匹敵する額など。そもそも、勇者の支援にそこまで必要ないはず」
「やれやれ・・まるでわかっていらっしゃらないご様子。わが国が盾となって魔国と接しているから、危機意識が薄いのですね。魔王が死んだ後も魔族は存在するのです。わが国に上空を通過する魔族を撃退する設備をつくるとか、魔国に妥協を求めるための根回しの費用とか・・わが国がそれをしなければ、いつまでも魔族の襲来は続きますよ」
「ぐっ・・」
「一ヶ月後に条約締結式です。ぜひご出席を。費用のほうは国債でかまいませんが、『森の杖』は本物をお持ちください」
意気揚々と使者は帰る。その後姿をミール国王は睨みつけていた。

フリージア皇国

「くくく・・光の国ミラーからは光の兜と２００万アル。海の国アトルチスは海皇の槍と２５０万アル。大地の国ガイルからは地獄熱の杖と３００万アル。その他の国も国宝と資金の提供をしてきた。これでわが国は大陸の覇者となるであろうな」

国王が笑う。

「私には『輝きのドレス』をください。これを着てアーシャさまと・・」メルト

「ふふ。わかっておる。すべて終わった後は充分に報いよう。ふふふ」

王族の親子は顔を見合わせて笑った。

出発

勇者召喚から一ヶ月。
今日は各国の王も招いての華々しい式典が開かれていた。
勇者が魔王討伐の旅に出るのを祝う式である。
同時に勇者協力条約が数百年ぶりに発効され、各国の間に同盟が結ばれた。

「本日はこのような式典を開き、誠に喜ばしく思います。私、フリージア皇国第四皇女が魔王を倒す救世主を招いた結果、非の打ち所のない立派な勇者を召喚できました。彼ならば魔族の脅威におびえる私達をすくってくれるでしょう。ご紹介します。勇者シンイチ様です！！！」
民衆の間から歓声がわきあがる。

フリージア城前の広場に作られたきらびやかな壇上の上にシンイチが姿をあらわす。
まるで王族がきるような豪華な服を着せられているが、その表情は硬い。
「勇者様！！！我等をお救いください」
「魔物に殺された息子の仇を！！」
「私の娘は魔族にさらわれました。今頃は奴隷として・・お願いします。娘をお救いください！！」
勇者を一目見ようと、他国からも民衆が押し寄せていた。
「はい。必ず魔王を倒し、この世を救います」
シンイチが言うと、再び歓声があがった。

シンイチは内心で恐怖に震えていた。
無責任な期待と崇拝は本人にはプレッシャーになるものである。

教えられた簡単な台詞を言うのが精一杯だった

（なんなんだよ・・俺には無理だよ。救世主でも勇者でもないよ）

しかし、ここで勇者のふりでもしないと、容赦なく見捨てられるであろう予測はこの一ヶ月でついた。

ちやほやされていたのは最初だけで、最近では城内の誰からにも馬鹿にされる始末。

寝る場所や食事も一般兵と同じ待遇で、さんざん馬鹿にされ苛められていた。

一ヶ月訓練しても、最下級兵士にも勝てなかったのでそうなったのだが。

よく見ると、フリージア皇国の兵士・役人・貴族たちは道化者を見る目であざ笑っている。

勇者パーティのメンバーであるアーシャ・ノーマンも同様だった。

仲間として認めてもらえず、面と向かって飾りだけの勇者、荷物もちだなと馬鹿にされた。

メルトも最初の頃の態度と違って、冷たく接するようになっていた。

「貴方は勇者としてただそこにいてくれるだけで結構です。下手に戦闘などなされぬように」

戦闘の才能もなく魔法も習得できないとわかった後、メルトからかけられた言葉である。

シンイチはすっかり孤独になっていた。

メアリーはシンイチを馬鹿にはしなかったが、できるだけ無視するようにしていた。

シンイチに対して同情していたが、親しくなると見捨てる時に辛くなると父王から言われていたからである

（・・ごめんね。私達が正しいとは言えないけど、これで平和になるんだよ）

「それでは他のパーティメンバーもご紹介します。フリージア皇国最強の騎士、アーシャ・カストール様！」
メルトの紹介で壇上から手をふるアーシャ。
若い女性から勇者に向けられる以上の歓声があがる
「神に仕える敬虔なる信徒、ノーマン神官！！」
「そして、我が王室からは、第五王女メアリー・フリージア！！」
王室からも参加するということで、民衆の興奮は頂点に達した。

各国の王は表面上は笑顔を浮かべていたが、内心では腸が煮えくりかえっていた。
（忌々しい。頼みもしないのに召喚されおって。勇者など不要だ）
（これでは魔物の被害よりも、勇者によって巻き上げられたせいで国が傾いてしまう）
（たとえ魔王が滅ぼされたとして、勇者の力が我が国に害を及ぼす可能性もある。どうしたものか・・）
シンイチも、各国の王の鋭い視線に気がついており、理不尽に憎しみを向けられておびえていた。

「さあ、勇者一行の出発です。皆様、盛大にお見送りしましょう」
メルト。
民衆の歓声の中、勇者パーティが馬車にのりこむ。
勇者一行を乗せた立派な馬車は、フリージア皇都を出て、北の魔国に向かっていった。

その裏では、魔国との「呪力条約」が締結されていた。
「ふむ。フリージアからの提供は、勇者の道具袋の返還か。あれはもともと先代魔王が開発した魔国の国宝。勇者に奪われ、専用化魔法をかけられたので勇者以外に使えなかったが、フリージアが開発

した道具袋の所有権譲渡魔法式と一緒にこちらに返還するということだ。現所有者であるシンイチとやらの命と引き換えに余に所有権が渡されるか・・くくく。結構な事だ」
魔王アンブロジアが条約の内容を確認する。

「はい。勇者シンイチの身柄と共にお渡しいたします。そして魔国側はフリージア国への友好条約と貿易の継続。そして同盟国の魔族コロニーを自治区とする代わりに、現コロニーのこれ以上の拡大をしないでいただきたい。あとは以前要求された人質を一人送るということですが・・」フリージア使者
「ふふ。よかろう。それでよい。この条件で署名しよう」

魔王アンブロジアがフリージア皇国王族の署名をされた呪力条約紙に血をたらし、署名する。
「ありがとうございます。これで両国の平和が永続いたします」
フリージア皇国からの使者は深く頭を下げ、感謝して帰っていった。

馬車

ゴトゴトと音を立てて馬車が行く。
周りは騎士隊によって固められている。
先頭の馬車にはアイーシャとノーマン。
次の馬車にはシンイチとメアリーが乗っていた。

シンイチは何度かメアリーに話しかけたが、冷たく無視されている。
馬車の中は気まずい雰囲気が漂っていた。

そのうちに会話を諦めて、この一ヶ月のことを思い返してみた。

「まったく、話にならん。馬にもまともに乗れないのか」
アイーシャに乗馬の訓練を受けたが、まったく乗りこなせない。当たり前だが日本の観光地で乗るような馬ではなく軍用馬なので気性が荒く、何度も振り下ろされて傷だらけになった。

「遅い！！剣くらいまともに振れるようになってほしいものだ！！」
木剣でめったうちにされ、気絶するシンイチ。

そのうちにアイーシャは相手もしなくなり、部下の兵士に訓練を丸投げするようになった。
「ほらほら、勇者様。俺たちが相手させていただきますよ」
そうなると、兵士から集団でいたぶられるようになる。彼らは勇者に対しての嫉妬を感じていたが、それを叩きのめすことができる自分達の強さに酔っていた。

「勇者様、掃除と洗濯もお願いしますね」
最後には、最年少のホライゾンからも容赦なく雑用を申し付けられ

るようになり、ただ耐えるのみだった。

剣の才能がないことは思い知っていたので、一刻も早く文字を覚えて魔法を習得しようともした。

しかし、既に勇者の才能は見限られているので、誰も教えてもらえない。

メアリーやフォンケルにも頼んだが、忙しいと断られるだけだった。

自分で勉強しようにも、辞典の一つもない状態では不可能。

結局何もできないまま、一ヶ月がすぎさった。

たまに、王宮内で王族や貴族の子弟からからかわれる事もある。

「おい、アイツが余にも珍しい無能勇者だぞ」

第一王子カリグラが取り巻きの貴族にそういってシンイチをからかう。

第一王子の癖に政治に携わる事もなく遊びほうけている彼にとっては、シンイチはいい玩具だったのだろう。

取り巻きの貴族も嗜虐心をそそられてあざ笑った。

「アイツが本当の勇者かどうか確かめてやろうぜ。ファイヤボール」

酔った勢いでカリグラがシンイチに対して炎の魔法を放った。

「あぐっ」

避けられずに背中に大火傷をおうシンイチ。

「ストーンスピア」「アイスカッター」

調子に乗って魔法をぶつけようとする取り巻きの貴族達。

「アースウオール」シンイチに魔法が当たる寸前、土の壁が出て、シンイチを守った。

「お兄様。そして皆様方。すこしお酒を召し上がりすぎですよ」

土の魔法をつかって助けたメルトが諫める。

「おお、可愛いメルト。冗談だよ。なあ、みんな」

周囲の貴族も同調する。
「もちろんご冗談ですわ。彼には魔王を倒すという使命がありますもの。お体は大切なもの。シンイチ様、お部屋で休まれては？」
「は・・はいわかりました」
ほうほうの体でその場を逃げ出すシンイチ。後から王子と貴族達の笑い声が聞こえた。

このように、この一ヶ月は屈辱の連続だった。
（なんでなんだよ・・なんで何も出来ない俺が勇者扱いされるんだよ・・魔王なんか倒せるわけないよ）
毎日夜になるとその様に考えて眠れなくなる。
そして、いつ魔王討伐の旅に連れ出されるかおびえていた。

いろいろ試して、結局シンイチに出来ることは道具袋の使用だけだった。
道具袋を開けたら出現する魔方陣に手を突っ込んで念じると、該当した中の物が出た。
入れるときは反対側の手で物に触れて念じると収納された。
収納無制限で、持ち運びも重さを感じないので、それなりに貴重な物だというのはわかる。
だがしかし、できる事はまさに荷物運びだけなのだ。
（ふふ・・確かに勇者じゃないな。荷物運びだ）自嘲するシンイチ。

考えるのを止めて馬車をみる。
なぜかシンイチが乗っている馬車は護衛で固めてあった。
（まてよ・・何かおかしくないか？旅をして魔物を倒しながら強くなっていくんじゃないのか？護衛されながらじゃ一回も戦闘経験を積むことなく魔王の前についてしまうぞ？いったいどういうことなんだ？これじゃただ単に魔国に護送されているみたいだぞ）
少しずつ、少しずつおかしな点に気がつきはじめるシンイチ。

どんどんと不安が大きくなっていった。

魔街

フリージア皇国首都から出発して４日、一行は国境をこえた。
ここまでの旅の間、魔物は一度も現れず、全く戦闘はなかった。
それどころか、旅をする商人風の人間や、魔族の姿も見られたが、
皆おとなしく一行に道をゆずって見送るだけだった。

その様子をみて、シンイチの違和感は頂点に達した。
（おかしい・・絶対におかしい。だいたい、なんで魔物が襲ってこないんだよ。こっちは勇者一行ですって宣伝しているようなもんだろ？周りに騎士隊に囲まれて旅にでる勇者なんているわけない！！）

「おい、メアリー。教えてくれよ。これは本当に魔王討伐の旅なのか？」
馬車の中で何度も聞くが、答えはいつも同じだった。
「うるさいなあ。そうに決まっているでしょ。ボクは疲れているんだよ。話しかけないでよ」
そういって無視を貫く。

野営の時も、アーシャやノーマンはシンイチを全く相手にせず、騎士隊の隊員と談笑してまったく緊張感がなかった。

そうしているうち、最初の魔国の街ナムールについた。
街は魔族やコボルト族、ドワーフ族、エルフ族など雑多な民族で溢れていたが、人間の姿も結構見かけられた。皆物珍しそうに勇者一行と騎士隊を見る

（おい！！こっちは敵国の軍だろ？なんで騒いだりしないんだよ！！）

シンイチの不安がドンドン大きくなっていった。

「よし。この後は半分は自由行動。残り半分は勇者の護衛につけ」
街で一番大きな宿屋に到着後、アーシャが命令し、騎士隊の半分は街に繰り出していった。

「勇者様は姿を見られると騒ぎになりますから、宿にいてください」
屈強な騎士に両脇を挟まれて、粗末な部屋に連行されるシンイチ。
そのままずっと監禁されていた。

料理亭「魔王の舌」ではフリージア国の騎士隊が大騒ぎしていた。
この数日の行軍でたまったストレスを発散している。
アーシャやノーマンも両脇に美しい魔族の娘をはべらかしていた。

「今日は無礼講だ。皆よく働いてくれている。魔王城まであと数日かかるが、ここで英気を養ってくれ」
アーシャの号令で乾杯する騎士達。
美味い料理や美しい女達に堪能していた。

店の隅で暗い顔をして料理を食べているメアリー。
「メアリー様。暗い顔をされて、どうされましたか？」
ノーマンが話しかけてきた。
「別に・・」
「勇者に同情されているのでしょう。メアリー様はお優しいですからな」
皮肉な口調で言う。
「別に優しいわけじゃないよ。でもさ、関係ない人を生贄に出して、それで平和になったからってどこか歪んでいるよ。そんな事してたら絶対手痛いしっぺ返しがくると思うよ」
「ほうほう・・例えば？」

「例えば、勇者の怒りをかって仕返しされるとか」
「あはは・・あのような最弱の荷物もちに何ができるとでも？」
ノーマンが笑い転げる。

「わからない。何もできないかもしれない。でも、こんな事続けていたら、何時か何処かで『何かできる人』に対して裏切りをして、こっちが酷い目にあう日がきっと来るよ」
「あはは、メアリー様の忠告、必ず国王陛下にお伝えいたしましょう」
そういうと、ノーマンは離れていった。

（・・別にアンタなんかに伝えてもらわなくても、帰ったら必ずお父様に言って、こんな事は今回限りにするように言わないと）
割り切れない思いを抱えながら、一人でワインを飲むうち、いつしか眠りに落ちていった。

「ふふふ・・平民王女様は心配性らしい」アーシャが笑う。
「第五王女様などに心配されなくても、フリージア皇国は安泰ですね。ふふ。まあ、一応陛下にはお伝えさせていただきますよ。ご本人様はお伝えできないでしょうからね・・」
「あはは・・」
腹に一物ありげな表情で、二人は飲み交わしていった。

ナムールに二日滞在し、すっかり英気を養った騎士隊は出発した。
その間シンイチは一室に監禁されたままで、食事の時でさえ部屋から出されなかった。
もはや、シンイチはこの一行が魔王討伐を目的しているとは信じられなかった。

相変わらず、メアリーと二人きりの馬車の仲。

シンイチは堪えきれずに何度も話しかけていた。

「なあ。本当に魔法討伐の一行なんだろうな」

「・・・そうだよ」

「このまま魔王城に乗り付けるのか？」

「・・・うん」

「なんでいきなりそんな事になるんだよ」

「・・・魔王が直接の戦いで勝負をつけようと言ったので」

「え？」

「前も言ったけど、軍を出して戦争するより、代表者の戦いで勝負をつけるの。そのほうが余計な被害がないでしょ？」

「そりゃそうだけど・・」

「・・・大丈夫。実際に戦うのは私達だから」

苦しそうに顔を背けて言うメアリー。

納得はいかなかったが、一応訳を聞けて、シンイチはすこし落ち着くことができた

到着

ナムールの街を出て数日後、ついに一行は魔王城についた。
漆黒の巨大な城で、数キロにわたる城壁に囲われている。
近づくにつれてシンイチは恐怖に震えた。

（だ・・大丈夫だ。俺は戦わないんだ。他の三人がきっと魔王を倒してくれる）
必死に呪文のように心の中で唱える。そうしないと恐怖で発狂しそうだった。

そして、そんなシンイチを痛ましそうに見つめるメアリーにも、予想もしなかった運命が待っていた。

魔王城の正面から近づくと、巨大な白馬に乗った巨人を先頭にした魔族の騎士隊が近づいてきた。
「勇者ご一行様、ようこそいらっしゃいました。私、１６魔将の一人ケルビムがお迎えに上がりました」
「おお、ケルビム殿。お久しぶりです。息災であらせましたか？」
アーシャが親しそうに挨拶する。
「はは、魔将としてこき使われておりますよ。再びお会いできて嬉しく思います」
二人はがっしりと握手をする。
その様子をみてシンイチは心臓が飛び出るほど驚いた。

「な・・なんで敵国の将軍と・・」
「・・アーシャ様は昨年の親善大使として魔国に赴いた際に彼と戦った事があって、引き分けたそうよ。それ以来友人なんだって」メ

アリー
「・・魔族と友人?おい!!本当に魔王を討伐にきたんだろうな?」
シンイチがメアリーの肩を掴んで揺さぶる。メアリーは切なそうに視線を下に向ける。
そうしているうちに一行は魔王城の正面門から入っていった。

魔王城の城壁内に、何千人もの魔族の姿があった。
全員整然と隊列を組んでいる。
「これは!!」シンイチ
「みごとな軍ですな」アーシャ
「はは、勇者と魔王様の戦いを見るために、我が軍の精鋭が集まったのですよ。数百年前の雪辱を注ぐ姿をみせたかったのでね」
ケルビムが誇らしそうに言う。
シンイチはその中の一人にだって勝てそうになかった。

魔王城正門から入り数キロいったところで、巨大な神殿のような建物があった、その入り口で馬車は止まる。
そこで一行は降りた。
不安そうに周囲を見渡すシンイチ。周囲を騎士が取り囲む。
その時、周囲に屈強な兵士を引き連れた巨人の姿があった。
シンイチでもわかるくらいに圧倒的な魔力と強大な力が伝わってくる。

「皆のもの、ご苦労であった。よく勇者と人質を護送してきてくれた。」
「はい。魔王アンブロジア陛下。勇者と人質の引渡しをさせていただきます」
アーシャが言うと同時に、シンイチとメアリーが拘束される。
すぐさま、魔王がメアリーに首輪を付ける。

「な！！！どういうことだよ。今からお前達が魔王と戦うんじゃなかったのか！！」
「黙れ」
魔王が軽くこづくと、シンイチはあっけなく気絶した。
「シンイチ！！！・・ボクも拘束するということは、最初から人質に差し出すつもりだったんだな！！」
「ふふ・・魔王様から王族を一人差し出すように言われましたのでね。急遽貴方様を第五王女として擁立したのですよ」ノーマン
「まあ、当方としては王の血を引いて魔力が高ければそれでよい。よい子が生めそうだ」
「！！！！　大地の極熱よ。沸きあがれ。ボルケーノ」
メアリーが持っている杖を振って攻撃しようとするが、魔法が出ない
「ああ、地獄熱の杖ならば、すり替えさせていただきました。人質には勿体ないですからね。その杖はそこらの安物ですよ。そんな魔法どころか、小さい火一つ起せそうもありませんね」
ノーマンがあざ笑う。
「・・・くっ」
メアリーが観念したようにへたりこむ。
「二人を地下牢にでも入れておけ」
魔王に従う兵士が連れて行った。

「これが道具袋でございます」
シンイチから取り上げた道具袋を魔王に献上するアーシャ。
「ふふ。間違いなく『魔王の袋』だ。ついに余の手に戻ったか」
感極まったように道具袋をなでまわす。
「よくぞ取り戻してくれた。所有権譲渡の儀式は明日執り行うが、見物していかれるかな？」
「いえ、我々はすぐに呪力条約紙をお届けして、国王陛下を安心さ

せたいのでこのまま帰ります」
「ふふ。せっかちだな。良いだろう。これが条約紙だ。確かに渡したぞ」魔王
「確かに受け取りました。これで過去の過ちも償われ、人間と魔族の間も平和が保たれます」
「我等も過去の勇者の非道を完全に水に流そう。両国に末永く平和を」
アーシャとアンブロジアが堅く握手をする。
そのまま騎士隊とともに帰っていった。

懺悔

地下牢にて
「ううん・・ここは？」
シンイチが気がつくと、暖かい枕の感触があった
目の前に泣きはらしたようなメアリーの顔がある。
シンイチはメアリーに膝枕されていた
「うわ！！」
あわてて起き上がるシンイチ。
その姿をなきながら見たメアリーは、静かに頭を下げた。
「ごめん・・本当にごめん。」

少し落ち着くと、先ほどの記憶がよみがえった。
「お前・・知っていたんだな。魔王討伐なんて嘘っぱちで、俺を生贄にすることを」
メアリーは頭を下げたまま、「うん」と答えた。
「なぜだ。なぜわざわざ俺を召喚して、わざわざ魔王の生贄にするんだ？？」

激しく責め立てるシンイチ
メアリーは静かに理由を話し出した
「そんな・・道具袋を魔王に返すため、それだけのために・・」
「道具袋の持ち主は本来は魔王なんだ。前回の勇者が道具袋を奪って、勇者にしか使えなくした。その所有者を他人に譲渡する魔法式は先に完成してたんだけど、肝心の所有者である勇者がいなかったんで、わざわざ召喚したんだよ」
「最初からそのために？」
「ううん。召喚した勇者がすごい能力の持ち主だったら、それはそれで魔王や他国を攻める道具として使う予定だったみたい。シンイ

チが弱いから、各国から勇者支援の名目で国宝や資金を巻き上げた後に魔王に対しての生贄にしようってことになったみたい」

「てめえ・・人が弱いからって、何様のつもりだ」
「ごめん・・王様ってそういう立場だって。国を豊かにするために手を汚すべきだって・・」
「ふざけるな！！！」
怒りのあまり、メアリーをビンタするシンイチ。
メアリーは殴られても泣きながら頭を下げ続けた。
「ごめん・・いくら殴ってもいいよ。この身を好きにしてもいい。それだけの事をしたんだから」
じっと耐えるメアリー。

その姿を見て、幾分怒りを静めるシンイチ。
「・・・でも、結局てめえも裏切られて、人質にされたんだな。間抜けな話だ」
あざ笑うシンイチ。
「うん。そうだよね。馬鹿だよね。好きなだけ笑ってよ。自分でも馬鹿だとおもう」
乾いた笑みをこぼすメアリー
「・・・」
「王族は１００人のうち、１人を犠牲にして９９人を助ける役目だって。この件が終わったら、第五王女として正式に認めるから、国のことを考えなさいって。そんな偉そうな事言われて納得しちゃって、犠牲にされる二人目にされたんだから。馬鹿としかいいようがないよ」
「・・メアリー。なんでそんなに王族になりたかったんだ」
「決まっているよ。王族になれなかったら、どの道一生道具にされつづけるからだよ！！！！！」
泣きながら平民を母に持つ庶子がたどる運命を話し出した。

各国の王家は、代々巨大な魔力を受け継ぐ。
それは優性遺伝であり、生まれた子供は正妻の子でも庶子でも強い魔力を持つ。
だから、王は貴族・平民問わず自分の気に入った女を取り上げ、ハーレムを作った。
いや、ハーレムに入れられる女はまだマシで、そのまま捨てられる女の方が多いのである。
当然、何十人もの庶子が生まれた。

王の血を継ぐとはいえ、平民を母に持つ庶子の人生は過酷である。
正式に王族として認められる者は少ない。
魔力が強い男は軍隊に入れられ、一生使い潰された。
魔力が強い女は貴族に下賜され、妾として一生日陰の身になった。
魔力が比較的弱い者は、多額の上納金と引き換えに富裕な平民の家に押し付けられた。ただの奴隷として。
例外的に魔力が強く、美しく、国に貢献できた者だけが王族として認められる。
メアリーの母は運良くハーレムに入れられたが、体が弱かったために数年前に病死していた。

「メアリー。貴方は美しく、魔力が強い。必ず王族として認められるよう努力しなさい」
平民出身のためハーレムの中でも疎まれ、病死した母の最期の言葉だった。
その言葉に従い、王族として認められるため、必死に魔力を鍛えた。

「王族としてみとめられたら、妾にも奴隷にもならずにすむし、比較的自由になれると思ったんだよ。そしていつか立派な貴族のお嫁さんになって、穏やかに暮らせると思って・・」

「その結果が人質として魔王の物か・・」
シンイチがポツリというと、メアリーは号泣した。

(怒っても仕方ない。この子だって俺と同じように裏切られて生贄にされたんだ。中学生くらいの年齢で、頼りにする親もいない子が必死に生きるためにした事なんだ。考えてみたら、魔王の奴隷なんて俺よりもかわいそうだ・・)
そう思ったシンイチは、泣き伏しているメアリーに近づいて、ゆっくりと頭をなでた。
「シンイチ?」
「もういい。もう泣くなよ。悪いのはお前じゃなくて他の王族だ。お前は仕方なかったんだよ」
「・・・許してくれるの?」
「・・同じ裏切られた者を責めても仕方ないだろう。もういいよ」
「ありがとう。ごめん」
「もういいから」
メアリーを抱きしめて頭をなでる。シンイチの胸の中でメアリーは泣き続けた。

しばらくしてから、メアリーは泣き止んだ。
「シンイチの胸、あったかい。」ぽつりと言う
「そ、そうか」
「ありがとう。最後に人を好きになれてよかったよ」
「す、好き?」
「うん。好き。ねえ、お願いしていい?」
「お願い?」
「・・・ボクを殺して欲しいの」
「な?」
「ボクに付けられた『奴隷の首輪』は自殺しようとすると意識を止めるんだ。だから・・」

「イヤだ」
「お願い」
「イヤだ！！！必ず助けるから！！勇者である俺を信じろ。お前だけの勇者になって、必ず魔王を倒してやるから」
「シンイチ・・」
シンイチに抱きついて泣き出すメアリー。疲れきっていたのだろう。すぐに眠りに落ちた。
「なにか方法があるはずだ。俺が魔王を上回っている所、俺にできて魔王にできない事。考えろ、考えろ・・」
今まで読んだあらゆる物語を必死に思い出して、なんとか魔王に勝つ方法を考える。
夜は静かにふけていった。

次の日、兵士に地下牢から引き出され、魔王城の広場につれていかれた。
広場には魔方陣が書かれ、中央に道具袋が置いてあった。

「ただいまより、愚かなる勇者から魔国の至宝である『魔王の袋』を取り戻す儀式を始める」
魔王が高らかに宣言すると、広場を埋め尽くした魔王軍から歓声が沸き起こった。

「火と破壊の魔公イフリート　魔王に忠誠を」筋骨たくましい男の魔族
「水と癒しの魔公ウンディーネ　魔王に忠誠を」絶世の美女の魔族
「風と滅びの魔公シルフィールド　魔王に忠誠を」小柄な少女の魔族
「地と恵みの魔公ノーム　魔王に忠誠を」見上げるような巨体の魔族

「１６魔将を代表して騎士ケルビム　魔王に忠誠を」騎士ケルビム

と15人の魔族が唱和する。
それらを見ながら、シンイチは必死に考えていた。昨日一晩中考えても思いつかない。
だが、なぜかどこかに抜け道があるような気がしていた。

「ふふふ・・勇者シンイチとやら。膝が震えているぞ。我が父を倒した勇者とは比べ物にならんな。何か言いたい事があれば聞いてやるぞ」
魔王アンブロジアがあざ笑う。
(考えろ・・考えろ。そうだ!!なんでこんなに軍隊で取り囲まれているんだ。俺が弱いことを知っているはずなのに)
「ふっ。これは武者震いだ!!なにせ、我一人を倒すため、これだけの軍勢を用意しないといけない卑怯で惰弱な魔王など、我にかなうはずもないからな」
一世一代の演技を必死にする。
「シンイチ!!!!」その姿をみて、メアリーが気でも狂ったのかと心配になる。
その言葉を聞いて、魔王は一瞬キョトンとし、次の瞬間爆笑した。
周囲の魔族も大笑いをする
「何がおかしい!!」
「いや、すまんすまん。シンイチだったか?余をここまで笑わせてくれたのはお前が初めてだ。褒美に、永遠にその名が伝わるよう歴史に残してやる。魔王を笑わせた勇者としてな」
「なんだと!!」
「ふふ。冥土の土産に教えてやろう。ここにいる全軍はお前を警戒して集めたのではない。これから人間を攻めるために集めたのだ」
「・・というと?」
「つまり、余がお前の命をとり、『魔王の袋』の所有者となる。そうして、この全軍を袋の中にいれ、余が運んで人間の国を攻める」
「!!!!」

「ふふふ。今まで補給の問題で攻められなかった各国を蹂躙してやる。『現在の魔族コロニーの拡大』をする事は条約違反だが、『新たに魔族のコロニーを作る事』は条約違反にはならないからな」
「卑怯者！！！！！」メアリーが叫ぶ
「ふふ。フリージア皇国とは平和条約を結んでいるので攻められぬが、周辺国すべてを平定してしまえば、結局は属国も同然。有利な貿易でじわじわと絞り上げ、今の王族が寿命で死ぬと同時に平定すればよい」
その声を聞いて、魔族の軍が歓声を上げる
「魔王様　万歳！！！」「世界の征服を！！」
メアリーは絶望のあまり涙を流した。

魔王の話を聞きながら、シンイチはある物語を思い出した。
それは神の手にも負えない魔神を騙す人間の青年の話。
（これしか方法がない・・）

シンイチは魔王に近づき、土下座をした
「ん？なんのまねだ」
「先ほどの暴言、本当に申し訳ありません。ぼくは貴方の部下になります。許してください」
そのままジリジリと道具袋に近づく
「ははは、なんだその姿は。まあ、人間として身の程を弁えたというべきだが、残念だな。お前の命がどうしても必要なのだ。そうでなければ、その無様な様子に免じて奴隷にしてやってもよかったが」
「そんな事を言わないで。魔王様！！」
みっともなく土下座を続ける。
「シンイチ・・いや、当然だよ。責められないよ」メアリーは幻滅しながらも、仕方ないと思った。
「どうしても？」
「どうしてもだ！」

「では、こうさせていただきます」
「なに???」
シンイチは土下座をしたまま、道具袋の魔方陣に片手を突っ込んだ。
その瞬間、シンイチの姿がかき消えた。

収納

魔王城

シンイチが道具袋に手を突っ込んだ瞬間、その姿が消えた。道具袋もなくなっている。
「なんだと!!瞬間移動の魔法を身につけていたか。さすが腐っても勇者。しかし、この魔王城には結界が張ってある。逃げられるとでも?皆、全員で勇者をさがせ!!」
魔王の命令で、全員が魔王城を隅々まで探す。

「ふふ。残念だったな。あの勇者は一人で逃げ出す卑怯者らしい。まあ、逃げられるわけもないがな」
魔王がメアリーを言葉で嬲る
「シンイチ・・いや、シンイチだけでも逃げてくれれば・・」
メアリーが独り言を言う。
すると、いきなりその姿が消えた
「なに!!!」
驚愕する魔王
「人質も逃げた。探せ!!!!」
魔王が吼える。いつの間にか余裕が失われていた。

「ま・・魔王様　大変です!!」兵士があわてた様子で報告する
「なんだ!!!!!」
「魔王城の他になにもありません!!!!」
「何もないとはどういうことだ!!!!」
「説明できません。こちらに来てください!」
兵士の後に続く魔王。城壁の正門から外を見る。

門の向こうには・・どこまでも続くなにもない白い空間が広がっていた。

あるところに、とてつもなく強力な魔神がいました。

その将来の力に恐怖した神は、幼い魔神を捕らえて、ちいさな小瓶にいれました

覚えておけ　この瓶のふたが取れた時こそ、世界のすべてを滅ぼしてやる

月日は流れ、魔神は瓶の中で、神をもしのぐ力を身につけました。

そうして、偶然にその小瓶を見つけた青年に言いました。

「この瓶のふたを開ければ、どんな願いもかなえてやろう。この魔神の名にかけて誓約する」

青年はその言葉を聞くと、瓶のふたを開けました。

「ふはははは。確かにお前の願いをかなえてやろう。その後に、この世界を滅ぼしてやろう」

「それでは、僕を死なせないでください」

「よかろう」

「外にいたら巻き込まれるので。僕を小瓶に入れてください」

「よかろう」

「そしてその小瓶を壊されたら死ぬので、壊さないでください」

「よかろう」

「あと、食料がないと死ぬので、全世界の食料も」

「よかろう」

「空気がないと死ぬので、全世界の空気も」

「・・・よかろう」

「あ、太陽の光がないと死ぬので、太陽も」

「・・・・・・・・よかろう」

「もちろん地面がないと死ぬので、全世界の地面も」

「・・・・・・・・・・よかろう」

「でも一人では寂しいな。多分孤独に耐えられず自殺するな。全世界の人々も」

「・・・・・・・・・・・・・・いい加減にせぬか」

「でも、最初の『僕を死なせない』為には必要なことですよ。あと・・」

延々と続く青年の要求

・・・・・・・・・・

「もういい！！！！わかった。ぜんぶいれてやる」

その言葉を実行した瞬間、世界のすべての存在が小瓶の中に入った。

後は世界の外側で一人呆然とする魔神がとりのこされ、何一つ壊せないままにおわりましたとさ。

「あ、あれ？ここはどこ？？？」

いきなり目の前の光景が変わってびっくりするメアリー。

目の前には、広く平坦な更地があり、そばにはシンイチが立っていた。

「メアリー、大丈夫？」シンイチが声をかける。

「シンイチ。すごい！！いつの間に瞬間移動なんて超高等魔法を使えるようになってたの？」

助かったと思い、シンイチに抱きつくメアリー。

「瞬間移動？そんな魔法使えないよ。ここはさっきの場所から一歩も動いてないよ」

得意げな顔をしてシンイチが言う。

「？？？どういうこと？？」

「いやー。俺には俺にしかできない力があったってこと。剣でも魔法でもないね」

「え？それって？」

「道具袋を使える事。あと、俺の世界の物語の知識。笑っちゃうよね。子供の頃読んだシュールな小説と、魔王の言葉にヒントがあったよ」

「どういうことなの？じらさないで教えてよ！！」
「まず、魔王は全軍を袋に入れようとしてたね」
「うん」
「四魔公とか１６魔将とかいう強そうな人と何千人の兵士も入れられるよね。強さとか量とか大きさとか関係なく無制限に」
「うん」
「んで、俺の道具袋は、片手を突っ込んで『収納』と念じたら、反対側の手に触れている物を収納できるよね」
「まさか」
「はい。入れちゃいました。反対側の手に触れている『魔王城』を。その中に魔王も魔族も全部入っているよね」

しーん

しばらく二人の間に冷たい風が吹いた。

「入れたの？」
「入れた」

「・・魔王も？」
「魔王も」

「・・・・魔公も魔将も兵士も？」
「魔公も魔将も兵士も」

「・・・・・・あのでっかい魔王城も？」
「魔王城ごとぜーーんぶ」

「ぷっ」
「くくっ」

「あっはっはははははは」
「はははははは」
しばらく、二人の笑い声が何もない更地にひびき渡った。

殺害（前書き）

今回はちょっとグロ入ります

殺害

「あはははははは　もうだめ。笑いしんじゃう」
涙が出るほど笑う二人。
「ははは。もうこれで心配ないよ」
「シンイチは本物の勇者だね！！」
二人ともこれほど爽快な気分になったのは初めてだった。
「さてと・・・それじゃ」
シンイチが立ち上がったとき、いきなり袋が動いた
「な・・なに？？？？」
二人で顔を見合わせる
まるで中で何かが暴れているような動きだった。

「もっとだ、もっと魔力を集めろ」
魔王を中心にして、周囲を魔族が取り囲んでいた。
「魔獄砲」
手を挙げて魔力を放出する魔王。
「ぐっ・・足りぬ。もっと魔力を余に集めろ」
四大魔公・十六魔将・数千人の兵士の魔力を集めても立っていられる姿は、魔王の威厳に満ちていた。
水の魔公ウンディーネと地の魔公ノームが必死に体を癒す。今にも魔力のオーバーフローでバラバラになりそうなくらい傷ついていた。

「もうおやめください。これ以上は・・」ウンディーネが必死に諫める
「・・・余にはすべての魔族の命がかかっておる。命果てようとも、この世界を破ってみせる」
鬼気迫る形相で魔獄砲を放ち続ける魔王。

山でも軽々と吹き飛ばす魔力砲を何発も放ち続け、道具袋の世界を破ろうとしていた。

激しくよじれる道具袋
「ど・・・どうしよう。このままじゃ破れて、魔王がでちゃうよ！！！！」
メアリーが悲鳴を上げる
「えっと、えっと、そうだ！！！」
シンイチは必死の表情で道具袋の魔方陣に手を突っ込み、何かを力まかせに引き抜いた。
【ブチッ】

その直後、魔方陣からこの世のものとも思えない叫び声がひびき、メアリーが耳を抑えてへたりこんだ。
シンイチが気持ち悪そうに、手に握り締めたものを捨てる。
「ね・・ねえ。聞きたくないけど、なにをしたの？」
「と・・とっさに。魔王の心臓を取り出した」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・・ねえ」
「・・・はい」
「鬼？」
「鬼ですハイ。」

「魔王様ーーー

他の魔族の憎悪が魔王城を包む。

「まだ魔王は死んでないみたいだね」
少しして落ち着いたメアリーがいう。
「わかるの？」
「この『奴隷の首輪』の魔力が消えてないから。主人が死んだら外れるの」
「そうか・・中途半端はよくないな。魔王キッチリ殺そう」
「どうするの」
「心臓抜いても生きていられる化け物だったら、確実なところは一つだけだよ」
「ききたくない」
「後ろ向いてて」

道具袋に手を突っ込んで、何かを一つまみ取り出して捨てる。
【ニュル】

「聞きたくないけど、何取り出したのかな？残酷勇者さま」
「ひどい！！！　魔王の脳みその真ん中辺りを一つまみ」
「・・・外道。ボクの勇者様は、魔王より怖いよね～」
「そんなぁ」
カランと音を立てて、奴隷の首輪が外れた。
同時にシンイチの頭の金輪もはずれる。

「・・魔王様は息をひきとられました・・」
ノームの声に、全魔族が堪えきれずに泣き出していった。

「・・・どうやら、落ち着いたみたいだね」メアリー。
「ああ。魔王が死んだし、中から破ろうとするのは止めたみたいだ」
シンイチ

「これからどうする？」
「とりあえず、フリージア皇国まで帰ろうか。あいつ等にはお礼をしないといけないからな」
「・・そうだね。お仕置きしよう。」

二人で手を繋いで、フリージア皇国へと続く道を歩き出した

魔法玉

「・・そういえば、おなかすいたね」
歩き始めて二時間くらいたって、メアリーが訴える。
「そうだよな。考えてみたら、今日は朝から何も食べてないしなぁ」
シンイチ
「そうだ!!。その道具の中には、魔王城が入っているんだよね」
「ああ。てかそう考えたら気持ち悪いな。魔族を何千人とぶら下げて歩いているんだから」
「魔族だけじゃなくて、食べ物も入っているはずだよね。お城だもん」
「そうだな。出てくるか試してみよう」

魔王城にて。
魔王が死んだからといって、食堂の仕事がなくなるわけではない。
何千人もの魔族の食事を作るため、２４時間体勢で料理を作っている
何千皿もの料理。その中でも魔公や魔将向けに作られた特別な料理があるが、いきなり消えた。
「あれ?おかしいな。ここの料理を運ぶはずだったのに、なくなっている。」
新米の料理人が首をかしげる。
「おい!!!どこやったんだ!!!」
「いや、確かにそこにあったんですよ」
「現にないじゃねえか。てめえ、食いやがったな!!!」
先輩のコックに殴られる不幸な新米料理人だった。

外にて
「おいしい~。さすが魔王城の料理!!」メアリー

「上等な料理でろ～なんて注文つけたけど、ちゃんと答えてくれるとは、なんという性能！！」
道具袋に頬擦りするシンイチ。見た目は小汚い袋だが、どんな伝説の宝物より価値があると感じていた。
ワインも取り出して、道の真ん中で宴会状態。二人は満腹になるまで食べまくっていた。

再び魔王城
４魔公と１６魔将が円卓につく。中央には虹色に光る巨大な魔法玉があった。
魔法玉とは魔物が死んだ時に死体の側に出現する魔力の塊で、冒険者はそれを回収して売って収入にする。または、自分で吸収すると、魔力量の増大させることができた。他にも、魔法を使う際に魔力補助をするなどに使えた。
しかし、強大な魔物の魔法玉には、別な使い道もあった。

「・・・この『魔王の魔法玉』を吸収した者が次の魔王となります」
水の魔公ウンディーネが発言する。
「この中で前魔王についで魔力が強いのは、ウンディーネ魔公ですが・・・」
地の魔公ノームが発言する。

「だが、ウンディーネ魔公は戦闘向きではない。今なすべき事は、一刻もはやくこの世界から脱出することではないか？少々の魔力の強さに関わらず、戦闘に長けた者が次の魔王になるべきではないか？余にまかせてほしい」
炎の魔公イフリートが言う。彼が一番戦闘能力が高かった。

「あはは。その前に、この中の空気を浄化し続けていかないと。私

に魔法玉をくれなきゃ、いつまでも魔力がもたないよ。いいとこ保って一ヶ月だね」
少女のような姿をした風の魔公シルフィールドが発言する。
「その前に脱出すべきだ！！！！」イフリート
睨みあう二人。

「お二人とも、冷静になっていただきたい。そもそも、魔王の魔法玉とは、歴代の魔王の魔法を伝える至宝。魔王が世襲制であることをお忘れか？魔王の血を引く正当後継者に渡されるべきものです」
魔将ケルビムが二人を牽制する。

「控えていただきたいケルビム将。如何に魔将といえども、公爵同士の討論に割り込むべきではない」イフリート
「いえ、ここはあえて言わせていただきます。数多いる魔王の子の中で、たった一人魔将の地位まで上りつめた、私こそが魔王の正当後継者としてふさわしいはず。父の後を継ぎ、魔王玉を吸収させていただきます」
「その通りです！！！」残りの１５将が唱和する。

魔王の地位は世襲制ではあるが、寿命が長いため、正当後継者を指名するのに時間がかかる。
その間、血で血を洗うような魔王後継者争いに勝つためには、実力を示さないといけない。
四大魔公に告ぐ魔将の地位に上り詰めたケルビムは、明らかに魔王の後継者としての実力があった。
お互いに睨みあう。円卓での会議は混沌とした雰囲気に包まれた。

（ダメだ・・・・魔王が死んで、このような世界に閉じ込められたのに、誰もが権力闘争を始めた。このような争いをしている場合ではないのに）

魔族の中で最も知性と理性に優れているウンディーネがため息をついた。

再び外
「あっ　大事な事忘れてたよ」メアリー
「何？」
「魔族が死んだら、魔法玉って物を残すんだよ。それが高く売れたり、魔力の元になったり、レベルアップに使えたりするんだよ」
「そういや、フォンケルの爺さんもそんな事いってたっけ。」
「きっと魔王が死んだから、魔法玉でたはずだよ。取り出して！！」
「はいはい」
シンイチは魔王の魔法玉でろ～と念じながら道具袋に手を突っ込んだ。

「うお！！！でっかいし綺麗だ。」
目の前に巨大な虹色をした魔法玉が出現した。
「・・こんな大きい魔法玉なんて見たことないよ。それにこの魔力。すごすぎる」
メアリーが呆れたように言う。
「それでどうする？」
「えっとね、こうやって手を触れて、『吸収』と念じれば、自然に吸収できるんだけど。二人で分けようよ」
二人同時に手を魔法玉に触れる
「うわ！！！すごい魔力が流れ込んでくる」メアリー
「？？？なにも感じないけど？？？」シンイチ
魔法玉はすごいスピードで小さくなり、魔力がメアリーに吸収される。
「あれ？なんで私だけ？」メアリーが首をかしげる。
「よくわかんないけど、俺が魔力を吸収する能力すらないって事だけは分かったよ・・・」

地面に座り込んで落ち込むシンイチ。

「ま、まあまあ。シンイチには無敵の道具袋があるじゃない。それに、魔法についてはボクが全部役に立ってあげるから」

ポンポンと肩を叩いて慰めるメアリー。

「せっかくこの本が使えると思ったのにな・・・」

道具袋から文字解析魔法が書かれた本を出してため息をつく。

魔王城

魔王の位を主張しあう者同士が激しく言い争う中、いきなり魔王の魔法玉が消えた

「!!!!!これは???」

「どうやら・・外の勇者に取り出されたようだ・・」

一瞬呆然とする一同

「だ、だから早く余に託せばよかったのだ!!」イフリート

「何を言う。身の程を弁えろ!!」ケルビム

「あーあ。これでもうお終いだね。キャハハ。みんなのせいだよ」

シルフィールド

お互いに責任を擦り付け合う魔族たち。

(これで・・魔族は終わりだ。情けない。どうすればよかったのだ)

ウンディーネとノームは頭を抱えて懊悩した。

不穏（前書き）

ついにランキングに乗りました。読んでいただける皆様に感謝！！

サービスで今日は3話更新します

不穏

外

「大丈夫だよ。さっきの魔法玉は特別性だったみたいで、いくつかの魔法も入ってたから。その中に『知識共有』の魔法があったから、今からボクの知識をコピーするからね。すぐ文字を覚えられるよ」

そういって接近してくるメアリー

「ち、ちょっとメアリー。近いよ」

「この魔法はおでこをくっつけないと使えないんだよ。そのままじっとしてて」

無邪気におでこをくっつけるメアリー。抱きついてくる。

シンイチはドキドキする。が、何もおこらない

「・・・え？」

「あ、ごめん。そういえば、ちゃんとした杖がないと魔法使えないんだった。」メアリー

「そうなの？」

「うん。魔法を使うには、魔力もそうだけど杖も必要だからね。という事だから、杖も出して」

「なんか、既に出てくる事が前提になっているよね」

そういいながら道具袋に手を突っ込む

「ちゃんとすんごい伝説の杖を呼び出してよ」

「そんな事いわれてもな～。えっと、魔王城内で一番すごい杖でろ」

魔王城

「え？？？」

ウンディーネが驚く。

長年愛用して、今も左手に握り締めていた杖が、いきなり消えたか

らである。
「ま、まさか、私の杖も外の勇者が取り出したの?。これでは、今の私達は瓶の中のアリに等しい。どうすれば・・いや・・・・これを利用すれば・・」
何か思いついて考え込む。

外
シンイチが取り出した杖をみて、メアリーが大喜びする
「シンイチ、すごいよ!!『女神の杖』だよ!!!」
「そんなにすごいのか?」
「伝説の勇者のパーティの魔法使いが使ってた杖で、彼女が魔王城で死んだ時に失われた伝説の杖だよ!!」
「ふーん」
「なんかリアクション薄いなぁ。これ、確実に国宝クラスだよ。売れば１００万アルは堅いよ。」
「どうせ俺には使えないし・・」
「もう。拗ねないの。それじゃ改めて・・」
シンイチに抱きついておでこをくっつけて、「知識共有」の魔法を使った。
「痛!!!!!」
「もうちょっとだから我慢して」メアリーががっちり抱きついてはなさない。
平原にシンイチの悲鳴が響き渡った。

「うう・・酷い目にあったよ」シンイチがぼやく
「よしよし、よくがんばったね」メアリーが頭をなでる。
「ん・・まあ、これで文字も覚えられたし、いいか」
座り込んで休むシンイチ

「ちょっと座ってて。ヒール」
メアリーが癒しの魔法を使う。シンイチの頭痛が消えた。
「魔法って便利だなぁ」
「そうでしょ。」
「俺もつかえるようになるかな?」
「うーん。シンイチの魔力量は１５だからね。使えてもライトの魔法一回分くらいかな?魔法玉吸収ができないからレベルアップも無理だし」
「魔王を倒しても最弱のままの勇者っていったい・・・」
地面に「の」の字を書いて落ち込むシンイチ。

「へへん。ただでさえ危ないシンイチにはそれくらいがちょうどいいと思うよ。ちなみに今のボクは魔法については魔王より上かも。えっへん」
腰に手を当てて胸をそらすメアリー
「理不尽だ・・」
ひたすら落ち込むシンイチであった。

魔王城が道具袋に入れられて数日

「ふざけるな!!!ただのポーションが２０アルだと?普段の１００倍じゃねえか!!!」
一人の若い魔族が魔王城内のショップエリアの店員にくってかかる。
「当然なんだよ。仕入れも見込めない以上、値上がりは当然だ。嫌なら買わないでくれ」
中年の魔族の店主が出てきて言う。
「貴様!!俺を誰だと思っている。１６将の一人、マルドーク様直属の兵だぞ!!」
「だからどうした?魔王様が死んで次の後継者も決まらない。こんな世界に閉じ込められて何日もたっていて、食料も水も天井しらず

の値上がりだ！！！。信用できるのは金だけなんだよ！！」
「き・・きさま。それでも魔族か」
「魔族だろうが人間だろうがメシを食わないと生きていけないんだよ。いいから帰ってくれ」
「よくわかった。殺してやる！！！」
剣を振り回す魔族
「おーい。後ろに並んでいる奴等、こいつを殺してくれた奴に特別にケセルの実を１０アルで売ってやるぞ」
「な・・なに？ぐわ！！」
若い魔族はすぐ後ろに並んでいる魔族に殺された。

もともと、魔王城に常駐していたのは５００人程度だった。その程度であれば、少々篭城しても食料も充分にあった。
しかし、人間の国の侵攻のために数千人の軍隊を呼び寄せた状態で閉じこめられたので、あっという間に食料不足になった。

それより深刻なのは水不足だった。
井戸は地下水脈につながっていないとすぐに枯れてしまう。
数千人の魔族の需要を満たす事はできなかった。
ウンディーネをはじめとする水の魔法の使い手が必死に空中から水を取り出そうとしているが、そうすれば当然空気が乾いてのどが渇くのが早まる。悪循環であった。

魔族同志の間でも争いが起き始めていた。

思惑

イフリートが滞在している西の塔

「・・やはり、その方法しかないか・・」イフリート
「・・はい。他の三人の魔公と、１６魔将と、兵士１０００人を殺して魔法玉を集めれば、計算上は魔王様の魔力を上回ります。その魔力をイフリート様が吸収し、魔力砲でこの道具袋の世界を破れば・・」
「まだ決断の時は早いが、わが配下を充分に掌握しておいてくれ」
「はっ」部下が下がる。
「・・・果たして、うまくいくだろうか?うまくいっても同族殺しの上、魔族の力が大幅に低下してしまい、人間に滅ぼされるかも・・」
イフリートは苦悩する。

ウンディーネが滞在している東の塔
「ウンディーネさま。言われるままに金貨を集めましたが・・どうされるのですか?他の魔公に知られたら・・」
部下に命じて、魔王城の財貨保管室から金貨を集めたウンディーネ。
「誤解を招く行為であることは承知しています。しかし、どうしても必要なのです」
集めた金貨を魔力で融合させ、一枚の純金の板を作る。
「もう我々には勝ち目はない。この上は、勇者の慈悲にすがるしかない。我々四大魔公や十六魔将の命を引き換えにしてでも、魔族を救わねば・・」
黄金の板に勇者に対しての手紙を掘り込んでいく。

「どうしてわざわざその様なことをするのです?」部下が聞く

「勇者に手紙を出そうとしても、そのままでは取り出してくれないでしょう。だから、勇者が『金銀財宝』を出そうとする時に、この金で出来た手紙も取り出してくれるはずです」
「そこまでして・・」
「我々には他に方法はないのです。」
ウンディーネはため息をついた。

ノームが滞在している北の塔
「なんですと!!!この世界に永住すると???」ノームの執事が叫ぶ
「永住とは言っておらん。脱出できる魔法を開発するまで、ここで生きていくしか方法がない」ノーム
「し、しかしどうするのです。食料も水も空気もエネルギーもないですぞ!!」
「あるではないか・・」
「まさか」
「我等四大魔公は精霊を先祖に持つものたち。精霊とは世界を司る力だ。我が大地に根を張り、生きるに足る果実を実らす大樹に姿を変え、ウンディーネ殿が清らかな泉に姿を変え、シルフィールド殿が世界を浄化する風に姿を変え、イフリート殿が天空にて光を照らす太陽に姿を変えれば、このような無の世界でも魔族は生きていけるだろう。もちろん、一族の者も相当数我等と共に姿を変えねばならんが、生き残った魔族がいつの日か世界に帰る魔法を開発できれば・・」
「お館様」
「すまんな。お前達も樹に姿を変えてもらわねばならん。無様な私を許してくれ」
「いいえ。魔族のために身をささげましょう」

中央の塔に滞在する１６魔将
「いいか。なんとしても他の魔族を滅ぼして、魔法玉を集めるのだ！！」ケルビム
「はっ」他の１５将
「イフリートはもしや同じことを考えているのかもしれん。よく警戒して、先手を取れ」

魔王城の中では緊張が高まっていった。

シルフィールドが滞在する南の塔

「キャハハ。皆いろいろな事かんがえているね～」
余裕たっぷりの表情で言うシルフィールド
「ふふ。風の末裔たる我等には水も食料も不要。あわてる姿が楽しいですね」
妖精のような少女が言う。彼女もシルフィールドと同じ容姿をしていた。

魔族のうち、風の末裔といわれるシルフィールドの一族だけは他と違い、肉体を持たないガス状生命体だった。
もっとも精霊らしさを残しているということでもある。
その種族特性ゆえに、個体という概念を持たない。すべて『シルフィールド』という存在の分身だった。

「まあ、私達にとって、ここから出ることなんてたやすいけどね。何回も『外の私』につながったし」
「勇者が何か物を取り出すたびに空気がつながりますからね。情報交換もできますし」
「しかし、こんな形で魔国の滅亡が現実化するとはね。予想も付かなかったよ。面白い」

「ええ。２０００年前でしたかねぇ。魔族が奴隷化されていた時代は」
「奴隷から解放して新しい世を作るんだーーーって言うあの子にほだされて協力しちゃったけどね」
「魔国を建国した初代魔王ですね。でも、結局は人間を奴隷にしたりしているんだから、同じでしたね」
「あの時は人間の帝国が滅ぶ様が面白かったから手を貸したけど、結局ずるずるそのまま協力しちゃったね」
「ふふ。私達は魔国が滅びる姿もみたかったんですよ。『風と滅びのシルフィールド』ですもの」

「あはは。じゃ、次は勇者君たちに協力しようか。勇者君たちが、今の社会を滅亡させるように。その後にくる新しい世をみたいしね。無力なくせに最強の勇者君はどんな世をつくってくれるんだろう」
「そうですね。それじゃ、勇者君のところにいってきます」
「たのんだよ～」
妖精のシルフィールドは消えた。

宝物

旅をして数日。メアリーはすっかり道具袋に味をしめていた。

「んふふ、今その道具袋は本当に宝の袋だね～。もっと試してみようよ」

「どうすればいいかな？」

「う～ん。例えば、値段の高い物でろとか？」メアリー

「身も蓋もない条件だね。んじゃ、取り出してみようか」

シンイチは例のごとく道具袋に手を突っ込んで、どんどんと取り出す

「うはっ。『炎の剣』『霧の羽衣』『地魔の槌』『天空の風石』その他いっぱい・・・素敵！！！」

目をハートマークにしてはしゃぐメアリー

「でも、俺には装備できないのね・・」シンイチ

『炎の剣』を持とうとしたら、熱くてもてなかった。

『土魔の槌』を持とうとしたが、重くてもてなかった。

『霧の羽衣』は女物だった・・・

「この『天空の風石』は使うのに魔力が必要みたいだしね」

ペンダントになっている『天空の風石』を首にかけてメアリーが言う。

「もういいや。どうせ俺なんて・・・」

魔王城

宝物を取り上げられた持ち主達が大騒ぎしていた。

「・・・まさか、着ている服まで取り上げられるとは・・ひどい。しくしく」
下着姿になったウンディーネは泣いていた。

外
「うーん。この『霧の羽衣』さわり心地バッチリ。最高!!そうだ、今の服何日も着てて気持ち悪いから着替えよう。えっと、シンイチ。下着も出してね♪」
「し、下着??」
「だってナムールの街までまだ遠いし・・お願い☆」
「わかったよ」
「もちろんきれいな下着だよ」
「・・綺麗な女物の下着・・でろ!!」
道具袋に触れた物を掴んで出す

「・・・えっちだね。こんなの着れないよ!!というかサイズが合わない」
「・・・・」
取り出したのはセクシーな大人用の下着だった。当然、胸のサイズが大きすぎる

「なんでこんなのだしたのカナ??ボクの胸に対するあてつけ?」
黒いオーラをまとうメアリー。
「ち、違うよ。『綺麗な下着』なんていうから、こんなゴージャスな下着が出たんだよ」
「バカ!!新品の下着っていう意味だよ!!」
「ご、ごめんなさい」

魔王城

「しくしく・・・なんで私ばっかり・・・もう勘弁してくださいよう・・」
素っ裸で泣くウンディーネ。

外
「でも、使い方がわからないと不便だよね。この『天空の風石』ってどう使うんだろう?」
「ああ、それはね。空を飛べるアイテムだよ。私の物だけど、あげるよ」澄んだ声がする
「え?すごいじゃん。・・・てか、キミだれ?」
いつの間にか、目の前に小さい妖精が浮かんでいた。
「初めましてだね。キミが魔王の後継者?そしてそっちの拗ねてるキミが勇者君?」
「えっと・・・?」
「あ、ごめん。私は四大魔公の一人シルフィールドの分身。シルフと呼んでね」

「「えええええ??」」シンイチとメアリーが声をあげる。
「あはは。そんなにびっくりしなくてもいいよ」シルフが笑う
「ど、どうやって道具袋から出たんだ!!!」
「ああ、魔法袋の物を取り出すときに中とつながるでしょ。その時に一緒に出たの。空気を扱う私しかできないけどね」
「ボ、ボクたちに仕返しするの?ボクは強くなったんだぞ!!!」
女神の杖を振り回しながらメアリーが言う。

「あはは。そんなに警戒しなくても。私はね、今度から勇者君のお供をする事になったんだよ、よろしく」
「「え??」」
「これから私は役に立つとおもうよ~。」
にっこり笑うシルフ

「なるほど。魔王城のシルフィールドは、魔国に対してもう愛想が尽きているわけなんだ」シンイチ
「うん。せっかく魔族の国を作って何か別の社会を作るのかなとおもったら、結局人間と同じなんだもの。戦争と支配ばかり。自分達は奴隷はいやだ～なんていっておいて、人間捕まえて奴隷にするとか。そんなの同じじゃん。もう協力するのも潮時かなとおもって。そろそろ滅んでもらって、新しい事を始めて欲しいんだよ。」
「・・でも、キミは風と滅びのシルフィールドなんでしょ？一緒にいたらボクたちも滅ぼされるんじゃないの？」
「興亡一体だよ。作った国はいつか滅ぶべきなんだ。私達『風』は何億年もこの世界を見てきた歴史の生き証人なんだよ。『風化』という言葉があるように、万物は滅びる。それは、次に新しいものを生むために必要な事なんだよ。正しくは『風と滅びと新生のシルフィールド』と呼んでもらいたいね。私は期待しているんだ。勇者君と魔王ちゃんがこの世界で新しい何かを作り出す事をね。それが古くなって硬直化するまでは滅ぼさないよ」

「・・まあ、今すぐ俺たちに危害を加えないなら、一緒に来てもいいんじゃない。小さいし、危険なさそうだし」
「そうだね。まあいいか」
「決まりだね。楽しい旅になりそうだよ」
旅の仲間にシルフが加わった。

「それじゃ、空を飛んでナムールの街までいこうか。」
「え？」
メアリーがシンイチの手を取る。すると、二人が浮き上がった。
「ち、ちょっとまって。怖い怖い～」シンイチ
「あはは。気持ちいい～」メアリー
「そうでしょ。風になって世界を巡るのって気持ちいいんだよ」シ

ルフ

一行はナムールの街まで飛んでいった。

各国

フリージア皇国
「ふふふ。うまくいったようだな」国王。
「ええ、これが魔王からいただいた『呪力条約紙』です」
アーシャが取り出して渡す

「ふむ・・なに!!!!!どういうことだ?」
「何か?」
「魔王の署名はあるが、血判が消えておる。これでは条約が発効しないぞ!!!!」
「なんですと!!」
アイーシャが見ると、確かに押されていた血判が消えていた。
「もしや、謀られたのでは??」
宰相が震える声で言う。

「い・・いや、この呪力条約紙は本物です。私達のこめた魔力も残っています。しかし、私達の血判も消えています」メルト
「確かに・・我等の署名した条約紙だ。両方の血判が消えているという事は・・」国王
「魔王に何かあったということ。もしや、あの勇者が魔王を倒したのでは??」ノーマン
「そんな、ありえない」メルト
「ええい!!!!なぜ勇者が魔王に殺され儀式が終了するとこまで見届けなかったのだ!!」国王
「も・・申し訳ありません」アーシャが頭を下げる。

「とにかく、この事が他国に洩れたら・・・」
「い、いや。元々魔王を倒すためという名目だったはず。だから目

的が達成されたということで・・」宰相
「馬鹿者!!!魔王が倒されたとて、次の魔王が攻めてきたらどうする。わが国の魔国との平和条約すら魔王の死で失効するのだぞ!!他国も魔族の攻撃がおさまらないと、我が国に対して不信感を持つ。最悪、魔国と他国連合で挟み撃ちになるぞ!!」
「そんな・・」
「緊急会議じゃ!!」

急遽国内の貴族が集められ、会議が開かれる事になった。

数日後

森の国ミール
「ええい。フリージア皇国からの使者はまだか?」
ミール王が声を荒げる。
「まだ魔国から帰って数日です。そんなに早く使者はこないのでは?」王子が諫める。
「何を生ぬるい事を言っておる。魔王が倒されたのなら魔族がコロニーから撤収してもよいはずじゃ。最悪、勇者が死んだ場合でもコロニーから魔族が出ないように条約を結ぶとフリージア国王は約束したはず。しかし、未だ魔族は暴れまわっており、略奪や誘拐が横行しておる。１００万アルの大金と森の杖を提供させておきながら、今までと変わらないではすまさんぞ!!」

「・・使者をこちらから出されてみれば?」王子
「そうじゃな。光の国ミラー、海の国アトルチス、大地の国ガイルとも提携して詰問状を出そう。場合によっては、連合してフリージア皇国を討つ」
「ち・・父上、戦争をするのですか?」
「場合によってはじゃ。資金を国債で提供してよかった。踏み倒し

てでもあの国に一泡ふかせてやる。戦争に勝てばただの紙切れじゃからの」

人間の国にも不穏な雰囲気が流れだした。

各国の間で使者が行き交い、どの国も今までと状況が変わらない事が確認され、フリージア皇国に使者団が派遣された。

「貴国は約束したはず。最悪の場合でも魔族の暴虐はおさまるはずと」森の国の代表
「は・・しかし」フリージア国宰相。中年太りの体は汗でぐっしょりと濡れている

「しかしではない。我等が国の魔族コロニーはむしろ拡大しておる。どういうことなのかな?」光の国代表
「まず、魔国とどういった話し合いだったのだ。魔王と勇者パーティで勝負を決めると説明され、魔王が勝った場合は魔族コロニーの自治権の認証。そして、勇者が勝った場合は魔族コロニーの撤退。そして、どちらにしても貴国が今後魔国に対しての盾となるといった取り決めだったはずだ」海の国代表
「もしや・・我等に何か隠している事でもあるのかな?とりあえず、魔国との間に結ばれた呪力条約紙を見せていただこう」大地の国の代表

「いや・・今は手元には」宰相
「我等を愚弄するか??ならば我等にも考えがある。貴国に差し出した国債証書は無効にする。そして、我等は連合して宣戦布告をさせていただこう」大地の国の代表者が最終通告をつきつける。
「わかりました・・」観念して、呪力条約紙を見せるフリージア宰相。

「これは・・何という事だ。最初から勇者が勝つ事は考えられておらぬ内容ではないか！！！」森の国使者
「魔王に勇者を生贄として道具袋を渡す。フリージア皇国には平和条約の継続。そして魔族コロニーの自治化のみで、勇者が勝った場合の撤退など何処にも盛り込まれておらぬ！！」海の国使者
「ひどい内容だ・・勇者と人質を生贄にして差し出して平和をもたらそうなどと。」光の国の代表
「・・・貴国に魔国との交渉をすべて任せていた我等が愚かだった。一定の約定が結ばれれば、徐々に奴隷とされた者たちの解放も交渉すると貴国はいっていたが、平気で王族を奴隷に差し出す国がその様な事をするはずもない」大地の国の代表。

「・・・」フリージア宰相は無言
みな、それぞれの代表にも、魔族の攻撃で死んだ知り合いや、奴隷として連れて行かれた親族がいた。

「・・・それで、結果はどうなったのだ。いや、この呪力条約紙の状態を見れば、予測が付くがな」森の国の代表
「わ・・我等も予想外の結果なのです。あの惰弱な勇者がどんな卑怯な方法を使って、魔王陛下を害したのやら・・」
宰相が焦って言う

「惰弱だと！！！！」
「・・・卑怯だと！！」
各国代表が怒気を募らせる。

「・・惰弱で卑怯なのは貴国だ。勇者ではない。わが国は勇者が帰還したら、最大級の敬意をもってもてなす。我等が救世主としてな」
森の国の代表

他の国の代表も頷く。

「・・・我等は大使として、勇者帰還まで滞在させていただく。もし勇者に仇なす時は、我等がすべてを敵に回すと心得よ。それから、貴国に差し出した国債証書と国宝は返還していただこう。あれは『勇者』に対して差し出した物であって、貴国に対して出したものではない」

「・・はい」フリージア国宰相はがっくりと肩を落とした。

金貨

ナムールの街に着いたシンイチたち。夕方になっていた。
「やれやれ。これで今日から野宿しなくて済むね。とりあえず、お腹すいたから食べようよ」メアリー
「ああ。しかし賑やかだなあ。」
街は相変わらず多くの種族で賑わっていた。
料理屋を探して街をあるく。

「ねえねえ、あそこがおいしそうだよ」メアリーが指をさす。立派な建物で、高級そうな料理店だった。
「ちょっと高級すぎないかな？」
「いいじゃん。どうせお金なら魔王城から出せばいいし」
ポンポンと道具袋を叩いて言うメアリー。
「とりあえず出して見ようか。１アル出て来い」シンイチが道具袋から１アル金貨を出す。
「うん。問題ないね。それだけあれば足りるはずだよ」メアリー。
「私は食べる必要はないけど、いい匂いを嗅ぎたいわね。それが私の力になるんだよ～」シルフ
「そっか。ならここでいいか」
三人で中に入っていった。

「ふー。満足」シンイチ
「おいしかったね」
高級な肉料理、魚料理、フルーツのデザートまできれいに食べた。
「そういえば、通貨の単位ってどうなっているの？」シンイチ
「アルが金貨で、その１／１０の価値がギル銀貨。さらにその１／１０の価値がジル銅貨。」
「一般の人の収入は？」

「んー？平民の一般的な家庭で３０アルくらいかな？」

「だいたい１アルが一万円で、１ギルが１０００円、１ジルが１００円くらいか・・」

「今食べた料理が二人で９ギル５ジルだね。」

「そんなもんか。・・そういえば、その『女神の杖』って１００万アルって言ってたっけ？」

「そうだよ。この世に一つしかない伝説の杖だもん。でも、その袋の中にはそんなのゴロゴロ入っているんだけどね。ボクが着ている『霧の羽衣』と『天空の風石』もそれ位するし。そう考えたらボクたちってすごいよね！！」

「すごいというか・・メアリー３００億円ぶら下げて歩いている事になるの？」

「キャハハ。もしバレたらこの街中の人に追っかけられるかもね」

シルフ

「・・・今日はもう服屋とか閉まっているから仕方ないけど、明日街をまわって必要なものを買おう。メアリーは街中でその服を着るの禁止！杖も風石もなるべく道具袋にしまっておこう」

シンイチが言う。

「え～。この服気に入っているのに」メアリーが膨れる。

「国宝ぶら下げて街を歩いていたら命がいくつあっても足りないよ！！」

「その時は皆ぶっ飛ばしちゃえば？」メアリー

「そうだそうだ！！！私も協力するよ」シルフ

「ダメだ・・メアリー魔王になりつつあるよ」

シンイチは頭を抱え込んだ。

料理店を出た後、街で一番大きな宿に泊まった。

「うわ・・ふかふかベッド。王宮みたいな豪華な部屋だね～」メアリーがはしゃぐ
「・・・なぜに同室。しかもスイートルーム」
部屋の中央には大きなベッドがあった。

「ねえねえシンイチ。この部屋おっきなお風呂も付いているよ。ボク入ってくる」
さっさとバスルームに行くメアリー。
「・・・無防備すぎるよ。まあ、子供だから仕方ないか」
とか無意味に冷静さを装うシンイチだった。
「・・覗く？」シルフ
「・・子供には興味ありませんですハイ」シンイチ
「なぜか体温あがっているけどね～」シルフがからかう。
「ねえシンイチ。また新しい下着出して持ってきてね～」バスルームからメアリーが呼びかける。
「あ、また体温が上がった」
シンイチは無表情に新品の下着を出してバスルームに投げ入れた。

交代で風呂に入って、落ち着いた二人。
「ねえ、そういえば、魔王城の中にお金っていくらあるんだろう？」
メアリー
「そうだな。確認しておこう。アル全額でろ！！」

とたんに、部屋中が金貨で埋まった。

魔王城内　酒場

「クッ・・金が儲かるのはいいが、それ以上に酒が高くなるのはな」
魔王城内の店舗エリアの道具屋店主。
「まあ、お偉方がどうにかしてくれるだろうぜ。俺らに出来るのは

儲けることだけだぜ」
武器屋の店主が言う。イフリート派、ケルビム派両方から飛ぶように武器が売れていた。
「だがなぁ。もうそろそろ品物がなくなって来てるんだ。はやくどうにかしてくれないと。ま、儲かるからいいけどな」
防具屋の店主がぼやく。
なんだかんだといいながら、彼らはこの特需を喜んでいた。

「兄ちゃん。勘定だ。いくらだ？」
「５０アルになります」酒屋のアルバイト魔族
「けっ。いい値段してやがるぜ。ほらよ・・なに？？？」
道具屋の店主が財布を開いて驚愕する。パンパンに膨れていたはずの財布から、金貨が消えていた。

「ど、どういうことだ！！！」
武器屋と防具屋の店主も財布を開いて驚く。綺麗さっぱり金貨が消えていた。
「店長・・大変です。金が消えています！！！」
酒屋のアルバイト店員も異変に気がついて騒ぐ。
「い・・一体何が起きているんだ。これ以上何が起こるんだ」
魔王城の中は大騒ぎになっていた。

「え？？メアリーどこ？？？」
焦ってメアリーを探す。
「んー。この辺に埋もれているみたい」シルフあわててメアリーを掘り起こす。
「・・ぷはっ　危うく金貨に埋もれて死ぬとこだったよ～」メアリー。
「・・そういえば、最初に召喚された時もアルを出したら部屋中金

貨だらけになったっけ。」
「金貨だらけどころじゃないよね。この広い部屋半分埋もれているもん」

「・・こんなにいらないなぁ。なくなったらまた出せばいいし」シンイチ。金貨を一つかみ取る。
「そうだね」メアリーも両手におさまるぐらい金貨をとる。
「それじゃ『収納』」金貨を収納した。

魔王城
「うひゃひゃ。金貨が降ってきているぜ！！」
魔王城の庭に金貨がどんどん降ってきていた。
兵士が必死に拾い集める。
「ま、まさか、あれって俺たちの金貨じゃ？？」
いきなり今まで貯めていた金貨がなくなって呆然としていた商人達が、我勝ちに金貨を回収しようとする。
庭では魔族同士の醜い争いが起きていた。

その様子を見て大笑いするシルフィールド
渋い顔をしているウンディーネとノーム。
殺気だっているイフリートとケルビム。
「もう限界です。何とかしないと秩序を保つことすらできません！！」ウンディーネが叫ぶ。
シルフィールド以外の魔公たちも同じ思いだった。

皇国

フリージア皇国城

数日前から国中の貴族を集めて対策会議をしているが、前向きな意見は出てこなかった。

「そもそも、このような卑怯な策をすべきではなかったのだ。勇者に対して誠実に接して、魔王を倒す事を目的としておれば、今頃は我等が魔国を征服することも可能だったはず」

「そもそも、このような策を立案したメルト王女に責任がある。」

「何を言うか!!!勇者があのような惰弱でさえなければ、我等も勇者に対して違った接し方があった。このような結果など誰も予想できん」

「現に魔王は倒されたではないか!!」

「そもそも、勇者が倒したとは疑わしい。あの人質となったメアリーとかいう平民の子が倒したのでは?」

「勇者が倒したと考えるよりは可能性があるが・・」

「誰も彼女に説得しなかったのか!!人質として役目をはたせと・・」

「いや、そもそも。勇者の残した伝説の武器や防具があるなら、アーシャ殿やノーマン殿が勇者と協力してれば充分勝算があったはず、

始めからそうしておれば、周辺諸国の信頼も勝ち得たものを・・これでは、わが国のみが周囲から孤立するぞ!!!」

「まず魔国の情勢を探るべきでは・・」

「いや、こちらから先手を取って周辺国に攻め込むべきだ!!各国の国宝を返還したとしても、前勇者の装備があれば充分勝算はある」

「・・それよりも、勇者や人質に対して手を打つべきでは?どちらが魔王を倒したにしても、間違いなく怒り狂って復讐に来るぞ」

「だが、勇者に対して手を出すと、周辺諸国が宣戦布告をしてくる・・」

「勇者とメアリー王女に対して謝罪して・・」

「いや、先手を取って・・」

「そもそも、我等に相談もなく国宝や国債を返還した弱腰な宰相殿にも責任が・・」

「勇者達が怒っているのは、裏切りをしたメアリー王女や勇者パーティに対してだろう、責任を取ってもらおうではないか」

議論百出。小田原評定。
誰もが不完全な情報を元に憶測で意見を言う。
国王や宰相、メルト、アーシャ、ノーマンもいい考えが思いつかない。
それぐらい勇者が魔王を倒すという事は予想外であった。
誰もが自分達に責任が向かないよう必死に誰かに責任をなすりつけ

ようとしていた。

会議がまとまらないまま、何日にも及んでいた。

フリージア城のテラス

「・・メルト王女様。お疲れのご様子」アーシャが声をかける

「いえ、アーシャ様こそおやつれになって・・なんとおいたわしい。これというのも、あの憎き勇者が余計な事をしでかしたから」メルト

二人とも連日の会議で責任を追求され、疲れきっていた。

「ああ、計画どうり勇者が殺されていれば、世界に平和が訪れ、愛しいアーシャ様と結ばれていたのに。そして、いずれは二人でこの国の王位を継ぐ事も出来たはず・・」メルト

「・・私はまだ貴方を諦めてはおりませぬ。我が愛しの姫。貴方こそ女王にふさわしい。第一王子は言うにおよばず、第二王女、第三王女も国のことなど考えもせず日々遊び暮らすのみ。この国のためには、どうしても貴方が女王になるべきなのです」

「アーシャ様・・」

絶世の美少女と美男子は、物語の主人公のように口付けを交わした。

フリージア城　教会

「ふむ。勇者が魔王を倒すとは、予想外じゃったの」

しわがれた声が言う

「悪いことばかりではありませんね。人類にとっての悪が滅びたという事ですから。マリコル大神官」

ノーマンが声を返す。

彼らは大陸全土に根をはる宗教団体「光の聖霊教」の神官だった。

「じゃがの、魔族の脅威があってこそ、我が教えも光を帯びるのじゃ。民草は一時的には勇者を崇め聖霊を尊ぶが、魔族の脅威がなくなれば神を信じなくなる」

「・・つまり，魔王を倒した勇者は邪魔だという事ですね」
「そういうことじゃ」
「・わかりました。勇者を堕ちた偶像にすべく、探りましょう」
「頼むぞ。わが子よ」

盗難

ナムール街

「うーん。よく寝た」起きて体を伸ばすメアリー
「・・あんまり寝られなかった・・・」シンイチ。目の下に隈が出来ている
「あれ?ベッドが堅かった?ボクには気持ちよかったけど・・」
「・・そうじゃなくて・・」

スイートルームにはなぜかベッドが一つしかなく、二人で寝たのである。
メアリーは子供っぽいが、１４歳の女の子である。ついでに言えば、可愛い。
「あはは。シンイチくん、男の子だね～」
シルフがからかう。
メアリーはわかってなくて首をかしげた。

「よし。今日は買い物だ!!」
「その前に、『霧の羽衣』と『女神の杖』と『天空の風石』は道具袋に入れるよ。持って歩いたら危ないから」
「え～。でも、ボクの着ていた服は洗濯してないし・・」
「道具袋から適当に取り出すよ。改めて街で気に入った服を買えばいいし。えっと、メアリーに似合いそうな服でろ」
シンイチは念じて取り出す。

「・・・メイド服?ボクにこれ着て欲しいの?」メアリー
「どうしてこうなった?」
「あはは、潜在意識に作用したんじゃないの?それがシンイチ君の

趣味か～」
「ち・・ちがう・・と思いたい」シンイチ。
「まあ可愛いからいいけどね。着替えてくるよ」バスルームにいくメアリー
「あれ？また体温が上がっている。期待でウキウキワクワク？」シルフ
「・・ノーコメント」
「でもね～魔王城じゃ多分一人メイドさんがひん剥かれているとおもうよ」
「・・・あっ」

「どうして私まで・・」魔王城の廊下でウンディーネの侍女が泣いていた。

ポケットに金貨を入れて、ナムールの街を歩く三人
「あ、これいい。この服も可愛い。これも」
「はいはい」
メイド服を着たメアリーがどんどん買い込む。
シンイチは必死になってついていった。
（はあ・・なんか本当に勇者じゃなくて荷物もちのような気がしてきた。まあ、道具袋があるおかげで、荷物が重くならないで助かるけど）
「あはは。シンイチ。この香水いい匂い。これも買って」シルフ
女性二人の買い物にかける熱意に圧倒されていた。

「ね・・ねえ、そろそろ休もうよ」
「「まだダメ」」
何時間も市場を連れまわされて、疲れきった様子のシンイチ。
二人に付いていこうとするが、つい引き離されていた。

「あっ！！！！」
その時、いきなりシンイチが持っていた道具袋がひったくられた。
「待て！！！」
シンイチは必死に追いかける。道具袋を取られたら破滅である。
「え？」「どうしたの？」
遠くで二人の声がするが、構わず追いかける。

盗人は裏通りに入っていった
「待て！！！ハアハア」
息が切れそうになるが、必死に追いかける。
すると、盗人が立ち止まった。犬耳と尻尾がついている小さい少女のようである。

「ハアハア・・お嬢ちゃん。もう逃げられないよ・・おとなしく・・グッ」
少女に近寄ると、いきなり後頭部に衝撃がきた。後ろから棒で殴られて昏倒するシンイチ。
「アンリ。よくやったぜ。こいつら結構高いもの買いまくっていたから、いい稼ぎになるぜ」
筋骨隆々とした男たちが数人出てきて、道具袋を探る。
「なんだこれ？開かないぞ。でも、触ってみたら何も入ってないみたいじゃねえか！！！！アンリ、失敗したな！！」道具袋を投げ捨てる
「そ、そんな。あたしは確かにその袋に物を入れたのを見たんだよ。」
「うるせえ。役立たずが。もういい。そこの男と一緒に、お前も今日限り売り飛ばしてやる！！」
「や、やめて。奴隷にするのだけはやめて。何でもして借金返すから・・」

「やかましい！！」男たちに縛り上げられるシンイチとアンリと呼ばれた少女。
そのまま袋をかぶせられ、連れて行かれた。

「シルフ、確かにシンイチはこの辺に来たの？」
「うん。シンイチの汗のにおいがこの辺に漂っているから」
メアリーとシルフは見失ったシンイチを追いかけて裏通りに来ていた。
「ここだよ。ここで倒れたみたい。地面に汗が染み付いている」
「・・・でも、シンイチいないよ？。あっ　これは」
地面に道具袋だけが落ちていた。

「ど・・どうしよう。シンイチが行方不明になっちゃったよ・・」
呆然とする二人だった。

奴隷

「どうしよう、どうしよう、シンイチー」
シンイチの名前を呼びながら闇雲に走り出そうとするメアリー
「メアリー落ち着いて」シルフ
「落ち着いてなんかいられないよ。道具袋がなかったらシンイチは無力なんだよ。しかも倒れていたって・・シンイチの身に何かあったら・・」
「落ち着いてってば!!ここでシンイチの匂いは途切れているけど、知らない男達の匂いが残っているから、それを追いかけよう」
「わ、わかったよ。シルフ、案内して!!」
道具袋を掴み、シルフについていくメアリー。

男達はシンイチとアンリを担いで、裏の奴隷取引場に連れて行った
「犬族の女の方は１００アルだな。男は・・ふむ。人族で魔力もないし、容姿もいまいちだ。５０アルだ」
「おいおい、それっぽっちかよ」男達
「そんなもんだ。最近は人族の捕虜が多いから、値崩れ起こしてんだよ。嫌ならいいぜ。奴隷同意書もないし、捕虜証明書もない。こいつらはどうせ誘拐してきたんだろ?俺のとこ以外でさばこうとしたら手が後ろに回るぜ。」奴隷商人
「ちっ　この業突く張りが。わかったよ。その代わり、次はいい値をつけるんだぜ」
「次はもう少しいい奴隷をつれてくるんだな。今日は奴隷市が立つ日だから、これでも色をつけてるんだ。メシ代がかからなくて済むからな」
軽口をたたきながら、男達は去っていった。

気絶から覚めるシンイチ。地下牢に入れられていた。

「またかよ・・でも、今回は膝枕じゃなかったな」
周囲を見回す。人間が半分、魔族や他の種族が半分といったところか
「・・・ごめん」
見た目が１０歳くらいの犬耳尻尾つきの少女が謝ってくる。
「・・さすがに二回目だとムカついてくるけど、まあいいや。キミの名前は？」
「アンリ」
「んで、アンリちゃんは何でこんなことしたのかな？」
「引ったくりをして、死んだ父ちゃんの借金を返せって・・」
「家には病気のお母さんや兄弟がいるってパターン？」
「・・なんでわかるの？」
「お約束。それで、道具袋の中には何もなさそうだったから、俺ごと奴隷にされたと」
「・・・うん」
はぁぁーとため息をつく

「何度経験しても、憎めないよね。自分をハメた奴が仲間に裏切られるのを見ると」
「・・前にもこんな事あったの？」アンリ
「ああ、結構酷い目にあったけど・・前よりマシかな？」
「なんで？」
「なんとなくだけど、助けが来ると期待できるから」
「でも、この奴隷商人の組織『魔獄』って、ナムールの街を取り仕切っているヤクザだよ」
「・・ま、前よりは規模は小さいね」シンイチ
こうなったらおとなしくメアリーやシルフが助けてくれるのを待とうと地下牢の床に寝転がった。

しかし、そんなシンイチの余裕は少し後で完全に吹き飛ぶ事になる。

「奴隷ども、服を脱いで出ろ！！」
人相の悪い鬼族の男が命令する。
地下牢の中の人々はノロノロと服を脱いでいった。
「え・・マジで？」
シンイチがためらっていると、容赦なくムチで打たれた

「いてぇぇぇ

「おれっちは海の国アトルチスの漁師でね。運悪く魔族のコロニー近くまで船が流されて、つかまっちまった」
「そうですか・・」

「まあ、捕虜証明書があるから、何年か奴隷をすれば故郷に帰れるんだが。しかし、あんたらみたいな不正につかまった奴隷は国の保護もないからなあ」
「国の保護？」
「ああ、借金が返せなくなった奴、自分で自分の身を売った奴、犯罪をして奴隷に落とされた奴、捕虜になった奴なんかは、奴隷の期間が決まっているんだよ。ちゃんと保護されていて、期間が終われば解放されるということ。だが、不正に捕らえられて奴隷にされた奴は裏でオークションにかけられるらしい。そうなったら期間なんかないからな。永遠に奴隷だよ」
「そんな・・・」
「まあ、兄ちゃんたちも強く生きろよ。そのうち勇者が魔王を倒してくれて、魔国なんかぶっ潰してくれるさ。そうなったら、奴隷から解放されるだろうよ」
「・・・」
自分がその勇者だなんて言えなかった。
「そうだ。勇者様一行がこの街を出て2週間。今頃勇者様が魔王を倒しているかもしれないぜ。」
「勇者万歳」
儚い希望にすがる奴隷達。
「・・・」
シンイチは初めて生で勇者に対する期待と言うものを感じた。

（この人達・・いや、魔族に虐げられている人達には、国が頼りにならない以上、勇者だけが希望なんだ。たとえそれが幻想であっても。どんな方法であれ勇者である俺は魔王を倒してしまった。だけ

ど、それだけじゃこの人達は救われない）

「・・・きっと、勇者が助けてくれますよ。噂じゃ、魔王城ごと魔王が消えてしまったとか」

「本当かい兄ちゃん?そいつは嬉しい事を教えてくれるねぇ」漁師が喜ぶ

（どうせ数日もしたらこの街にもその噂が広がるだろう。この人達の希望になれば）

シンイチの意識で何かが変わり始めた。

魔砲

「はあ、はあ、ここに本当にシンイチをさらった連中がいるの？」
メアリー。
シンイチを探して街中を走り回っていた。
「間違いないよ。大気中に存在している分身たちも集めて探し回ったもん」シルフ
何百体も分身を召喚して探したシルフ。

「よし。とにかく突撃！！！」
「あっ、待ってよメアリー」
メアリーが目の前の汚い家に突入する。
中では男達がシンイチ達を売った金で酒盛りをしていた。

「お前たち！！！シンイチをどこにやったんだ！！」
いきなり踏み込むメアリー
「な？誰だお前は？」
「誰でもいいだろ。シンイチを返せ！！」
「ぐふふ。威勢のいいお嬢ちゃんだ。それにめったに見れないくらいの上玉だ！！」
数人の男たちがメアリーに迫る。
「な、なんだよ。近寄るな。大地の極熱よ。沸きあがれ。『ボルケーノ』！！」
しーん

「？？？なんだ？なにをするつもりだったんだ？」
男達がキョトンとしていた。
「そ、そういえば、『女神の杖』は道具袋に入れてたんだった・・」
メアリー

「・・だから待ってって言ったのに・・」シルフ
「何をするつもりだったか知らねえが、残念だったな。今からおじちゃん達といいことしようか」
酒臭い男達に捕まるメアリー

「イヤ!!シルフ。助けて!!」
半泣きになりながらシルフに助けを求めるメアリー
「・・残念だけど、私も魔力切れだよ・・街中分身たちと探し回ってたんだから・・」
「そ、そんな」

「おい!!今からこいつを売り飛ばしにいくか。今ならまだ奴隷市に間に合うだろう」
「その前に楽しもうぜ!!」
酒に汚れた手がメアリーに触れようとしていた。

「イヤーーー!!」メアリーの絶叫が響き渡った。

メアリーの絶叫と共に、抑えていた男と近寄ろうとした男は吹っ飛んだ。
「て、てめえ。今何しやがった」
「え?今の何?」メアリー
「そうだった!メアリーは魔王の後継者だったね。あの技が使えるはずだよ。メアリー、魔力そのものを放出して?」シルフ
「え?どうやるの?」
「いいから、何も考えずに魔力だけどかーんと出してみなよ」シルフ

「てめえら、何ごちゃごちゃ言ってやがんだ。お前等も倒れてないでさっさとふんじばれ!」

倒れた男達も起き上がって、メアリーに迫る
「え、えっと、魔力をどかーんとだす・・」メアリーが魔力を放出する
「「「「ぐぁぁぁぁぁぁ!!!!」」」」
周囲の男達は全員吹っ飛んだ。

「ねえ、シルフ。これって何?杖もないのに魔法が使えたの?」
「正確には魔法っていうより魔力の放出だけどね。魔将クラス以上魔力が強くないと使えないんだよ。おめでとう『魔獄砲』が使えるようになったね。第二の魔王さん」
「『魔獄砲』かあ。えい!!」魔力を放出する。床でうめいていた男たちが失神する。
「・・・メアリー。失神させてどうするのよ。シンイチの居場所を聞きだすんでしょ」
「あっ・・」
すっかり忘れていたメアリーだつた。

その後、チンピラたちの家を漁ってみる。
「ねーシルフ。何かある?」
「うーん。こっちに盗品とか誘拐した人の持ち物とかおいてあるけど、ろくなものがないなぁ。あ、これは?」
「何か使えるのあった?」
「えっとね。『家事の杖』があったよ。これなら、補助魔法くらいなら使えるんじゃない?」
「今はそれで充分だよ。えっと、こいつがリーダーっぽかったね」
失神しているチンピラを椅子に座らせて、ロープで縛り上げる。

「よし。『知識共有』の魔法を使って、シンイチの行方をさぐろう」
シルフ
メアリーがチンピラに近づく。途中で動きが止まった。

「・・・どうしたの?はやくおでこをくっつけないと」
「・・気持ち悪い」メアリー
「シンイチだったら平気だったじゃない。」ニヤニヤしてシルフが言う
「シンイチだからだよ。気持ち悪いから顔を布で覆って」
「はいはい」
シルフがチンピラの顔を布でおおい、メアリーが魔法をかける。失神していたチンピラは、痛みで叫び声をあげた。

「よし。シンイチは奴隷商人に売られたんだね。そして、今日は奴隷市が立つから、郊外の奴隷市場に運ばれ・ると」メアリー。
「すぐに行こう。っとその前に、さっきの市場であれを買わないと。今から行くのは非合法の場所なんだから」
「でも、さっきお金使いすぎて、あんまり残ってないよ・・」メアリー
「こいつらから取り上げればいいんだよ」シルフ。
二人はチンピラたちが貯めていた有り金全部を奪っていった。

奴隷市場

「証明書がある奴隷はこっちだ」
漁師やその他、半分ぐらいの奴隷が兵士達に連れて行かれる
「兄ちゃん。希望を捨てずにがんばるんだぜ」
シンイチの肩を叩いて漁師は出て行った。

「残りの奴隷はこの服を着てこっちにこい」
奴隷市場の一番奥、古くてボロボロの建物に連れて行かれた。
そこには広間があり。かなり多くの席があった。

「兄ちゃん・・これからどうなるのかな」
アンリがおびえてシンイチの手を握る
「兄ちゃんもわからないよ・・メアリー、シルフ。早く助けに来てくれ～」
必死に助けを祈るシンイチだった。

競売

すべての正規の奴隷市が終わった後の深夜、裏のオークションが始まった。
「それでは、オークションを始めます。今日はいきのいい者たちが沢山入荷されました！皆様方のきっとよい奴隷となるでしょう」
司会の男が挨拶し、裏のオークションが開催された。

今回は誘拐されて奴隷オークションに出されたのは１０人だった。
年齢も性別もまちまちだが、皆粗末な服を着せられているだけの姿だった。
それぞれの首から札を下げられている。
アンリは八番、シンイチは十番だった。

「さあさあ、皆様じっくりとご鑑賞お願いします」
１０人の奴隷は壇上に上げられ、客達の視線にさらされた

「一番の女はなかなか美しい・・」
「五番の男はたくましいわね・ふふ。きっと私のよい僕になるわ」
「八番の子犬ちゃん。ふふ。僕のペットにいいなぁ」
それぞれ好き勝手に品評する。

シンイチは客の目を見てゾッとした。
奴隷達を舐めまわすような目で見ている。
まだペットを見る目の方がマシだった。

「さてさて、皆様方、お気に入りの奴隷は目に止まったでしょうか、それでは、それぞれの者に自らをアピールしてもらいましょう。そ

れから、このオークションでの開始価格は２００アルからです。売れ残った奴隷は、最後にこのオークションの目玉、公開処刑ショーの生贄にします。さあ奴隷達、自らを助けていただけるご主人様方に、命を賭けて慈悲を求めなさい！！」
奴隷達は恐怖に顔を引きつらせた。

「い、一番。ミール国のマチルダです。お、お願い。助けてください」
素朴な村娘のような容姿の女が、必死にアピールする
「さあさあ、この哀れな美女に救いの手を」
「２１０アル・・」
「３００アル」

狂気のオークションは進んでいった。

「ふふふ。奴隷達は必死だな」太った男が特別席から見下ろす
「この形式を取るようになってから、奴隷たちの反抗は少なくなったようです。何せ、ご主人様は命の恩人ですからね。マハーラ伯爵」
若くて美しい男が返答する。
「しかし、半年に一回で１０人とは、まどろっこしいのう。もう少し増やして、『魔獄』からの上納金を増やせぬかの。ラグル」
「ははは。あまりやりすぎると『魔王城』にバレますよ。そうなったら厄介ですからね」
「それもそうか。くくく」

マハーラ伯爵とよばれた男はこの街の領主であり、ラグルと呼ばれた男はナムールの街の裏を取り仕切るヤクザ『魔獄』の首領だった。
「しかし、最後の男に２００アル以上の値が付いたらどうするのじゃ？オークションの締めである公開処刑ができずに、奴隷達に恐怖と恩を植えつける事ができなくなるぞ」

「ふふふ。そうならないように一番価値のなさそうな男を最後に回したのですが・・一応手を打っています。ご安心ください」
「おぬしのやる事にぬかりはないか。半年に一度の楽しみじゃ。ゆっくり見物させていただこう」
オークションはどんどん進行していった。

「八番!!哀れなる犬族の少女です。皆様の慈悲を!!」
アンリが壇上に上げられる
「ア・・アンリで・・す」恐怖のあまり声が出ない。そのまま座り込んで泣き始める。
客達はその様子をみて嗜虐心をそそられる
「もっとはっきりと言えーーー」
「なにいっているかわからねえぞーーー」
「ハアハア。」
「かーわいそ。」
客達が騒ぐ

シンイチはその姿をみて怒りに拳を握り締めた。

（くそ・・）
出来れば暴れだして助けてやりたかった。しかし、奴隷オークションが開始されてから、シンイチ達奴隷は暴れないように、兵士によって首に剣を突きつけられていた
（道具袋さえあれば皆をすくえるのに。メアリー、シルフ。来てくれないのか・・）
客達を見回しても、二人の姿はどこにもなかった。

９番の奴隷が売れ、次はシンイチの番になる。
壇上に上がろうとすると、兵士に止められた

「お前はこうしてから壇上に上がれ」
その言葉とともに、頭から腐った生ゴミがぶちまけられた。
「なっ！！」
「いいからあがれ。せいぜい値が付くように頑張るんだな」
兵士たちがあざ笑う。

「さあ皆様お待ちかね。最も貧弱な人間の少年。果たして値が付くのでしょうか。素敵な香水をまとって登場です」

体中に生ゴミを付けられたシンイチが壇上に上がる
観客は爆笑していた。

このオークションに2回以上参加している客は、最後の奴隷は公開処刑ショーの生贄になる事が決定しているのを知っていた。
新規の客が間違って値をつけないよう、このような事をするのだった。
シンイチに思いつく限りの罵声を浴びせる客達。
シンイチは無言で仁王立ちしていた。

解放

「さあさあ、誰もいないのですかな?」司会の男が煽る
「３００アル」値をつける声がした。

一瞬静まる観客達。値をつけた魔族を見る。
首に金のアクセサリーをしている全身を筋肉に覆われた男だった。
シンイチに向かってウインクする

シンイチは全身に悪寒を感じた。
（ま・・まさか、ウホッな人?）

「ははは、慈悲ぶかきお客様がいらっしゃった。さあさあ、他にいませんか?」
「４００アル」最前列の男が値をつける。司会の男と目配せする。
この男は主催者側のサクラで、最後の奴隷の値が付いた場合、競り落としてその場で公開処刑のショーとする役割をしていた。
「５００アル」筋肉男が言う
「６００アル」最前列の男
「１０００アル」
「・・・・１５００アル」
「１万アル」
「・・・・」最前列の男が様子をうかがうように後ろを向く。視線がラグルと合う。

いつの間にか、会場は異様な雰囲気で静まり返っていた。
「２万アル」ラグルが値をつける
「１０万アル」筋肉男
「・・・き、貴様、いい加減にしないか!!。空気を読まないか!

！」
ラグルが痺れを切らしたように言う
「そうだ！！」
「俺たちはラストのショーまで見物に来てるんだ」
客達も騒ぎ出す。

「妙な事を仰る。このオークションでどのような値をつけるかは客の勝手のはず。貴方はオークションを否定するのか？」
落ち着き払って渋い声で言う男

「ぐっ・・・そもそも、なぜこのような男に１０万アルなどという値をつける。このオークションを侮蔑しているのか？」ラグル
「ははは、こやつには１０万アルどころか、一億アル以上の価値がある。よければ、我輩が証明してみせようか？公開処刑ショーよりはるかに面白い見世物になる事を請け負おう」
「・・いいだろう。もし我々が納得できなければ、お前が１０万アルを支払った上にその男を処刑させてもらおう」
「いいだろう」
筋肉男が立ち上がり、壇上のシンイチに近づいた。
「まて、何をたくらんでいる」ラグル
「人聞きの悪い。手ぶらで何ができると？」
「いいだろう。その奴隷の価値を証明してみせよ」
筋肉男は壇上に上がった。

近づいてくる筋肉男を見るシンイチ。何度みても覚えがない。
「ふふふ、やっと会えた。」
いきなり抱きついてくる。シンイチは泣きそうな顔で叫び声をあげた。
「う、うわわ。抱きつくな。俺にはそんな趣味は・・」

離れるシンイチ。
「もう。つれないなぁ。せっかく助けに来て上げたのに」
「え？」
筋肉男がアクセサリーを外すと、左肩にシルフを乗せ、右手に道具袋をさげたメアリーが現れた。
数刻時間を遡る。

「あった。これだよ。姿を変えるアクセサリー。」
先ほど買い物をした市場で見つけるメアリー。
「値段は・・１４０アル？よかった。ギリギリセーフ」シルフ
先ほどのチンピラの知識で、裏オークションに入場するのに身分証と入場料１０アルが必要な事がわかっていた。
身分証はチンピラ達が持っていたが、持ち金とチンピラから奪った金が足りるかどうかは微妙なところだった。
「急いでいくよ！！」
オークション会場に向かう二人。

身分証を持っていたチンピラの姿に変える。道具袋も体に密着させて姿を消した。
裏オークション会場に入場するメアリー。

「シンイチ！！。待ってて。今助けるから」
奴隷として壇上に上げられたシンイチの傷ついた姿をみて、思わず周囲に魔獄砲をぶっぱなそうとするメアリー。

「メ、メアリー。落ち付いて」姿を消したシルフがなだめる。
「落ち付いてなんかいられないよ。シンイチ！！」
「この会場にいる兵士はプロだよ。騒ぎを起こしてもまず奴隷を確保しようとする。シンイチを人質にとられたらどうしょうもないよ」

シルフ
「じゃあ、どうすれば・・」
「とりあえず、シンイチが壇上に上がった時に近づこう。作戦は・・」
シルフが作戦を練る
「いい、堂々としているのよ」シルフ
「わかった」メアリー
シンイチが生ゴミにまみれて壇上に上がったとき、怒りで魔力が暴走しそうになるのを必死で堪える。
「ははは、こやつには１０万アルどころか、一億アル以上の価値がある。よければ、我輩が証明してみせようか?公開処刑ショーよりはるかに面白い見世物になる事を請け負おう」メアリー扮する筋肉男
「・・いいだろう。もし我々が納得できなければ、お前が１０万アルを支払った上にその男を処刑させてもらおう」
「いいだろう」
メアリーは立ち上がり、壇上のシンイチに近づいた。
奴隷オークション会場
「メアリー!!」
「シンイチ!!」
壇上で抱き合う二人。シンイチは生ゴミの異臭を放っていたが、メアリーは気にならなかった。
「くっ。貴様達、何者だ!!」マハーラ伯爵が立ち上がって叫ぶ。
静かに離れる二人
「俺はお前達を滅ぼす勇者だ!!」シンイチ

「ボクはあんた達を滅ぼす魔王だよ！！」メアリー
「そして私は二人をサポートするマスコットかな？」シルフ

「ふざけるな。奴等を殺せ！！」ラグルが叫ぶ。兵士達がおしよせる。

シンイチは道具袋を開けて、魔方陣に右手を突っ込み、左手を床につけた。
「メアリーとシルフと奴隷達を除いてこの建物全部を収納」静かに念じるシンイチ。
三人と奴隷達を残し、オークション会場がこの世から掻き消えた。

更地になった建物のあった場所。
シンイチ達と奴隷達が立っていた。

「おっと、これも入れておかないとな」シンイチが付けられた足の鎖を道具袋に入れる。
「しかし、間に合って本当によかったよ。」メアリー
「助けに来てくれてありがとうな」シンイチ
「ボクにいっぱい感謝するんだよ」メアリー
「私にもね。シンイチを探し出したのは私なんだから」シルフ

「ああ、ありがとう。当分二人に頭が上がらないな」
「当分じゃなくてずっとだよ～」メアリー
「今までと変わらないね～」シルフ
「あはは、そうかもな」シンイチ

不安から解放されて笑い合う三人。

「あ、あの、お兄ちゃん」アンリが近寄ってくる。

「ああ、そういえばお前達の鎖も外してあげないとな」
アンリと奴隷達の鎖を道具袋にいれる。

「ね、ねえ、お兄ちゃん勇者様なの？お姉ちゃん魔王様なの？」アンリが聞く。
犬耳と尻尾がペタンと垂れている。
「ああ、そうだよ」優しく笑いかけるシンイチ。
「この子可愛いね。お持ち帰りしたいな～」メアリー

「・・・私達を助けてくれるのですか？」奴隷の一人、マチルダが問いかける。
「ああ、そうするよ。とりあえず街に帰ろう」

その言葉を聞いて、奴隷たちが歓声をあげる
「勇者様！！」「我等が救世主！！」人間の奴隷
「魔王様！！！慈悲ぶかき我等が王！！！」魔族や獣人の奴隷
「「「我等を救っていただき、ありがとうございます！！」」」

奴隷達の感謝の声を聞きながら、シンイチとメアリーは照れ笑いをした。

こうしてシンイチの長い一日は終わりを告げた。

感謝

「それじゃ帰ろうか、メアリーお願い」シンイチ
「任せて。」天空の風石を発動させる。
空を飛んでナムールの街まで帰った。

「それじゃ、今日のところは宿に泊まって、明日ゆっくり皆のことを考えよう」
宿屋の前に降りるシンイチたち。奴隷達に部屋を取り、休ませる。

「・・お兄ちゃん。お姉ちゃん。ありがとう。私は家に帰るね。きっとお母さんと妹が心配しているとおもうから」アンリ
「いまからかい？今日は泊まっていけば？」
「ううん。大丈夫。本当にありがとうね！！」頭を下げて走り出そうとする。
「まって。危ないから送っていくよ」シンイチ
「でも、お兄ちゃんも疲れているのに・・」
「大丈夫だよ。それに今から子供の一人歩きは危ないよ。道具袋さえあれば、俺って無敵だから」
「でも・・」
「しょうがないね。ボクも付いていくよ。飛んでいったら安全だからね。」メアリー
「お姉ちゃん・・ありがとう」
シンイチ達は再び空を飛んだ。

「・・この辺なのか？」アンリの家の近くで降りる。
「うん。ここからすぐ近くだよ」アンリ
「・・なんというか・・」メアリー

ナムールの街の表道りとちがい、ゴミだらけの貧民街だった。
周囲の建物はみなバラックで、いかにも廃材を集めて作ったような
もの。
それどころか、そこら中にみすぼらしい格好の人が道端で寝ていた。

「私達犬族って大した力もないから、皆貧しいんだ。この辺にしか
住めないんだよ。」
「ひどい匂い」シルフ
この世界の裏側をみてしまったシンイチ。暗い気分になる
（こうしてみると、日本って平和だったんだな。奴隷制度もないし、
貧しい人でもこんなに酷くないし）

「なあ、仕事とかはないのか？」
「魔力が弱い種族は、何も出来ないから低賃金の仕事しかないんだ
よ」アンリ
（何とかしてやりたいけど・・）シンイチ

「ほら、ついたよ。ここが私の家」
一際みすぼらしいバラックの前でアンリが言った。

「アンリ姉ちゃん！！」
アンリに似た小さな少女が出てきて、アンリに抱きつく
「借金とりにつれていかれて・・うぐっ・・帰ってこないから心配
したんだよ。」
「ミスリ、心配かけてごめんね」妹の頭をなでる。
「ううん。かえってきてくれて、嬉しいよ」ミスリの尻尾がパタパ
タと振られた。

「ねえ、このお兄ちゃんとお姉ちゃんは誰？」ミスリが聞く
「あ、えっと、紹介するよ。私を助けてくれた・・」

「・・ア、アンリが、帰って来た、の？」
奥からか細い声がする
「母さん！！大丈夫？」アンリは一目散に家の中に入っていった。

「どうしようか？」メアリー
「あ、あの。お兄ちゃんたちもどうぞ」ミスリ
「とりあえず、お邪魔しようか」シンイチ達も家の中に入った。

「あ、あなたがたは・・？コホッ」
家の奥のゴザの上では、痩せた女性が横になっていた。

「お母さん、お兄ちゃんは勇者様で、お姉ちゃんは魔王様なんだよ！！奴隷にされそうだった私を助けてくれたんだ！！」
「ア、アンリを助けて、いただいて、ありがとうございました。私は、母のショリといいます。」
「いや、お気になさらないでください」シンイチ。

家の中には家具らしいもの何もなかった。ショリと名乗った女性も相当弱っている様子だった。
「いえ、誠に心苦しいのですが、お礼に差し上げるものもなく・・」
「いえ、お礼なんて不要ですよ」メアリーが言う。

「娘を助けていただいた上、お願いをするのが心苦しいのですが・・」
「なんでしょう？」
「私の命ももう長く保ちません。アンリとミスリをお願いできませんでしょうか？この子達は慈悲深いご主人様の奴隷になるのが、一番幸せに生きていけるのです・・」苦しそうな表情でいうショリ。
「「お母さん！！」」アンリとミスリが取りすがる。

「ねえシンイチ。可哀相で見ていられないんだけど・・」メアリー
「ああ・・。とりあえず、やるだけの事はやってみよう」シンイチ
「どうするの？」シルフ

道具袋の魔方陣に手を入れるシンイチ
「とりあえず、どんな病気でも治る薬でろ！！」
手の中には黄金色に輝く液体の入った小瓶があった。

「うっわ。それってエリクサー？初めてみた。王族でも死にかけるような時しか使われない高価な薬だね」メアリー
「それを売ったら１０万アルになるけど、使うの？」シルフ
「うん。使う」あっさりというシンイチ。
「そ・・そのような高価な薬をいただいても・・」ショリ
「どうせ俺のもんでもないし。薬なんて使ってナンボですよ。さあ、アンリ飲ませて上げて」
「うん。お兄ちゃんありがとう」
薬を飲むショリ。そのままゆっくりと眠りに落ちた。
「うん。薬が効いたみたいだね～」メアリー。
楽になったようで寝顔は安らかだった。

「さて、帰るか。さすがに眠い」シンイチ
「そうだね。」メアリー
「お兄ちゃんたち、本当にありがとう。このお礼はきっとするから！！」アンリ
「無理しなくていいよ。それじゃあね」
シンイチ達三人は宿に帰っていった。

次の日の朝

「本当にありがとうございます。助けていただいた上、お金までい

ただいて・・」
奴隷を代表してマチルダが言う。
「いえいえ、気をつけて帰ってください」
一人、旅費として１００アルずつ渡す。これでそれぞれの国に帰れるだろう。

「・・私達には何も返せる物はありません。しかし、私達は優しい少年勇者シンイチ様と、勇敢な少女魔王メアリー様のことをこれから出会うすべての人に話すでしょう。私達から話を聞いた者は、大いなる希望を感じ、それを広めるべくさらに多くの人に話すでしょう。あなた方は長く各国で語り継がれる伝説となっていくでしょう」
四番の札を付けられていた、長身の青年が言う。

「ウッ　あんまり広めて欲しくないような。生ゴミかけられてガチムチの男に抱きしめられた事とか特に」シンイチ
「あはは、そこのところは大いに話してね。ボクに抱きしめられて泣きそうになったシンイチの姿を」メアリー
「ははは。ありがとうございました。このご恩は、どこかで必ずお返しします」青年

「勇者様に栄光あれ！！」
人間の解放奴隷たちが唱和する。

「魔王様に栄光あれ！！」
魔族や獣人族の解放奴隷が唱和する

「「「「勇者様と魔王様に永久なる感謝を！！」」」」
最後に全員が唱和し、それぞれ故郷に旅立っていった。

歴史

「お客様、その、玄関前に来客が来ておりますが・・」
宿の従業員に呼ばれるシンイチ。
「誰だろ。行ってみよう」
玄関に行くと、アンリとシュリが来ていた。

「シュリさん。元気になったんですね」シンイチ
部屋に招き入れて話をする
「よかったですね」メアリー
「まあ、エリクサーを飲むと病気だけじゃなくて体力も魔力も完全に回復するしね～」シルフ

「皆様。この度は本当にありがとうございました」シュリが頭を下げる。
「いえいえ、よかったですよ」シンイチ。
「はい。それで、アンリからもいろいろ話を聞きました。それで、やはりアンリだけでも、シンイチ様の側に置いていただけたいのです」
「いや、それは。奴隷なんて・・」
「奴隷としてじゃないよ。私自身がお兄ちゃんたちに恩返ししたいんだ。それに、お母さんが元気になって働いたとしても、いつ何かあるかわからないし、ミスリだって育てないといけない。つまり、私を働かせて欲しいの」

「働く?」シンイチ
「うん。こう見えてもお母さんの家事を手伝っていたし、買い物でも掃除でもなんでもできるよ」アンリ
「・・・我々は弱い種族なのです。貴方たちのような慈悲深い方々

の側にいるほうが、アンリの幸せになります」
「どうせどこかで働かなくちゃいけないし、お兄ちゃんたちの側の方が安心できるよ」
「・・う～ん。でも、俺たちは旅にでるかもしれないから、家族の側にいられないよ？」
「大丈夫。しばらくお別れになるって、ミスリにも言っておいたから」アンリ。
すでに付いてくると決めているらしい

「・・メアリーやシルフはどうおもう？」シンイチ
「いいとおもう。この子可愛いし」メアリー
「まあ、勇者と魔王なんだから、従者くらいいてもいいよね」シルフ
「わかりました。奴隷じゃなくて使用人で雇います。月３０アルでいい？」
「そ、そんなにいただかなくても・・」シュリ
「いいですよ。どうせ金なんて大したつかい道ないんですから」
「ありがとう・・ご主人様、これからよろしくお願いします」シッポをふりながらアンリが言う
アンリが仲間に加わった。

「それじゃ、アンリに必要なものを買ってこよう。シンイチ。お金ちょうだい」メアリー
「はいはい。」袋から１００アル取り出す。
「ありがと。シンイチは今日は休んでいるといいよ。シルフはどうする？」
「ん～。昨日たくさん買ったから、今日はいいや。シンイチと一緒にお留守番するよ」シルフ
「うん。そうしてて。さ、行こう」
メアリー達は街に行った。

部屋でシルフと二人きりになるシンイチ
「・・・シンイチ。何か私に相談したいことがあるんじゃない？」
「わかるのか？」
「ふふ。私は数億年存在する精霊だよ。人間や魔族が生まれてからも、ずっと見てきたんだよ。それくらいわかるよ」

「そうか・・それじゃ、この世界の歴史を教えてほしい。なぜ人間と魔族たちの戦いが始まったのか？」
「長い話になるけど、いい？」
「かまわないよ。俺はこの世界のこと、なにも知らないんだ」
「わかった」
シルフはこの世界の歴史を話し始めた。

「２０００年前に、この大陸にはピザンチウム帝国って国があったんだ。そして、その頃には魔族も獣人族もいなかった。」
「えっ？」
シルフは魔族や獣人族の発祥から話し始めた。

「ピザンチウム帝国は、貴族や平民が、豊かな生活をしていたんだ。平民でも最低限の食料の配布があったり、無料で公衆浴場が使えたり、闘技場でショーを見たりして。皆が遊び暮らしていたんだよ。」
「へえ。良い国だな」
「・・平民以上にとってだよ。そのしわ寄せは誰に行くとおもう？」
「・・まさか」
「そう。ピザンチウム帝国は他国に攻め入り、その国の国民を全員奴隷にして、強制的に働かせていたんだ。そうした犠牲の上に成り立っていた」
「・・・・そうか」

「でも、ピザンチウム帝国が他の国をすべて滅ぼしてこの大陸を支

配した時から、歯車が狂った」
「もうこれ以上奴隷を手に入れられなくなった」
「そういうこと。そうなれば奴隷に対して、今以上に搾取するようになって・・」シルフ
「奴隷がどんどん死んで数が少なくなった」シンイチ。
「そうなると、豊かな生活ができなくなった平民達の不満が高まった。そこで、当時の魔術師が解決法を編み出した。」

「・・ろくでもないんだろ?」
「うん。奴隷の女性に呪いをかけて、普通の人間より強くて丈夫な子供をたくさん生ませるようにしたんだ」
「品種改良・・・」
「その結果、精霊の力を宿すもの、翼が生え空を飛べる者、角を持ち力が強い者が生まれた、彼らは寿命も長く、奴隷として役に立った」
「・・・・それが」
「そう。それが後の世で魔族や獣人族といわれる者達」

「そういう者たちを奴隷にして、生活水準を維持できた。しかしそれだけでは飽きたらず、奴隷達をショーの見世物に使い始めた」
「・・」
「魔族が生まれて１００年ほどたった頃、闘技場で殺し合いのショーをする剣闘士の中に、飛びぬけて強い男が現れた。名前は、スパルタクス。真剣勝負が売りの闘技場で、５年も生き抜いた伝説の魔族」
「元の世界にもそんな話があったな」

「彼は風の精霊力も強かった。そんなある日、私を呼び出して鎖を解いてくれるように頼んだんだよ。もうこんな生活はイヤだって。仲間と一緒に逃げ出して、新しい魔族たちの国をつくりたいって。

私はそれに協力した」
「そうか、そいつが」
「うん。彼は仲間の剣闘士と共に、ピザンチウム帝国に反逆した。奴隷達を解放し、軍を編成し、首都を滅ぼした。その後、北の領土を占領して、魔国をつくったんだよ。それが初代魔王スパルタクス」
「・・・」

「でも、誤算だったのは、彼が必要以上に人間を憎んでいた事だね。魔国を作った後、南の領土のピザンチウム帝国は４つの国に分裂したんだけど、その後も戦争を仕掛けて人間を連れ去り、奴隷とした。きっと個人的な復讐心が満足されなかったんだろうね。それに対抗して人間も魔法技術を磨く。後は取ったり取られたり、慢性的な戦争が続いたんだよ」
「そうか・・」

「魔国建国から１６００年後、おもわぬ事態が起こった。それはフリージア皇国による、異世界の勇者の召喚だった。彼の名前はトモノリ・ヤギュウ。恐るべき剣の使い手に加え、召喚されてすぐ強力な魔法を習得した男。その男が各国の魔族占領地を滅ぼし、魔国に迫った。」
「・・一人の人間が？」

「魔国のナムール街で、当時その街を治めていたアンブロジア魔王子と戦って重傷を負わせ、下賜されていた『魔王の袋』を奪って勇者専用の魔法をかけたんだよ。そうして中に入っていた大量のエクスポーションやエリクサーを使いまくって、破竹の勢いで仲間と共に魔王城に迫り、先代魔王アパドンを殺した。その後、魔王を引き継いだアンブロジアと平和条約を結び、人間の奴隷を解放させた」
「すごいじゃん。俺にはそんな事できないな」

「人間側から見るとそうかもね。でも、各国も魔国も相当荒らされたよ。各国が必死に作り上げた国宝級のアイテムは取り上げるわ、占領した魔国の街の財産を全部取り上げるわ、それでも足りずに魔族を奴隷として人間の国に売り飛ばすわ」

「・・・」

「平和条約を結んだのも、これ以上の被害を避けたい魔王様の苦渋の決断だったみたいだね。世界中の財宝を道具袋に入れて意気揚々とフリージア皇国に帰った勇者は、その戦勝会のパーティで毒殺された。犯人は財宝を狙った仲間の一人、第一王子という噂があるけどね」

「・・バカな奴だ」

「ともかく、そうやってフリージア皇国とは平和条約を結んだけど、各国とはまだ小競り合いを続けていて、奴隷にされる人間が未だに魔国に運ばれるというわけ。もちろん、人間の捕虜になったり、誘拐された魔族は各国で奴隷にされているよ」

長いシルフの話が終わり、シンイチは考え込んだ。

反逆

「そうか・・。俺はこの街を出たら、すぐフリージア皇国に復讐するつもりだったんだ。」
「まあ、そうだろうね」
「人を勝手に召喚して、勇者なんてものを押し付け、弱いと見ると生贄にした王族。俺より力があるからって見下し、馬鹿にしてきた自称勇者パーティのアーシャ達や兵士達。人に危険を押し付け、自分達だけ安全にぬくぬくとしている貴族。魔族による被害があったからといって、勇者に勝手な期待を寄せる民たち」

「今はどうなの？」
「王族や貴族たちに対しては、今でも憎いよ。だけど、無力な平民達にとっては、勇者にすがるしかなかったというのが今回の件でよくわかった」
「平民については許してあげるの？」
「許すというより、うまく言えないけど、俺にもできることがあるんじゃないのかって思えた。いや、曲がりなりにも勇者として魔王を倒してしまったんだから、最後まで責任を果たしたいというか。」

「シンイチは何をしたいの？」
「勇者として、魔族の脅威を取り除きたい。いや、魔族や獣人族の人達だって、弱い人間はアンリ達みたいに蹂躙されているんだ。だから、助けたい」
「・・助ける、か。今回みたいに食い物にしている奴を倒して奴隷を助けたり、貧しい人にお金を出してあげるとか？」
「いや、そんな事をしても、ただの自己満足だよ。目の前の困っている人を助けて、感謝されたら素直に嬉しいよ。でも、それって『勇者』にしかできない事なのかな？それに、目の前以外の困ってい

る人間にとって、なんの救いにもならない。」

「まあ、お金持ちならお金あげることなんて誰でもできるし、力づくで押さえつけても根本的な解決にはならないし、他の人は勇者が助けてくれるまでずっと苦しみながら待ち続けて、そのまま死んじゃったりするよね。」シルフ

「俺が感じているのはそこなんだよ・・・。それに、今からフリージア皇国に行って、王族や貴族を殺しまくって、お金を奪いまくって、それで何か変わるかといったら、何も変わらない。俺は復讐できて快感を感じるかもしれないけど、国が滅んだら・・」シンイチ

「ま、周辺各国から軍隊が来て、徹底的に蹂躙されたり、魔族が無秩序に攻めてきて、たくさんの人が奴隷にされるとか」シルフ

「そうなんだよなぁ・・、そいつ等を全員道具袋に入れて力で押さえつけても、もっと大きな戦争が起こるだけで・・」シンイチ

「最後には、逆らうものすべてを道具袋に入れて、シンイチは恐怖の大魔王になる」シルフ

「そういう物語もたくさんあるんだよ。最初は自分の復讐しているだけのつもりが、最後は皆から恐怖され嫌われる存在になるってのは」

シンイチはため息をついた。

（これは・・シンイチは拾い物かも。スパルタクスはこんな風には考えなかった。ひたすら虐げられた自分と仲間を嘆き、復讐に猛狂って、今まで自分を虐げたものを皆殺しにしたり、その家族を奴隷にしたりして、魔国を作った。その結果、結局は自分が一番否定し嫌っていた弱い者を虐げる邪悪な者に成り果ててしまった。そこまで予測がつくって・・単に頭がいいとかではないね。）シルフが考える。

「ねえ。それって、シンイチが自分で考えたの？」シルフ
「いや。俺の世界にはさまざまな物語があって、いろんなシチュエーションがあるんだ。ハッピーエンドもあるし、バットエンドもある。弱い者が力をつけて強者に復讐を果たしたら、いつのまにか自分が復讐される対象になっていたなんて話もある」

「ふーん。例えば、魔王を倒したやり方なんかもそれをヒントにしたの？」
「追いかけてくる鬼を騙して姿を小さくして、餅にくるんで食べた話とか、そんなのをヒントにしたね。自分が強くない場合は、相手を弱める状況に持っていくやり方で倒すってこと。あの時はとっさだったけど」

（そうか！！シンイチは他人とはここが違うんだ。持っている情報量がこの世界の人間と比べ物にならないんだ。これが異世界の人間の特徴なのか、シンイチだけのものかはわからないけど）

一説には、江戸時代の農村で一生を終える人間の情報量と、現代人の一ヶ月の情報量がほぼ等しいといわれている。
現代社会は情報社会であり、普通に生活をしていても、さまざまな情報が入ってくる。
その中にはいくらでも応用が聞く情報があった。

「そうか。シンイチは私の期待どうりの勇者だよ。その知識で、今の世界に対して反逆してみない？」
「反逆？」
「強い者が弱い者を一方的に理不尽に虐げる。弱い者を助けたかったら、そんな世界そのものを変えるしかないんじゃない？」
「そうだな。俺の復讐の対象はこの社会自体だ。社会制度を変え、

奴隷制度を恥とするようにみんなの価値観を変え、王族や貴族を尊いといった価値観を変え、皆が平等という意識に変えよう。そうしたら、個人的な復讐相手であるフリージアの王族や貴族も自然に没落するだろう。その姿をみて笑い飛ばしてやろう」

シンイチのこれからの目標が出来た。

手紙

その日の夜
「そういう訳で、フリージア皇国に行って仕返しするのはしばらく止めようと思う」
一杯に荷物を抱え込んで帰って来たメアリーに言う。

アンリは子供らしい可愛い服に着替えていた。
「シンイチはそれでいいの？」
「うん。あいつ等に仕返しなんていつでも出来るし、そんな事より先にする事があるからな」
「それは？」
「とりあえず、戦争を止めさせて、奴隷を解放させよう。人間も魔族も関係なしに」
シンイチが言い切る。
「・・それは、出来たら素晴らしいことだけど、具体的にどうすればいいんだろう。各国の王様達は勇者だったら会って話を聞いてくれるかもしれないけど・・戦争をしないで奴隷を解放なんてできるかな？」
メアリーが言う。

「ああ、そういえば、魔公の一人、ウンディーネがシンイチに連絡取りたがっていたね。手紙を書いていたよ？」
シルフが思い出したように言う。
「手紙？」
「うん。シンイチが金銀財宝を取り出すときに出るようにって、わざわざ純金の板に手紙を書いていた。なかなか取り出さないからあては外れたみたいだけどね。可哀相だから読んであげたら？」
「そうか。それなら読んでみよう。俺宛の手紙出ろ」

道具袋から純金の板に書かれた手紙をとりだす。

勇者様へ。

我等が魔王と貴殿の戦いの結果、我等は敗北し、魔王城ごと袋の世界に閉じこめられました。
魔王様はお亡くなりになり、魔王玉すら勇者様に取り上げられたため、もはや自力ではこの世界から出られないと悟り、魔王城の者は絶望にかられております。

時間がたつごとに、水や食料が不足し、我々は塗炭の苦しみにあえいでおります。
ある者はこの期に及んでも権力を求め、ある者は金に執着し、魔王城内では混乱の極に達しております。
しかし、城内の宝物も金貨も、その気になればすべて勇者様に取り上げられるので、我々は瓶の中のアリと同じだと思います。
我々にはもはや勇者様のお慈悲にすがるしか道はありません。
魔王城のすべての物は、もはや勇者様の物です。お望みでしたら、私どもの命も差し出します。
何卒、お慈悲をお持ちして、兵士や民の命を救っていただきたく存じます。
我々は、勇者様が望むすべての要求にお答えいたします。ぜひ話し合いに応じていただけませんでしょうか。

四大魔公　水と癒しのウンディーネ。

追伸

城内すべての物は勇者様の物と書きましたが、どうか、『疾風のブラ』と『魅惑のショーツ』だけはお返ししていただけませんでしょうか・・。長年愛用した下着なのです・。

「・・・・」
「返してあげなよ・・。ボクにはサイズが合わないんだから」
メアリーが同情したような顔で言う。
「いかにも俺が持っているような事言わないでよ!。アレはとっくに道具袋にしまったでしょ!」
「ん~。収納した道具が袋の中のどこに行くかはわからないからね~」
シルフが面白そうに言った。

「それじゃ、ウンディーネさんと話してみよう」
シンイチがウンディーネを取り出そうと道具袋を開ける。

「ちょっと待ってよ!!相手は魔公の一人なんだよ。出てきた瞬間、ボクたちに襲い掛かってきたら??」
「まあ、ウンディーネちゃんに限ってそんな事はないだろうけどね」
「わかんないよ。警戒しなきゃ」
『女神の杖』を構えてメアリーが言う。

「う~ん。どうしたらいいんだろう?」
シンイチがうなる
「ならば、ウンディーネちゃんだけ取り出すように念じたら?武器とかアイテムとか持ってなかったら、メアリーが勝つでしょ?」
「それしかないか。でも、シンイチ気をつけるんだよ。」

「わかった。何も持たない状態で、ウンディーネさんだけ出ろ」
魔法陣に手を突っ込んで取り出す。

部屋に２０才くらいの年頃の美しい女性が現れた。
・・・・・・・・・・・全裸で。

一瞬、部屋のすべてが止まっていた。

美しい女性が叫び声をあげる。
メアリーがシンイチにビンタする。
シルフが大笑いする。
アンリは冷静に部屋の毛布を持ってきて、女性にかけた。

・・・アンリが入れたお茶を飲んで落ち着く女性。目には泣いた後がある。
「シンイチ。反省してよね。本当にえっちなんだから」
メアリーが腰に手を当てて説教する。それをシンイチが正座して聞いていた。
「だ、だって、シルフがウンディーネさんだけ取り出せって言うから」
「口答えしない！いくらなんでも、服まで取り上げる事ないでしょ！」
「いや、この場合服は袋の中にあるから取り上げてない・・ごめんなさいなんでもないです」
シンイチは正座を続けた。

交渉

シンイチが道具袋から取り出した服を着て、やっと落ち着いたウンディーネ。
シンイチは罪悪感で一杯である。

「・・お見苦しい様を見せてしまいました。勇者様」頭をさげる
「いえ、俺こそ失礼なことをしてしまい、申し訳ありません」シンイチも頭を下げる。
「それでは改めまして。私は四大魔公の一人、ウンディーネと申します。以後お見知りおきを」
「俺は一応勇者のシンイチです」
「ボクは、フリージア皇国・・いえ、一応魔王?なのかな。メアリーといいます」
「あはは。シルフィールドの分身のシルフだよ。道具袋から一足先に出させてもらっているよ～」

「よろしくお願いします。メアリーさんが魔王玉を継いだのですね。凄まじい魔力を感じます」
「あはは、勝手に継いじゃったんですけどね」
「いえ。それは今まで代々積み上げた魔王のすべてなのですが・・負けたからには、致し方ないことです」
沈んだ声でウンディーネが言う。

「はは・・それで、俺たちと話し合いをしたいということですが」
シンイチが本題に入る
「はい。その前に謝罪させていただきます。魔王がシンイチ様を生贄にしようとした件、誠に申し訳ありませんでした。我々には『魔

王の袋』は国を象徴するくらいの宝物であり、前勇者が前魔王を倒した原因ともなったものです。そういったことがあり、袋を放置しておけば、無限のアイテム収納という性能上、いつか召喚される勇者に魔国が滅ぼされると懸念したのです。・・結果はまさにその通りになってしまいましたが」

「・・・その事についてはもういいです。魔王は倒しましたからね。これからの事を話しましょう」

「はい・・。私達は、勇者様に全面降伏いたしましょう。我々四大魔公や十六魔将も捕虜となりましょう。魔王城や、その中にある金貨、宝物もそのまま勇者様に進呈いたします。そして、魔国もフリージア皇国に併合されましょう。ただ・・兵士達の命や、民達が奴隷にされる事だけは許していただきたいのです・・」

ウンディーネが土下座する。

「・・・頭をあげてください」シンイチが静かに言う。

「フリージア皇国に併合ね・・」メアリーが嫌そうに言う。

「ははは。ウンディーネちゃん。そんな事言っても、勇者君と魔王ちゃんは喜ばないんじゃない？そのフリージア皇国に生贄にされた二人なんだから」

「・・そうでした。では、勇者様と、魔王の後継者様のお二人に、この魔国を治めていただくというのは・・」

「私とウンディーネちゃんはそれでよくても、他の魔公や魔将とか、この国の民衆は人間を魔王に受け入れるかね～。先祖代々人間に奴隷にされた歴史を教育してきているんだから。なんとか無理矢理に魔王に押し上げても、すぐ反乱がおきそう」

シルフが真面目な口調で言う。

「そ・・それは、私が説得します。シルフィールド殿も協力お願いします」

「シンイチはどう思う？」
シルフが聞いてくる。

（これは試されているな）シンイチは感じた。
「う～ん。王様とか柄じゃないんだよね。元の世界ではただの高校生だったし。メアリーはどう？」
「王族になったら、豊かな暮らしとか、誰かの奴隷とかにされずに穏やかに暮らしていけると思ったけど・・考えてみたら、あんまりメリットないかも。
お金は埋まるほどあるし、シンイチとどこか穏やかな所で二人暮らしていくのもいいかな？」
メアリーがさらっと言う。

「メ、メアリー。いきなり何言い出すんだよ」シンイチが顔を真っ赤にする。
「前に言ってくれたでしょ。シンイチはボクだけの勇者だって。もともと王族になりたかったのも、どこかの優しい貴族のお嫁さんになって穏やかに暮らすためだし・・考えてみたら、今のボクってシンイチがいれば全部満たされているんだよね。シンイチは優しいし、貴族にならなくても大金持ちだし」
明るく笑うメアリー。
「はいはい。ご馳走様」シルフがからかう。
その様子をウンディーネは呆然と見ていた。

（わ、私達は差し出せるものをすべて差し出すつもりなのに・・彼らは何も必要としていないの？）
「お、お願いします。どうか私達をお助けください」
再び涙を流しながら、ウンディーネは頭を下げた。

「そ、そんなに泣かないでください。悪い事をしている気分になる」

シンイチが焦っていう
「あはは。実際にウンディーネちゃんを苛めているのはシンイチだけどね」
「シンイチ・・ウンディーネさんかわいそう」
「なんでメアリーまでそっち側？」
焦るシンイチ。

そのうち、ウンディーネの泣いている姿に耐え切れなくなった。
「も、もう止めてください。俺は魔族を滅ぼそうなんて考えていませんから」
「ぐすっ　ほ、本当ですか？」
「はい。ああもう。アンリ、タオル持ってきて。」
タオルをウンディーネに渡す。
「あ、ありがとうございます・・・」

「魔王城の中にいる人達は、全員解放していいです。四大魔公とか魔将とかもすべて」
「あ、ありがとうございます」
「しかし、彼らが俺たちに復讐するかもしれないので、それを絶対にさせないこと。あと、魔王城とその中の物については、そのまま俺の物にさせていただきます。」
「は、はい。当然のことです。」
「それから、これはキツイ要求かもしれませんが、魔国の奴隷をすべて解放していただきたいのです。そして、魔国から永久に奴隷制度を廃止していただきます」

「・・奴隷をですか？」
「奴隷制度があるかぎり、人間と魔族は永遠に憎みあいます。ひとまず、それを終わらせたいのです」
「・・・わかります。私も決して奴隷制度に好意的ではありません。

いつかは止めないといけないと思っておりました」
「もちろん、今後奴隷にされる人が出ないように、各国の魔族コロニーも撤退してもらいます」
「はい」
「それから、今後は魔族と人間の関係は、すべて俺が間に入ります」
「勇者様が？」
「貴方方は戦争の歴史を背負っています。話し合いをしようにも、過去の因縁が絡んで話がこじれるのがオチです。ここはいったん、俺が全部間に入って交渉するようにしましょう。一応勇者の看板をしょってますから、魔国が認めれば各国も無視できないと思います。」
「ほ・・ほんとうに我々の仲立ちをしていただけるのですか？」
「それが俺にとって一番いいやり方なんですよ」
「勇者様・・貴方こそ、われわれ魔族にとっても救世主になる方なのかもしれません」
ウンディーネはシンイチの手を握った。

「こほん・・いつまで握り締めているのカナ？」
メアリーがわざとらしく咳払いする
「あ・・私としたことが。失礼しました」赤くなって手を離すウンディーネ
「い・・いえ。ありがとうございます」シンイチが照れて笑う。
メアリーはジト目でみた。

仲介

「でも、魔族と人間の仲立ちなんて、本当にできるの？」シルフが言う。
「まあ、少なくても戦争にならないようにすることはできるね」
「どうやって？」

「俺たちの世界では、世界を巻き込んだ大戦のあと、二つの陣営に分かれて睨みあう状態が長く続いたんだ。どっちも核兵器という、使えばどっちも終わりっていう恐ろしい武器を向け合ってね」
「・・・そんな状態が続いたら、恐ろしくて暮らせないじゃん」
メアリーが言う。
「それが、そうでもないんだよ。その状態で得をした国もあった」
「得？」
「つまり、相手の大国が入ってこないように、間にある国を防波堤として置いたんだ。そうして対立しているけど戦争をしない状態、いわゆる『冷戦』という状態にもっていった。不沈空母と呼ばれたその国を盾にするために、一方の大国はその国を援助した。そして、その国は世界中で貿易を始めた。戦争で壊滅的な被害をこうむって一から始めないといけなかったのに、数十年後にはその間の国が世界中の富を独占いるようになって、世界で一番進んだ国になったんだよ」
「・・・詳しいね」
「よくわかんない」
実はシンイチは歴史が好きで、その手の本をよく読んでいたのである。

「つまり、人間と魔国の間に領土を作って、直接関わらせないようにする。そうして二つの国の貿易を一手に握る。もちろんお互いに

不干渉の条約を結び、経済的にもその貿易を仲介する領土がなければ両方が困るようにする。そうして、戦争を起こりえない状態に持っていく」

「・・そんなに上手くいくかな？」

「その間の領土が周囲から舐められないように勇者と魔王後継者の看板しょってたら、両方の国をうまく操れるよ」

「興味深いですね・・」

ウンディーネが感心したようにいう。

「あと、俺らの世界でも、２００年くらいまでは奴隷がいたんだ。それがどうやって解放されたかも知っている。今じゃ、その奴隷にされた民族から、世界一の大国の指導者が生まれているよ。」

「そ・・そんな事があるのですか？」ウンディーネが驚く。魔公として政治に携わる彼女は、自分の知らない世界のことに興味を持った。

「ああ。奴隷解放は理念とか人の情とかもあるけど、一番の理由は経済問題だな」

「経済？お金の問題のことなんですか？」

「その大国は北の工業地帯と南の農業地帯に分かれていた。発端は北の工業地帯で奴隷が解放され、奴隷は従業員として賃金を受け取る事になった。そうするとどんどん物が売れて、景気が良くなる、雇い主の工業主も儲かる。景気が良くなると人手が不足して、さらに人が必要となるといった循環ができた」

「ぐう」

「寝るなメアリー。それに反して、南の農業地帯は奴隷を働かせていたが、作物を作っても買い手がいない。買い手がいないので、北の地域まではるばる運ぶしかなくなり、作物を安く買い叩かれる。そうしたら地主である主人は儲からなくなる。という風に、両方の

地帯で格差がおきた。奴隷を解放して従業員にして人手不足を解消しようといる北部と、そのまま奴隷として酷使したい南部との戦争が起こった。結果は北の圧勝で、奴隷は解放されて一般民衆になったんだ」

「へえ・・面白いね。人を奴隷として酷使するより、物を買ってくれる一般人にしたほうが、結果的に上の人間は儲かるの？」

シルフが思ってもみなかった用に言う。

「そういうこと。そうすると、一般人の中からどんどん成り上がる者もでてきて、国が豊かになる。俺が読んだ本にはそう書いてあったよ」

シンイチが語る。ウンディーネは今までとは違った目で勇者を見ていた。

「シンイチ様・・とても興味深いです。その・・お願いがありますが」

「お願いですか？」

「シンイチ様の知識はとても面白いです。『知識共有』を私としていただけませんか？

ウンディーネがにじり寄ってくる。

「・・別にいいけど」

「ダメ」メアリーが間に入る

「なんで？」

「ダメったらダメ！！」駄々っ子のように言う。

「メアリーったら。でも、ウンディーネちゃんと『知識共有』するのはいいかもね。魔族の知識の中にも、シンイチの知らない有益なことが一杯あるだうから」

「ううう・・わかったよ。」メアリー

「ありがとうございます。・・それでは失礼します」

ウンディーネがシンイチに抱きつき、おでこを引っ付ける。

「・・・（スハッ。いい匂い）」
ウンディーネは絶世の美女である。大人の女性の匂いを纏っていた。
クラクラするシンイチ
「・・シンイチ」
怖い声で名前を呼ぶメアリー。シンイチは恐怖で震えた。

「痛!!。これは何回やってもなれないな～。でもいろんな魔法があるんだな。使えそうだ」
シンイチがウンディーネから離れる。
ウンディーネは呆けていた。

「・・？ウンディーネさん？どうしたの？何かあった？」
心配するシンイチ
「はっ・・何でもありません。心配していただけるのですか？シンイチ様は優しいですね・・」
ウンディーネが言う。
「いえいえ、そんな事ありませんよ」照れるシンイチ

（こ・・これは。ほんのわずかな知識を交換しただけなのに、なんなのこの情報量。空を飛ぶ鉄の塊。宇宙にまで飛び出していく筒。大地を走る蛇。都市を照らす光。豊かで種類豊富な食べ物。自動で動く馬車。しゃべって絵を写す箱。天まで届きそうな建物。奴隷など一人もいないのに、誰もが豊かに光溢れる街をあるく人間達。なんという理想郷。このような世界から来たの？私も、この世界に行ってみたい）
シンイチを熱い目で見つめるウンディーネ。
メアリーはウンディーネを警戒した。

「す・・素晴らしい国です。このような街を作り上げるのに、何年かかったのですか？」

「えっと・・だいたいの基本的なところは３０年くらいかな？」
「３０年！！！！！」ウンディーネは驚愕した。
それは数百年を生きる魔族にとっては、ほんの一瞬にしかすぎない。
「ぜ、ぜひこのような世界を作り上げましょう、私も死ぬ気で協力します」
シンイチに抱きつくウンディーネ。
「ええい。シンイチから離れろ。シンイチはボクのものだ」
メアリーが間に割って入った。

下着

魔王城

１６魔将の一人　ドレイク将軍の兵士達は、魔王城の錬兵場で模擬戦をしていた。

【シュパッ】音がして、高速の剣が相手の剣を叩き落す。
「勝者、タータルス！！」審判が試合をとめる。
全身筋肉で被われた体格のよい男が勝利した。

「すごいぞタータルス！」
「わが部隊で最強の戦士だな！」
周囲から歓声があがる。
タータルスと呼ばれた兵士は、右腕を上げて歓声にこたえた。

「いや、ここ最近の体のキレは素晴らしいな」
「どうやったんだ？お前は力だけは相当なもんだったが、動きが遅くて負け続けていたのに」
「その動きの秘密を教えてくれよ」
友に囲まれて持ち上げられる。
「ふっ。日ごろの訓練のたまものだ」
格好をつけて答えるが、敏捷性があがった理由は答えられないものだった。

数日前、タータルスのベッドの上に、布切れが落ちていた
（なんだこれ・・・女の下着？なんでこんなものが落ちてんだよ！）
あわてて同室の兵士に見つからないように隠す。

捨てようとしたが、その下着から魔力を感じた。トイレの個室にこもり、じっくりと見る
（これは、なかなか・・。いや、すごい魔力だ。何かの効果がある
に違いないが・・）

中級兵士であるタータルスには、ここまでの魔力を感じる魔具はみたことがなかった。
売れば相当の値がつくだろうが、その為にはかかっている魔法の効果を知る必要がある。
もちろん、それを知るためには、むりやり装備するしかない。
意を決して、男としての尊厳を捨てた。
（これは・・軽い。体が羽のようだ。これなら・・）
体の動きが遅いため、戦士としては中級だったが、下着を装備する事で早く動けるようになった。

しかし、ここ数日、友たちの態度がおかしくなっていった。
やたらと遊びに誘われたり、食事に誘われるのである。
いや、別にそれ自体はいいことなのだが、なぜ二人きりで行こうと誘われるのか？
漠然とした不安を抱え込んでいた。

「まあまあ、いいじゃないか。それより、風呂いこうぜ！！」
部隊の連中が誘ってくる。確かに訓練の後は汗だくだが、下着を見られるわけには行かない。
「・・お前等先に言ってこいよ。俺はいい」
いつもはこうやって断っているが、今日はなんだかおかしかった。
「・・・ハアハア。遠慮するなよ。俺たちはお前と風呂に入りたいんだ。もう何日も我慢してたんだぞ」
「お前の匂い、たまらん」
「もう我慢できないんだ！」

取り囲まれ、全員に担ぎあげられるタータルス
「な、なんだ！何が起こっているんだ！」

同僚達から感じる異様な雰囲気に、タータルスは恐怖した。

「あの、それで、私の下着は・・返していただけませんでしょうか？」

上目遣いでシンイチに頼む
「は、はい。すぐに返しますから・・ええと、『疾風のブラ』と『魅惑のショーツ』でろ」
道具袋から取り出す。
「ええと・・これです、よね？」
下着は伸び伸びになっており、汗でぐっしょりと湿っていた。
「・・なんだか、誰かが使っていたみたいだね」
「・・ケホッ　シンイチこっちに向けないで、何日も風呂に入ってないような男の汗の匂いが・・」
シルフの言葉に、あわててウンディーネに差し出すシンイチ

「・・・うわーん。ひ、ひどすぎる。一番のお気に入りだったのに・・・。」
ウンディーネはまた泣き出した。

タータルスの体から下着が消える
「あれ？俺たち何してたんだ？」周囲の同僚が正気に戻る。
（危なかった・・金輪際女物の下着など着ないぞ！）
タータルスは当然の決意を固めるのだった。

「そ、それでは、ひとまず魔王城に帰って、他の魔公たちと協議い

たします。一日後、また呼んで下さい」気を取り直して、ウンディーネは魔王城に帰っていった。

「ウンディーネさん、大丈夫かな?精神的に大分ショックみたいだったけど」

「あはは。彼女はああ見えても魔族のトップだよ。あれくらいじゃへこたれないよ」

「そうだね。とりあえず、待ってみるか」

シンイチ達は魔族内の結論が出るまで、ナムールの街に滞在することにした。

条件

魔王城

魔公や魔将たちに召集をかけるが、１６魔将は代表としてケルビムを出席させるのみとなった。

「・・というわけで、私は勇者様と交渉をしたし、一応の合意を得ました。条件は以下のものとなります

?:魔国は国内のすべての奴隷を解放し、以後、奴隷制度を廃止する事
?:魔国は現在行われている戦争をすべて停止し、人間の国内にある魔族のコロニーを撤退させる事
?:魔国は勇者と魔王後継者に対して、復讐行為をしない事。
?:魔国は魔王城と中の財宝・金貨・物品すべて勇者に引き渡す事。
?:魔国と人間の国の間に中立地帯を作り、そこを勇者の領土とし、貿易や交渉はすべてそこを通して行う事。
?:勇者は魔国・人間国と協力して、勇者の世界の知識を世界のために役立たせること。
?:勇者は人間国内で奴隷とされている魔族を解放するように取り計らうこと。
?:勇者は魔王城にいるすべての者を解放すること

勇者の提案を飲めば、我々も救われ、これ以上不毛な戦争をする事もなくなります。それどころか、勇者の知識を使えば、たった数十年でこの世界が理想郷となります。私からの提案は以上です」

ウンディーネが席に座る。

この会議に出席前にウンディーネは他の四名と『知識共有』を行っていたので、その提案に嘘はないことを全員が理解していた。

「奴隷の解放とはな・・・・。昨日この世界に落とされた者たちは、勇者を奴隷としようとして反撃をされたと言っていた。バカなことをしおって。・・・・この世界から出られるというなら、ある程度の領土の割譲や、金貨や財宝はいたし方あるまい。魔族コロニーの撤退もだ。しかし、奴隷を解放するといっても、一度にすると大変な事になる。下手をすれば反乱がおき、魔国自体が滅びるぞ。もう少し、条件を妥協できないものか」
イフリートが考えながらいう。

「私はウンディーネちゃんに賛成だね。勇者すら利用して魔国を富ませるくらいのことはしてもらいたいもんだね～」

「・・私はイフリート殿に賛成だ。我々や魔王城の者が助かるとはいえ、奴隷を失う事で社会が混乱する。もちろん、このままでも魔国は滅びてしまうので、ある程度の条件は飲まねばならんが、奴隷の即時解放は現実的ではない・・。現に、勇者の世界でも奴隷解放のため内乱が起こったというではないか。勇者の異世界の知識の有用性は認めるが。」
社会の混乱を憂うノーム。

「私は反対だ。ここで弱腰になると、我々が奴隷とされた暗黒時代の再来だ。どれだけ犠牲が出ようが、袋を破り、自らの手で脱出すべきだ」
「ケルビム殿。犠牲を出して脱出するとは、いかなる方法によってか？」
イフリートが鋭く聞く。
「イフリート殿もお分かりのはず。貴殿の部下が武器や防具を買い占めているのは我等も承知だ」
「我等も１６将が同じ行為をしているのを掴んでおる。だが、我等

は貴殿とは違う。同族を犠牲にするくらいなら、勇者の提案を呑むほうがマシだ。その程度の誇りはもっておる」
イフリートとケルビムが睨みあう。

「お二人とも・・今は争っている場合ではありません。採決で決めましょう。条件付でもかまいません。勇者様の提案を呑む方は？」
ウンディーネ、シルフィールド、イフリート、ノームが手を挙げる。
「決まりです。魔王がいない以上、魔公の決議で決まります。１６魔将は代表者が魔公一人分の決議権を持っております。４対１で勇者様の提案を呑む事が決定しました。」
ウンディーネが採決し、方針が決定した。
「では、勇者殿に対して、条件の交渉の議論に移りましょう」
それぞれ意見を言う。だが、ケルビムは無言だった。

「・・・だいたい、勇者に提出する条件は、これでよいでしょうか」
魔公同士の議論で、シンイチに対しての魔国側の条件の同意が得られた。
反対したケルビムは採決直後、全権を委任して退去していった。

魔国側の提案として

?他の条件はすべて呑む。領土は国境の周辺一帯を勇者個人に割譲し、どこにも属さない領土として独立を認める。
?全部の奴隷の即時解放は社会不安をあおり、内乱の可能性があるので難しい。よって、捕虜証明書を持つ奴隷のみ解放して、人間国に帰国を認める。犯罪の罰や金銭を理由として奴隷になったものは、そのまま主人の所有を認める。
?今回を契機に奴隷について一斉に調査し、証明書をもたず不法に奴隷を所有する者には厳罰を与え、そのものの資産から奴隷に対して保障を与える。

？同意後、人間国側に魔国側が使者を出し、不可侵条約と貿易、交渉を勇者に一任することを伝える。

以上の条件が数時間の議論を経て同意された。

反乱

全員がさすがに疲れたのでいったん会議を中断して休憩している時、それは起こった。
「大変です!!。ケルビム殿、叛乱!城内は反乱軍との戦闘で大混乱です」
イフリートの部下が注進に来た。

「・・なんという事でしょう」
「やはりな。心配なされるなウンディーネ殿。この中央エリアは我が軍で固めておる。半ば予想されたことだ」
イフリートが安心させるように言う。
「・・わが一族にも警戒するように言っておる。地の魔族はここに向かっておるだろう」
「１６魔将直属の軍は２３８１人。そして私達の軍は合わせても１７３８人。さらに、魔将軍はこの中央エリアに集中しているけど、魔公軍は四つの塔に分散しているね～。中央エリアにいるのはイフリート君の部下８００人程度か。」

「シルフィールド殿。結界を張り、城内外縁部にいる魔公軍に中央エリアを目指すように伝達していただきたい」
「了解。イフリート君とノームおじさんは皆を守って。あと、ウンディーネちゃんは勇者に呼び出されたら、訳を話して助けを求めなよ」
「でも、助けてくれるでしょうか・・」
「お人よしだから、一度知り合いになった人を見捨てたりしないよ。」

「ならば、我等は防御に専念しよう。この中央エリアにいるイフリート魔公軍は私が指揮を取る」
イフリートが前線に出て行く。
「ウンディーネ殿は篭城のための回復ポーションを作り出していただきたい。私は身を削り、魔力を込めた実をつくり出そう。」
体の一部を樹に換え、魔力実をつくるノーム。
「はい。勇者様・・早く私を呼び出してください」
ひたすら祈るウンディーネだった。

中央エリア前では、激しい戦闘が行われていた。
魔公軍のみ出入りできる結界を作り出すシルフィールド。
その結界を破ろうとする魔将軍。
防御に専念するイフリート直轄軍。
外から魔将軍を破ろうとする外縁部魔公軍。
戦場は混沌としていた。

戦闘は膠着状態のまま、時間が過ぎていった。
本来なら魔将軍の圧倒的有利のはずだったが、体力の回復ができるウンディーネ、魔力の回復ができるノームが魔公側に存在し、戦闘力が最も高いイフリートが回復しながら防御に専念するので、戦闘は決め手を欠いたまま時間ばかりがすぎた。

「ええい。戦況は?」
いらだってケルビムが報告を求める。
「中央エリアの結界は未だ破れず」
「魔将リーク将。イフリートと戦闘の結果、重傷を負って敗退」
「外縁部魔公部隊は、つかず離れず攻撃してきます。」

「進言します。外縁部魔公部隊を先に殲滅すべきでは?」

魔将ナルハルトが上奏する。
「・・いや、そうなれば、背後からイフリートの軍が襲い掛かってくる。挟み撃ちだ」
ケルビムが却下する。
「しかし、シルフィールドの結界は、やすやすとは破れそうにありません」
「しかし、ここは一点突破を計るしかない。外部はかまうな。攻撃を結界に集中させろ。」

魔将たちが前線に出て、魔力砲を放つ。結界にぶつかって霧散する。
「ふふ。その程度じゃ破れないよ～」
シルフィールドがからかう。

「魔将たちよ。いい加減にせぬか。今やっと勇者との交渉が出来るようになったところだ。同族を犠牲にせずとも、袋からでられるのだ」
全身に『太陽の鎧』をまとい、『炎の剣』を振りかざしてイフリートが言う。
何人かの魔将に動揺が走る。

「本当ですか・・ケルビム殿は、人間に屈することになると仰ってますが」
「現に我等は勇者に屈しておるのは間違いない。だが、勇者も闇雲に魔族を滅ぼそうとしているわけではない。もしそうなら、我等が今生きている道理はない。魔王様ですらなすすべなく一方的に殺されたのだ。我等などなんの抵抗ができよう」
イフリートの言葉にうなだれる魔将

「で、では、交渉とは」
「それは・・」

イフリートが発言しようとすると、ケルビムが前線に出てきてさえぎる。

「勇者に屈し、彼の差配に従って生きるなど、誇り高き魔王の血を引く我等にはできぬ。魔国を売り渡して、どうして生きられるか！」

「魔国を売り渡すのではない。彼らには我等の仲介をしてもらうだけだ。」

「戯言を。魔王を殺した勇者など信頼するにあたるか。子としても偉大な父の仇を取らずにはおれぬ！」

「仇だと！一国を指導するものにとって、私怨などもってのほかだ。我等は個人的な復讐より、大局をみるべきだ！」

「イフリート公！貴方は魔王玉を真っ先に要求した。それこそ私利私欲。魔王の座につきたいのであろう！」

「ばかな！魔王玉を要求したのは、それが袋の世界を破る為に必要だと思ったからだ！」

「私としてもそう思っておる。だからこそ、貴殿の魔力が必要なのだ！」

「・・・どうあってもか。交渉で外に出られるとわかってもか。同族殺しをしてもか。」

「くどい！誇りを持って外に出ないと、結局は魔国は滅びたと同じだ」

「・・・私を殺したとしても、袋を破る魔力を得るには足りまい。どうするのだ？」

「袋を破る魔力を得るまで、他の者にも犠牲になってもらうまでだ」

「我が一族も、他の一族も、魔将たちも、兵士も、民もか？」

「そうだ！！。私さえ魔王となって外に出れば、魔国は立ち直る」

ケルビムの言葉に、他の魔将や兵士達も目を剥く。

「・・よくわかった。この上は一騎打ちにて勝負をつけよう。我を

倒して魔法玉を吸収してみるがいい。他の魔将たちや兵士達もよく見ておくがいい。私が倒されたら、強大化した魔力をもってケルビムは見境なく虐殺を開始するだろう。その時は、結界内に逃げ込み、勇者に助けをもとめるといい。シルフィールド殿。お願いしたす」

「・・わかったよ。しんじゃダメだよ」

シルフが悲しそうな顔で言う。いつの間にか、魔将や兵士達も戦いをやめ、二人の対決を見守っていた。

戦闘

イフリートとケルビムの戦いは続いていた。
イフリートが炎の属性に特化した魔族ならば、ケルビムは全属性を均等に使える魔族だった。
イフリートの『炎の剣』をケルビムの『氷河の斧』で防ぐ。
ケルビムの魔力砲をイフリートがかわす。
全く互角のまま、数時間も戦い続けた。

『ボルケーノ』イフリートが広範囲の炎魔法を使う。
『ウインドレイン』ケルビムが風の刃を作り、無数に降らせる。
イフリートの体が切り刻まれる直前、イフリートは結界に逃げ込んでいた。

「卑怯者。一騎打ちに逃げをうつか」
「ほざいていろ若造。回復したらまた相手をしてやる」
イフリートは結界内に帰り、それをきっかけとして両軍の戦闘は中断された。

「これは・・ひどい怪我です。イフリート殿、無理はなさらないでください」
ウンディーネがエクスポーションを使うと、体の傷がどんどん回復していった。
「イフリート殿。よくあの猛攻をしのがれましたな。感服いたしました」
ノームが魔力実を作って食べさせ、魔力の回復に努めた。

「いや・・正直いって戦闘についてはケルビムの方が上だ。魔公として政治を行い、戦闘から遠ざかっていた私と、常に戦闘を繰り返

していた魔将ケルビム。いつの間にか逆転していた」
イフリートが言う。
「しかし、これで勝機が見えてきましたな。こちらは回復できるが、あちらには回復する手立てがない。次に戦えば確実に全快したイフリート殿が勝つ」
「そうだと良いのだが。ノーム殿、私はもう大丈夫だ。。引き続き皆をお願いする。」
「わかった。養生されよ」
ノームが去る。イフリートは疲労から、つかの間の眠りに落ちた。

ケルビム陣営
「もうポーションはないのか？」
「はい。もともと品薄だったのですが、この戦闘ですべて使い切ってしまいまして」
「回復魔法が使える者は？」
「癒しの魔法を使える水の属性を持つ者が少なく・・殆どがウンディーネの配下ですから」
「ぐぬぬ・・」
部下と現状確認をするケルビム。

イフリートと引き分けた彼も全身に傷を負っていたが、回復の手段がなかった。
（このままでは、再戦時には確実に負ける。やむをえん、もともと覚悟していた）

「他の１６の魔将を呼べ。軍議を行う」
伝令が伝えられ、１６魔将が揃った。

「ケルビム殿・・そのご様子では相当傷ついたようです。ここらで

停戦をされれば？」
魔将マルドークが言う
「あちらの提案では、勇者の出した条件を呑めば解放されるとのこと。それならば・」
魔将ドレーク。彼はもはや同士討ちにうんざりしていた。
他の魔将もそれぞれ満身創痍の状態であり、士気が目に見えて下がっていた。
「わかった。後は私が一人で戦う。皆ご苦労であった。『グラビティ』」
ケルビムが呪文を唱えると、軍議をしていた部屋の床一面に魔法陣が広がった。

「こ・・これは」
「動けない」
「まさか、重力魔法!!なぜこのような事をなされる」
体が動かなくなり、動揺する魔将
「貴官たちの犠牲は無駄にはしない。その魔力すべて私が受け入れる」
ケルビムが冷酷に言う
「き・・貴様！」
「くっ・・貴様についたのが間違いだった」
「た・・助けてくだされ!!」
魔将たちの体がどんどん潰れて消えていく。後には１５個の大きい魔法玉が残った
魔法玉に手を触れて吸収するケルビム。体がふた回り大きくなっていた。

再び進軍する魔将軍。
ケルビムがシルフィールドが張った結界に向けて魔力砲を放つ
ドガンと大きな音を立てて、結界が砕け散った。

「でてこいイフリート。決着をつけるぞ」
ケルビムが大声で叫ぶ。

イフリートが出てくる。
「貴様！その姿は・・」
「察しのとうり、１６将はもはや私一人だ」
「外道め！。貴様はもはや魔族ですらない。ただの食人鬼だ」
「上等。魔族のすべてを統べるには鬼でなくてはならぬ。覚悟！」
ケルビムの体から魔力が吹き上がる。
その魔力は父である魔王アンブロジアに迫りつつあり、まさに『魔王』と呼ぶにふさわしいものであった。

ケルビムと激突するイフリート。
「ははは、どうした。その程度か！！」
ケルビムが笑う。もはや力の均衡は完全に崩れていた。
「くっ　サンニードル」
『太陽の鎧』から無数の光の棘が出て、ケルビムに突き刺さる
「ははは、このような小技、今の私にはかすり傷程度だ」
突き刺さった光が弾かれる。
（くっ・・どうすれば）
必死に防戦するも、ケルビムの猛攻に耐え切れなくなってくる

「これで終わりだ。オメガブリザード」
戦いの場を絶対零度の吹雪が覆う
「くっ・・」
イフリートの動きが止まる。
「ハッ」
ケルビムの『氷河の斧』がイフリートを真っ二つに両断した。

「ククク・・・これで私は最強の魔王になる。後は残りの魔族を皆殺しにして・・」

イフリートの死体の側にでた大きな魔法玉を吸収する。

ケルビムの体はさらに巨大になった。

切捨

道具袋の中で魔族が混乱に陥っている頃・・

フリージア皇都。カストール伯爵邸。

カストール伯爵は５０代の灰色の髪をした堂々とした壮年の紳士である。

今回の国内会議のため、北方の魔国に接している領地からフリージア皇都に赴いていた。

既に会議は開かれて何日もたっていたが、地方の領主は皇都から離れた領地に普段住んでいる為、到着次第出席することになる。

それで、会議に出席する前に今回の勇者召喚からの一連の経緯について報告を受けていた。

「ふむ。まず、最初に勇者召喚の計画を立てていたのは、メルト王女なのだな」

低い声で言う。

「はい。父上。この計画には、弟であるアーシャもからんでおります」

発言したのはドンコイ・カストール。カストール伯爵家の長男である。

普段は特に役職もつかず、皇都に滞在し、情報収集と称して同世代の貴族と放蕩を繰り返している。

体はぶくぶくと太り、目は細まっている。

彼が評判の悪い第一王子カリグラの取り巻きの一人であり、騎士副団長である弟アーシャを嫌っているのは周知の事実であった。

「はは、第四王女に取り入り、勇者を召喚して魔国に対して優位に立てば王位に近づくとでも吹き込んだのでしょう。勇者が弱いと見て生贄にするよう計画を立てたのでしょうが、ものの見事に策略がはずれ勇者が魔王を倒してしまいました。剣を振るしか能がない無能男がなまじ策を練るからこのような無様なことになるのでしょう」
ヒヒヒッ　と楽しそうに笑う。

「・・ずいぶん楽しそうだな。それでその間、お前は何をしていたのだ」
カストール伯爵が不快そうに言う。
「いえ、私は特に何もしておりませんでしたよ。余計な事は一切。本来、国事にかかる事は陛下や宰相殿の仕事ですからね」

「何もしていない・・か。確かにお前は昔からそうであったな。剣も才能がない。学問も長続きをしない。そのくせ人の批判は得意だったな。お前がアーシャの剣について批判した時は、家臣一同失笑したものだ」

以前、ドンコイはアーシャが剣の修行を続けて周囲から達人として認められるようになると、貴族に剣など無意味だ、木の枝でも振っているほうがまだ周囲が危なくないのでマシだとあざわらったのである

「ああ、あの件ですか。私は今でもそう思っておりますよ。戦場で命を散らす下賤な兵士でもない貴族が、剣を学んでなんとします？まあ英雄にあこがれるお馬鹿な姫君達の関心を得るぐらいのことですな。むしろそれで本人まで勘違いしてしまうので有害ですらあります」
悪びれない顔で言う。

「・・剣もまともに振るえないお前が、アーシャの剣技を批判するのか？」
「おかしな事をおっしゃる。剣について批判できる者は、剣技を極めた者しかできないとでも？」
ドンコイが顔を歪める。

「事実、アーシャが美しく、剣を使えるということだけで名声を得て、騎士団副長になり、現実を何もしらないお姫様とお近づきになりました。そのせいで、調子に乗って勇者召喚などという愚劣な計画をし、ものの見事に失敗。その結果、わが国は他国からも疎まれる始末。その責任をめぐり、カストール伯爵家が窮地に追い込まれている現状はどうお考えなのですか？」
かさにかかって言い放つ。

「・・・くっ。その点は確かにアーシャにも責任がある。だが、今ここでその様な事を言っている場合ではあるまい」
「・・・父上。本気でおっしゃっているのですか？今だからこそ、その事について目をそむけている場合ではないのでは？」
「どういうことだ？」
「つまり、勇者生贄計画に参加したのは、騎士副団長アーシャであって、カストール伯爵家次男アーシャではないということですよ」
「なに？？」
「アーシャの言い分では、フリージア皇国のために勇者を生贄にしたということでしょう。では、カストール伯爵家のためにアーシャが生贄にされても文句は言えますまい」
「貴様は自分の弟を切り捨てろと言っておるのか！！！」
伯爵は手に持ったグラスを投げつける。グラスがドンコイの額に当たり、血が流れる。

「父上。気が済みましたか？」

ドンコイは顔色も変えてなかった。平然としている。
「貴様は・・」
カストール伯爵は今までこの長男を見限っていた。醜く太り放蕩を繰り返す長男を廃嫡し、アーシャを世継ぎと考えていたのである。しかし、今目の前にいる男は、本当に自分の息子かと疑うほど圧力を与えてくる。

「気が済んだらご決断を。アーシャを取ってカストール家を潰すか、アーシャを切り捨ててカストール家を救うか」
「だ・・だが、アーシャを切り捨てるといっても、他の貴族が納得するまい」
「ああ、それでしたらこれをお使いください」
ドンコイが手を叩く。従者が書類と袋を持ってくる。
「これは？」
「袋には私が今まで横領したり略奪したりして貯めた金２０万アルが入っております。書類は私達放蕩息子達が今まで犯してきた罪が詳細に書かれております。暴行・略奪・殺人・横領。証拠も捜査したらすぐに見つかるようにしております」
「・・どうしろというのだ」
「私達の仲間の親は第一王子を筆頭として有力者ばかりです。金は買収に、書類は脅迫にお使いください」
「お前は・・だが、この書類を脅迫に使うといっても・・」
「ふふふ・・その書類には有力者の子弟の罪を個別に書いております。誰を罪に落そうが、父上の采配一つです」
「だ、だが、しかし、お前もその者たちと悪事をしていたのであろう。脅迫など・・」
「ああ、もちろん私が犯した悪事の証拠など残しておりません。当然の話です。証拠つきで訴えられた者が何を喚こうとも、責任逃れの戯言と言い張れば済む話」
「貴様・・」

「もちろん脅迫など使わない方が良いに決まっております。万が一のためです。その様な事をせずとも、金をばら撒けば味方につけることは可能でしょう。」
「・・・」
「父上、ご決断を」
「・・わ、わかった。アーシャを切り捨てよう」
その言葉を聞いて、ドンコイは満足そうにうなずいた。

数日後、皇国会議に出席したカストール伯爵は、伯爵家の責任はないと主張する
「何をおっしゃるか??。アーシャ殿は貴殿の次男。カストール家の責任は免れませんぞ」
「アーシャは確かに我が次男ですが、もはやカストール家には縁なき者です」
「どういうことですか!!」
「彼に対しては正式に勘当いたしました。いや、騎士として国に仕えると決まったとき、カストール家の者ではなくなったのです」

「・・ち、父上、何を仰るのですか?勘当など私は聞いておりません!!」
アーシャが悲鳴を上げる。カストール伯爵は今まで優秀な息子である自分を愛し、跡継ぎにすると公言していたはず。自分を切り捨てるつもりかと睨みつける。

「アーシャ。父として最後の言葉だ。お前は騎士になる時、カストール家よりも優先してフリージア皇国に忠誠を誓ったはず。お前が今生きているのも国からの禄を食んでいるからだ。そうである以上、お前はカストール家の者ではない。」

カストール伯爵が冷たく言う。

「・・言われてみれば一理ありますな」

「確かに勇者生贄計画に加担した時点では、身分は皇軍獅子騎士団副長でしたな」

「騎士団副長として失敗した責任を、実家に持っていくというのはいささか筋違いではないかと・・」

カストール伯爵の根回しを受けた有力貴族たちが同意する。

「確かになぁ。伯爵家に残った男子とはドンコイのみ。ドンコイの行いなら伯爵家にも責任があるが、騎士団副長殿の責任は騎士団にとってもらうべきだよなぁ」

ニヤニヤと笑いながら第一王子カリグラが言う。

（こ、この無能王子めが！まさかあの豚に買収されて・・くっ　この私がなんという屈辱を。これはドンコイの策略に違いない。あの無能者が余計な事を父上に吹き込んだのだ。卑怯者め・・）

今まで散々見下しあざ笑っていたドンコイに、アーシャは確実に追い詰められていた。

翌日、騎士団に対しての命令が下った。

「皇軍獅子騎士団は魔国に赴き、改めて経緯を確認して、勇者を丁重にフリージア皇国まで移送せよ。命令があるまで決して手を出してはならない。責任者はアーシャ副長を任命する。また、この命令は完全に非公式のものとし、途中何があっても国は関与しない」

「・・・謹んで拝命します」

騎士団１００人のみで魔王亡き後の混乱している魔国に非公式に潜入し、勇者を丁重に連れ帰れという、半ば死んで来いというのと同

様の命令である。
アーシャは観念し、膝を付いて命令を受けた。

「これでよかったのであろうか・・」
カストール伯爵が懊悩する。
「ご心配なく。どう転ぼうが、カストール伯爵家は安泰です」
「なぜだ。」
「アーシャが勇者と和解すればそれもよし。アーシャが勇者を暗殺すればそれもよし。勇者がアーシャの処分を求めてもそれもよし。どのような結果になろうが、カストール家に被害はありません」
ドンコイがしたり顔で言う。

「だが、もしアーシャが勇者と和解すれば、自分を切り捨てたカストール家に対して復讐を企てるぞ」
「ああ、その場合は生贄が必要ですな」
「生贄だと!!これ以上誰を犠牲にするというのだ!!」
伯爵が激昂する。

「決まっておるではありませんか。私ですよ」
ドンコイが涼しい顔で言う。
「なに・・・?」
意外そうな顔をする伯爵。
「つまり、アーシャを切り捨てる事を提案した、私を勘当するなりアーシャに差し出すなりすべきでしょう」
「き・・貴様。一体何を考えているのだ。お前の考えていることはわからん」

今まで、ドンコイの事をすべてわかっていたはずだった。出来の悪い息子として見限ったはずだった。
しかし、今までの態度が仮面をかぶっていたとわかった後は、ひた

すら不気味さを感じていた。

「やれやれ。情けないですぞ父上。我等兄弟に対して常に伯爵家の為に行動しろと説いていたではありませんか」

「それは・・貴族としては当然のことだが」

「ふふ。私が家中でどう思われているか、すべてわかっております。剣でも学問でも容姿でもアーシャにかなわないと知れわたった頃から、父上やアーシャや家臣の見下す目。無能者とあざ笑う声、すべて私に届いておりました。」

ドンコイが父親を睨みつける。

「・・お前は・・」

ドンコイの濁った目に見据えられて、伯爵は身震いした。

「ですが、私はこれでも長男です。カストール家の為に役に立て、自らより家の事を考えろという教育はしっかりと根付いております。だから私は考えました。アーシャの逆を行こうと」

「逆だと・・」

「アーシャが痩せて美しくなるなら、私は太って醜くなりました。アーシャが金に執着せず清いとこを見せると、私は金を横領して溜め込みました。

アーシャが騎士や兵士達と修行して力をつけると、私は惰弱で放蕩者の貴族たちと遊びまわりました。アーシャが美しい王女と恋愛をはぐくむと、私は娼館に入り浸りました。アーシャが父上や家臣の評判を上げると、私は逆に評判をさげました」

「な・・なぜだ。わかってて今までなぜその様な事をしてきたのだ!!!」

「なぜですと?カストール伯爵家の為です。アーシャが伯爵家を継ぐなら、私はすべての悪評を背負って消えましょう。それでアーシャが伯爵家を掌握できるでしょう。もしアーシャが気の緩みでつま

らぬ醜聞をたてれば、私が身代わりになることが出来るでしょう」
「・・・・・」
「私がごく潰しの放蕩者である限り、家中はまとまっていたのです。アーシャを立てることで」

「・・・そのような事を考えておったのか。我等はお前の演技を見抜けず、騙されていたのか」
疲れた声で伯爵が言う。

「だが、それもすべてアーシャが順調に行っていればのことです。今回のような国を揺るがす失態をしでかした場合、アーシャのせいでカストール伯爵家そのものの存続が危ぶまれているのです。魔王を倒した勇者が戻ってきて、アーシャを裏切り者と非難した時、誰もかばうことなどできません。今までの実績も名声も地に堕ちて、うすぎたない裏切り者として滅ぼされるでしょう。我等も確実に巻き込まれます」
「・・そうだな」
「今までアーシャの味方だった清い者達はアーシャが失敗したとき、手のひらを返すように敵に回るでしょう。清い者を代表としていたカストール家の味方はいなくなります。そのような時にこそ、私の濁った生き方が生きてくるのです。今まで彼を妬んでいた醜く濁り堕落した者たちは、私を押し立てて彼に対抗させるでしょう。結果、カストール家は救われるのです。」
ドンコイが目を伏せる。

「・・私は今までお前を見損なっていた。お前はお前なりに考えていたのだな。伯爵家を継ぐのは、お前こそがふさわしいのかもしれん」
「それはわかりません。器量、時の運、状況によります。誤ちを謝罪して勇者をわが国に引き込めるか、あるいは愚かにも勇者に敵対

を続けるか。前者ならアーシャは一国の重鎮となるにふさわしい器量を示す事になるでしょう。私は自分なりの器量を示しました。後はアーシャ次第です。」
ドンコイは静かに言う。部屋には沈黙がおりた。

フリージア皇国、教会。
「ナムール街に侵入していた間者から、勇者についての情報を集めた手紙が伝書鳩で届きました。」
ノーマンが報告する
「ふむ。勇者がどうやってかは知らぬが魔王を倒した後、ナムールの街に来ていたのだな。そこで奴隷を解放したと」
「はい。ナムールの街では解放された奴隷が話を広め、噂になっております。領主やヤクザの首領が消え、不当に奴隷にされそうになっていた者達が助けられたと。それをしたのが勇者を名乗る少年と、魔王を名乗る少女だと」
「魔王を名乗る少女じゃと？」
マリコル大神官が首をかしげる
「はい。おそらくは、人質にされたメアリー王女かと」
「ふむ。あの小娘も生き残っておったか。しかも魔王を名乗るとは・・・」
「はい。この話を使えば、勇者を堕ちた偶像にすることができるでしょう」
ノーマンが笑う。
「よし。光の国にある大神殿にはワシが報告しよう。お前は勇者が魔王と結託して魔族に協力していると広めよ」
「了解いたしました」

その後、国中の神殿に使いを出し、勇者が裏切り魔王と結託したという噂を流した。

フリージア城
玉座の前で膝をつくアーシャ。
「アーシャよ。いよいよ明日出発か。余が望んだ事ではないが、こうでもしないと貴族どもの不満は抑えられん」
ヘラート国王がアーシャに話しかける。
「陛下のご厚情感謝いたします。必ず勇者を探し出して連れてまいります」
アーシャが言う。
「・・アーシャと話がある。全員退出せよ」
玉座の間にいる者に退出を命じ、部屋の中には二人になった。

「アーシャよ。余は正直お主と、メルトに次代のこの国を任せるつもりであった。玉座が誰のものになるかは別として、実権はな」
「身に余る言葉、勿体のうございます」
「だが、ここまで貴族の間に不信感が広まると、そうも言ってられなくなる」
王の言葉に肩を落とすアーシャ。

「アーシャだけの話ではない。メルトも、余も今回の件で立場が危うくなっておる。もはや、勇者は存在するだけでフリージア皇国の害となる」
ハッとして顔をあげるアーシャ。
「よいな、今回は非公式での任務じゃ。つまり、お主も騎士団も皇都から動いていない事になっておる。対外的にはな」
「それは・・」
「国の支援を受けられぬということじゃ。同時に国の制約もない」
「・・わかりました。」
国王の意を察するアーシャ。

「よいか、必ずフリージア皇国の害を取り除け。それさえ出来れば、

後のことはどうにでもなる」
「はっ。必ず陛下の意に沿うようにいたします」
頭を下げるアーシャ。
「・・・メルトに会って行くがいい。お主の為に祈る女は、男に確実に力を与えてくれるものじゃ」
「重ね重ねのご配慮、誠にありがとうございます。もはや父にも見捨てられたこの身、陛下とメルト王女にすべてをささげます」
アーシャは涙を流して礼をいい、退出していった。
（・・この試練を乗り越える事が出来れば、父として安心して娘を託せる。頼むぞ・）
退出していくアーシャの後姿を見つめながら、ヘラート国王は思った。

「アーシャ様・・」
「メルト様・・・・」
メルト王女の私室で抱き合う二人。
「必ず、必ずあの憎き勇者を滅ぼして帰ってきてください。そうしたら、私と・・」
「はい。その時には、堂々とメルト様に求婚させていただきます」
恋人同士の逢瀬はいつまでも続く。二人はこの時だけは幸せだった。

結界

魔王城

一回り大きくなった姿のケルビムが中央エリアに侵入する
「ノーム。シルフィールド、ウンディーネ。出てくるがいい。イフリートは既に倒した。お前達も新たなる魔王の贄となるがいい！」
叫びながら彼に従う魔将軍兵士と共に中央エリアを捜索する。
彼らはもはや勝利を疑ってなかった。

「クッ・・イフリート殿がやられたか。やむをえん。私が出て止めよう」
ノームが言う。
「ダメだよ。今彼の前に出たら、結局やられて彼に力を与えるだけだよ」
「だが・・」
「今はここにいて。姿を見えなくする結界を張っているから、しばらくは見つからないよ」
魔王城の魔公軍生き残りと非戦闘員は、シルフィールドが張った結界の中で息を潜めていた。

「ですが、いずれはここも見つかります。どうすれば・・」
「こうなったらシンイチに賭けるしかない。なんでもいいから道具袋さえ開いてくれれば、シルフとつながって情報交換できる。ウンディーネちゃんを呼び出してくれてもいい。今は時間を稼ぐしかないよ」
必死に姿を隠し、シンイチに希望を託すシルフィールド達だった。

外

「ああ・・よく寝た。」
朝になり、シンイチがおきて来る。
「おはようシンイチ。朝ごはんどうする？」
「んー。食堂で適当に食べよう」
メアリー達とのんびり朝食を取る。
「しかし、新聞とかないと読むものがないなぁ」
「新聞って？」
「それぞれの家庭に昨日起きた事なんかを記事にして伝える情報紙。だいたいの家庭が毎日取っているよ」
「紙？貴重な紙を毎日配るの？」
「貴重って・・ああ、こっちじゃまだ紙は貴重なのか」
「職人さんたちの手作りだよ。各家庭って・・一体どれだけの量になるの？」
「さあ・・毎日何千万部かわからないなぁ」
「・・・シンイチ達の世界ってすごいんだか無駄なんだか・」
メアリーが呆れたように言う。

「そもそも、毎日なんてよくそんなに書くことがあるねぇ。私は分身が世界中の情報を伝えてくれるけどね」
「その辺は俺もよく分からないけどね・・というか、シルフの方がすごい。この世界のことをなんでも知っているの？」
「うーん。その辺は微妙かな。分身が多すぎて情報を共有するのに時間がかかるからね。いちいち同期しないといけないし」
「まあ、そんなもんか。」
「魔王城の中のシルフィールドとは、道具袋が開くたびに情報交換しているよ。一番近い分身同士だからね」
「なるほどねぇ。もう一服して落ち着いたら、ウンディーネさんと話してみようか。結論出ているかもしれないし」
「あー。もうちょっと後でもいいんじゃない？食べたばっかりだし」
朝から結構な量を食べたメアリー。

「食べ過ぎると太るぞ」
「なんかいった？」
女神の杖を向けてくる。
「ナンデモナイ。それじゃ、朝食代を払おうか。いくら？」
宿の親父に聞く。
「二人で1ギルだ」
「はい」

道具袋を開けてお金を取り出した。
その瞬間、シルフが頭を押さえて地面に落ちた。
「シルフ！！どうしたんだ！！」
「・・・大丈夫。ちょっと緊急の情報が入っただけ。あまりにやかましいから頭が痛くなったよ」
「緊急？なんだ？」
「とりあえず、部屋に帰ってウンディーネちゃんを呼び出そう。魔王城が大変な事になっているみたい。」
三人は部屋に帰って鍵を閉めた。

「ウンディーネさん（服つき）でろ」道具袋から取り出す。
部屋の中央に焦った様子のウンディーネが出現する。

「シンイチさん。よかった・・呼び出してくれたんですね」
シンイチにすがりつくウンディーネ
「だから、離れろっていってるでしょ！！」
無理矢理二人を引きはなすメアリー。

「ウンディーネさん落ち着いて。どうしたの？」
「じ、実は、魔王城内で反乱がおきて、イフリート殿が殺されて、結界が破れて・・とにかく大変なんです」
混乱しながらも、なんとか説明を終えるウンディーネ

「お願いします。魔王城の者達を助けてください！！このままでは皆殺しにされます！」
必死の形相のウンディーネ。

「わ、わかりました。ケルビムって奴を倒せばいいんですね。ケルビムの心臓でろ」
道具袋に手を入れるシンイチ
「熱ッ！！」
火の中に手を入れたような熱が伝わってきて、シンイチは手に大火傷を負った。
床を転げまわるシンイチ。
「シンイチ！！」「シンイチさん！」
あわてて手にヒールをかけるウンディーネとメアリー。しばらくして、シンイチの火傷が回復した。
「あ・・二人ともありがとう。いったいどうなったんだ？」
シンイチは理解できずに首をかしげた。

魔王城の中で、ケルビムの姿は炎に包まれた巨人となっていた。
イフリートの魔力を吸収したことで、自らを炎とかす『フレイムフィギュア』の魔法が使えるようになったのである。

「ふふふ。今勇者が余の心臓を取り出そうとしたが、炎に焼かれおったわ。待っておれ。袋の中の魔族を食らい尽くした後、この袋の世界をやぶり、じっくりと燃やしてやる」
イフリートから奪った『炎の剣』を振るって暴れるケルビム。もはや魔王アンブロジアを完全に超えていた。

「おそらく、炎の魔公の魔力を吸って、自らの肉体を炎と化す魔法を使えるようになったのでしょう」
ウンディーネが言う。

「そんな。それじゃその体を取り出そうとすると・・」
「シンイチの手がこんがり焼けるってことだね。それ以前に心臓も炎と化しているんじゃつかめないよ」
メアリーとシルフがあわてる。
（まてよ・・こういう時こそ今まで読んだ物語を思い出せ。何か方法があるはずだ・・）
自分を落ち着かせて、ケルビムの暴走を止める方法を考えるシンイチだった。

ケルビムが放った炎が魔王城を焦がす。
シルフィールドが張った姿をくらます結界からも、熱に耐え切れず飛び出す者が続出した。
「たーー助けて」
結界から出た者は、ケルビムの配下に見つかり、無残にも殺された。
その魔法玉を吸収して強くなっていく魔将軍の兵士たち。
「ははは・・新たな魔王の誕生だ!!」
「魔王ケルビム万歳!」
「このような古い城など、魔公どもと一緒に燃やしてしまえ!」
彼らの宴がひろがっていく。

「やむをえん。皆は逃げろ。私が奴を抑える」
ノームが結界から出ようとする。
「ダメだよ。ノームおじさん。しんじゃうよ」
シルフィールドが必死に止める。
「大丈夫だ。大地を燃やし尽くす事など誰にも出来はしない。」
ノームは結界からでて、ケルビムの前に立った。

土魔

「やっと出てきたか。ノーム公。余の糧になる覚悟が出来たか？」
炎の巨人となったケルビムが言う。
「・・残念だがそんな気はない。せっかくすべてが丸く収まるといった時に、わざわざすべてをぶち壊すような者など、私は認めない。『スチールフィギュア』」
ノームは自分の体に魔法をかけ、巨大な鋼鉄製のゴーレムの姿になる。
「いいだろう。ならばその体を引き裂いて、魔法玉を得るのみ」
炎と鋼の魔人が交差した。

『炎の剣』がゴーレムを切ろうとするが、全く歯が立たなかった。
「無駄だ。この姿になった私は何物も寄せ付けない。そして、私にはこうする事ができる。」
『地魔の槌』を地面にたたきつけると、周囲に高重力がかけられた。
「ぐっ」
飛んで避けようとするが、堪えきらずに地面に膝を付く。
「たとえ水であれ風であれ炎であれ、土の支配からは逃れられん。おとなしくしておれ」
地面に魔法陣が現れる。
「な、何をするつもりだ」
「その魔力、危険すぎる。また皆に戻してもらうぞ。『ケセルシード』」
ケルビムの体の上にノームの魔力のこもった種が撒かれる。それはみるみるうちに成長してケルビムの体に根をはり、樹になっていく。
「こ、これは・・魔力が吸われる」。
「何も魔法玉のみが魔力を取り扱う方法ではない。その種はたとえ実体がない炎や風の状態でも、魔力そのものに根を張り巡らせる。

成長した樹は魔力を吸い、魔力をこめたケセルの実をつける。それを弱き者に与えれば魔力を回復させられる。本来は攻撃用の技ではないが、今のおぬしにはちょうどよかろう。ケセルの樹となって恵みをもたらすがいい」

「ぐわーーーー」

ケルビムが絶叫する。その姿は急速に成長する樹の根元に隠れて見えなくなった。

外

「ちょっと、どうなっているか知りたいから、道具袋開けて」

シルフがシンイチに言う。

「そうだね。状況をしろう。」

道具袋の魔法陣に片手を突っ込んで外の世界とつなげる

「んー。来た。あれ？ノームおじさん、ケルビム倒しちゃった？」

「え？本当ですか？」

ウンディーネが拍子抜けしたような顔をする。

「えっと、どうやったか・・・あー、シンイチ並にえぐい事するねぇ」

シルフが笑う。

「え？」

「ケルビムを魔力を吸う樹であるケセルの樹の苗床にしちゃったよ。そのうち魔力が吸い尽くされて、カラカラになったケルビムの干物ができちゃうね」

「・・・えぐいね。シンイチみたい」

「だから何で俺が・・」

「ふう。一安心しました・・」

ウンディーネが肩の力を抜く。

「みんな、お茶入れたよ。お菓子も買ってきたから食べようよー」

アンリが言う。なんとなく皆気がそがれて、まったりと紅茶を飲んだ。

魔王城

ケセルの樹の成長が止まる。

「息絶えたか・・ケルビム。今までの事を償ってもらう。」

たくさん実ったケセルの実をもぎ取ろうとノームが近づく。

その時、ケセルの樹の枝が動き、ノームの巨体を絡め取った

「な??」

あまりの驚きに動きがとまる。その間にも蔓が何十にも撒きついた。

「ふふ。さすがノーム公。余も危うく死ぬとこだった」

ケルビムの声が聞こえる

「貴様・・まだ生きていたのか?」

「ふふ。残念だが元の肉体は滅びたが、新しい肉体を得た」

「まさか!!」

「寄生魔法『パラサイト』。まさか使う機会があるとはな。何が幸いするかわからん。ケセルの樹は乗っ取らせてもらった」

「な??」

「余の強みは数百の種類の魔法を使える事だ。だからこそ魔王子の中でたったひとり魔将にまで上り詰めた。あらゆる状況に対応できる」

「くっ」

「魔力そのものに根を張るとは貴様の言葉だったな。ならばどんなに硬い体でも関係あるまい。余の糧になるがいい」

ノームの体に何百ものケセルシードが撒かれ、ノームの体を侵食していった。

外

「はっ　お茶を飲んでいる場合ではありませんでした。皆が傷ついています。魔王城に戻らなければ」

紅茶を一杯飲み干して、ウンディーネが焦ったように言った。

「もう帰るの?ゆっくりしていけばいいのに」

「ありがとうございます。また一日後にでも呼び出してくださいね」
シンイチに笑いかける。
「それじゃ『収納』」
ウンディーネの手を握って念じると、姿が消えた。
「やれやれ、忙しそうだな・・え?シルフどうしたの?」
「た、大変だよ。とにかく、早くノームおじさんを呼び出して」
「なんで?」
「何ででもいいから。絶対余計な事考えないでよ。『ノームさんだけ出ろ』って念じて」
「え?それじゃ真っ裸のおじさんが出てきて・・」
マッチョおじさんの全裸を想像してウェッとなる。
「い・い・か・ら」
ものすごく怖い顔で言うシルフに押されて、シンイチは頷く。
「わ、わかったよ。『ノームさんだけ出ろ』」
そう念じた次の瞬間、傷だらけのノームが出現した。

魔王城
「な?ノームが消えた。・・またあの忌々しい勇者の仕業か。ちょろちょろとちょっかいをかけおって、うっとうしい。・・ふふ。まあいい。代わりに愚かにも帰って来た魔公がいるようだからな」
ウンディーネの魔力を感知し、笑うケルビム。
ケセルの樹をさらに成長させ、蔓を触手として魔王城中に伸ばす。
「他の雑魚どもは後でゆっくり喰らってやる。まずはウンディーネとシルフィールドだ」
魔王城は蔓に被われていった。

「いや、勇者殿。助けていただいて誠にかたじけない。私は地と恵みのノーム。四大魔公の一人です。」
メアリーがヒールで治療を施し、動けるようになったノームが挨拶する。

「えっと、勇者のシンイチです」
「魔王（仮）のメアリーです」
二人が自己紹介する。

「しかし、もうダメだと観念したのですが、どうやって助けていただいたのですか？ケセルの種に寄生されたら例え魔王でも助からないのですが・・」
「へへん。私が機転を利かせたんだよ～。『ノームおじさんだけ出る』ように念じて出れば、ケセルの種も根も置き去りにして出られるからね」
「そうでしたか・・。シルフ殿。ありがとうございます」
ノームが頭を下げて、シルフが照れる。
「しかし、せっかく救っていただいたのですが、皆を助けないと。勇者殿、申し訳ござらんが、魔王城に戻していただけませんでしょうか？」
「ノームさん。今戻っても自殺行為です。それより、ケセルの樹について教えてください。なんとかする方法を見つけないと、結局無意味になってしまいます」
「・・・そうですな。では、お話します」

？ケセルの樹の栄養は空中や地中の魔力と日光で、日光さえあれば魔力を自己合成するので無害であり、魔国での作物になっている
？土の属性を持つ者は自分の肉体に種を植え、コントロールすることでケセルの実をつけて他者に魔力を分ける事が出来る事
？ケセルの種は自然の状態では日光がある肥えた土地にしか発芽しない
？他者の魔力をこめたケセルの種を生物の肉体に植え込み発芽させたら、コントロールできずに魔力を吸い尽くすまで絶対に離れず、助かる方法はない事等を説明した。

「え?作物なんですか?」
「はい。空中や地中の魔力を効率よく集め、日光のエネルギーを魔力に変換し、ケセルの実をつけるのです。それを食べれば魔力が回復するのです」
「空中や地中の魔力を集める。光合成をする・・」
「死んだ者の魔力が凝縮される魔法玉と似ておりますな。魔力自体は魔法玉よりかなり少ないですが・・」
シンイチは今の情報でどうにか道具袋で状況を打開できないか、考えた。

水精

魔王城

蔓に拘束されたウンディーネとシルフィールド。着ていた服が破れて、かろうじて体に引っかかっている。
「ふふふ、いい格好だなウンディーネ。一度こうやってお前を抱きたかった」
全身蔓に撒きつかれたウンディーネ。
目の前にはケルビムの顔が浮き出た巨大な樹があった。
「どうだ。我が妻として魔王妃にならぬか。二人で魔国を支配しようではないか」
樹の幹に浮き出た顔に近づけられるウンディーネ。

「・・あの～。ところで私は無視ですか？」
同じように蔓に絡め取られているシルフィールド。魔力そのものに絡み付いているので、逃げられない。
「お前はエサだ。それ以外の何者でもない」
「ひどい。美少女のサービスシーンなのに、無視？」
喚くシルフィールドを完全無視するケルビム。

「・・・エサ、ですか。共に魔国を支えてきた仲間を、エサと呼ぶのですか」
ウンディーネが静かに言う。
「そうだ。私のエサだ」
「もはや、貴方は魔族ですらありません。すべての存在から忌み嫌われる、表現する言葉もない化け物です」
「ふふふ。イフリートも同じような事をほざいていたな。今は余の養分として役に立っておる」

「その様な姿となり、これからどうするつもりなのですか？もはや、一歩も歩けない姿。どれだけ魔力を集めようと、道具袋の世界から出られるわけもありません。」
静かに諭す

「それもよし。この世界を支配する大魔王となり、永遠に魔族を統べるのだ」
「何が大魔王ですか。この何もない世界でたった一人、永遠の孤独に取り残されるだけですよ。他者が存在しない世界でいくら無双を誇ろうとも、無力な赤子と同じことです。」
「弱者の戯言だな」
「私達は魔王アンブロジアが無力な人間の若者に倒された時点で、力の無意味さを悟るべきでした。何度も世界と道具袋を往復してつくづく思いました。貴方はどれだけ強くなろうとも、袋の中で威張るアリと同じです」

「・・・シンイチといったな。あんなひ弱な勇者に何ができる」
「私達がここで死んでも、貴方を永遠にこの世界に閉じ込め、二度と出さないでしょう」
「ま、しゃーないか。どうせこの『私』が消えても、いくらでも分身はいるんだし」
シルフィードがさばさばした顔で言う。

「よかろう。では、二人とも喰らってやろう。そうして他の魔族も喰らい、袋を魔力を込めた蔓で破り、外の世界のすべても喰らってやるわ！！」
ウンディーネとシルフィールドにケセルの種が植え付けられた。

ウンディーネはケセルの根に魔力を吸い取られながら、今までの事を思い返していた。

実はウンディーネの年齢は１２０歳で、魔族としてはむしろ若い娘だった。人間で言えば２０才である。
魔族の名門である水の一族の魔公の姫と生まれ、幼い頃から期待されてそだった。
父や母が死んだ後、一族の者は彼女を中心としてまとまり、魔公を継いだ。

今まで何万人もの魔族を癒した。
何人も自分を愛し仕えてくれる家臣や侍女がいた。
しかし、自分と対等に接してくれる者は、誰もいなかった。
誰もが自分を美貌と癒しの力を敬ってくれる。
それが当然の世界だった。
奴隷や貧しい人達を見て哀れにおもい、癒してあげることはしてきても、彼らを救おうとは思わなかった。
それは自分とは違う世界の出来事のような感覚だったのである。
自分に対して傷つける者がいない、誰からにも愛される世界に彼女はいた。

（ふふ・・どうして人生の最後に、あの少年の顔が思いうかぶのでしょうね）
最初に魔王城で見た時は、何の力も持たない勇者に憐憫の情が沸いたが。それだけだった。

しかし、その無力な少年が、魔王を倒し自分達全員を道具袋に封じ込めた時、彼女は初めて絶望というものを感じた。
１２０年の人生で、ここまで追い詰められた事はかってなかった。
どうすれば良いかわからなくなり、ただ幼い子供のころのように許しを請おうと思った。

自分の服や下着を取りあげられたとき、悲しくて泣き出した。

自分にこんな事をするような者は今まで一人もいなかったのである。
魔王城の中ではどんどん争いが起こってきた。彼女はひたすら助けを待ち、塔にこもり続けた。

ついに自分の手紙がとどき、外の世界に出ることができたとき、彼女はまたしても裸に剥かれた。
初めて異性に肌を見られた。
恥ずかしさのあまり、また泣き出してしまった。

シンイチと名乗る勇者は、申し訳なさそうな顔をして謝ってきた。
隣にいる少女に説教され、ひたすらペコペコと頭を下げてきた。
（なぜこの方はこのように謝るのだろう。すべての魔族を封じるくらいに強いのに、不思議なほど弱気だ）
その姿を見てウンディーネは思った。

改めて話をして、ウンディーネはますます不思議に思った。
彼は自分に対して、全く隔意がない。魔族に敵対する勇者なのに。
かといって、自分を尊敬したり崇拝したりする気配もないのだ。
先ほどは強いとのにと思ったが、改めて気配を探ると魔力も力も自分よりはるかに劣る。
（強いのに、弱い。弱いのに、相手を恐れない。それなのに、弱気で柔和だ）
今までこのような人間とは、ただの一度も会った事はなかった。

魔王のように強さを示し、自分を従えない
侍女や部下のように、自分に従わない。
貧民のように、自分を崇拝しない。
初めて「対等」に接してくる者に対して、ウンディーネは興味を持った。

奴隷を解放したい。戦争をなくしたいという彼。
彼はともかくも魔王を倒した勇者なのだ。魔王城の宝物財貨も彼のものだ。豊かに安全に生きていけるはず。奴隷を解放したり戦争を止めたところで、何の得にもならない。
それなのに自分の事のようにそれらを悲しみ、実例を出して奴隷解放、戦争停止の理想を語る。
彼が生きていた世界とは、どのような世界なのだろうか。
意を決して『知識共有』を提案した。
これはかなり親しい者同士でないと行わない魔法。
相手の知識だけではなく、悪意や劣情といったものも知ることになるのだ。
ウンディーネは今まで両親としかしたことがなかったが、どうしても彼の世界が知りたかった。

シンイチの世界の知識が流れ込んでくる。
今まで思いもしなかった発想、価値観が流れ込んでくる
（なんて素晴らしい世界。人が人として認め合う世界。私も行ってみたい）
新しい世界の事を知り、見るものすべてが珍しかった子供の頃のようなわくわくとした気分になった。
１２０年も同じような生活、同じような人を見続けていたのである。
（こんな気分になったのは１００年ぶり。シンイチ様は異世界への扉。）
あこがれがこもった視線でシンイチをみた。

恥ずかしかったが、取り上げられた下着を返してもらうように頼んだ。
シンイチは顔を赤くして下着をとりだした。
（ふふ。可愛い。このような面もあるのですね）

しかし、出てきた下着は男の匂いと汗が染み込んでいた。
恥ずかしさのあまり泣き出すウンディーネ。
（なぜここまで悲しくなるのだろう。シンイチ様に恥ずかしい所をみられたから？）

魔王城に帰り、魔公や魔将を必死に説得する自分。
シンイチの理想のために自分も力を尽くしたいと思った。
それは今まで与えられ続けた彼女にとって、初めて自分から動いて何かを始めたいと思ったこと。
条件付ながら、魔公たちが受け入れてくれた事も嬉しかった。

しかし、直後にケルビムの反乱が起きた。
今まで一度も戦闘などしたことがなかったウンディーネは、恐怖に震えながらシンイチに祈った。
（シンイチ様・・どうか私達を助けてください）
必死にけが人を治療したりポーションを作りながら思う。
いつの間にか頭の中はシンイチのことで占められていた。

そうしてついに呼び出された。その直後にケルビムが倒されたと聞いた。
今まで恐怖に張り詰めていたが、急に気が抜けた。
勇者達が暖かいお茶を入れてくれて、彼らと一緒に談笑した。
いつのまにか、シンイチだけではなく彼女達もウンディーネに対等に接してくる。
（楽しい。これが人間というものなの？彼らは敵だったはずなのに打ち解けている。私も彼等に対する敵意などカケラもかんじない）
人生で一番楽しいお茶会だった。

いつまでもお茶を飲んでいたかったが、魔王城では未だ多くのけが

人がいた。
「ゆっくりしていけばいいのに」
シンイチの言葉に頬がゆるむ。
また呼び出してくださいといいながら、魔王城に帰った。

魔王城に帰り、けが人を治療していると、突然蔦に被われた。
何重にも拘束され、根元に運ばれる。
目の前には巨大な樹があり、ケルビムの顔が浮かんでいた。

「ふふふ、いい格好だなウンディーネ。一度こうやってお前を抱きたかった」
ケルビムの顔が笑う。
「どうだ。我が妻として魔王妃にならぬか。二人で魔国を支配しようではないか」
情欲をむき出しにした顔。

（嫌らしい。汚らわしい。なぜこんな醜い情欲を向けてくるの。）

隣で拘束されているシルフィールドに向かってエサだと言い放つケルビムに、初めて力を誇示するものへの嫌悪を感じた。
（どんなに力を誇ろうとも、所詮この袋の中に限定される哀れな道化にすぎないというのに・・）

体にケセルシードを撒かれ、全身に芽が入り込んでくる
脳裏にシンイチの気弱そうな顔が浮かぶ。暖かい気持ちになる。照れた顔が可愛いと思う。

（シンイチ様・・もう一度会いたかった。貴方の理想がこの世界に広がり、皆が笑って暮らせる世の中を作りたかった。なにより、貴

方の側でわらいたかった・・。そうか、この感情。１２０年生きていて、誰にも感じなかった、この人の側で笑っていたいという感情。これが・・・）

ウンディーネの意識が静かに闇の中に落ちていった。

神手

「ウガァァァァァァァァァァ。勇者めぇぇぇ」
ケセルの樹と化したケルビムが叫び声をあげる。
その声でウンディーネの意識が戻る。

「はっ　どうなっているのです？」
体内に入ったケセルシードが見る見るうちに枯れていく。
拘束していた蔦から力が抜け、解放されて下に落ちた。
目の前の樹のケルビムの顔が苦しげにゆがみ、叫び声があがる
どんどんと樹が枯れていく。

「えっと・・どうしたの？ふんふん。え？シンイチが？　あっはっはっは。シンイチなんでもありだね」
隣のシルフィールドが大笑いする。
「シルフィールド殿。これはどういうことでしょうか？シンイチ様に助けていただいたのでしょうか・・？」
「あはは。あーおかしい。ウンディーネちゃん。空を見てみなよ」
言われて空を見上げたウンディーネの口が開きっぱなしになる。
空には、巨大な手の形をした魔力結晶があった。

「魔法玉って要は魔力の結晶なんですよね」
シンイチがノームに確認する
「間違いござらん」
ノームが肯定する。
「以前、魔王城の金貨を出そうとしたら、城の全部の金貨を集めることができました。つまり、袋には袋の中の物を選別したり集めたりする機能がついています。そして、魔力は集めることができる。」

「では・・」
「つまり、ケルビムが魔力を吸い続けて暴走しているなら、ケルビムが吸った魔力をケルビムから取り上げればいいわけだ。そういえば元の世界で、オラに皆の元気分けてくれって元気を集めた物語があったっけ」
そういいながら道具袋に手を突っ込む。

「ケルビムから魔力を抜き出して集めろ！」
そう念じながら手を入れて念じ続けた。

魔王城
「助けて・・助けてください」
「く・・これは、どういうことだ」
敵味方関係なく、ケセルの蔓に拘束される魔族たち
ケルビムの意思が伝わってくる
『我の贄になるべし』

「そんな・・俺たちは味方です。お助けください」
魔将軍の兵士達が懇願する
「余に必要ない。すべて我が糧になれ」
「そ、そんな・・」
魔王城にいる全員にケセルシードが撒かれ、体内で根を張る

誰もが絶望に包まれた時

「オオオオーーーーーーーー、勇者めぇーーー」
叫び声をあげながらいきなり枯れていくケルビム。
魔王城にいる者たちを拘束していた蔓が枯れる
「た・・助かったのか？」

「よかった」
抱き合って喜ぶ魔族

「おい、空を見てみろ」
誰かが叫び、皆が空を見る。そして全員が固まった。
空には虹色に輝く巨大な手。

「神様・・」
幼い魔族の少女がつぶやく。
「神の手だ・・」「「奇跡をおこし、我等を救ってくださった・・」
全員が膝をつき、手を胸の前で組んでこの荘厳な奇跡に祈りをささげた。

外
「うーん。うーん。ケルビムから魔力を抜き出して集めろ」
道具袋に手を突っ込んでブツブツいい続けるシンイチ。

「なんか、傍からみたら危ない人だね」
メアリーが呆れたようにいう。

「・・失礼だが、本当に魔王アンブロジア陛下を倒された方なのか・・あまりに・・」
ノーム。首を振っている。

「お兄ちゃんは立派な勇者だよ！！」
腰に手を当ててぷんすか怒るアンリ。

「いや、まあそうなんだけど、あまりに普通の人過ぎて信じられなくなるよね～。今の姿は普通じゃないけど」
メアリーがからかう。

「シルフィールドから連絡が来たよ。上手くいっているみたい・・
ケルビムは完全に枯れて消滅したよ。あと・・ププ。」
「何？」
「いや、シンイチって本当に面白いね。毎回わらっちゃうよ」
「どうされたのかな？魔王城内の他の者は無事であろうか？」
ノームが心配そうにいう。

「ケルビムに取り込まれそうになった人達は、なんとか解放されたよ。それでね、その人達がシンイチの手をみて、神様の手だって拝んでいる」

「プッ。神様？」
メアリーが吹き出す

「ふっ」
思わずノームも笑う。

「このつながってる手が神様か。変な気分だなぁ。ははは」
シンイチも笑う。部屋が笑いに包まれた。

「シンイチ様・・ありがとうございます」
跪いて上空の手に感謝をささげるウンディーネ。
「あらあら。ウンディーネちゃん。あれはただのシンイチの手だよ～」
「ええ。だからこそ、私は感謝をささげたいのです」
ウンディーネが笑う。
もう一度シンイチに会えることの喜びで胸が一杯だった。

新時代

ナムールの街

道具袋から解放された魔族達。
誰もが長い幽閉から解放された喜びで沸きあがっていた。
道具袋から解放されるに当たり、全員が勇者に対して復讐をしないことを誓約した。

勇者は確かに彼らを閉じ込めた原因でもあったが、同時にケルビムから救ってくれた恩人でもある。
『神の手による奇跡』を目の当たりにした魔族たちは、勇者にたいして奇跡を起こす者として尊敬の念を抱いた。

そして、新魔王には地と恵みの魔公ノームが就任することになった。
新しい魔王就任に当たり、勇者や魔王後継者や魔公の間で話し合いが行われ、誰もが魔王を押し付けあった結果、ノームに決まった。

「新しい魔王は、我等を救ってくれた勇者殿がふさわしいだろう」
「俺はそんな柄じゃないし、魔王の魔法玉を継いだのはメアリーだし」
「ボクはパス。そもそも人間だしね。ウンディーネさんが継いだら？」
「いえ、私は他にやりたい事ができました。ノーム殿かシルフィールド殿が・・」
「あはは。私は世界の傍観者だしね。魔族を率いるなんて向いてないよ。ここはノームおじさんで決まり！」
「いや・・私は」

「これから、魔国を立て直していくには、すべての魔族に恵みを与えることができるノーム殿がふさわしいと思います」
ウンディーネが賛成する。

「俺も賛成。外見からして威厳がある王様って感じだしな」
「確かにシンイチとかウンディーネさんとかだとちょっと魔王って感じがしないよね。シルフなんて論外だし」
「あはは。可愛らしい私にはマスコットが似合ってるよ」

「そうか・・。では、私が魔王として、魔族を導こう。これからの魔王は戦いを指揮するものではなく、皆に平穏と恵みをもたらす者として。それも一つの王者としての役割である。ウンディーネ殿、シルフィード殿、それから勇者殿とメアリー殿も、協力して欲しい」
「「「喜んで」」」
皆はノームに協力することを誓った。

ナムールの街の広場には式典の会場が作られ、魔王就任式が開催されることになった。
「余はここに、魔公と勇者の承認のもと、新しき魔王として即位し新魔国の建国を宣言する」
ノームは威厳のある態度で宣言し、王冠をかぶる。

そうして壇上に設置された巨大な手の形をした魔法玉に手を触れる。みるみる内に魔力がノームに吸い込まれた。ノームの体が巨大化する。
「余はこの魔力を余だけのものとはせぬ。皆と分かち合う事を誓う」

ノームの体から巨大なケセルの種が分離し、地面に植えられる。ノームの体はもとのサイズにもどった。
それは瞬く間に成長し、巨大なケセルの樹となり、たくさんのケセ

ルの実が成った。
それを収穫し、魔力が弱い者に分け与える。

「新魔王万歳！！」
「我等の指導者！！」
「弱きものに恵みを与える慈悲ぶかき魔王に忠誠を！！」
元魔公軍と元魔将軍の兵士が一体となって宣言する。
街は魔族たちの歓声にあふれた。

その時生まれたケセルの樹は「勇魔の樹」とよばれ、魔王と勇者の和解の象徴として末永く魔族に恵みを与えつづけることになった。

「皆の者、我等が新たな友を紹介しよう。反逆者ケルビムを倒した勇者、シンイチと、前魔王の力を継いだ少女、メアリーだ」
新たな魔王となったノームが紹介する

「ど、どうも。シンイチと申します」
「ボクはメアリーというよ。シンイチの妻だよ」
シンイチが頭を下げる。メアリーがさりげなく宣言する。

「我等を救っていただきまして、誠にありがとうございます。『神の手』を持つ勇者よ！」
ケルビムから救われた兵士や民衆は歓声をあげるが、ナムールの街の住民は首をかしげる

「なんか弱そうなんだけど・・」
「魔力もほとんどないし、ひ弱そうだし・・」
「でも隣にいる少女はすごい魔力だぞ」
ざわざわとお互いに話しだす。

「皆の者、見てのとおり、彼は魔力は弱い。普通の人間と同じだ。だが、その知恵は我等の誰もかなわぬ。アンブロジアもケルビムもその知恵に破れたのだ。」
魔王とケルビムを倒した経緯を話す。

「この事は、力さえ強ければよしとした今までの考えが間違っていたという証明だ。力も必要だが、知恵の前ではなすすべもなく破れるのだ」
ノームの言葉に、魔王城の中にいた者はうなずく。

「新しき魔国は、決して力のみを求めない。勇者に対しても、魔王を倒す者ではなくて、我等の友として共に歩んでいく者とする。我々の最大の味方にして人間との調停者。それが勇者シンイチだ」
ノームは演説する。

「彼は言った。奴隷制度は間違っている、戦争の原因だと。奇しくも偉大なる初代魔王スパルタクスと同じ思いを持つ者だ。我等はその言葉を真摯に受け止めなくては成らない。我等の先祖は人間の奴隷であった。その檻を破り、魔国を建国した。しかし、今度は我等が人間を奴隷という檻に閉じこめていた。これは先祖を苦しめた愚かな人間達と同じ行為だ。過ちは正さねばならぬ」
ノームは声を張り上げる。

「今、このときを持って、新魔国は奴隷解放と戦争停止を目標に掲げる。人間の国に対しては、勇者が間に入って魔族の奴隷解放を真摯に交渉していただけると約束してくれた。我等は彼を信じ、人間との間に新たな信頼関係を結ぶべく努力をする。それは我等一人一人がそう努めなければならぬ。皆の者、新たな魔国の建設について、協力して欲しい」

ノームの言葉に感銘を受けた者が声を張り上げる。
「新しき魔国に協力します」
「過去の忌まわしき歴史に終止符を」
「我等は新魔王様と勇者様と共に新しい時代に協力いたします！」
いつの間にかナムールの街は、人間も魔族も肩を組み、ともに笑いあっていた。

「魔王万歳！」
「勇者万歳！」
いつの間にか町の者達も唱和し、誰もが新たな時代の到来を心から祝福していた。

建国

魔王就任式にて、魔王と勇者との条約が結ばれた。

?:フリージア皇国とナムールの街の間の土地を、勇者の領地として割譲する

?:魔国側の国境線はナムールの街とする。

?:今後、人間国との貿易は勇者が管理するものとする。

?:人間国との交渉は、勇者を仲介して行う

?:勇者の領地と魔国は、互いに人の移動や移住を自由に許可する。

?:奴隷解放については、人間国からの捕虜については即時解放とする。犯罪者や金銭が理由で奴隷にされた者は「拘束者」と名称を変え、期間が過ぎて解放されるまで国の登録と管理が必要となる。

?:拘束者についての暴行、酷使は禁止。違反した場合、犯罪となり主人が拘束者になることもある。また、主人は拘束者に一定の給料を支払う義務が発生する。主人は拘束者が犯罪を犯した場合に責任を持つ。

?:人間国内の魔族コロニーは撤退する。

?:勇者は人間国内の魔族の奴隷を解放するように取り計らう。

?:勇者は永世中立を掲げ、魔族と人間の調停者となる。

また、勇者を誘拐して不当に奴隷にしようとしたチンピラや奴隷商人、裏奴隷市場を経営していたラグルの一家、不正に奴隷を購入して虐待していたマハーラ伯爵を始めとする貴族が拘束され、貴族の身分剥奪、全財産没収の上最初の『拘束者』の見本にされた。

「このように、貴族であろうが平民であろうが、不正に奴隷を売買し所有する者は罪に問われる。これから魔国内で厳しく捜査をするが、その前に不当に奴隷とされた者に対して謝罪と補償をして解放した者は罪には問わない」

ノームの言葉に、何人かの上等な身なりをしていた者が落ち着かない様子になり、こそこそと式典を離れる。彼らは一刻も早く屋敷に帰って奴隷を解放しようと必死だった。

壇上で条約を締結するシンイチとノーム。かたい握手を交わした。それを見ていた群集の中の、『奴隷の首輪』をつけていた人間達が声を張り上げて感謝の言葉を言う

「兄ちゃん!!。いや勇者様。ありがとう!!いや、本当に俺たちを救ってくれるとは。さすが勇者だぜ!」

視線を向けると、奴隷市場で一緒になっていた漁師だった。

シンイチが手を振ると、より一層式場が沸きあがり、奴隷たちは喜び合った。

「俺たちはこれから元魔王城を中心とした街を作る予定です。基本的にすべて一から始めるので、人手はいくらあっても足りません。協力していただける方がいれば、ぜひ参加してください。また、給料を出すので、奴隷から解放されて故郷に帰ろうとする人も、しばらく働いてもらってお金をためることもできます。」

シンイチが呼びかける。

「はい！」

「解放してもらえたんだ。恩は返します」

「女房子供には手紙出して無事を知らせるだけでいい。少しぐらい自力で稼がねえとな」

その言葉に奴隷たちが応じる

「あと、仕事がない魔族の方もどうぞ。幸いにも魔王城は大きいですので、かなりの空きスペースがあります。住居も提供できますよ」

シンイチの言葉に、貧民街に住む犬族・猫族・兎族がざわめく。

「私達でもよろしいのですか？その、魔力が弱く、あまり役にたてそうにないかも知れませんが・・」

「かまいません。大歓迎ですよ。」

貧民達がざわめく。

「では、我等も一緒に連れて行ってください」

同意する者たちが何人も現れた。

「出発は二週間後です。ついて来ていただける方は、この広場に集まってください。」

シンイチの言葉にさまざまな思惑で参加を決める者達。

どの顔も自分達で新しい国を作り上げようとする熱意に溢れていた。

二週間後

広場にはナムールの街の犬族、猫族、兎族と、元魔王城に勤めていた官僚・使用人の一部。そして解放奴隷たちが集まっていた。

この二週間、魔国の各都市をまわって解放奴隷を集めて袋の中に入れたり、食料や必要物資、貿易の対象とされている特産品等を全魔

国から買い求めたりしている。

「それでは皆さん、行きましょう」
シンイチは彼らを道具袋に入れる。
「では、行きましょうか」
なぜかウンディーネが側にいる。
「ウンディーネさん？どうしたんです？魔公の仕事は？」
「ああ、魔国の外交官兼協力者として、シンイチ様の側にいることになりました。シンイチ様が寿命尽きるまで、側にいさせていただきます」
ものすごくいい笑顔で言う。

「ウンディーネさん！なんども言うけど、シンイチはボクのものなんだよ」
メアリーが食って掛かる

「ふふ。ならば私はシンイチ様のものですね。この命はシンイチ様に救われた物。すべてをささげますわ」
シンイチに抱きついて擦り寄る。
「ムキー」
メアリーが二人を離そうとする。

「はいはい。いいから行こう」
「お姉ちゃん達、お兄ちゃんが可哀相だよ」
シルフとアンリに諌められる二人。

「うう。わかったわよ」
『天空の風石』を使って空に浮きあがる一行。
フリージア皇国との国境近くの平原まで飛んでいった。

ナハト平原。
かなり広い草原がひろがり、近くには美しく澄んだナハト湖がある。気候もよく、水はけもいい。ナムールの街とフリージア皇国を結ぶ街道が通っていた。
ここに街が築かれなかったのは、人間国との国境が近すぎるせいである。

シンイチ達はその平原に魔王城を出現させ、袋の中の者たちも取り出した。

「それでは、今ここに新しい国である『狭間の国ヒノモト』の成立を宣言します。小さな国ですが、どの国よりも豊かになるように精一杯がんばります。皆さんも力を貸してください」
日本から取った名前である「ヒノモト」国成立を宣言するシンイチ。

「ヒノモト国万歳！」「ヒノモト王に栄光あれ」
国民達の歓声のなか、勇者は王者になった。

街造

魔国の解放奴隷達は、魔国各地からヒノモト城に集められて、その後に帰国することが始まった。
全員が集合するまではしばらく城に残って、街を建設する仕事をすることになった。

「食料は魔国の各地で大量に購入したから、当分心配はないよね」
ウンディーネに聞く。いつの間にか秘書のような扱いになっていた。
「はい。数ヶ月は大丈夫ですし。ナムールの街からも商人が定期的に来る事になっています」

「あと、兵士達は何人くらいいるんだろう」
「えっとね。２１３人だよ。ボクがいつの間にか彼らに祀り上げられているんだけど・・」
メアリーが報告する。
「兵士達にとってはメアリーの魔力の強さに憧れるんだろう。魔王の後継者だし。それじゃメアリー将軍。治安の維持をお願い」
「なんで私がいきなり将軍？まあいいか。女将軍ってカッコイイし。」
メアリーが喜ぶ。

「・・んで、私は？」
「シルフは分身たちと連絡を取って、なるべく多くの情報を集めて。諜報大臣」
「諜報大臣ってなにさ？なんか悪そうなイメージ」
こうしてそれぞれの役割が決まった。

「えっと、取りあえず、水をどうにかしないといけないなぁ。」
何もない平原にいきなり城を置いたので、井戸も何もない。
「地下水が存在するのは感じます。まず皆に井戸を掘らせましょうか？」
ウンディーネが言う。
「うん。とりあえず、ウンディーネさん水が出そうな場所を教えて」
城壁内を探索するウンディーネと水の魔族。

「ここですね。ここに水が集中しています」
「わかった。取り合えずここにするか。兵士達に伝達して建設の経験がある労働者を集めてください」
シンイチが自分に仕える事になった官僚に命令する。

半日後、多くの筋骨たくましい男達が集まった。
「陛下、言われたとおりに集めました。今から掘るのですか？」
「ちょっと待ってくださいね・・ああ、これがちょうどいいな」
城壁に手を当てて「収納」と念じる。煉瓦で出来た城壁の一部が消える。

「へ・・陛下。何を？」
官僚がいきなり消失した城壁に驚く。
「とりあえず材料がなかったんで。『煉瓦の形に戻って出ろ』」
煉瓦の山が積まれた。

「それじゃ皆さん掘って・・いや、これを応用したら・・」
ブツブツと何かを考え出すシンイチ
「また何か変な事に道具袋を使う気だね～」
ついてきたメアリーが言う。
「シンイチ様は賢者ですから。きっとすばらしい事を考えているの

ですわ」
ウンディーネが目をきらきらさせて見る。

「ウンディーネさん。水までどのくらいの深さです？」
「ええ。だいたい１２メルくらいですね」
「ざっと１０メートルくらいか・・」
さらに考え込むシンイチ

「よし。考えるまえにとにかく試してみよう。『底まで螺旋階段がついた１０メートルの穴の形で地面を収納」
地面に手を当てて念じる。
いきなりシンイチの姿が消えた。

「シンイチ！！！」
「シンイチ様！」
二人が焦る。目の前には大きな穴が開いていた。
あわてて覗き込む。下には大きな地下水の泉があり、その中央にシンイチが浮かんでいた。

「もう！！もうちょっと考えて使いなよ」
メアリーが腰に手を当てて怒ってくる。
「まったくです。シンイチ様は王様なんですよ。危険なことはしないでください」
ウンディーネが涙目になっていいつのる。

「いや、ごめんごめん。道具袋を使ったら簡単に穴を掘れると思ったけど、まさか自分が穴に落ちるとは・・」
幸い、下に大きな水溜りがあったので、気絶する程度で済んだ。

「けど、これで面白い事がいろいろできるな。とりあえず、煉瓦で穴崩れないように補強してください」
「はい。既に手配していますわ」
ウンディーネがいう。
「ありがとう。次はね・・」
シンイチの街づくりが始まった。

「健康で文化的な生活をするには、とりあえず電気、ガス、水道、衛生が必要だと思うんだ」
ウンディーネたちに相談する。
「知識共有したからなんとなくわかるけど、この世界にはそんなものないよ」
メアリーが困惑したように言う。
「そうですよね。いくらシンイチ様でも、異世界の知識を深いところまで知っておられるわけではないですし」
ウンディーネがため息をつく。

「とりあえず、電気については風魔法を使える人達に研究してもらおう。雷をどうにかして明かりに変えるという方向を示したら、何とか形にしてくれるかもしれない」

集まった国民を袋から出す時、「属性魔法が使えて工夫・研究に向いている人」という条件で出した魔族や人間を研究者に指名して、西の塔を与えて研究室にしている。

「ガスと水道は？」
「水道についてはナハト湖から引いてこよう。数箇所井戸も掘ったからとりあえず後回しで」
「ガスはどうするのですか？なにかいい考えが？」
ウンディーネが期待する。

「ふふふ。以前テレビで見たんだけど、ガスと衛生を両立させるいい方法があるんだ。」
「それは？」
「その前に、この世界では屎尿の処理はどうしているの？」
シルフに聞く。

「そうだね。穴を掘って埋めるだけ」
「臭いの処理は？」
「吸臭石っていう風の魔術をこめた石を一緒に入れて埋めると、臭いが吸収されるんだよ。魔王城でも使われているよ」
「よし。それを使ってみよう。あと、鍛冶職人を呼んで」
シンイチの命令で鍛冶職人のドワーフが呼ばれる。

「王様。なんか用すか？俺に立派な剣を打てとか？」
ドワーフとしては若者のような容姿をする男がくる。
彼はいろいろと自分のアレンジを加えて前衛的な武器をつくったりするので、師匠と喧嘩をして追い出され、ヒノモト城に来たのである。

「いや。剣じゃなくて作ってもらいたい物があるんだけど・・知識共有をしてもらえないかな？」
シンイチが頼む
「マジっすか？男となんて・・いや・・ご命令であれば」
「シンイチ・・ボクには手を出さないのに・・」
「シンイチ様がその様な・・」
メアリーとウンディーネが冷たい目で睨む。

「変な勘違いしないでよ！作って欲しい物があるんだけど、言葉じゃ説明しにくいんだよ！」

「わかったっすよ・・覚悟を決めるっす。お、俺はカンカスといいます。以後よろしく・・ポッ」
「そこで顔を赤らめるんじゃねー」
シンイチとカンカスはおでこをくっつけ、メアリーに知識共有の魔法をかけてもらった。

「ん?こんな変な物をつくるんすか?いや、なんとか出来ない事はないっすけど・・」
「頼むよ」
「わかったっす。3日時間ください」
カンカスは西の塔に帰っていった。

「あと、シルフは吸臭石の魔術を改良して、逆に一定の量で放出する魔術を作れる?」
「そりゃ魔術式を反転するだけだから簡単だけど・・」
「よし。条件が揃った。それでガスの問題は解決だ」
シンイチは悦に入る。他の者は首をかしげていた。

三日後、

鉄製で出来た焼却炉に配管がつき、台につながっているような物ができた。
「いやー。王様のイメージに近い物をつくるのに苦労したっすよ。とくに変な花の形をした部分が。でもこれなんなんすか?」
カンカスが聞いてくる。

「メタンガス式ガスコンロだよ。つまり、う○このガスに火をつけて竈にするんだ」
「え?」
「そ・・そんな事出来るのですか?」

「試してみよう。シルフ、吸臭石を入れてみて」
「はいはい。くさっ！」

逆に臭いがでるような魔法をかけて、すぐに炉に放り込む。
しばらくすると、花のような形をした部分からう○この臭いが漂ってきた。
「「くさ！！」」
皆が鼻をつまむ

「め、メアリー。花火みたいな火を出して」
「う、うん。ちょっと火でろ」
メアリーが女神の杖を振ると、花の形をした部分に安定的に火がともった。
「え？」
「臭いが消えた・・火がついている。薪もくべてないのに・・」
「よし成功。これでガスの問題はクリアだ。
一人喜ぶシンイチ。

皆はだんだんこの発明のすごさを理解しだした。
「え・・これって、もう薪がいらないの？」
「うん・・いえ、排泄物を燃料に出来るのですか？」
「ははは。吸臭石は埋めたまま放置しておくと、臭いが洩れてきて迷惑になるんだよね。その問題も解決かぁ」
皆がシンイチを尊敬の目でみた。

水道

「さて、次は材料集めだ。どこかいい材質の石がある岩山とかない？」
シルフに聞くシンイチ。
「えっとね。ここから東にいったマルク山が岩山だけど」
「それじゃ行ってみよう」
「なんかやけに楽しそうだね」
「道具袋が思ったより高性能だからね。これを使えば、簡単に街を作る事が出来るよ」
「面白そう。それじゃ行ってみよう」
シルフと一緒にマルク山に飛んでいった。

「なんか、岩山ーってかんじだねえ」
シンイチが言う。
「なんの変哲もないただの岩ばかりだよ。どうすんの？」
「とりあえず、岩山全部収納」
数億トンもあるだろう岩山が全部消える。
「うん。綺麗になった」
見渡す限り平坦になるマルク山。

「・・・シンイチ。やりすぎ」
「そ、そうかな？」
「なんか、シンイチが怖くなってきたよ・・私これでも数億年を生きている精霊なのに」
ドン引きしているシルフ

「ご、ごめん。自重するよ」
「ま、いっか。誰の迷惑になるわけでもないし」

そういって二人はヒノモト城に帰った。

ヒノモト城内の開けた場所に立つシンイチ。
「陛下・・今度は何を？」
建設を担当する官僚が聞く。
「ここに石の材料を置くから、建物の建設に使って。ブロック状になった石でろ」
４０ｃｍ四方に切られた石が出てくる。
「あと何パターンか必要だな。それ」
他にもいくつかの形状の石を出す。

「ふむ・・相変わらず、すごいですな。しかし、この石は妙な形をしておりますな」
片面には凸の形が３つ、反対側の面は凹のくぼみが３つついている。
「ああ、元の世界には子供の玩具でレゴ〇ロックってのがあってね、ブロックの組み合わせで簡単に家の形や壁を作る事が出来るんだ」
「・・たしかに。この石を組み合わせれば・・」
官僚が目を輝かせる。
「細かい部分の石は後から調整するから。取り合えず大雑把に作ってよ」
「わかりました」
「あと、城ももっと広げようと思うから、外にもう一つ外壁を作る。内壁と外壁の間の土地の一部を住宅エリアにするから、労働者を雇って家を建てて。」
「はい。」
「ちゃんと一日1アル払ってあげてよ。そして、全部2階建てにて、台所、トイレ、風呂のスペースを2階に作って、居住スペースを一階にして」
「平民にそこまでの家を作るのですか？」
官僚が声をあげる。個人用の風呂など上級貴族の家にしかない。

そもそも庶民は風呂など入る習慣もない。

「この都市は、全大陸で一番進んだ住みよい街にするために一から作っているんだ。そうでないと意味がないよ」

「・・かしこまりました」

官僚たちが頭を下げた。

「さて・・外壁を作るか」

城の壁から数キロはなれた地点に飛ぶ。

「取り合えず、深さ２０メートルくらいの溝の形で平原全部囲うように土を収納」

地面に手を当てて念じると、深い堀の形で土がなくなる。

「次に、高さ５０メートルの一枚板の形をした平原を囲う壁でろ」

巨大な壁が出現し、堀にぴったりとはまり、ナハト平原全部を囲った。

「・・・なんか、すごい。すごすぎて笑っちゃうね」

「まだまだこれからさ」

シルフとシンイチは笑いあった。

ナハト湖は、ヒノモト城より北にある湖で、西にある海に向けてナハト川が流れている。

「うーん。ナハト湖から取水して、水道を引けばいいんだけど・・」

シンイチが考える。

「川の流れを変えたら？」

シルフが提案する。

「そうしたら雨が降ったときに洪水になるかも。必要量だけ引くようにすればいいんだけど」

テレビで見た事を思い出して考える。

「よし！ローマの水道橋を参考にして作ろう。まず、この辺に水道橋を作るようにして・・」
湖底より低くなる部分から岩作りの水道橋を作ることにする。

『土台分の穴の分の土を収納』『支柱つきの水道橋出ろ』」
ナハト湖から一直線に城に向かうように土台を掘り、支柱を埋め込んで水道が流れる道が上に通る橋を作る。
支柱は中に細い空洞をつくり、そこに水が落ちるようにして、下部に取水口をつくる。その周辺を城の農業エリアにする。

「城内の上空を水道が通るようにして、中央部分に貯水場所を作って・・」
城の中央エリアに巨大なプールを作り、城内の水道の起点にする。

「あまった水を最終的に西側に排水して、西側の農業用水に再利用しよう。最後に海に放出するようにして。とりあえずこんな物か」
「こんなもんかって・・なんで一日で出来るんだよぅ」
メアリーが呆れたように言う。
城内の民衆はどんどんと出来上がっていくインフラをみて畏怖している。

「・・王様って・もしかして神様？」
「人間技じゃない」
「ま、まあまあ。とりあえず水道とガスが出来たから、明日から外周の北側と西側を農業用地として開墾を始めて。後、内壁内の商業エリアと西側の工業エリア予定地・南側の住宅エリア予定地への細かい水道配線と下水道は任せるよ。」
シンイチが建設担当の官僚に言う。
「わ、わかりました。労働者を集めて、さっそく取り掛かります」
そのやり取りを聞いていた民衆が殺到する。

「王様を一番に働かせちゃ申し訳ありませんからね」
「これは、どの街よりも進んだ街になりそうだ・・」
「俺、国に帰らずにこの国に家族を呼び寄せた方がいいかも・・」
城内の民衆も新しい街に期待していた。

娯楽

ヒノモト街。住宅地エリア。
大勢の労働者がブロックを運んでいる。
「とりあえず、完成品の見本を作ろう」
シンイチの指揮で家を作り上げる。

「一階にはリビングと客間。二階には台所と風呂とトイレと寝室。屋根に水道管を通して、二階の水場に繋いで。んで排水は二階から外付けの管に流して、道路わきの溝に流すようにして。トイレはぼっとん式で一階に取り付けた浄化槽に落ちるようにして、そこに吸臭石を取り付けて。んで、二階の台所と風呂にガスが行くように別ラインで出臭石を取り付けて。風呂は大きな鉄製の鍋で、下から火をかけられるようにして、板を踏んで入る五右衛門風呂方式にして・・」

どんどん取り付けていく。
カンカスとその仲間は殆ど寝る間を惜しんで配管や風呂の見本を作っていた。

「シンイチ様、なぜ2階にお風呂をつけるのですか？」
ウンディーネが聞いてくる。
「ポンプがないから、水を流れるようにするには重力をつかうしかない。だから、屋根に水道管を通すようにしたんだよ。そして、石のブロックでできた家だから、配管を中に取り付けたら不便になるし、水漏れしたら家中が濡れる。だから配管は全部外付けにして、二階の一箇所に水周りを集めて、排水は重力による勢いで外の配管を通って下の溝に流れるようにしたんだ。一階に水周りを作ったら床下を掘らないといけないからね」

「いろいろ考えたのですね・・」
ウンディーネが感心したように言う。

「よし！！完成」
直接屋根の上に引く方法で水道を引いて、水を取り入れる。
水とガスが上手く配置され、見本が完成した。

「とりあえず、皆試してみてよ。これを一般的な家にしようと思うから」
シンイチの声に集まっていた平民達が見本の家に入る。

「こ・・これは。水汲みをしなくてもこの栓を外すと水が出てくるとは・・」
蛇口の構造がわからなかったので、横向きの管にネジ方式の栓を取り付けて出したり止めたりする方式を採用した。

「ちょっと臭いが、薪を使わなくて火をかけられる。後始末も必要ない・・」
メタンガス式コンロに驚く平民達

「私達のような平民でも毎日温かいお湯につかって、水浴びができるの？」
五右衛門風呂にとまどったが、シンイチが入り方を実演してみせると、歓声があがった。

新しく便利な生活が出来る家を見て、大喜びする平民達。

「こ、これを本当に我々に与えて下さるのですか？」
平民達がシンイチに聞く。

「与えるというか、貸しますね。ちゃんと家賃を取ります。毎月６アルくらいを予定しています。落ち着いたら、国から借金をして買い取ってもいいですよ。その場合は土地つきで１５００アルですね。」

シンイチが言う。

「ほ、本当に住んでもよいのですか？我々も家をもてるのですか？」

「ええ、真面目に働いてくれれば、ちゃんと家を手に入れられます」

「陛下・・」

「ありがとうございます・・」

犬族等の魔族や、貧しい暮らしをしていた人間達が土下座する。

「いや、土下座なんかしないでください。対等の取引ですから。ちゃんと働いて家賃を払ってくれたり、家を買ってくれれば国は儲かりますから」

「「「死ぬ気で働きます」」」

平民達の顔は希望に溢れていた。

「後は娯楽だなぁ・・とりあえず思いつくのはローマ時代だな。闘技場と劇場があったんだっけ」

ヒノモト城内に写真で見た石造りの闘技場と劇場を思い浮かべて、道具袋からその形で取り出す。

「闘技場はギャンブルの対象にしようか。強い兵士や一般参加の人を募集して木剣で戦わせて、誰が勝つか賭けたりして。劇場は可愛い女の子を集めて、会いにいけるアイドル方式にするか。」

考えるだけでワクワクする。

さっそく官僚に命令して、　国民から該当する人間に参加を募るようお触れを出す事を命令する。

一週間後

闘技場には観客が詰め掛けていた。
選ばれて参加した兵士達や、賞金目当ての飛び入り参加の一般人達が重さを軽くした木剣で激しく戦う。
戦いはトーナメント方式、集団戦、バトルロイヤルなどいろいろな形式で行われた。
それぞれに賭けが行われ、観客は熱狂に包まれた。

戦闘は紳士的にルールの下で行われ、相手を殺したり必要以上に傷つけたり卑怯な行為をしたら失格となり排除される。
けが人も少なく済み、興行は盛り上がった。

もちろん賭けの胴元であるシンイチは大儲けをする事が出来た。

闘技場と同時期に劇場も公開された。
１０代の可愛い女の子達が、拙いながらも歌や踊りを披露する。
劇場は若い男達の熱狂で盛り上がる。
歌の後では握手会を開き、それぞれの女の子達の石像が飛ぶように売れた。

もちろん興行主であるシンイチは大儲けできた。ただ。後からメアリーとウンディーネに白い目で見られたが。

「あと、スーパー銭湯も作ろう。ボイラーを作って・・」

中央エリアにある巨大な貯水プールから水を引いて作った、いろいろな風呂があるスーパー銭湯も好評だった。
国民達は農作業や建設作業が終わると、スーパー銭湯に集まり疲れを癒した。

この銭湯は公営ということもあり、安い料金で利用できるようにした。

このようにシンイチは毎日のように設備をつくり、国のために尽くした。

その姿をみて国民達は、毎日懸命に働き、自分達の暮らしをよくしてくれる王に感謝した。

女将軍

女将軍メアリー。
１４歳の少女であり、元フリージア皇国第五王女。そして前魔王アンブロジアの魔力を引き継ぐ少女。
その圧倒的な魔力は、強い者に憧れる魔族や人間の若者を惹きつけた。
外観は可愛らしい少女であることもあいまって、兵士達のアイドルとなっていた。

「魔力砲！・・だめだ、出ない・・」
兵士の中で比較的魔力がつよい若い魔族が悔しげに言う。
メアリーの指導で魔力砲の訓練をしていた。
「えっと、やり方はこうするんだよ。えい！魔獄砲！」
錬兵場で魔力砲の見本を見せる。
「すさまじい威力だなぁ・・」
兵士達が感嘆の声をあげる。

「うーん。ボクももっとコントロールが必要だね。兵士達も少ない威力なら出来るようになると思うよ。魔力を手のひらじゃなくて指に集中させて・・」
若い魔族の手をとって、魔力を込めながら説明する
「メアリー将軍・・」「あいつ・・ぬけがけしやがって！」
周りの魔族や人間が睨みつける。

「うん。ボクも魔力を込めてみたから、指に魔力を集中させて打ってみて」
メアリーと若い魔族の指先をあわせる。
「・・・はっ。はい！魔力砲！」

細い魔力のビームが出て、地面に穴が開いた。
「やり方はこんな感じ。次は一人でやってみて」
「はい！。魔力を指先に集めて・・魔力砲！できた！」
若い魔族が狂喜する。

「お見事！これで杖がなくても、何かあったときは攻撃できるね」
若い魔族の手をとって喜ぶメアリー。
「は・・はい！。このタング。メアリー将軍に感謝いたします」
おもわずメアリーに抱きつこうとするタング。周りの兵士に殴り飛ばされた。

「つ、次は俺を」「いや、俺が先だ！」「メアリーたんハァハァ・・あの指・・」
メアリーがガチムチの兵士達に取り囲まれる。
「あはは。皆落ち着いて。一人ずつ教えてあげるから。
「「「はい」」」
整列して一人一人メアリー将軍の指導を受けた結果、今まで魔将クラスしか使えないとされていた魔力砲が少ない威力ながらも全兵士に使える様になった。

「うーん。ボクには剣は向いてないみたい」
柄が杖になり、先が剣になっている杖剣と呼ばれる兵士の武器を振り回すメアリー。
少女が重い剣を振り回す姿はヨロヨロだった。

「・・・・」「・・可愛い」「汗だく少女・・ほのかに透けているような・・」「なんだこのモヤモヤする気持ちは・・っと危ねえ！」
ボーっと見ていた兵士達にメアリーが倒れてくる。

「ごめん。やっぱ危ないよね。」

「い・・いえ。ハァハァ」
メアリーが倒れるところを抱きとめた兵士の息がなぜか荒くなる。
(柔らけぇ・・)
「あの・・そろそろ離してもらえるかな」
「ハッ・・し、失礼しました」
髭をたくわえた大柄な兵士は顔を真っ赤にしていた。周囲の兵士が妬む。

「・・メアリー将軍。将軍ともなれば剣は必要。さあもう一度訓練です」
「うう・・わかったよぅ・」
涙目になって剣を振るうメアリー。兵士は倒れそうになるのを周囲で待ち構えていた。

「よし、午後からは外エリアで広域魔法の特訓!これが楽しみなんだよね~」
兵士達と共に外周の工業エリア予定地にいく。
ここには工場などを建てる予定だが、今は更地である。

「んふふ。やっぱり剣を振るより魔法の方が楽しいな。」

『ボルケーノ』地面一体が溶岩の海になる
『ウインドレイン』カマイタチが上空から降って地面に突き刺さる
『グラビティ』メアリーの周囲の地面が重力によりめり込む
『オメガブリザード』一面氷に被われた銀世界となる

「最初見たときはビビッたが、ああも景気よく極大魔法使われると気分いいなぁ」
メアリーから離れて見ている兵士達が言う。
「感心している場合じゃないぞ。俺たちもなんかしないと・・」

「どうせメアリー将軍一人いれば、どんな軍隊だって太刀打ちできねぇよ」
「確かに・・」
兵士達はリラックスして雑談していた。

「キミたち！遊んでないで訓練。『ドラゴン召喚』　ペディー遊んであげなよ』」
黒い鱗をした、１０メートルに及ぶ大きさのドラゴンが召喚される。
このドラゴンはメアリーが最初に召喚した後、メアリーとすさまじい戦いを繰り広げた結果、使い魔となった。今ではペット扱いである

「じ、冗談じゃねぇ！！」「やべぇ」
「あはは。ペディー。殺さないようにね。殺したら治療できないから。怪我はいいよ」
「み、みんな本気で戦え」
実戦さながらの訓練で、兵士達は確実に腕を上げていた。

兵士達はペディーにやられて、ボロ雑巾のようになった。
「皆がんばったね。はい。ヒール」
メアリーの治療魔法が彼らに染み込む
「あたたけぇ・・」「気持ちいい・・」「なんか踏まれた後で優しくされたみたいだ・・」
何かに目覚めつつある兵士達だった。

「よし！今日は新しい魔法に挑戦しよう。皆離れていて。『メテオストライク』」
周囲の土が浮き上がり、上空で固まり巨大な岩になる
「お、おい。まさか」
兵士達が後ずさる
「いけーーー！」

巨大な岩が落ちる。地面に落ちた後、転がっていき外壁にぶち当たり、粉々に粉砕する。

「あ、コントロールまちがっちゃった」

メアリー。

「・・・・」「あの外壁って厚さ5メルくらいあったよな」「一撃で粉砕・・というか壊していいのか？」

兵士達がドン引きする。

「しょうがないな。『シンイチ、ちょっと来て』」

念話で呼びかける

「『何？』」

「お願い。ちょっと壊しちゃったので、直してほしいの」

「了解。シルフに頼んで今から行くよ」

１０分後、壊れた外壁の惨状に呆然とするシンイチの姿があった。

内政

ウンディーネ。
その知恵と癒しの力と美貌で誰からも愛される魔族。
現在はヒノモト城で事実上の宰相として政治を統括していた。

「現在のヒノモト城の財政を報告お願いします」
官僚たちに質問をする。
「歴代の魔王様たちの蓄財が金貨と宝物をあわせた価値が７０億アルですね。あと国宝級のアイテムが『女神の杖』『霧の羽衣』『天空の風石』『輝く弓』『闇の鎧』その他多数あります」
「ふむ。財政的には余裕がありますね・・陛下のおかげで街の建設の材料費や労力がずいぶん削られましたからね」
黒ぶちメガネをかけたウンディーネが資料をみながらつぶやく。

「それでは、現在のヒノモト城内の人数は？」
「我々役人が７０名、兵士が２１３名、使用人が３０名ですね。人手が足りないので増やしたいところですが・・」
「現在の国の規模では適正でしょう。皆にはかなり負担をかけますが、よろしくお願いします」
適正と判断してそのままとする。

「ヒノモト国の国民の数は？」
「現在まで集まっている解放奴隷が約３０００名。このうちの何割かはヒノモト国に定住を希望しております。魔族は各地から集まった者達が犬族約１２００名　猫族約１５００名　兎族約８００名。その他が約３００名ですね」
「その者たちに仕事は割り振りましたか？」
「いえ、まだ建設と、農地開墾のため１０００人ほど雇ったのみで

す。彼らには賃金として一日1アル支払っております」
「わかりました。順次追加募集をお願いします。」
「しかし、1アルとはいささか賃金として高すぎないかと・・」
「陛下のご意向です。民衆にお金を支払い、余裕のある生活をさせることが活力を生むとのことです」
「ですが・・」
「実際、彼らはよく働いております。また、陛下が作った闘技場や劇場などで彼らが支払うお金は、国に戻ってきております。私も少しずつ陛下の考えがわかってきたような気がします。このまま続けてください」
「かしこまりました」
役人達は不満そうだったが、引き下がった。

「それから、商人たちが陳情に来ております。城内の店舗スペースで商売を行いたいと」
「わかりました。リストを作成して提出してください。」
「彼らにはどのように対処いたしますか?」
「どのような商品をどれくらいの価格で売るか?仕入先はどこからするのか?国に支払う税金はどのようにするのかなど、陛下のご意向も確認しないといけませんので、そういったことを書いた資料の作成をお願いします」
「わかりました」
(陛下だったら無料で許可しそうだけど、ここは国の為にしっかりと言わないといけないところですね・・)
ウンディーネは思う。

「それから、以前ご命令された農業地の開墾ですが、予想以上に雑草が生えていて遅れております」
「そうですか。魔国からピギーをもっと輸入して除去に当たらせましょう。手配してください」

ピギーとは魔物の一種で、雑食性でなんでも食べる。雑草除去や生ゴミの始末で重宝するが、その肉を食べるのは忌避されていた。
「開墾が終わったら、ケセルの樹と麦を植えてください。私の水の領地からピルクの苗木も取り寄せます」
ピルクの樹の実は甘くて柔らかく、魔国では好まれていた。薬効成分があり、疲労回復にも有効である。

「それから・・」
官僚たちの報告は続く。
ウンディーネは毎日忙しく政務をこなしていた。

「以上が報告でございます。陛下」
めずらしく外出せずに執務室にいたシンイチに報告する。

「陛下は止めてよ・・シンイチでいいよ」
「いえ、ここは公務をするところなので、私情ははさみません」
ウンディーネがピシャリという。メガネをかけた有能な秘書か女教師に見える。
「は・・はい。でも政治はウンディーネさんに任せたいんだけどな。心から信頼しているし。」
シンイチが笑う。
「い、いきなり何を・・信頼していただけるのは嬉しいのですが・・」
ちょっと顔を赤らめるウンディーネ。

「まあいいや。報告の中で思ったんだけど、まだ仕事に就けてない人がいるんだよね」
「はい」
「その人達には、道路を石材で舗装する仕事についてもらって。道路幅は大通りが１０メルで、民家が並ぶ通りは６メルにして、排水

用の側溝もつくって欲しい」
「舗装ですか？それに道路がずいぶん広いですね。」
「うん。舗装道路だと馬車も人も歩きやすいし、雨が降ってもぬかるんだりしないし。道路が出来たら、街中を定時に回る乗り合い馬車の制度を作ろう。その為に、馬車の工場も作ろう」
「わかりました。職人を集めておきますね」
「うん。カンカスのところでもガスコンロや配管作るのに必死みたいだから、手先が器用な人を労働者として派遣して」
「すぐ手配いたしますね」
ウンディーネが言う。

「あと、商人たちには、とりあえず商売を許すけど、売り上げに比例した税を納めるようにして」
「売上税ですか？」
「一ヶ月に一度、帳簿を提出させて、その商人の取引を確認して税金を納めさせる。一定以下の税金が三ヶ月以上続くようだと、とりあえず営業停止で他の人に任せる」
「かなり厳しくはないでしょうか・・」
「そうでもないさ。誰でも参入できるようにしているわけだから。そして、それらに対抗して国でも一般的な物を売る店を作ろう。そっちは店長と店員を雇って商売するようにして。そうなると、最低限でも国が提供する物よりいいものを売ろうと工夫するはずだから」
「わかりました。やってみます」
「頼んだよ」
商人は楽に商売に参加できるが、そのかわり競争が厳しくなるようなやり方にした。

「あと、ピギーという魔物ってどんな物なの？」
シンイチが聞く
「ピンク色をした肌で、鼻が突きでています。性質は野生の物は人

や魔族を襲いますが、飼いならされるとおとなしくなります。雑食性で何でも食べ、雑草の除去や生ゴミの始末に使われます」
「食べれるの？」
「・・食べれないことはないのですが・・その、あまり食べるのはおすすめできません。」
「なんで？」
「肉はおいしいと言われているのですが、食べた者が体調を壊す事がよくあるのです。それゆえ、貧しい者が食べる肉として忌避されています」
「そうなんだ・・なんか豚みたいだな。いや、もしかして体調壊すのって・・。」
ブツブツと独り言を言う
「わかった。とりあえず、ピギーとその肉を持ってきて。考えがあるんだ。」
「わかりました・・」
ウンディーネはあまり気が進まないようだったが、了承した。

つれてこられたピギーを見るシンイチ。
「やっぱり豚だ。馬がいるんだから豚もいても当然か。んで、こっちがピギーの肉か」
今締められたばかりのピギーの肉をみる。
「よし、では料理長に命令して。肉を薄く切って小麦粉と卵を混ぜたものを油で長く揚げて料理してみて。」
「どうするのですか？」
ウンディーネが聞く
「元の世界でも、一部の地域では豚は忌避されていたんだ。要は食べたら寄生虫がいるので、体調をこわすのがその理由」
「寄生虫ですか？」
「うん。つまり、薄く切って熱い油で料理したら寄生虫が全部死ぬから安全なんだよ」

シンイチの命令で調理されたピギーの肉が運ばれる。
「うん。美味そう。」
「へ、陛下、我々が毒見を・・」官僚たちが止めようとするが、シンイチは構わず食べた。
「やっぱり・・やった!これでトンカツが食べられるようになった」
シンイチが喜ぶ。
「そんなに美味しいのですか?私も一口・・美味しい」
ウンディーネの顔がほころぶ。
「ピギーの肉は安いんだろ?この製法で調理して、労働者に食べてもらって」
「はい!すぐ手配いたします」
新しい料理トンカツは瞬く間に民衆の間に広がっていった。

「あと、ピクルの実ってどんな食べ物なの?」
「そう言われると思って、持ってきました。これは私の領地で作っておりまして、人気があるんですよ」
ピンク色をした実を差し出すウンディーネ
「どれどれ・・。甘い。これって桃みたいだな」
「シンイチ様の世界にもこのような果実があるのですか?ただ、一つ欠点がありまして、実をもいだ後に長持ちせずにすぐに腐ってしまうのです」
「すぐに腐るか・・まてよ。桃といえば。考えがあるから、カンカスを後で呼んで来て」
「わかりました。また何かするのですか?」
「うん。きっとこの国の産業になるよ」
そういうシンイチの姿をほほえましく見つめるウンディーネだった。

カンカスが呼ばれる
「また王様何かするっすか?」
「うん。また知識共有して」

「またっすか。好きですねぇ」
「だからそういう事を言うなって。ウンディーネが怖いんだから」
ウンディーネが睨んでいる
「冗談っすよ。それじゃ始めましょう」
知識共有をウンディーネにかけてもらう

「これはまた・・これが出来るようになったらすごいっすね。餓死する人いなくなるんじゃないですか？」
「出来れはそうなって欲しいね。作れそうかい？」
「蓋は接着剤をつけてかぶせるとして、なんとかできそうっすね」
「頼むよ。あと器具のほうもお願い」
「わかりました。あと、人が増えてきたから、広い工場が欲しいんですが・・」
「うん。工場エリアに人をやって優先的に作るようにするよ」
「お願いするっす。出来たら持って来ますから」

数日後、カンカスが鉄で出来た筒のような物を持ってきた。
「これは何ですか？」
ウンディーネが首をかしげる。
「ああ、これは『缶詰』って物だよ。上蓋の縁にこれをこう引っ掛けて・・」
缶きりで実演すると、上蓋が円形に切れて外れた
「これは・・中にピクルの実と水が入っているのですか？」
「食べてみて」
「はい・・甘いです。実も腐ってないですね」
「こうすると、数ヶ月もつんだよ。これを大々的に売り出そう」
「ほ・・本当ですか？」
「ああ、非常食にもいいし、遠くまで持ち運べるからね」
「他にも出来るか探しましょう。これが出来れば、途中で腐って捨てられる食べ物が減ります」

「ああ、頼んだよ」
ウンディーネはシンイチの命を受け、缶詰になりそうな食べ物を探した。
これらはヒノモトの特産品となり、飛ぶように売れるようになった・

（シンイチ様はすごい・・きっと、別世界の何千年もの試行錯誤の結果得られた知識を身につけられているのでしょう。私達は２００年もの間、何をしてきたのでしょう。今からでも遅くない。シンイチ様の知識を世の中に広げて人々を豊かにしなければ・・）
毎日忙しく働いていても、ウンディーネは充実していた。

情報

風の魔公シルフィールドの分身シルフ。
国の情報収集を担当する彼女の元には、分身からさまざまな情報が入ってきた。

「シンイチ。そろそろ魔国の使者が各国に着くみたいだよ」
「そうか。この世界はどんな人間の国があるんだっけ？」
「森の国ミール。光の国ミラー，海の国アトルチス、大地の国ガイル、最果ての国メギド、高山の国ヤッホー、湖沼の国ロブロール。そして勇者の国フリージアだね」
「勇者の国フリージアか・・」
「問題はそのフリージアだよ。妙な事になっているみたいだよ」
「えっ？詳しく教えてくれ
シルフは各国とフリージア皇国の動きを話した。

「そうか。わざわざ俺が復讐なんかしなくても、充分恥をかいているんだな」
「うん。各国はフリージア皇国に対して不信感でいっぱい。勇者に対しては魔王を倒したことで好意的に見ているけどね。しかも、魔国からの貿易が中断している影響がけっこう大きいみたい」
「今までフリージア皇国が独占していたみたいだしなぁ。早めに貿易を再開しないと困る人がたくさんいるな」

「今はフリージア皇国に貯めていた物資を各国に輸出することで押さえているみたいだけどね。いつまでも続かないし。そうなったら各国がどんなことをするか・・」
「でも、戦争が起こって平民が迷惑するのは嫌だな。なるべく早く道具袋に輸出品と解放奴隷を入れて各国を訪問しよう。」

「甘いねぇ。でもフリージア皇国はまた何かしそうだよ。」
「えっ？」
フリージア皇国の動きを話すシルフ

「裏切った勇者メンバーで、アーシャってのがいたでしょう」
「ああ・・俺を一ヶ月間散々いじめてくれた奴だよ。」
「そいつが直属の皇軍獅子騎士団を率いて、こっちに向かっているよ」
「そうか・・」
「魔王を殺した勇者を連れてくるようにって。各国から責められているからね。シンイチが凱旋してきたら、各国の手前勇者に対して謝罪しないといけないし、何されるかわからないからって迎えにきたみたい」
「今更おそいっつーの」
「そうなんだよ。そこの所はフリージア王だってわかっているから、非公式にしたんだよ。つまり、目的は勇者の暗殺」
「暗殺？」

「フリージア皇国にとってもはやシンイチは存在するだけで有害だからね。うやむやの内に消えてもらいたいんだよ」
「・・まあ、あいつ等の事だからそうするわな。バカバカしくなってせっかく仕返しする気も失せてきたのに。二回も許す必要ないな」
「今はちょうどフリージア国境の領地カストール家に滞在しているけど、あと数日でやってくるね」
「皆を集めて対策を練ろう」

メアリー将軍やウンディーネ宰相、そして主だった官僚を集めて会議を開いた。

「まあでも。シルフ大臣がいるから動きは筒抜けだしね。狭間の国

の外壁門に入った時点で道具袋に入れてもいいけど・・」
「それだったら、こっちから理不尽に攻撃したことになりますので、永世中立を掲げているわが国にとってはよくありません」
ウンディーネが諌める。
「そうか。ならどうしょうかなぁ」
シンイチが頭をかく

「ボクも兵士達も強くなったからね。先に攻撃させて戦っても余裕で勝てると思うよ」
「しかし、戦闘になったら街に被害が出るので・・」
官僚が言う。メアリーは外壁をぶち破った前科があるので、街が壊れないか心配している。

「メアリーは城の魔術書庫で勉強もしているんだよね。」
「うん。どんどん新しい魔法が使えるようになっているよ～」
シルフの質問にメアリーが答える。

「『召喚』とか使えるようになっている?」
「もちろん。最近使えるようになったから、シンイチと道具袋に召喚対象としてかけているよ。いつでも呼び出せるように」
「・・・ちょっと待って。そんなのいつの間に・・」
シンイチがビビる。

「寝ている間にかけた。だってシンイチはボクのものだから、いつでも手元に持ってこれるようにしたいし」
「・・・メアリー怖いよ」
シンイチが震える。

「・・とにかく、シンイチをいつでもメアリーが呼び出せるなら、罠を張ろうよ」

シルフが提案する。
「でも、シンイチ様は大丈夫でしょうか・・？」
ウンディーネが心配する。

「伝説の装備を身につけて、ガッチガチに身体硬化の術を掛けまくって、不意打ちに備えれば大丈夫だよ。それに、そろそろボク達『勇魔兵団』も実戦を経験したかったしね」
「なにその名前？まあいいか。それじゃここに着くのは何日後かな？」
「うーんとね。カストール城を出て5日くらいだね」
「わかった。皆準備を頼む。盛大にもてなしてやろう」
「わかりました」
官僚たちやメアリー達が準備に取り掛かった。

カストール城

アーシャ率いる皇軍獅子騎士団が駐屯している。ただし、非公式なので、表向き商人の商団を装っており、街中では平服をきている。一般市民は騎士団が来ていることを知らさせていなかった。

アーシャは城内でカストール伯爵、ドンコイと対談していた。

「父上。私を勘当とは酷いではありませんか。私以外に伯爵家を継げる者はいないと仰っていたではありませんか」
父親に訴えるアーシャ。

「それは、お前が失敗をしてなかったからだ。今回のような弁解の余地もない失敗をした場合、カストール家までお前のせいで滅びることになる。それに、お前以外にも伯爵家を継げる者はちゃんとお

る」
ドンコイの方を見るカストール伯爵。
口元に卑しげな笑いを浮かべて一礼した。

「はっ。このような剣も学問も出来ず、容姿も醜く、人望もない男に誰が従いますか。今まで何の実績も上げておらんではないですか」
ドンコイをみて嘲笑うアーシャ

「貴様は自分の兄に向かってその様な事を言うのか？」
カストール伯爵がアーシャを睨みつける。

「兄なら兄らしくして欲しいものですね。尊敬できぬ者に兄だからといって敬意は払えません」
「・・・だが、俺はお前みたいな失敗はしてないからなぁ。ま、放蕩者といわれているが、今のお前よりはマシさ」
キヒヒッと笑い声を上げるドンコイ

「貴様、そのカンに触る笑い声をとめないか」
「優等生は可哀相だな。常に強く正しく美しくと要求され、失敗したら皆から失望され手のひらを返される。その点、俺は無能で劣悪だから、何もしてなくても別に失望されない。それで、お前が勝手に自滅すれば伯爵家の後を継げる。ま、今後は俺も放蕩を収めて、しおらしい態度をすれば、無難に伯爵家を治められるよ。今までの放蕩なんて若い頃の過ちですむからな。お前みたいに国を揺るがす失敗なんか、しようとしても出来ないから、俺はつくづく無能でよかったわ」
歯をむき出して笑う。

「貴様！！！」
アーシャが剣を抜く。ドンコイが護衛の兵士の後に隠れる

「止めぬか二人とも」
カストール伯爵が一喝する。

「父の面前で剣を抜くとは・・・。アーシャ、城を出て街で宿に泊まれ。、お前はあくまでも騎士団副長なのだからな。この城にとどまる事は許さん」
カストール伯爵の言葉に顔を真っ赤にして拳を握るアーシャ。

「アーシャ。父として助言する。決して勇者と敵対するな。お前がかなう相手ではない」
「・・・ふっ。勘当した息子に父親面ですか。もはや、私が仕えるのは国王陛下のみなのでしてな。失礼いたすカストール伯」
そう言い捨てて、アーシャは荒い足取りで出て行った。

「・・だんだんメッキがはがれてきてますな」
「仕方あるまい。今まで困難など一度も乗り越えた事はなかったのだろう。あそこまで思慮が浅いとは・・。勘当を言い渡されて、少しは頭が冷えたかと思ったが。陛下に何事か吹き込まれたか・・」
「陛下も半ば捨石のようなつもりなのでしょうな。それがわからぬとは、その程度の能力なのでしょう」
「・・・」

「なんにせよ、これで『無能な長男が自分の失敗につけこんで、父親をたぶらかした。悪いのはドンコイだ』という考えがアーシャに生まれました。最悪アーシャがすべてを丸く治めて国の英雄扱いされる状況になったときも、私の首一つで収まるでしょう」

「・・お前はそれでいいのか？」
「なに。そういう状況になったら、アーシャも得意の絶頂になっているので、私が涙を流して足元にすがり付けばそれで満足するでし

ょう。なんならおまけで座り小便でもしましょうか。そこまでしたら、英雄が理由はなんであれ自分の兄を殺すなど、醜聞になりますからしないでしょうね」

「ふっ。そこまで考えておるのか。もはやお前に伯爵家を継がせたくなったわ。アーシャの知恵など、お前の狡猾さの前では子供の浅知恵にすぎん」

「ふふ。初めて褒めていただきましたね。一度ぐらいはそうしてもらいたかったのですよ」

二人は笑いあった。

「くそ・・ドンコイめ。口だけの無能者が、父上に取り入って・・絶対にゆるさん。」

酒場に来て、部下達と浴びるように酒を飲むアーシャ

「副長。心配いらないですよ。陛下の密命もあることですし。あんな弱い勇者なんてサクっと殺して首を持ち帰りましょう」

「そうですよ。そうしたら勇者は魔族に殺されたって各国に報告して、王都でメルト姫と結婚式ですよ」

「王女が嫁なら王族の一員になるし、そうしたらカストール伯爵家なんて自動で副長の物ですよ」

シンイチを苛めていた兵士達が口々に言う。

「そうだな・・。そうなった時のドンコイが見ものだ。泣いて土下座しようが絶対にゆるさん。散々いたぶった後で無一文で追放してやる」

「その意気です！さあもっと飲みましょう」

カストール城の夜はふけていった。

撃退

数日後　ヒノモト城
「いよいよ来たねぇ。みんな、配置は大丈夫？」
「バッチリ」
シルフの偵察により、近づいてくる騎士団を把握して準備しているメアリー達。
「シンイチの準備は？」
「あの・・動けないんですけど・・・」

『極鉄の面』『闇の鎧』を着せられた上に身体硬化魔法をかけられ、口に拡声魔法をかけられている状態のシンイチ。
重さで一歩も動けない。情けない勇者である。

「それじゃ、外壁の城門の内側から少し離れた所に降ろすよ」
「・・・ホントに大丈夫なんだろうね」
不安そうにするシンイチ
「大丈夫。外壁の上から見ているから」
メアリーと兵士達、そして、一般民衆の一部が外壁の上に立っていた。３０メートルくらいの高さがあるので、地上からは見えない。
シルフは魔石を持ってシンイチの側についていた。

ヒノモト城の外壁に近づく騎士団。
「こ・・これはなんだ。こんなところになぜ壁がある！！」
アーシャが動揺する
「二ヶ月くらい前に勇者を送っていった時には、こんなものはなかったぞ！」
「ここはナハト平原という、何もない平原のはずだが」
兵士達が言い合う。

「あ・・あそこに門があります。開いていますが・・」
先行していた騎士が報告する
「仕方ない。皆、警戒しつつ進め」
アーシャの命令で入る騎士団

「これは・・遠くにまた壁がある。その向こうに見えるのは・・まさか魔王城？」
「広い平原だが・・誰もいない。いや、あそこに人影が見えるぞ」

騎士達がちかよる。

「そこで止まれ。お前達は何者だ。どうしてこのヒノモト城にきた」
突然、黒い面と全身鎧で被われている者から大きな声で話しかけられる

「き・・貴様こそ何者だ」
「私は、勇者にしてこのヒノモト国の王、シンイチ・スガイ・ヒノモトだ。貴様達、名乗るがいい」
シンイチの声に動揺する騎士達。

「ば・・ばかな、勇者だと？」
「なぜこのような所に・・」
「どけ！」
騎士達をかき分けて、アーシャが出る

「これはこれは勇者殿。お久しぶりですな。ご立派な姿をされて。国王とは？」
「馬上から王者に話しかけるとは。貴様のような下賤な輩など、話をする価値もないわ。」

ピシャリと切り捨てられ、アーシャは顔を真っ赤にする

「去れ！話があるなら国書を携えた礼節を弁えた者をよこせ。いくらフリージア皇国が野蛮国だとしても、それぐらいの形式は守ったらどうだ」

シンイチの言葉に、騎士たちも怒りで顔を赤くする。

「・・これは失礼を。我等は貴方を迎えに来たのです」

アーシャが押さえた声をだす

「ふふふ。勇者ばかりか王の娘まで生贄に出す国が、魔王が倒された事を知りあわてて迎えをよこすか。だが、今の私は一国の王。たかがフリージア皇国の卑怯王が迎えをよこしたとしても、それに応じる義理はない。もう一度言う。立ち去れ」

シンイチの声が張り上げられる。

「もはや問答無用。陛下まで侮辱するとは、その罪万死にあたる。死ぬがいい！！」

アーシャはシンイチに馬上から切りつけた。

『ガキン！』

金属の音がして、アーシャの金色の剣が折れる。

「ば・・ばかな。これは前勇者の装備品である『皇金の剣』だぞ？」

アーシャが呆然とする。

「シルフ。いまのを録った？」

「バッチリ綺麗に音声付で」

シルフが持っている石は、数分間録画ができる『契約の魔石』だった。通常は大きな契約などに使われる。

「よし、右手を上げて合図を・・って、動けない！シルフ。メアリーに伝えて」

シルフがメアリーの元に飛んでいく。

「くそ！！」「なんだこいつは！！」
騎士達が持っている剣で切りつけるが、傷一つ付けられない。
「もういい。縛り上げて持っていけ」
アーシャの命令で縛り上げられるシンイチ。
いきなりその姿が消えた。

『シンイチ召喚』メアリーが杖を振ると、シンイチの姿が外壁の上に現れる。
「動けないから焦ったよ・・。よし、城門をとじろ」シンイチが装備を脱がせてもらいながら命令する。
兵士達と民衆が協力してロープをひっぱり、城門が閉じられた。外側から閂をかける。

皇軍獅子騎士団は閉じこめられた。

「よし。『勇魔兵団』出撃ーー！でも殺しちゃダメだよ」
メアリーの号令で兵士達が外壁から降りる。
「うぉぉぉぉ。今までの訓練の成果みせちゃる！」
兵士達は騎士団に襲い掛かっていった。

『勇魔兵団』は２１３人。装備もよく、錬度も高い。毎日のようにドラゴンと戦っているので、実戦経験も積んでいる。
『皇軍獅子騎士団』は１００人。装備は通常程度だが、長旅で疲労している上に知らない土地である。おまけに、兵士達は貴族や良家の出身者が多く、実戦経験も乏しかった。その上、不意を付かれた形になる。

魔力砲が打たれる。すべての騎士たちが馬から落ちる。
そこを狙って魔法が飛びかう。

騎士たちがあわてて剣で兵士を打ちのめしても、恍惚とした顔で何度でも立ち上がる勇魔兵団の兵士達。
「もっと・・もっと打って来い。後でメアリーたんの治療・・」
「な・・なんだこいつら。どれだけ倒しても起きてきやがる・・グォッ」

あっという間に騎士達は怪我をして地面に倒れ付した。
「なんだそのザマは!!たって戦え!!」
アーシャが激を飛ばすが、誰もが力尽きていた。

「ふーん。だったら、アンタの相手はボクがしてあげるよ」
アーシャの前にメアリーが立つ
「メアリー王女。貴方は第五王女ですぞ。フリージア皇国の為に尽くすのが筋でしょう」
「だったらメルト王女や他の王族は何してるんだよ。それに、ボクを生贄にして自分達だけぬくぬくと暮らすようなフリージア皇国なんかに尽くす義理はないよ。今のボクは、シンイチの妻にして女将軍、メアリー・ヒノモトだ!!」
『女神の杖』を振り回して魔法を使う

『グラビィティ』重力がかかる。アーシャの乗っていた馬が潰される。
『フレアー』アーシャの鎧が爆発ではじけ飛ぶ。
『魔獄砲』直撃を食らったアーシャが吹き飛んだ。

地面に倒れて荒い息をつくアーシャ。アバラ骨が折れている。
「シンイチに感謝するんだね。殺すなって言うから、手加減してあげたよ」
メアリーが笑う。
アーシャは屈辱のあまり、地面に手をたたきつけた。

「メアリー、もういいよ。こいつらには二度とこの国に来たくならないように捨ててくるから」
シンイチが道具袋を持って念じる
「このあたり一帯の敵と装備品を収納」
周囲一帯から皇国獅子騎士団のすべてが収納された。

「よし、これで侵略者達は撃退した。皆、協力ありがとう」
ワーーッと民衆から歓声があがる
「シンイチ陛下万歳、メアリー将軍万歳！」
ヒノモト城は歓声につつまれた。

シルフと共にカストール伯爵家領地のゴビ沼地に飛ぶシンイチ。
「ここがいいかな？」
「うん。沼地だから、落しても死なないでしょ」
「わかった。皇軍獅子騎士団全員素っ裸でてろ」
道具袋から騎士達が取り出され、そのまま下の沼地に落ちる。
「もう二度とくるなよ。次は命はないぞ」
もう一度宣言して、シンイチはヒノモト城に帰る。
後には傷つき泥だらけになったアーシャと騎士たちが残された

暴露

全身汗まみれ、泥まみれでアーシャと皇軍獅子騎士団はカストール城にまでたどり着いた。
何日も素っ裸で歩きずくめであり、疲労と空腹で今にも倒れそうになっていた。

「つ・・着いた。とうとう我が城についた。これで助かるぞ!!」
アーシャが叫び声をあげる。兵士達からも歓声があがった。

「報告します!素っ裸の怪しげな集団が城外に近づいてきます。」
物見の報告を受けるカストール伯爵とドンコイ。
「様子は?」
「全員が泥まみれで傷つき弱っているようです」
報告を受ける。
「なるほど。おそらく、皇国獅子騎士団でしょうね。やはりアーシャは懲りずに勇者の敵に回り、返り討ちにあったようですね。連れて来るのに成功していたらそのような様子ではないはず」
「・・どうしたものか」
カストール伯爵がドンコイを見る。親としての情と伯爵としての立場の板ばさみに立っている。

「非公式での命令では、勇者を連れて来るというもの。勇者があの集団にいないなら、命令に違反した反逆者ですな。助けるとかえってカストール家を陥れる口実になりかねません。おまけにいらぬ勇者の恨みまで買う可能性もあります。」
「・・・それはわかっておるが・・」
「ただし、助けないと騎士達の親の恨みを買います。勇者についての情報を手に入れる機会でもあります」

「・・・」

「父上はこの城にいなかった事として、私に任せていただけませんでしょうか？」

「いいだろう。もはや次期伯爵はお前に決まったようなものだ」

「アーシャの命がここで尽きるかもしれませんが？」

「・・やむを得まい。一度犠牲にすると決めたのだ。未練は残さぬ。アーシャの自業自得でもある」

「わかりました。お任せしていただいて、ありがとうございます」

ドンコイは父親に一礼して下がり、兵士に命令をくだした。

「開けろ！！！！私はカストール伯爵家次男だぞ。なぜ門を閉ざす！！！！」

アーシャが城の外壁の門にとりすがって喚く。

カストール城は規模は小さいものの立派な都市であり、小規模な城下町を取り囲むように5メートルほどの高さの城壁に囲われている。城壁の上には広い通路があり、兵士達が上から弓を放って攻撃できるようになっている。

門は二箇所のみであり、外壁から突き出たような形。

その正門の上のベランダに太った男が護衛付で現れる。

「おやおやこれは。ご立派な騎士団副長である我が弟・・・に似ている盗賊だな」

ドンコイがあざ笑う。その姿は実にいやみったらしく、アーシャの怒りに火をつけた。

「何が盗賊だ・・私はカストール伯爵家次男、アーシャ・カストールだ。貴様ごとき豚など兄というのも恥ずかしいわ」

落ちている石を投げつける。ドンコイの護衛に当たり、鼻血が出る。
「・・アンス。大丈夫か?よく身を挺して私をかばってくれたな」
「ドンコイ様?え?・・あ、ありがとうございます。」
アンスと呼ばれた兵士は、評判の悪い長男から意外に優しい言葉をかけられて戸惑っている。

「貴様のその姿、浅ましくて見ておれぬ。我が忠実なる兵士を傷つけおって」
ドンコイが片手を挙げると、外壁の上から弓を持った兵士達があらわれた。外壁上にずらりと並んでいる。
「去れ!!今なら弟に似ていることに免じて不問にしてやる。」
ドンコイが声を張り上げる。

「城内の兵士よ。私がわからぬか!。お前達の指導者であり、次期伯爵たるアーシャ・カストールだ。すぐに父上を呼んできてくれ」
兵士達に呼びかけるアーシャ

「お・・おい。本当にアーシャ様の声だぞ」
「まさか。しかし泥まみれだが、確かに似ているような・・」
「ドンコイ様。いかがいたしましょう」
兵士達に動揺が広がる。

ドンコイが片手をあげて制する
「ふむ。声までそっくりか。よく化けたものだ。あいにく、父上は皇都に向かっていて留守だ。よって、城内のすべては城代である私が取り仕切っておる。まことアーシャなら、皇軍獅子騎士団の印が入った陛下下賜の騎士の杖をもっているはず。それを見せよ」
アーシャに向けて証拠を要求する。

「ばかな!!杖など戦で失くしたわ」

アーシャが言い返す。
「・・・その様な言い訳が通ると思うか!!卑しくも皇国騎士団なら、どのような負け戦であれ王権代理の象徴である下賜された杖を持ってないなどということがありえるか。去れ。アーシャを名乗る盗賊よ。これ以上騎士団を騙るなら、弓の的にしてくれる」
ピシャリと言い放つ。

「ア、アーシャ様」
「ま・・まずいですよ」
騎士団の幹部達がうろたえる。
すべての騎士団には、出陣の時には王の代理人である事を象徴する杖を渡される。これはどんな負け戦の場合でも持ち帰らないといけないとされていた。だが、今は道具袋の中である。

「・・・くっ。兄上。先ほどの失礼はお詫びする。事情があるのだ。話を聞いて欲しい」
アーシャが膝を折って懇願する。

「・・アンス。下がって治療を受けてこい。その怪我では辛いだろう」
アーシャを無視してアンスに優しい言葉をかける
「いえ!!この程度の怪我、大丈夫です」
アンスは嬉しくなって強がる。

「そうか。なら別の仕事を与える。城内の兵士達と共に触れ回り、城内の領民に声をかけて外壁の上に集合させろ。不安を感じておるようだからな。これから面白い見世物が始まるといえ」
「はい!」
「それからハッツ。パンと清潔な服と行水用の水を用意せよ。怪我をしているようだから、治療ができる魔術師もな」

ハッツと呼ばれた兵士に指示をだす
「御意。ドンコイ様のお慈悲に彼らは感謝するでしょう」
城内に帰っていくアンスとハッツを見送り、ドンコイは濁った目でアーシャを見つめた。

それからしばらく、何も動きもなかった。
アーシャは頭を下げ続け、ドンコイは冷たく見下ろすのみ。
そうしているうちに、城内の領民が外壁上に集まってきた。皆不安そうにしている。

ついにアーシャが痺れを切らした。
「兄上、何とか言ったらどうだ!!。私は謝罪しておるのだぞ」
大声で喚き散らす。普段の貴公子然とした姿などもはや面影もなかった。

「そうだ。早く城門を開けろ。太った豚め!」
「騎士団に対して諸侯は協力する義務があるはず!この事は陛下に報告するからな!」
「そうなったらそこの豚など勘当だ!!」
「もし我等を入れないと、この領内の村を襲って蹂躙してやる!」
追い詰められた騎士達が騒ぎ出す。彼らも必死だった。

「いいだろう。話だけは聞いてやろう。そこのアーシャを名乗る者よ。本当に本人なのだな?」
念を押すように確認する

「本人だ!!!見てわからぬか。この放蕩者の豚め!!」
アーシャが喚く。
その声は充分に城壁の兵士や領民たちにも聞こえていた。

「わかった。ならば貴様がアーシャだとして、なぜこの場にいるのだ。皇軍獅子騎士団は皇城内に詰めているはず。」
ドンコイが問う。
「何を白々しい事を。貴様が余計な差し出口を叩いたのであろう」
「差し出口？はて？何の事だ？」
「とぼけるな！貴様のせいで、我等は勇者を連れて来る命令を受けることになったのだ」
アーシャが言い募る

「私のせいとはさっぱりわからんが、まあ命令を受けたという事だな。それで、どうしてその様な姿をしておる。剣の一つもない素っ裸ではないか」
ドンコイが首をかしげる
「あの悪逆な勇者は、我等と正々堂々と戦う事もせず、罠にかけてだまし討ちにした。あまつさえ、我々を道具袋に閉じ込めたのだ。その上、騎士たる我々の装備をすべて奪い、泥にまみれた沼に叩き込んだ。あいつは勇者などではない。悪魔だ！」
アーシャが絶叫する。

（ふむ・・あの道具袋にその様な使い方があったとは。ただ無制限に物を入れることができる便利な魔具程度にしか思っていなかったが。しかも、袋の中に入れた物を『選別』することが出来るようだな。これはまた厄介な物だ。手に入れた者は幼児でも世界を征服できる。勝ち目はないな）
黙って考え続けるドンコイ。
アーシャが何事か喚き続けているが気にしない。

「聞いておるのか。この豚め！『騎士の杖』がない理由も納得しただろう。さっさと門を開けろ！！」
怒鳴り散らすアーシャ。

「待て。勇者様は以前、魔王を倒すために魔国に旅立ったという。お前もその旅についていったのではないか？風の噂では魔王を倒していただけたというではないか。それだから、騎士団は勇者様を迎えに来たのだろう？なぜ勇者様と戦う必要がある」

「ウッ。そ、それは・・」

言いよどむアーシャ。

「皇都では勇者様を送るために、国を挙げて盛大な祭りをしたではないか、私も参加したし、領民達の間でも話題になっていたぞ。その勇者様が魔王を倒したのだ。迎えに来るのは当然だが、なぜ勇者様と戦うのだ。そもそも、貴様がアーシャなら勇者様と共に魔王と戦ったはず。なぜ勇者様と共に帰ってこない。なぜ皇国にいて、騎士団と共に勇者様と戦うのだ。納得の出来る理由を説明しろ！」

鋭く責めるドンコイ。その言葉に、城壁の上の兵士や領民達らも不信感を感じ始めた。

「そうだよ。本物のアーシャ様なら、勇者様と一緒に凱旋するはず」

「なんで皇軍獅子騎士団が勇者様と戦うんだよ」

「あいつら、ただの素っ裸の盗賊じゃないのか？村を襲うって言ってるし・・騎士の態度じゃないよ」

そういった声が大きくなる。

「城内の皆も納得できたようだな。この男はアーシャではない。アーシャに似ている事を利用して、騎士団の名を騙る盗賊どもだ。本物のアーシャは勇者様や仲間と共にいずれ帰ってこよう。これ以上の問答は無用。去れ。それから、我が領内を襲った場合、カストール家の名にかけて地の果てまで追い詰めて皆殺しにする。いや、さっきの略奪発言だけで死刑に相当するな。弓兵、構え！！」

ドンコイの命令で弓兵が構える。

「待ってくれ。待ってくれ・・事情があるのだ！！」
アーシャが必死の形相で弁解する。
「だからその事情を説明しろと言ったはず。こちらを納得させる事もできず、貴様をアーシャだと認められるものか」
「すべてを話す。だから弓で射ることだけはやめてくれ・・」
アーシャは勇者生贄計画の事を話し始めた。

「ばかな・・・国が勇者様を裏切り、魔王に対して生贄にしただと！！」
「勇者様を利用して各国から財貨と財宝を提供させただと！！」
「勇者様が魔王を倒したからといって、邪魔になった勇者様を殺そうとしただと・・」

城内の兵士や領民たちが驚愕する。以前勇者の護送に参加しなかった騎士団の一部も驚く。
いつの間にか城下町の領民の殆どが外壁に出ていて、アーシャの告白を直接聞いていた。その数は千人以上になっていた。

「アーシャ様なんかじゃない」
若い少女がつぶやく
「アーシャ様はその様なことはしない」
小さな少年がつぶやく。小さな手に石を拾う。
「貴様がアーシャ様であるものか！」
城内の若い兵士が拾った石を投げる。
それは瞬く間に全員にひろがり、無数の石礫が騎士団に降り注ぐ。

「グッ　やめろ、やめてくれ・・」
「くっ、ちくしょう。なんで誇り高き我々騎士団がこのような目にあうのだ・・」

皇軍獅子騎士団の騎士たちは何千人もの人々に石を投げられ、全身に傷をおった。
彼らは元々貴族の次男三男や富裕な市民の出身であり、今まで周囲から期待されもてはやされていた。
このような屈辱は一度も味わった事はない。

「城内の者達よ。もうやめよ。偽者なのはアーシャを名乗るあの男だけであり、他の者は違うかもしれぬ。」
大きな声でドンコイが命令する。
永遠に続くかと思われた石の投擲はやんだ。

「アーシャを名乗る者以外の騎士に問う。アーシャは誇り高き騎士だったはずだ。その男が本物のアーシャだと言い切れるか？」
ドンコイの言葉に動揺する騎士たち。
「か・・彼は常に我等といた。本物であることはまちがいない」
騎士団の幹部が言う。

「本当に言い切れるか？姿を変える魔具など、その辺の店でも売っておるのだぞ？」
「バカな。私のこの姿をみろ。何処に魔具などつけておる」
アーシャが素っ裸で声を張り上げる。

「簡単な事だ。その様な魔具を体に埋め込めばよいだけだ。貴様がアーシャを殺して成り代わった魔族でないという証明は騎士としての誇りだけだ。本物のアーシャがその様な計画など思いつくはずがない。勇者様と共に轡を並べて魔王と戦うはずだ。」
ドンコイの言葉がアーシャを追い詰める。

「何を言うか！私は本物だ！」
もはやアーシャは恐慌を起こしていた。彼は始めて本性を現した兄

に対して恐怖を感じていた。

（な・・なぜだ。こいつはただ放蕩を繰り返す無能者だったはずだ。なぜこいつは私の命令をきかない？なぜ城内の者がこいつに従って私に石をなげるのだ。なぜ言葉だけで私をここまで追い詰めるのだ）

騎士たちのアーシャを見る目がどんどん冷たくなっていく。もはや、この場のすべての者がアーシャに敵意を示していた。

追放

ドンコイが隣にいる護衛の剣を抜き、城壁の外に落とす。

「アーシャを名乗るものよ。自害して自らの身の潔白を証明しろ。貴様が魔族でないなら死ねば魔法玉はでないはず。その場合でも、勇者様への裏切りの責任を取ったとして、残りの騎士の命は助けよう。もし貴様が魔族であったならば、残りの騎士は騙されていたということで、その場合も命を助けよう。上に立つものの責任として、潔く散って見せよ」

ドンコイの言葉にすべての人が納得してアーシャを見つめる。

アーシャは震える手で剣をつかんだ

「ハッ」

そのまま、気合と共に剣をドンコイに投げつける。

平地であったら、アーシャの体力が万全であったら、その剣でドンコイを貫けただろう。

しかし、剣は虚しく城壁にあたり、そのまま下に落ちていった。

再び剣を拾おうと近づいたとき、目の前に影が立ちふさがった。

「・・見苦しい」

「貴様は確かにアーシャ様ではない」

「我等が化けの皮をはいでやる」

あわてて後退するが、背中にも影達が塞がる。

「もはや本物でも偽者でも魔族でも同じ事。『アーシャ』と言う高潔な騎士などこの場にはおらんわ!!」

その言葉と共に、周囲の騎士に殴られ、血反吐を吐いて倒れるアー

シャ。
その姿は騎士たちに踏みにじられて血だらけになる。

（アーシャ、お前は今まで自分をエリートだと思い、優れた自分は誰からも愛され慕われると思っておっただろう。そして、劣るものを見下し馬鹿にて、使い捨てにしても何の不都合もないと思っていただろう。勇者の件にしてもそうだ。優秀な者に陥りがちな罠にお前も陥ったか。お前ももう少し早く挫折を経験して劣る者の気持ちを理解しておれば、こんな事にはならなかったのに）

殴られ、蹴られてボロボロになるアーシャを見ながら、過去のことを思い出していた。
ドンコイは確かにアーシャより剣も学問も能力がなかったが、決して無能だったわけではない。ただ、親や師のいう事をそのまま受け入れるには賢すぎたので、逆に疎まれたのだ。

なぜ戦場に出ることもない貴族が見た目だけ派手な剣技を覚えないといけないのか？
なぜ市井の事情を知るより机上の学問が優先されるのか？
なぜ金銭のことについて詳しく理解しようと、金に拘る者は卑しいと侮蔑を受けるのか？

その様な考えにとらわれて日々の勉強におろそかになり、周囲に疎まれた。
なお悪い事に一つ下の弟は素直で可愛く、剣も学問もできるので、周囲に愛された。
だんだん弟も傲慢になり、兄を豚呼ばわりして馬鹿にしても誰もとがめなかった。

（これはダメだ。このような世間知らずで劣る者を見下す弟では、

平穏な時では何事もなく過ごせるが、危機に陥った時は自分で解決する事はできないだろう。カストール伯爵家の長男としてはどうすべきか）

その日から、ドンコイの辛く苦難に満ちた道は始まったのである。

常に優秀で見目麗しく、誰からも好かれたはずのアーシャは、地面にしゃがみこんで固まっている。

その姿を見ながらドンコイは思った

（優れた者が劣る者より負けている点がたった一つある。それは、優れた者はそれゆえに優れた行為を要求され続け、一度でもそれに反した行為があったらすべてを否定されるということだ。それは期待が裏切られた分、最初から劣る者にくらべはるかに苦しいものとなろう）

その結果が城門前に転がっている。

「もういい。殺すまでもない。裏切り者を自分達の手で制裁するということは、騎士としての誇りを忘れておらぬようだ。お前達を助けよう。城門を開け。柔らかいパンを食べ、暖かいスープを飲み、水で汚れた体を拭き、清潔な服を着るがいい。治療出来る者も用意しよう」

「感謝いたします。慈悲ぶかき貴族であるドンコイさま」

騎士団達がいっせいに膝を付いて礼をした。

アーシャがふらふらと立ち上がる。

「き・・貴様。いつか必ず復讐してやる」

その言葉に周囲の騎士が殺気立つ。

「ふん。すべてをなくした徒手空拳の身で私に復讐できるなら、やってみるがいい。そうすれば、再びカストール伯爵家を継ぐ事がで

きるかも知れんな。もういい。兄の慈悲で、一度は見逃してやろう。どこへなりと行くがいい。」
「クッ・・覚えているがいい」
そのままフラフラと城門から離れて、何処へともなく消えていった。

騎士たちから、勇者の情報を聞き出してカストール伯爵に報告するドンコイ。
「結果はこうなりました。アーシャも情けないですな。自滅同然です。所詮、あやつには清らかな英雄としての役を貫き通すほどの器量もありませんでしたか。まさにメッキの騎士でしたな」
ドンコイがつまらなさそうに言う。

「だ、だが、こうなっては勇者を完全に怒らせてしまった。どうすればよいのか・・」
カストール伯爵が頭を抱える。

「ふふ。何を恐れる事がありますか」
「何か考えがあるのか？勇者を擁する魔王城は国境に聳え立っておる。配下には続々と人が集まっておる。いや、兵士など不要。あの道具袋を使えば、このカストール領、いや、フリージア皇国そのものが勇者に蹂躙されるのだ」
カストール伯爵が青ざめる。

「考えはあります。いや、どのような状況に陥っても、父上と私の覚悟さえあればカストール家は安泰です。我等が背負わされた役目はカストール家とその領民の保護。それさえ忘れなければ、いくらでも手はあります」
「ど、どうするのだ」
カストール伯爵はドンコイを見直した後、すっかりその知恵を認めている。

「私のやり方である『清濁を併せ呑む』方法が有用であることは父上もお認めいただけますか？」
「認めておる。それなればこそカストール家に責任が及ぶ事はなくなったのだからな」
「当然、この事態も考えられました。ですが、一人の人間が『清』と『濁』を同時に行うなど現実には不可能。今まで『清』を担っていたアーシャが使い物にならなくなった以上、父上に『清』の役をしていただかねばなりません」

「・・というと？」
「父上は騎士団と共に皇都に赴き、事情を説明してください。私は勇者が攻めてくるようであれば、勇者に膝を屈してフリージア皇国に背きます。そうして、父上は皇都で状況を見るのです。もし勇者に対してまだ敵対するのであれば、父上は討伐軍に参加するのです」
「なんだと！！」

「フリージア皇国が勝てばカストール家の再興がなり、勇者が勝てばフリージア皇国が滅びようともカストール家は存続します。父上は本気で私を殺す気で攻めてください。勇者不利とみれば、私は故意に負けて首を打たれます」
「ばか者！！もはやアーシャもおらん。私の世継ぎはお前しかおらん」
「大局を見据えてください。あと、この地を離れる時、この者たちを連れて行って欲しいのです」
領地の方々の村に住む者の名前が書いてあるリストを渡す。

「この者たちは・・？」
「私が放蕩を重ね、方々の村で作った子供達とその母の一部です。貧しい暮らしをさせてはおりますが、最低限の教育は施しておりま

す。中にはカストール家の後を継ぐにふさわしい者もおるでしょう。父上の孫達です。大切に育ててください」

「お前は・・」

「どんな状況の時でもカストール家が生き残るようにする。これこそ父上が仰っていた貴族の義務なのです。」

「そうだな。私よりよほど貴族としてしっかりしておる。誇りに思うぞ」

「ふふ。あえて放蕩息子として罵声を浴びておりましたが、褒められるのもなかなかいいものですな」

初めて見せる清清しい表情でいう。

「父上が皇都に旅立った後、私も勇者に会いに行きましょう。その人柄、考え、フリージア皇国に対する扱いなど、直接会って探るべきです。私も一応彼と面識がありますからね。カリグラ王子の取り巻きとして、彼を笑ったことがあります」

「・・大丈夫なのか？」

「問題ありません。勇者の前で土下座して非礼を詫びます。そこで私を処断するようであれば、勇者を攻める口実にも使えます。各国も勇者の対応を知り、彼を警戒するようになるでしょう」

「お前は・・またそのような・・」

「勇者に対する情報を多く持つことで、カストール家は優位に立てるのです。私の身など知れたものです」

「わかった。死ぬなよ」

「ふふふ。逆に勇者が皆に尊敬される真なる勇者ならば、私はいち早く彼に接触することで巨大な利益を得るかもしれませんよ」

「そうであってほしいものだ・・」

「では、我が領の宝物・金貨をお持ちください。そして、これが『清』に属すべき人材です。彼らもお連れください」

家臣のリストを渡す。

「わかった・・。これが今生の別れかもしれぬな」

「ふふ。その様な事をおっしゃるとは、父上もまだまだ思慮が浅い。私はどちらも生き残れるよう、まだまだ知恵を絞る気です。」

「ははは。お前ならそうするだろう。私はお前に割り振られた『清』の役を果たそうとしよう」

二人は別れを惜しむように、夜通し語り合った。

宿屋（前書き）

もう少しで１００万ＰＶに届きます。皆様ありがとうございます

宿屋

カストール伯爵と騎士団が皇都に旅立った後、家臣にカストール城を任せてヒノモト城に出発するドンコイ。
「それじゃ、後は任せたぞ。爺」
「はい。ドンコイ様もお気をつけて。もはや御身はカストール家の後継ぎなのですから」

アーシャの無様な姿を見て、騎士団幹部からアーシャの陰謀が事実だと知らされたカストール家の領民は、すっかりアーシャに失望していた。
逆に、毅然とした態度と、騎士団に対しての慈悲を見せたドンコイの評判はうなぎのぼり。
カストール伯爵が出発前に、ドンコイをカストール家の後継ぎとして正式に認めた事や、今までの放蕩はカストール家を守るための演技であった事を知らされて、領民はドンコイを慕うようになった。

ドンコイと護衛の４人の馬車は領民の見送りを受けてヒノモト城に旅立った。
「やれやれ後継ぎになると、羽を伸ばせなくなって窮屈なものだな」
兵士に話しかけるドンコイ

「ドンコイ様?今までの放蕩は演技だったのでは?」
アンスが聞く
「演技・・だったんだが、途中から気楽に楽しめるようになった。アーシャが失敗しなかったら、一生楽しめたのにな」
ハハハッと笑うドンコイ
「しかし、笑われるとずいぶん印象が変わりますね。私は貴方が放蕩を繰り返すので、何回も殴ってやろうかと思っていたのに。そん

なに明るく笑われると、あの暗くてじめっとしていたドンコイ様ではないみたいですよ」
ハッツが言う。

「カストール家にとってはそのままの方がよかったのだがな。策謀の才が必要とされるのは、平和が破れた乱世での話だからな。無邪気にアーシャのような美男子で強い騎士がもてはやされる時代が続く方がよいのだ」
ドンコイがしみじみという。

「ですが、ドンコイ様がいらっしゃったら、俺達は安心できますよ。これからもお願いします」
他の護衛たちが言う。
「あまり期待されても困るのだが・・まあなんとかやってみるか」
和気藹々と話しながら馬車は進んでいった。

「これは・・なんという大きな外壁だ。しかも国中を覆うように囲っている。皇都の壁よりも高い」
ヒノモト城の外壁が見えてきた所で、ドンコイは感心する。
「下手に大勢の兵士を連れてこなくてよかったな。何万人を集めようともあの壁は破れぬ」
「そうですね・・」
呆けたようにアンスが言う。

「止まれ。お前達は何者だ」
門の兵士にとめられる。
「私達は、フリージア皇国辺境伯カストール家の使者です。私は伯爵家世子ドンコイ・カストール。父に代わり、謝罪と挨拶に参りました。ぜひヒノモト王にお取次ぎをお願いいたします」
持ってきた手紙を兵士に渡す。

「フリージア皇国か・・挨拶はともかく、謝罪とな？」
「数日前、この国を襲った皇国獅子騎士団を率いていたのは、アーシャ・カストール。カストール家次男です。もはや勘当したも同然ですが、父に代わり兄として謝罪にまいりました」
「・・わかった。しばらく門の外側で待つように」
手紙を持ってヒノモト城に伝達にいく兵士。

「ね、ねえ、ドンコイ様？アーシャ様のことまで正直に言うのはまずかったんじゃ？」
「隠してもいずればれる。今から覚悟しておけ。もっと心臓に悪い事が起こるかもしれんぞ」
「俺・・帰っていいですか？」
ハッツがビビる。
「まあ、大丈夫だ。最悪でも私の命だけで済むだろう」
「ドンコイ様・・わかりました。俺たちも覚悟を決めますから」
護衛たちはドンコイを囲んだ。

４時間ほど待った後、返事が帰って来た。
「うむ。入城を許されたぞ。ここから入ってまっすぐ行くと、内壁門の前に『勇者の宿』という宿屋が建っている。後ほどそちらに使者を遣わすので、そこで待機せよとの命令だ」

「わかりました。お役目ご苦労様です。これは少ないですが、酒代にでも」
ドンコイが5アルを握らせようとする。
「せっかくだが、そういった物は一切受け取らないようにしておる」
兵士達が断る

「なぜでしょう？何か御気に触る事でも・・」

ドンコイが首をひねる。
「そういったワイロは国の信頼を落とすのでな。我等のようなワイロを受け取りやすい立場にいる兵士は、定期的に道具袋の中に入れられて、『ワイロを取っている奴出ろ』と審査されてしまうのだ。まあ、その様な事をされずとも、ワイロなど取るつもりはないがな。この国は今までとまったく違った国になりつつある。我等の待遇もよい。下手なことはできぬよ」
明るく笑う兵士達。

（これは・・道具袋に選別の機能がついている事は予想できたが、その様な使い方もできるのか）
ドンコイは感心する。
「わかりました。貴方がたの対応も我が国に伝えますね」
「うむ。気をつけていくがいい」
兵士達と別れて外壁内をすすむ馬車。

内壁に近づくにしたがって、建築中の家が見えた。
「ずいぶん変わった家だな。煉瓦ではなく石の組み合わせで作っているのか。しかも、組みあがるのが早い」
「ええ、しかもそこそこ大きな家ですね。皆2階建てですよ」
「あの屋根の上を通っている管はなんでしょうね・・」
物珍しそうに見回す一行。
ガタンと音がして何かに乗り上げる。その後、急に馬車のゆれが少なくなった。

「？これは？石を敷いて道路にしておるのか」
地面を見ると、家の壁と同じような石が地面に敷いていた。
「なるほど、こうすれば揺れは少なくなるし、雨が降ったときも道路がぬかるむ事もない。面白いな。皇都ですら道路は土のままなのに」

また感心するドンコイ。
「なんだか、変な街ですね」
ますます不安になったようなアンス。
「いや、こういった発想をするという事は、勇者は少なくとも民を虐げる発想はなかろう。労働者達も生き生きと働いておる」
そんな事を言っているうちに、内壁の前にたどり着いた。

内壁門の横に『勇者の宿』と看板が書かれた二階建ての大きな建物があった。
一階には大きな食堂もついている。
「ここだな」
「はい。では宿を取りましょう」
護衛の二人が馬車に残り、ドンコイたち3人が宿に入る。
「いらっしゃいませー」
明るい声で迎えられた。

「私は、ドンコイ・カストールと言う。カストール領からの使者である。5人で宿を取りたい」
「はい。お話はうかがっております。お荷物と馬車をどうぞ」
犬族の若い女性が受付をする。
「はい。それでは、お部屋にご案内いたします。」
奥から受付の女性より少し年齢が高い犬族の女性が出てきて、部屋まで案内した。
（ふむ。よくしつけられておるな）

部屋に入る5人
「お客様、本日はよく当宿『勇者の宿』にお越しいただけました。私は女将のショリと申します。なんなりとお申し付けくださいませ」
ショリと名乗った女性が言う。

「ドンコイ様、綺麗ですねこの部屋」
「広くてベットもちゃんとあって・・部屋の中に風呂までついていますよ。あれ、これはなんだ?ああ、服をかけるところか。」
護衛たちがはしゃいでいる。

ドンコイは苦笑すると、ショリと名乗った女将に向き直った。
「ふむ。少し聞きたいのだが、時間はいいか?」
「はい。なんでしょう」
「以前はこの平原には何もなかったと思うのだが、この街を作ったのは勇者様か?」
「はい。勇者様のご指導により、一ヶ月でこのような街ができたのです」
「一ヶ月で・・。そうか。それで、勇者様はどのようなお人だ?」
「勇者様は素晴らしい方です。奴隷を解放し、貧民を救い、仕事を与えていただきました。私にとっても命の恩人でございます」
誇らしげに言う。

「命とな・・?」
「以前、私は病気で死に掛けておりましたが、ある日勇者様がこられて、『エリクサー』という高価な薬を与えてくださったのです。それだけではなく、娘も奴隷から解放していただけました。今はこの宿を勇者様から委託されて働かせてもらっています」
「なんと・・エリクサーなど名前しか知らぬ。一応大貴族である私も見たことはない」

「はい。それだけではなく、仕事まで与えてくださったのです。娘は今もお側で侍女として働いております」
「そうか・・。勇者様はお優しいのだな」
「はい。それに、街の者にいろいろな娯楽を与えてくださったり、便利な家を作っていただいたり。美味しい料理を考案していただい

たり、持ち運びに便利で何ヶ月も腐らない食品を開発していただいたり。この街の住人は一人残らず勇者様に感謝しております」

「・・・」

「よくこの宿にもご飯を食べにこられるのですよ。下の娘などはおそれおおくもお兄ちゃんと呼んで懐き、勇者様も優しく接していただいて・・」

ちょっと涙ぐんでいるショリ

「わかった。よく教えてくれた。これは礼だ」

1アルを手渡そうとする。

「いえ、当店ではお客様のそういったご好意は気持ちだけいただいております。それより、この国の事をぜひ広めてくださいね。勇者様はこの国に移住したいと希望すれば何人でも受け入れると仰ってます」

「・・・わかった。」

ショリが退出していく。

（これは・・別な意味で脅威だな。下手をすればわが領の民が流出しかねん。この国の良いところを学んで取り入れねば・・）

ドンコイは一ヶ月でここまで国を立ち上げる勇者を畏怖した。

塩田

ドンコイが宿屋に到着する前。

シンイチは元奴隷の漁師の訪問を受けた。

「兄ちゃん。いや王様、少し提案があるんだけどな」

「いいですよ。なんでしょうか？」

シンイチが気さくに聞く。

「おっと。まだ名乗ってなかったな。俺はフェーバーって言うんだ。よろしくな」

「よろしくお願いします」

フェーバーが自己紹介する。

「さっそくだが、俺は海の国に帰るのをやめて、この国で暮らそうと思うんだ」

「それはありがたいですね」

「よく考えたら船は魔族に壊されちまったし、今から誰かの船の雇われとして一からやり直さないといけねえ。それだったら、この国に漁村を作って漁師の網元になるほうがマシだって思えてな」

「でも、船はないですよ」

「そこでだ。王様は今から各国を回るんだろう？海の国に行ったときに、そこで何人かこっちに移住してもいいっていう漁師を雇って、船を買ってここにそいつらをよこしてもらえばいい。その間、俺はこっちで人を集めて漁村を作るってのはどうだい？」

「上手くいきますかねぇ」

「大丈夫さ。海の国にも一旗あげたいって野郎はいっぱいいるし、家を提供するって言えば来たがる奴は多いさ。俺も知り合いに手紙

を出して移住をすすめるからよ」
「そうですね。漁村を作って新鮮な魚を食べるってのもいいですしね。さっそく作りましょう」
「おう！さすが兄ちゃん。話がわかるぜ」

「それじゃウンディーネ。行って来るね」
「あっ・・陛下。お待ちください。まだ決裁の書類が・・」
「帰ってからするよ。シルフ。行こう」
シルフとシンイチとフェーバーは海に飛んでいった

「うーん。海に面しているといっても、平地があまりないねぇ。」
海と丘にはさまれて少しの砂浜があるだけだった。
「どうするのシンイチ？」
「とりあえず、丘の一部を『収納』」
道具袋の中に丘の一部が収納された。切り取られたような感じでスペースが出来る。

「これで平地が出来たから、ここを漁村スペースにしよう」
「初めて見たけどすげえなぁ。これだけで何年もかかるような工事だぜ」
「はは。自分の力じゃないですけどね」
「謙遜するない！あんたは立派な勇者だぜ！」
フェーバーが背中を叩く。

「それで、船を泊めるには桟橋がいるな。ここに作りましょうか」
「おう。頼むぜ。船が来るまでは、家を作りながらこの砂浜で塩でも作ってるからよ」
「塩・・ですか？」
「ああ、遊んでいるわけにはいかないからな」
「塩か・・。取り終えず、下が太くなる形で岩の桟橋でろ」

シンイチが海に手をつけて念じると、岩でできた桟橋が出来た。

「塩作りってどうやってやっているのです？」
フェーバーに聞く
「そりゃおめえ、樽で海水をくみ上げてばら撒く。海水を砂に染み込ませて、その砂を集めて煮炊きして作るやり方だぜ」
「うーん。やっぱり揚げ浜式製塩法か。もっと大量に塩を作るやり方があるので、協力してください」
「そうなのか？」
「すこし時間はかかりますけどね。ま、道具袋を使って塩を製塩するやり方が手っ取り早いんだけど、産業として継続的に成立させる為には別の方法で塩を作ったほうがいいですからね。シルフ、この近くで海面より低い土地ってあるかな？」
「うーん。北東のほうに砂地があるけど・・」
「よし。ちょうどいい。そこに行って見よう」

シルフとフェーバーと共にを飛行して、先ほどの浜から北東に1キロぐらい離れた砂地に移動する。
「シンイチ、何をするの」
「テレビでみた天日製塩法をやってみたいんだけど、道具袋の力で強引に作る。段々になるような形に土地を収納」
段々の形に砂地が削られる。

「相変わらずすごいけど、これでどうやるの？」
「ここまで海から通路を掘って、海水をここに入れる。1～2年かけて太陽と風の力で水分を飛ばして、段々と塩分が濃くなった海水を下に落していって、最後の段で充分に濃くなった海水を煮詰めて塩を取り出す。これで大量に出来るよ」

「・・王様、すげえ事考えるなぁ」

「砂地じゃ崩れるから、段々を石で組んでください。材料はここにおきますね。完成したら道具袋で海からの水路を掘りますから」
石材を取り出す。
「よしわかった。漁村作りと塩田作りは任せておきな」
「よろしくお願いしますね。水産大臣」
「はは、このおれっちが大臣か。よっしゃ、やる気が出てきたぞ！」
喜ぶフェーバー。彼の元に人や魔族が集められ、漁村作りが行われる事になった。

ヒノモト城に帰り、ウンディーネに報告する
「・・というわけで漁村と塩田を作るから、ウェーバーさんに予算渡して自由に作らせて」
「かしこまりました。塩がたくさん出来ると国家の収入が増えますから、楽しみですね」
ウンディーネがニコニコと笑う。
「うん。新鮮な魚と塩は豊かな食卓に欠かせないからね。船を買う予算も計上しておいて」

「はい。ところで、フリージア皇国のカストール領から使者が来ております」
「使者？」
「なんでも、ドンコイ・カストールを名乗っています。謝罪と挨拶をしたいと」
「謝罪？なんで？フリージア皇国の謝罪ってわけじゃないんだろ？」
「どうも数日前に攻めてきた、アーシャの兄らしいですよ。本人に代わって謝罪にきたそうです」
「うーん。明日の午前中に会う様に伝えて。今日は遅いから宿屋をとって待機してもらって」
「かしこまりました。そう伝えますね」
「うん。お願い」

「・・・それにしても、顔が真っ赤ですよ。どうされたんですか？」
「今日は一日中砂浜にいたからね。日焼けしちゃたかな？」
「それはいけませんね・・治療いたしますから、こちらへ」
ウンディーネが自分の寝室に招く。

「い、いいよ。こんなの別に大したことでも」
「王様の体調管理も私の仕事です。たとえ日焼けといえども、放ってけませんわ。・・それとも、ふふっ、怖いのですか？」
「い、いや、コワクナンカナイデスヨ」
「では・・こちらへ」

ウンディーネの寝室に初めて入るシンイチ。
香水のようないい匂いが漂っている。思わず吸い込んだ。

「はい。それでは、上着を脱いでベッドに横になってください」
「え・・？」
「ふふっ　脱いでいただかないと日焼けの治療ができませんわ」
ウンディーネが笑う。
「ハ・・ハイ」
上半身裸になってウンディーネのベットに横になる。ウンディーネの匂いに包まれるシンイチ。

「はい。それでは失礼して・・」
ウンディーネの指が背中に薬を塗っていく。
「ひぅ・・」
「ふふ。シンイチ様の背中、意外に広いんですね。」
「そ、そうかな」
「でも、毎日あちこちを飛び回ってお疲れのご様子。今日はマッサージをさせていただきますね」

ウンディーネの指が全身を優しくなでる。シンイチの体温は上がっていった。

いつのまにかウンディーネもベットに上がり、添い寝をしている。
「う、ウンディーネ?」
「ふふ　最近、ウンディーネと呼び捨てにしていただけるようになって、嬉しいです」
手をシンイチの胸に這わせる
「ひっ」
「あらあら、お顔がもっと真っ赤になりましたね。これは念入りに治療しなければ」
ウンディーネが抱きつく。全身から癒しの魔法が発せられる。

「ね、念入り?」
「私は今まで治療といえば手を触れていましたので、全身を使って癒しの魔法をかけるのは初めてです。・・・そうしたいと思った異性も」
ウンディーネも顔を赤らめる。

「ソ、ソウダスカ」
「・・・シンイチ様。王の義務として、世継ぎをつくるというものもあります。・・メアリーさんはシンイチさまの妻を名乗っていますが、彼女を王妃に迎えられるのでしょうか?」
「い、いや、別に今の所は考えてないけど・・メアリーは妹みたいなものだし」
「妹、ですか」
ウンディーネが嬉しそうな声をあげる。

「メアリーは家族である父と姉に裏切られて不安なんだよ。俺しか信用できない状況に陥ったからね。だから妻と自称しているんだ。

妻かどうかともかく、俺もメアリーを家族だと思っているし」
「そうですか・・・では、私は？」
「ウンディーネは・・姉だね。メアリーと同じように信用できるし」
「姉ですか・・」
ウンディーネが気落ちした声をだす。

「ごめん。馴れ馴れしかった？」
「い・・いえ。複雑な気分ですが嬉しいです。それなら、今は姉としてシンイチ様を支えますね」
シンイチをギュッと抱きしめるウンディーネ。
「ウ・・ウンディーネ？」
「ふふっ　可愛い弟ができたということで、今日は一緒に休みましょう。・・いい匂い」
体中に手を這わせ、首筋に口をつける
「ひ・・ひぃ。気持ちいいけど眠れない」
そのまま夜は更けていった。

天使

光の国ミラー。

この国には大陸全土で最大の信徒を抱える『光の聖霊』教団の大神殿があった。

フリージア皇国の大神官マリコルから手紙を受け取った教皇アルセル一世。

彼は既に７０代を超えた老人であり、杖をついて体を支えている。

「ふむ。勇者は魔王と結託し、世界を支配しようとしているか・・。どうおもう。ルイージ神官よ」

目の前に膝を付く長身の青年に問う。

「それは、ある意味魔王と結託という部分は間違っておりませんが、世界征服など言いがかりでしょう。私は直接勇者を名乗る少年と魔王を名乗る少女に会っております」

「報告は聞いた。奴隷に落されそうになったのを救ってもらったとか」

「はい。魔王を名乗る少女は、単に倒された魔王の魔法玉を継いだだけでしょう。彼女も心優しき少女だと思います」

ルイージと呼ばれた神官が言う。

彼は光の教団の間者として魔国に潜入中、ミスを犯してさらわれ、奴隷にされかけたのだった。

「そうか。他の間者の報告から、勇者は新しい魔王ノームと条約を結び、奴隷解放を成し遂げたという」

「勇者様ならきっとそうしていただけるでしょう。奴隷にされた者

たちもいずれ帰って来るでしょう」
「ふむ・・そうだとしたら、マリコルのいう事を鵜呑みに出来んな。教会が軽々しく勇者を裏切り者扱いにして、解放された奴隷が戻ってきたら教会に対して不信感がつのる」

「仰るとおりです。ここは、素直に勇者様を認めて、祝福すべきでは？」
「うむ。国王は魔王を倒した勇者に対して好意的だ。この上、奴隷にされた者まで解放されて戻ってきたら、国を挙げて勇者を歓待するだろう。下手にマリコルの話に乗ったら、民に加えて国まで敵に回る」
「では・・」
「いや、勇者が善なる者か、いと尊き方々にお聞きする。判断はそれからじゃ」
そういうとアルセルはルイージを退室させた。

そうしておいて、厳重に保管された宝物室から一つの鍵を取り出す。
「この鍵を使うのは教皇となって始めてじゃ。勇者が善なる者であってくれればいいが・・」
そうしておいて、大神殿の奥にある高い塔に向かった。

アルセルが向かった塔は『光の聖霊の塔』といわれる。
その塔の上では、この世界を作り見守る光の聖霊アマテラスの使者に会うことができるとされていた。
神聖な塔であり、教皇しか入ることを許されない。教皇ですらみだりに入ると天罰を受けるといわれていた。
よって、アルセルが即位して１５年になるが、一度も塔に入ったことはない。

「我等人の身には判断がつかぬ。天上の尊き方にお伺いを立てねば」

アルセルは塔の中に入り、杖をつきながら塔をのぼっていく。

高さが４０メル程の塔である。老人が上るのは辛い。
それぞれの階の部屋には、虹色の魔法石がぎっしり詰まっていた。
何度も止まり、休みつつも最上階にたどり着くアルセル。

最上階にある祭壇の前には、円卓になった7つの席があり、その内の一つに銀色の髪をした美女が座っていた。
背中には真っ白い二枚の翼が生えている。

部屋の入り口で立ち止まり、跪くアルセル。
「地上に座す者よ。何用でまいったか」
凛とした声が響く。

「尊き方よ。我等卑しき人の身に導きを」
「勇者を名乗る者についてか」
「かの者は善なりや？悪なりや？」
「悪」
一言で切って捨てる。

「如何なる理由をもって？」
予想外の判断にアルセルは動揺する。
「かの者、聖霊のつくりたもうた世界の理を混乱に導く者なり。おぞましき魔族と聖霊の子人族を混ぜあわせ、世界を混乱の渦に巻き込む者。魔族と人族は決して交わってはならぬ。それは光の聖霊アマテラスの意思なり」
「・・・・光の聖霊の意、確かに承りました。光の使者様の導きに感謝いたします」
一礼をして、アルセルは降りていった。

「光の使者の意を受けた。我等は勇者を人の裏切り者と認め、彼を敵とする」
アルセルは神官を集めて宣言する。
「何をおっしゃる。何かの間違いです」
ルイージが食い下がる。
「間違いではない。大天使ウリエル様から直接賜った神託である以上、お前は勇者に騙されているということじゃ」
「しかし！！」
「もうよい。下がれ！！」
ルイージが拘束される。
「我等は彼によって解放された奴隷達を国民として認めぬ。よって受け入れることはせぬ。そうすべての国の神殿に伝えよ」
そうアルセルは神官たちに命令する。その顔は苦悩で歪んでいた。

光の聖霊の塔

円卓には7人の翼がついた者達が席についていた。

「しかし、勇者も余計な事をしてくれたもんだな。あのまま魔王に倒されていたら、今頃すべての国中で戦いが起きていたのに」
緑色の髪をした大男が言う

「人間と魔族が和解などしたら、退屈な時代になってしまうからね。あの方もつまらないでしょう」
赤い髪をした少女

「我等の役目はあの方を喜ばせる事。勇者は確かに意表をつくやり方で魔王を倒し、あの方を喜ばしただろうが、その後が余計な事を始めているな。奴隷解放に魔族との和解など」

白い髪をした老人。
他の者もうなずく。

「それでは、次はどうするのですか？ミカエル様」
ウリエルと呼ばれた銀髪の美女が問いかける。

「うむ。この者を使おうと思う」
ミカエルと呼ばれた男の言葉と共に、中央の円卓にある男の姿が浮かんだ。

「く・・くそ。これからどうすればいいのだ・・」
あてもなくさまようアーシャ。
身にはボロをまとっている。持ち物も金もない。
途中の民家に忍び込みボロの服を手に入れることはできたが、金や武器を見つける前にみつかって追い回された。

「なぜだ・・なぜ英雄と呼ばれた私がこのような目に合うのだ。くそ、勇者め！ドンコイめ！俺は死なん。必ず復讐する」
呪詛を繰り返しながらさまよう。
そのうちに疲れて眠りにおちた。

「ぷっ　面白いね」
青い髪の少年が笑う
「大陸全土に響き渡った騎士が、このザマか」
黒い髪をした老婆が嘲笑う。

「ふふ。この男とは面識がある。まだまだ使える筈だ。三千年ぶりに光の王の依り代にしてもよい」
ミカエルと呼ばれた男が笑う。

「アレをまたやるの？」
「そうだガブリエル。そろそろ人口が増えすぎていた頃合いだ。二千年前は魔族を作る事で戦争の原因を作って人口を一定に保ったがな」
「ふーん。まあ良いか。僕達もたまには受肉して体を持ちたいしね」
ガブリエルと呼ばれた少年が言う。
「では、ウリエル。彼の元にいって癒してやれ。この『清光なる剣』をもってな」
「はい」
ミカエルの命令を受け、ウリエルはアーシャの元に飛んでいった。

「勇者アーシャよ・・」
耳に心地よい声が響く。
「勇者だと・・私は勇者なんかではない。勇者など悪魔だ・・」
朦朧とした意識で返すアーシャ。

「いえ、貴方こそが真の勇者。異世界から来た勇者は偽者です」
「・・なんだと？」
意識が覚醒してくる。目の前には背中に翼が生えた銀髪の美女がいた。

「貴方は、偽勇者を倒す使命を光の聖霊から与えられた真の勇者。いかなる困難にも立ち向かい、世界に混乱をもたらすあの者を倒すのです。この剣を受け取りなさい」
光り輝く剣をかざす美女。アーシャの汚れ傷つき膿にまみれた体が癒えていく。
「あ、貴方は・・」
「私は光の使者ウリエル。聖霊に認められし勇者アーシャよ。再び立ち上がるのです」

その言葉と共にアーシャの意識は再び薄れていった。

「今のは夢だったのか・・これは！」

手に一本の剣が握られていた。鞘から抜くと、自ら光り輝く刀身が現れた。

アーシャの体に力がみなぎっていく。

「ふふふ。何が勇者だ。この私こそが真の勇者。まっておれシンイチ。ドンコイ。すべて滅ぼしてやる」

狂喜するアーシャ。

その姿を7人の天使が笑いつつ見ていた。

会談

ヒノモト城。
アンリに案内されて、ドンコイが玉座の間に通される。

「弟の不始末、重ね重ね申し訳ありません。」
玉座の前でいきなり土下座するドンコイ
「いえ、別に弟がしたことで、そんなに謝られても。別に兄である貴方が悪いわけではないですし」
シンイチが玉座の上から言う。

「いえ、私にも罪があります。非才なる身で勇者様の本当の姿を見抜けず、カリグラ殿下と共に酒の力を借りて貴方様を侮辱いたしました。その罪を痛感いたしております。」
「そ、そういえばそんな事があったなぁ。だからってそんなに土下座されても・・」
戸惑うシンイチ。何歳も年上の人間に土下座されて、居心地が悪そうにしている

「いいえ。弟と私の罪は万死に値するでしょう。私をご自由に処断して、そのお怒りをお鎮めください」
土下座を続けるドンコイ。

「・・えっと、どうすればいいんだろう?」
なぜかちゃっかり玉座の隣に豪華な椅子を持ってきて座っているメアリーに聞く。

「・・・信用ならないよ。カストールの放蕩息子ドンコイって有名だもん。すっごく評判悪かったんだよ」

メアリーは顔をしかめる。

確かにドンコイは第一王子カリグラの取り巻きとして評判が悪かった。

メアリーは皇城で何度もその噂を聞いて、不快に思ったものである。

「メアリー王妃様。仰られる通りでございます。私は自らの卑しさを思い知り、後悔しております。なればこそ、わが罪を勇者様に裁いていただく事をお願いいたします。ただ、我が領の民たちには罪はありません。何卒お慈悲を賜りたく存じます」

土下座したまま言うドンコイ

「・・・メアリー『王妃』様？・・・反省しているみたいだから、許してあげたら？シンイチ」

「許すのはやっ！」

シンイチがあきれる。

「ヒノモト陛下。このように謝罪をしても、形だけでは私の心は伝わりますまい。貴方様の審判を受けたいと思います」

「審判？」

「はい。兵士の方々に、道具袋を使ってワイロを取ったか判断をされていると聞きました。では、私を道具袋に入れて『勇者に味方する者出ろ』と念じて見てください。それで私が出なければ、道具袋の中で永遠の虜囚となるでしょう」

「・・そんなことしてもいいの？」

「かまいません。審判を受け入れます。そうでないと、謝罪の意思も伝わらないと思います。」

「わかった。『収納』」

ドンコイの姿が消える

「勇者に味方する者でろ」
ドンコイの姿が現れた。

「おお・・道具袋に認められた。私自身も安心いたしました」
「・・わかりました。貴方の謝罪を受け入れます。顔をあげてください」
「慈悲深い陛下に感謝いたします」
ドンコイは立ち上がり、もう一度深く頭を下げた。

「これはお詫びの印です。どうかお納めください」
見事な宝飾がついた細い剣と、ダイヤモンドの首飾りを差し出す。

「この剣はカストール家の家宝『軽銀の棘』です。軽くて扱いやすいので、護身用に最適です。こちらの『健康の金剛石』は、かつて王室から降嫁された祖母の遺品で、身につけた者の毒や麻痺、病気などの身体異常を軽減し回復させる効果があります」
おしげもなく家宝を差し出す。

「こ、こんな高そうな物、いただけませんよ」
シンイチが固辞する
「・・・ボクはあのネックレス欲しい・・」
小さい声でつぶやくメアリー。

「ははは、陛下は無欲ですな。しかし、何らかの形で誠意を示すのは、過ちを犯したものの当然の行為です。でしたら、我が家から国王陛下と王妃殿下にお貸しするということでいかかでしょう。使用するものもなく蔵に入れておくのももったいない話ですからな」
ドンコイが笑う。

「・・わかりました。では、お借りいたします」
「やった」
「我等の謝罪を受け入れていただいて、ありがとうございました。隣の領地同士いろいろと話し合うこともありますが、何卒末永くお願いいたします」
ドンコイが頭を下げる。その時、タイミングよくドンコイの腹が鳴る。

「・・いや、これは失礼いたしました。この国についてから、謝罪を受け入れてていただけるか心配でろくに食事がのどを通らなかったのですよ」
ドンコイが照れたように笑う。
その言葉でシンイチの緊張がほぐれた。

「よろしければ、一緒に食事をされますか？ちょうど昼時ですし」
「ありがたい事です。この国を見て、その素晴らしさに感動していたところです。私も末端ながら政治に関わるものとして、ぜひご教授賜りたい。」
「ははは、大したことはしていないですよ」
穏やかに二人は話し合った。

（ふふ。どうやら勇者は『清』に属する者か。しかもアーシャと違い、私のような下の立場の人間を見ても見下す事がない。よく言えば善良、はっきりいえば幼いな。だが、少なくとも我が領地に攻めてくることはなさそうだ。ならば、利用してカストール家を有利にしよう）
あくまで勇者に対して味方はするが、同時に利用しようと思うドンコイだった。

昼食の席につくシンイチ達。
シンイチ、メアリー、ウンディーネ、そしてドンコイが着席する。
「陛下はいつもこちらで召し上がられているのですか？」
何の変哲もない普通の城の食堂である。周囲は兵士や使用人たちも食べている。
「ええ、食べる物も皆と一緒ですよ」
シンイチが答える。

「・・普通なら、国王は専用の部屋で専用の食事を取るものですが・・」
「そんな窮屈な思いはしたくないですよ」
「・・最初は私も諫めたのですが、陛下はお聞き入れにならないのです」
ウンディーネがため息をつきながら答えた。

「ボクは別にどっちでもいいけどね。兵士達とも普通に一緒に食べているし」
「王妃様が・・？」
「いえ、王妃というのはメアリーさんの【自称】です。本当は将軍です」
ウンディーネが自称を強調して言う。

「ムッ。でも、シンイチはボクのものだもん」
「・・俺の意思は無視ですか？」
「あの地下牢ではっきり『お前だけの勇者になってやる』っていったもんね」
「・・・はずかしいから言わないでよ・・ドンコイさんもいるのに」
シンイチが顔を赤らめて言う

「ははは。仲が良いですな。うらやましいものです」
いつの間にかドンコイまでほほえましい気分になる
（ハッ　いかんな。どうも調子が狂ってしまう）
心の中で気を引き締めるドンコイ。

「お待たせでーす。今日のお昼ご飯はトンカツですよ」
アンリが台にのせて食事を運んでくる。

「おっ。トンカツか。ラッキー」
「これは私も好物なんですよね～」
「美味しそう」
シンイチ達が言う

「・・・これは、何の肉なんでしょう」
ドンコイがおそるおそる言う。狐色のなんだかわからない肉?とパンと、水に浸した果物が運ばれてきた。

「ああ、ピギーの肉ですよ」
シンイチが平然という
「・・・ピギーですか?」
ドンコイが焦る

（なんだ・・私にそんな物を食わせようとは、これが仕返しなのか?だが、他の三人にも同じ物が運ばれているようにみえる）
「ええ、それじゃ、いただきます」
「「いただきます」」
シンイチと他の二人が唱和して、美味しそうに食べ始める
（???なんでこんな貧しい者が食べる肉を美味そうに食べるのだ）
ドンコイが周囲を見渡すと、兵士や役人達も食べている

（・・・ええい。食べてやる）
勇気を出して一切れ食べてみる
（うま?!）
今まで食べた事がないようなジューシーな味が口の中に広がる
「こ・・これは、本当にピギーの肉なのですか?」
ドンコイが聞く

「ええ、そうですよ。ははは、最初は皆そんな反応してましたね。作り方はですね・・」
食べながら説明するシンイチ
（そんな理由でピギーの肉を食べると体調を崩していたのか。そんな方法で調理できたのか）
心の中で必死に覚える
（この情報だけで、家宝分の元はとったな）
ドンコイの口元がニヤリとほころんだ。

「だけど、トンカツといったらやっぱりアツアツのご飯と一緒に食べたいねぇ」
食後のお茶をすすりながらシンイチが言う
「ご飯ですか?」
ウンディーネが聞く

「ああ、元いた国での主食なんだ。これくらいの小さい粒が鈴なりになっていて、色は薄い茶色で、沼地に生える穀物だよ。この世界にはないかな?」
「ラスの実のことですかな?しかし、あれは食べたら腹を壊すので、せいぜい家畜のえさにしかなりませんが。わが領地にもたくさん生えておりますが、むしろ雑草扱いで駆除に苦労している有様ですよ」
ドンコイが言う。

「もしかしたら、本当にお米かも。ウンディーネ、あるかな？」
「え、ええ。馬などの飼料に使われることがありますから」
「よし、今から持ってきてみてよ。」
シンイチが命令をする。

「やっぱり、お米だ」
運ばれたラスの実を見てシンイチが言う
「・・それを食べるの？なんかヤダ」
メアリーが嫌がる。

「ふふふ。今からやる事をみていたまえ。まず、臼でひいて・・」
臼で外の籾殻をはがす
「シルフ、風で籾殻を飛ばして」
「めんどいな～」
文句を言いながらも、籾殻を飛ばす。
「よし、次は空き缶に入れて、棒でひたすらつつく」
地味にひたすらつつくと、白い米が出来上がった。

「よし、それじゃとりあえず、お粥にして食べてみよう。ちょっと塩を入れて」
コトコトと煮立てる。
「完成！」
お粥を皆にふるまう

「・・美味しい」
「柔らかいです」
「美味しいね。お兄ちゃん料理もできるんだ。勇者様ってなんでもできるんだね」
アンリが褒める
「いや・これって料理なんてレベルじゃないんだけど・・ドンコイ

さんどうかしました」
下を向いて肩をふるわせているドンコイ
「い・・いや、何でもありません・・」
あわてて笑顔を作るドンコイ

（・・なんということだ。雑草が食料に代わるとは。我が領で飢える者はいなくなるぞ。戻ったらさっそく沼地を農地に開拓しよう・・しかし、このような情報をなぜ私にみせるのだ。単に馬鹿なのか、それとも我等にあまねく恵みをもたらす真なる救世主なのか・・）

なんとか利用して優位な情報を引き出そうといろいろ策略を練っていたが、何もしていないのにとんでもない情報が飛び出てきて、ドンコイはとまどっていた。

（これはもしかして、勝手にこの情報を使うと後から何事か要求されるかもしれん。先手を打っておこう）
ドンコイは疑う。

「ヒノモト陛下。ピギーの料理といいラスの実といい、素晴らしいですな。この事を我が領にも広めてよろしいでしょうか？」
ドンコイが聞く
「いいですよ」
シンイチがあっさり答える。

「ありがとうございます。それで、どのくらい上納をすればよろしいでしょうか・・？」
「上納・・・？」
シンイチが首をかしげる
「ええ。特にラスの実の食べ方は我が領に巨万の富をもたらすでしょう。何割ほど納めればよろしいか、先に決めておきたいのですが」
そういってシンイチの顔色をうかがう。

「そんなの必要ないですよ」
シンイチが明るく笑う
（そんな馬鹿な・・これが広まったら何十万、何百万アルの富を恒常的に我が領にもたらすのだぞ。絶対に何かある）
逆に疑いを深めるドンコイ。

「いえ、国家機密に匹敵する有用な情報を教えていただいたのですから、何割かは上納しなければ・・」
「そんなのいいですよ・・そうだ。ならば、お願いしたい事があり

ます」
（そらきた）
ドンコイが気を引き締める

「それでしたら、我が国にラスの実をどんどん売ってください。そして、わが国の物をどんどん買ってください」
「え？」
「新魔王ノームさんとの条約で、魔国との貿易は我が国が一手に扱う事になりましたが、各国との話し合いはまだなんですよ。今から買い手を探さないといけないので。」
「・・つまり、私に貿易の窓口になれと」
「ええ、よろしくお願いします」
「は・・はい。こちらこそよろしくお願いします」

（・・・何だこれは。我が領にとってどんどん有利に進んでいく。ふふふ、とことん利用しつくしてやる）
腹の中で笑いがとまらないドンコイ。

「それじゃ、こちらが我が国の取り扱い品です。」
ウンディーネが見本を見せる。魔国から入ってくる魔具やピクルの実、ケセルの実、そしてそれらを缶詰にした物。
特に缶詰をみて驚嘆するドンコイ。これらは宝の山に見える。

「いくらで貿易するは後ほど我が領の担当の者をよこします。さすがに細かい相場とかは知らないので・・」
汗を拭きながらドンコイが言う。

「お願いします。こちらは馬や馬車、ピギーや鶏、そしてラスの実や麦、鉄鉱石などの材料を輸入したいですね」
ウンディーネが要求する

「さっそくフリージア皇国から品物をとりよせます。そして、私がフリージア皇国に対して窓口になりましょう」
ドンコイ。手に入れた利権を確固たる物にしようと、既にフリージア皇国に対してどうすべきか考え始めていた。
「お願いいたしますね」
ウンディーネが笑う。その笑顔に見とれるドンコイ。

（ハッ、いかん。しっかりしなければ。これは戦争などしておる場合ではないな。フリージア皇国に謝罪させて、勇者との間を取り持つ。現在の国王を退位させて、元凶のメルト王女を処罰させて、カリグラ殿下を即位させて我が領の利権を認めさせて・・）
ブツブツと独り言を言いながら考えるドンコイだった。

「ドンコイさんはいつまで滞在されますか？」
シンイチが聞いて来る
「は。予定では、明日出発して帰るつもりですが・・そうだ。その前にフリージア皇国に対しての国書をいただけますか？私が説得し、勇者様に対する非礼を必ず謝罪させますので。何卒戦争などは・・」
ドンコイが頭を下げる

「まあ、今はもうそんなに怒ってはいないですから。この国を発展させる事に頭がいっぱいですからね」
シンイチが言う
「シンイチ陛下・・わかりました。今は話し合いをする用意があり、私に仲介を依頼するとだけ、書面でいただけますでしょうか」
「いいですよ。それではお願いします。ウンディーネお願いするよ」
「かしこまりました」
後でウンディーネが正式な国書を作ってドンコイに渡すことになった。

（やった。これでカストール家がヒノモト国に対して正式な外交を担当するようになった。命の危険を犯してまでやって来たかいがあった）
ドンコイが笑う。
「明日は一緒に街を回りませんか？私達が作った街を案内しますよ。」
無邪気にシンイチが言う
「喜んで。楽しみですな」
ホクホク顔で宿に帰るドンコイだった。

次の日、シンイチ、シルフ、メアリー、ウンディーネが『勇者の宿』にドンコイを迎えに来る。

「あ、お兄ちゃんいらっしゃい」
ミスリが明るく迎える。
「おはようミスリ。今日も元気だね。」
シンイチが頭をなでると、くすぐったそうに笑う。
「ドンコイさんはいるかな？迎えに来たんだ」
「すぐ呼んで来るよ！！」
元気に返事して、奥に入っていくミスリ。

少しして、ドンコイと護衛たちが転がるように走り出してきた。
「こ・・これはシンイチ陛下。皆様方。わざわざ迎えにきていただいたのですか？」
恐縮したように言うドンコイ
「ええ、そろそろ闘技場が開くからと思いましてね。一緒に行きましょう」
「お供いたします。しかし、陛下の護衛の方はいらっしゃらないの

ですか？」
シンイチ達は兵士を連れていない。
「普段は連れていないのですよ。このメンバーだけで一国の軍隊に匹敵するぐらいの強さがありますからね」
「そ、そうですか・・」

一行は連れ立って闘技場に向かった。
到着すると闘技場をよく見渡せる貴賓席に案内される

「これは・・・立派な施設ですな。皇都にもこのような物はない」
感心したように言う。
「はは、私の世界にはこういった娯楽を提供する場がありまして、作りました。さて、一回戦が始まるみたいですよ」
闘技場のグラウンドに司会が立ち、一回戦の説明を始める

「皆様、大変お待たせいたしました。これより一回戦「一般人によるバトルロイヤル」を始めます。賭けは一口1ギルで、上限が3口です。さあ、皆様こぞってご参加ください。」
その言葉と共に、魔族や人間の女性が観客席を回って掛札を売る。

参加者は胸に番号が書いてあるゼッケンをつけていた。３０人ほどいる。
「これは・・」
「一回戦は一般人ですからね。殆ど運試しみたいなものですよ。私達もかけましょう」
貴賓席に来た従業員からそれぞれ札を買う
「皆様、それでは開始いたします。スタート」
その言葉と共に、戦闘が開始された。

参加者が使う木剣には赤い塗料が塗られており、その塗料を相手に

付ければ勝ちとなる。
勝負がどんどんと進み、負けたものは退場していく。最後に17番の札の人間の若者が勝ち残った。

「だめだったか・・」
「まあしょうがないね」
「・・私は当たったみたいなのですか・・」
ドンコイが言う。
「おめでとうございます。帰りに換金所に持っていけば3アルになりますよ」
「これは・・幸先いいですな」
上機嫌になるドンコイ。

「では次、二回戦は集団戦です」
どんどんと消化されていった。

「よし。それじゃ、ボクは次出番だからそろそろ行くよ」
「ああ、メアリーがんばってこいよ」
「がんばってくださいね」
「あんまり苛めちゃだめだよ」
それぞれに声をかけられて、メアリーは選手控え室に行く

「??メアリー様も参加されるのですか?」
「以前気まぐれで参加したら、大人気でしてね。それから最後の締めとしてよく参加しているんですよ」
シンイチが笑う。

（メアリー様は見かけは華奢な少女なのだが・・。魔王の魔法玉を継いだというし、興味深い）
いつの間にかワクワクして待つドンコイ

「お待たせいたしました。ラストイベント。我等が将軍にて王妃（候補）のメアリー様。可憐なる容姿に魔王の魔力。ドラゴンに乗った姿はまさしく戦乙女。メアリー将軍ＶＳ勇魔兵団精鋭です」
ワーっと歓声があがる。

黒いドラゴンに乗ったメアリーが現れ、１０人の兵士と対面した。
「シ、シンイチ陛下。あのドラゴンは？？？」
ドンコイが焦る
「ああ、あれはメアリーのペットのペディーですよ」
こともなげに言うシンイチ
「・・・・・」

驚愕のあまり言葉もでない。ドラゴンなど、人間の騎士団が全員でかかっても大抵返り討ちにあう。
「まあ、それが普通の反応ですよね。従えるメアリーさんもですが、戦える兵士さんたちも相当なものですよ」
ウンディーネが言う。

「ドンコイさんは賭けはどうします？俺はたまには兵士達に賭けますね」
「・・・私はメアリー様にかけます」
賭けの上限である１アルをかける。

「それでは、始め！！」
開始の声と共に熱狂する観客達。

ドラゴンが炎を吐く。メアリーが魔法を使う。
兵士達が数を生かして取り囲む。飛び回る魔族。接近して魔力で強化した木剣をふるう人間。

ペディーの牙にくわえられて放り投げられ、退場扱いになる兵士。
魔力で結界を作ってメアリーの魔法に耐える兵士。
闘技場はすさまじい戦いに沸いた。

（な・・なんだ。私は何を見ているのだ。兵士達も一人一人が人間国の大将軍に匹敵するぐらいの強さだぞ）
その力に恐怖を覚えながら、熱い戦いに興奮するドンコイ。

「ハッ」
ドラゴンとメアリーの注意を前方にひきつけ、後ろから飛んで近寄る魔族の兵士。
気合と共にメアリーの背中に木剣を振り下ろす。メアリーに赤い塗料がつく。
「そこまで！！なんと、勇魔兵団の初勝利！」
司会が絶叫する。観客が沸く。

「ありゃー。負けちゃったよ。キミたち強くなったね」
傷つき疲れてへたり込んでいる兵士達に声をかけるメアリー

「そりゃ・・」
「毎日みたいにドラゴンと戦ってれば、嫌でも強くなりますよ・・」
「そ・・それより。がんばったご褒美に・・ハァハァ」
兵士達の息が荒くなる。

「うん。ヒール」
兵士達に治癒魔法をかけるメアリー

「「「きもちよか～」」」
恍惚とした表情で兵士達は立ち上がって手を振る。観客達は一斉に拍手をした。

もちろんドンコイと護衛たちも拍手をしていた。
（ハッ、拍手している場合ではない。あの強さは尋常ではない。もしこれが実戦だったら・・）
ドンコイは勇者達の軍事力にも恐怖した。

劇場

闘技場から出る一行。
「さて、それじゃ次は劇場に・・・・って？」
シンイチが劇場に行こうとすると、ウンディーネに腕を掴まれた。
「陛下にはお仕事があります。書類がたまっているんですよ」
冷たい顔で言う

「・・そうだね。劇場なんて行かなくて良いよね」
反対側の腕を掴むメアリー。

「ふ、二人とも、これもドンコイさんにこの街を案内するといった大事な仕事であって・・」
腕をつかまれながら必死で言うシンイチ
「ふふ。私は知っているんですよ。あそこに行く度に女の子からちやほやされて・・」
「この間劇場の控え室で一番人気の子に抱きつかれていたんだってね」
二人から黒いオーラが立ち昇る。

「な・・なんでそんな事知ってるの？はっ」
シルフを見る
「キャハハ。私は諜報大臣としていろいろ報告する義務があるからね～。あーんな事やこーんな事されたのも報告しているよ」
「・・・裏切り者」
シルフを睨むシンイチ

「ふふ。これからゆーっくりとお話いたしましょうね。大丈夫ですよ。私も治療魔法得意ですから」

笑顔いっぱいでいうウンディーネ
「・・あんな事されたんだってね。ボクにもまだなのに・・妻としていろいろ教育しないと」
「・・・助けて・・」
「ふふ。それじゃドンコイさん。劇場はあの建物ですから、楽しんでいってくださいね」
ウンディーネとメアリーがシンイチを引きずっていった。

後に残されるドンコイと護衛たち。
「・・・なんだかなぁ～」
アンスが息を吐く
「あの戦いを見た後じゃ、メアリー様が怪獣に見えますね。シンイチ陛下は大丈夫でしょうか？」
ハッツがおびえて言う。
「ふふ。あの二人を攻略した方がよいかも知れんな。どれ、劇場とやらに行って見るか」
ドンコイたちは劇場に入っていった。

「会いたかったの～　貴方に会いたかったの～」
「恋をするたび頭がポンッ」
劇場では２０人くらいの可愛い少女が、フリフリの衣装を着て歌を歌いながら踊っていた。
周囲には若い男性達が、人間魔族問わず熱狂していた。
彼女達は笑顔でそれに答える

「うわっ　この熱気。すごいですがうるさいですね」
ハッツが言う
「え？ここって何なんでしょうか・・」
アンスがいまいちついていけないような感じで言う。

「・・・・・」
「ドンコイ様?」
「会いたかったの～」
「!!」
「メイド服を着せないで～」
「これは!!」
ドンコイの目が熱病に冒されたように潤む。いつの間にか周囲の男たちと肩を組んで踊っていた。
「まずい!!!」
「正気に返ってください!!!」
護衛たちが必死にドンコイに声をかける。

「ええい!!邪魔するな。私はもう伯爵家など知らん!!放蕩者に戻る!!」
ドンコイが暴れる。
「は、早く出よう」
護衛たちがドンコイを引きずって劇場から出た。

（ハッ。これは・・。民衆をここまで熱狂させるとは。危うく罠にはまるところであった。しかし・・心地よい）
外に出ると、ドンコイが落ち着く
「すまんな。いささか正気を失っていたようだ」
「い・・いえ。元に戻っていただければ」
護衛たちが一安心する。

「ふう。なんだか汗をかいて疲れたな」
「ドンコイ様、ここは何の施設でしょう。結構賑わっているみたいですが」
アンスが建物を示す。『スーパー銭湯　癒しの湯』と看板が出ている
「入ってみようか。こうなったら毒喰らわば皿までだ」

ドンコイたちは銭湯に入っていった。

「ふう」
「はぁ」
「あーー」
広い湯船に漬かってリラックスするドンコイたち
「これはいい物だな・・風呂に入ることはあったが、ここまで広いのは初めてだ」
「俺たちなんか入ったこともないですよ～」
ハッツが感動したように言う。

「しかし、上級貴族でもない民衆が、格安で風呂を利用できるとはな」
「この賑わいでは低料金でも相当儲かっているみたいですね～」
「・・・今までの政治のやり方を根本的に変えておるな。貴族だけが楽しんでいた娯楽を、民衆に解放することで、逆に貴族がより一層儲けることが出来るとは・・。カストール城に帰ったら、出来る事から始めてみよう」
ドンコイが感心したように言う。

「そういえばドンコイ様も大貴族なんですよね。俺たちと普通に裸で風呂に入っていますが、いいんでしょうか？」
アンスがつぶやく
「ふふふ。皇都でこんな事してたら確実に不敬罪だがな。しかし、この国は貴族然とした者がいないな」
「そういえばそうですね～」
「こうして風呂に入ってみれば、貴族も平民も人間も魔族もないな。いろいろ策謀をしていたのが馬鹿馬鹿しくなってくる」
心底リラックスした様子で風呂につかるドンコイ

（ふふ・・シンイチ陛下。なんだか完全に負けた気がしますが、不思議と清清しい）

湯上りのリラックスした様子で街を遊び歩くドンコイ。何年ぶりかで穏やかな気分になっていた。

翌日、ヒノモト国の国書を携えて、カストール領に戻るドンコイ。

「ふふふ・・今回の旅はたくさんの物を持ち帰ったな。お人よしな勇者に対する情報、カストール領に巨大な利益をもたらす食料の情報、外交の相手として認められたという立場、ヒノモト国の軍事力に対する恐怖、そして麗しき歌姫達への思慕。風呂を癒しにするという発想。正直さすがの私も腹いっぱいだ。」

ドンコイがつぶやく

「私などは頭のなかグチャグチャですよ・・」

混乱したように言うアンス。

「ドンコイ様が正気に返ってくれてほっとしましたよ。あのまま放蕩者に戻るんじゃないかと不安になりました。」

ハッツがいう。

「私が後継ぎでさえなければ、金を持ってヒノモト国に逃げるのだが・・アーシャを切り捨てたのは我が生涯最大の失敗かもしれん」

真面目な顔でいうドンコイ。

「冗談でもそんな事言わないでくださいよ・・怖いですから」

「ふふ。では、我が領に帰ったらさっそく・・」

「さっそく？」

「劇場を作る！！」

「まずい！！！正気にもどってない！」

護衛たちと騒ぎながら帰っていった。

未遂

馬車の中で、銭湯で見た演劇を思い返すドンコイ。
「あの演劇は正直堪えたな・・戻ったらあのジジイと同じ事をしてみるか」
ドンコイが言うと、アンリとハッツが食いついた。

「私はスケサンでやってみたいです」
「私はカクサンでやります」
「というと、私はあのジジイの役か？確かにな・・」
帰ったら徹底的に街を捜査して、現実にやってみようと思っているドンコイだった。

ヒノモト国「癒しの湯」での事

風呂から上がり、冷たい麦茶を飲んで休んでいると、いまから劇が始まると従業員が振れまわっていた。
それを聞いた客達が大きな部屋に入っていく。

「ここでも何か劇が始まるのかな？」
「見てみましょうか」
ドンコイたちも入っていった。

「お待たせいたしました。それでは開催されていただきます。『ミート老公』」
その言葉で幕があがる

一人の老人と二人の青年が旅をしている。
そうしていると、若い女性が人相の悪い男達に囲まれる。

青年が割ってはいる

「なんだてめえら」「いいからやっちまえ」
男達をなぎ倒す二人の青年
「おぼえていろ」と逃げていく男達

「娘さん。大丈夫ですかな?どうして襲われていたのでしょう?」
と老人が聞く
「はい、おじいさま。実は商売仇の宿屋が、お代官様とぐるになってうちの宿を閉めろと脅しておるのです。いう事を聞かないから私をさらって・・」
娘が事情を説明する。

ドンコイたちは話に引き込まれ、娘に同情した。

場面が変わって代官の館
「お代官様。山吹色のお菓子でございます」
アル金貨を満載した袋を渡す
「ふふふ。『エチゴ屋』そちも悪よのう」
それを受け取る太った代官
「娘はお代官様に献上いたしますので・・」
二人でぐふふを笑いあう

「・・・あれ?」
「誰かに似ていませんかね?」
護衛たちがジト目でドンコイを見る
「わ、私は娘を誘拐などした事はないぞ・・山吹色の菓子をもらった事はあるが・・」

【じーーっ】

「わ、わかった。二度とせんからそんな目で見るな」
（くっ　客観的に見るとなんという悪党だ。これはなにか？私に対するあてつけか？）

突然その場に踏み込んでくる青年と老人
「いや、お代官様の悪事、確かにこの目で見ました」
老人がいやみったらしく言う
「なにをこのジジイが！出会え！出会え！」
役人たちが飛び出してくる

「スケサン、カクサン。懲らしめてやりなさい」
二人の青年が役人をなぎ倒す。頃合をみて老人が止める
「ひかえい！！！！！」
「ひかえおろう！！！！」
突然、二人の青年が大声をあげる

「こちらにおわす方をどなたと心得るか！！」
「恐れ多くも先の大公であらせらせる、ミート老公であるぞ！！」
一人の青年が家紋が入った袋を取り出す。

「ご老公の御前である。頭が高い。控えおろう！！」

ははーーっと代官や商人、役人が平伏する

「代官の悪事、このミート確かに見届けた、おって厳しい沙汰があろう」
老公の一喝に観念する代官と商人

「娘さん、これで安心できますな」
「はい、ご老公さまのおかげです」

感謝する娘
「うむうむ。かっかっかっか」
最後に大笑して幕が下りた。
客達は感動して前におかれている箱にどんどんお金を投げ入れていた。

「これは・・気持ちいいですな」
「うん・・まさに世直し。上に立つ人はこうでないと」
涙を流して感動する護衛たち

ドンコイも感動していた
（・・・うむ。やはりこうでないと・・ハッ　現実はこんな物ではないぞ・・だが、これを理想として切って捨てるわけにもいかん。少なくとも民に対してはこのように公正でないとな。帰ったら不正を行っている役人を捜査して探し出し、このようにしてみるか）
すっかり影響されるドンコイだった。

ドンコイが帰って少しした頃。魔国各地から解放された奴隷達がすべて集合した。
隣国のフリージア皇国の奴隷とその隣の光の国ミラーの奴隷は直接ヒノモト国で解放され、皇国まで自分で帰ることになった。
残りの国の奴隷達は、シンイチとシルフが道具袋に入れて連れて行くことになった。

「それじゃ明日出発するから、メアリー、ウンディーネ。留守を頼むよ。」
二人にヒノモト城を託すシンイチ。

「もう、なんでボクも連れて行ってくれないんだよ～」
メアリーが膨れる。
「しょうがないでしょ。メアリーは将軍なんだから国にいなきゃ。ウンディーネには実際に国を見ていてもらわないといけないし」

「まかせてください。シンイチ様が帰ってくるまでしっかり国を守ります。でも、すぐに帰ってくださいね」
シンイチに甘えるように言う。メアリーがシンイチを睨みつける。
「わ、わかったよ。シルフがいるし、一ヶ月以内に各国を回って帰ってくるから」
「シンイチは私が守るから安心していね」
シルフが安心させるようにいう。

「それじゃ、今日は早めに寝るよ。お休み」
食事をしてすぐに寝室に入るシンイチ。すぐに眠りに落ちた。
しばらくたった頃、シンイチの部屋の前にくるメアリー

「メアリー将軍？陛下はお休みですが・・」
ドアの前の護衛の兵士がいう
「今日は二人ともういいよ。夜はボクがシンイチを護衛するから・・」
顔を赤らめていうメアリー

「ですが・・」一人の兵士が言おうとすると、隣の兵士に鳩尾を突かれる
「・・失礼いたしました。ごゆっくりお楽しみください」
ニヤニヤしながら兵士は同僚をつれていった。

「楽しみってなんだろ？ボクは久しぶりに二人で寝たかっただけだ

けどな。しばらく会えないんだし」
シンイチの部屋に入る。ベッドの上のシンイチは既に寝ていた
「シンイチの寝顔って結構安心するんだよね～」
そんな事をいいながらパジャマに着替えてベッドに入る

「・・ん？誰？メアリー？」
誰かが入ってきたので起きるシンイチ。
「そう、ボクだよ。しばらく会えないから、今日は一緒に寝ようとおもってきたんだ」
「・・・？え？って！メアリーにはちゃんと自分の部屋があるでしょ！」
意識がはっきりして大声をだすシンイチ
「一緒に寝るのダメ？」
上目遣いで言うメアリー
「・・・わかったよ」
一秒で陥落した。

「ふふふ。一緒に寝るのナムールの街以来だね。シンイチあったかい」
無邪気に抱きついてくるメアリー
「ソ、ソウダネ」
一部のみならず全身が硬直するシンイチ

「ねえ。シンイチはボクの事、好き？」
「・・・好きだよ」
「だったら何で王妃にしてくれないの？」
「まだ王妃とか早いから・・俺１７歳だし、メアリーだって１４歳でしょ？」
「それくらいで結婚なんて王族だと当たり前だけどね。でもいいや。まだって事はいずれ王妃にしてくれるんでしょ？」

「い・・いや、それは・・」
「ボクはずっと待っているから」
そのままシンイチに抱きつき続ける。しばらくしたら眠りに落ちた。

「やれやれ・・・確かにメアリーは可愛いけど、妹みたいな感じなんだよなぁ。」
そう独り言を言うシンイチ
その時、扉がひらいて、美女が入ってきた。

（な・・なに？なんなの？）
とっさにベッドの上のメアリーに布団をかぶせて隠す
「シンイチ様。お休みのところを失礼いたします・・」
薄い服を着たウンディーネがベッドに入る。
幸い、無駄に広いベッドなので寝ているメアリーは気づかれかった

「ウ、ウンディーネ？どうしたの？」
シンイチの声が裏返る
「明日からしばらく会えないので、マッサージをしに来ました・・」
ウンディーネの匂いに包まれる

「い、いいよ。」
「そんな・・私などもう必要とされないのですか・・？」
上目遣いで聞いてくる
シンイチは０．５秒で陥落した
「オネガイシマス・・」

全身をマッサージされるシンイチ
「気持ちいいですか・・？」
「キモチイイデス」
天にも昇る気持ちよさだった。

「シンイチ様・・以前私の事を姉のようだとおっしゃってましたね・・」
首すじにウンディーネの息がかかる。
「は、はい」
「・・今はそれでもいいです。ですが、いずれ私との間に子を為していただけませんか・・」
ウンディーネがぴったりと体を密着させる
「こ、子？」
「はい。魔族の人生は長いです。ですが、本当に心から愛せる人を見つけるのはとても難しいのです。私は王妃の地位など必要ありません。ただ、シンイチ様の命尽きるまでお側に置いていただければ・・」
そのまま首すじに口をつける
「ひぃ・・。な、なんでもします」
「本当ですか？では、今からさっそく・・」
シンイチの上に覆いかぶさるウンディーネ
「ひっ、脱がないで！！心の準備が！！」
シンイチが大声を上げる。
「・・うるさいなぁ・・」
メアリーが起きてくる。
数瞬後、二人が同時に叫び声を上げる。
その隙にシンイチは逃げ出し、その日の夜は食堂の隅で寝る羽目になった。

森国

この世界「オールフェイル」は丸い形の大陸が東西に広がり、その間を細い通路がつながっている形になっている。
北部分が魔国になり、南部分が人間各国だつた。
その間の部分にシンイチは狭間の国ヒノモトを建設した。

ヒノモト国から出発して、右回りに各国を回る予定である
シルフが風を起こし、二人は空を飛んで森の国に飛んでいった。

それに先立ち、新魔王ノームから各国に使者が使わされていた。
森の国ミールの王、エリック・ミールの前に跪く魔国の使者。

「以上の経緯により、新魔王ノーム様は勇者と条約を交わし、奴隷の解放と魔族コロニーの撤退を約束されました」
淡々と伝える使者。
「それは、我が国にとって悲願というべきものだが」
「いずれ、勇者様がこちらに解放された奴隷をつれてやってくるでしょう」
「うむ・・。ありがたいことだ」

「勇者様は貴国に捕らえられて奴隷とされている魔族の解放にも尽力すると約束されました」
「もし本当に魔族コロニーが撤退されて、我が国民が解放されるなら、必ず解放すると誓ってもよい。できれば、その後も平和条約を結びたいのだが。」
「勇者様との取り決めにより、そういった交渉はすべて勇者様が間に入ることになっております。とりあえず、我等は貴国の占領地より撤退いたします」

魔族の使者はそういうと、魔族コロニーに撤退の命令を伝えるために飛んでいった。

「・・本来は喜ばしいことなのだが・」
「光の国の大神殿の教皇様から、勇者は人間の裏切りものであり、解放された奴隷は穢れているので国民として受け入れるべからずと通達がきております」
森の国の大神官が言う。

「うむ・緊急会議を開く、おもだった貴族と将軍を召集せよ」
ミール国王が命令する。

貴族たちを集めた会議では議論が紛糾した。
「勇者は前魔王を倒し、新魔王と条約を結んだ。奴隷も解放してもらえ、間にはいって交渉もしてもらえる。魔族のコロニーもなくなる。よいこと尽くめではないか。ここまで勇者が誠意を見せたのだ。我々もそれに応えるべきだ」
貴族達が口をそろえて言う

「・・・だが、それらは我々を油断させて、世界を征服する為の罠かもしれん。現に、教皇聖下は勇者を悪と断じた。」
神官達が反論する

「そもそも、これは政治判断だ。坊主が口出しすべきことではない!!」
「我等を無視すると?天罰が下るぞ!!」
だんだんと両方の口調が激しくなる。

「神の僕があきれる。今までなんの役にもたたなかったくせに、魔王が倒されたとみると口を挟みおるか。貴様等は今まで何をしてき

たのだ！！」
貴族達が罵る

「卿らこそ！どれだけ今まで戦おうとも魔族を追い払えなかったではないか！」
「だからこそ、我等ができぬ事をしてもらえた勇者に対して敬意を払うのが当然ではないか！」
「・・だ、だが、教皇は光の聖霊の使いから、直接勇者を悪とのお言葉をもらったとのことだ」
神官が反論する。

「ふん。どうだかな。そうやって聖霊を持ち出して、自分たちの権勢を広げたいだけだろうが」
「聖霊の代理人たる我等が教皇に対して侮蔑するか！！」
神官が激昂する

睨みあう両者。
「・・・もうよい。神官どの。これは政治に関わる話。いかに教皇のお言葉とはいえ、せっかく奴隷から解放された国民を受け入れるなと言う指図は我等はうけいれられぬ」
「・・ですが・・」

「そもそも、勇者が悪だという根拠は？」
「魔族と交わり、世界に混乱をもたらす者だからです。人と魔族は交わってはならぬとは、光聖霊アマテラス様のご意思です」
「なるほど。わざわざ、解放された奴隷達も受け入れるなという細かい指示まで天使様は出されたのかな？」
「・・いえ。それは世界の混沌を防ぐための当然の処置で・・」
「わかった。しかしのう、勇者はすでに狭間の地にて国を作っておる。そうして、魔国と人間国を分断しておるのだ。これはむしろ、

交わらないようにしているということにもならぬか？」

「・・・確かに」

「つまり、我等は彼に対して味方もせず、積極的に関わる事もしない。解放された奴隷を受け入れ、貿易は必要な範囲でするが、人間の交流は国としては行わない。こんなところでどうであろう。もちろん、魔族と交わるなという指示に従い、厄介者の魔族の奴隷も引き取ってもらう」

「それなら、確かに教皇様に対しての言い訳は立ちますな。奴隷達は勝手に戻ってきたということにして、国は関知してないことにすれば」

「うむ。神官殿も本心では奴隷を受け入れたいのであろう」

「はい。わかりました」

納得して引き下がる神官達。

「決まりだ。勇者が来たら、失礼のないようにな」

国王が命じる。森の国としての方針は定まった。

森の国ミール

ミール城から少し離れた広場に降り立つシンイチとシルフ。

「ここらでいいかな？ミール国出身の奴隷でろ」

シンイチが道具袋から奴隷達をだす。

「ああ・・この森の匂い。まちがいなく故郷だ」

「この日をどんなに待ち望んだか・・」

「すぐさま陛下に知らせます」

奴隷達はシンイチに一礼すると、ミール城に帰っていった。

程なくして、立派な馬車と騎士団が迎えに来る。
「魔王を倒した勇者であり、新しき国『狭間の国ヒノモト』の国王陛下であるシンイチ様でしょうか」
騎士団長が丁寧に問いかける
「はい」
シンイチが返事をする

「おお、魔国から使者がきてからというもの、何日もお待ちしておりました。それでは、この馬車へお乗りください・・失礼ですが、お付の方々は??」
「あ、そういえば。護衛とアンリでろ」
道具袋から5人の護衛とアンリがでる。

「プハッ。やっと出られた。おじさん達ばっかりで怖かったよ～」
アンリがシンイチにすがりつく。
「よしよし、ごめんな」
頭をなでるシンイチ。

「・・ともかくお乗りください。街の者たちも首を長くして待っております」
シンイチを乗せた馬車はミール城へ向かった。

中立

ミール国の国王に謁見するシンイチ

「勇者にして狭間の国ヒノモトの王、シンイチ陛下。このたびは魔王を倒し、わが国から魔族の脅威を取り除いていただいて、誠にありがとうございました。心より感謝いたします」
エリック王が感謝の意を伝える

「いえ。自分の為にしたことです。それで、エリック陛下にお願いがあるのですが・・」
「はい。大体の事情は魔国の使者より聞いております。魔国と人間国の間に永世中立を誓う国を作り、今後は戦争をおこさないように双方の仲介を取っていただけるとか。素晴らしい思想です。私どもの方からお願いいたします」
「そういっていただけるとありがたいです」
シンイチはにっこりと笑った。

「後ほど、呪力条約紙をお持ちいたします。わが国はヒノモト国に魔国との交渉の権限を依託し、ヒノモト国とも中立の立場に立つことを誓約致します。また、ヒノモト国を相手に貿易をすることを認め、捕虜になり奴隷に落された魔族を解放いたします」
ほぼシンイチの要求が通り、ヒノモト国とミール国の間で中立の条約が結ばれた。

道具袋から貿易品を大量に取り出し、森の国の取り扱い品である大量の木材、蜂蜜等と交換していく。
「今後は何ヶ月かに一度、商人として定期的に訪問するようにいた

しましょう」
シンイチが言う。

「こちらにとってもありがたい事です。それから、これをお納めください」
『森の杖』をシンイチに差し出す。
「これは、国宝クラスの武器ではないでしょうか・・」
「はい。わが国が総力を挙げて作り出したものです」
「でしたら、ぜひ貴国でお使いください。正直なところ、私は伝説の武器など装備できないのですよ」
ハハハと笑うシンイチ。

「ですが・・」
「それに、これ以後戦争も少なくなるでしょう。武器など不要です。ぜひ他の使い方を考えて使ってみてください」
「わかりました・・」
「それより、今後はもっと貿易を広げたいと思います。このような物を開発してみたので、ぜひ使ってみて、良かったら購入してくださいね。」
袋からメタンガス式コンロ一式を取り出して実演してみるシンイチ。
王や貴族達は新しい発明品や缶詰などに興味津々だった。

夜になり、シンイチを主賓としたパーティが開かれる。
シルフを肩に乗せ、アンリと護衛を伴って参加するシンイチ。いろいろな貴族に話しかけられ、なんとか笑顔で対応した。

「シンイチ陛下。実は、二人だけでお話したいことがあるのだが・・」
エリックが話しかける。
「よろしいですよ」

パーティ会場から離れた、隠し部屋に案内される。シルフだけは一緒に連れて行った。

「エリック陛下。それで、話とは・・？」
シンイチが切り出す。
「実は、光の聖霊教団に怪しい動きがあるのです・・」
エリックが警告する
「『光の聖霊教団』？」
シンイチが首をかしげる

「この世界の宗教だよ。この世界を作ったといわれている光の聖霊アマテラスと、その僕である7人の天使を崇める教団で、この大陸で一番の信者数を誇っているよ」
シルフが説明する

「この世界にも宗教ってあるんだ・・でも、そんなの実在するの？」
「実在するよ。といっても、私より上位の精霊に相当するから、情報をさぐれないんだけどね。歴史上何回か天使が暗躍したのを知っているし、光の聖霊の声も聞いた事もあるよ・・」
シルフが畏怖するように言う。
「失礼ですが、貴方は？」
エリックが聞く

「私は風の精霊シルフ。風は世界中をまわっているから、大抵の情報は手に入れられるんだけど・・正直あいつらの事だけはわからない」
「そ、そうですか・・精霊さま。わかる範囲で教えていただけないでしょうか。実は、光の国の教皇に、天使から勇者は悪であるという神託がもたらされたのです。そのせいで、国を割るようなことになりかけました。なんとか押さえ込んだのですが・・」

エリックが不安そうに言う。

「うーん。あいつらタチが悪いからね。わざと戦争が起きるように撹乱たり、不利になるような神託をする事も多い。少なくとも人間が魔族を敵視するようになったのは、少なからずあいつ等が争いを煽ったようなところもあるよ」

「マジかよ・・天使って神の使者じゃないのか」

「神の使者だから、人間を見下しオモチャにして遊んでいるんだよ。本人達は管理しているつもりだけどね」

「なんと・・」

エリックが絶句する。

「人間という種が生まれて最初の頃は光の聖霊もよく人間に直接神託を授けていたんだけど、いつの間にかあいつ等が全部代行するようになった。私もアマテラス様の声は数千年聞いていないね」

「たち悪いな」

シンイチがうなる。

「ただ、あいつ等自身もなんらかの制約があるみたいだね。教皇を除いて、神託を告げられるのは、不幸のどん底におちていて、なんの力も持たない一般人のみ。直接世界に影響をもたらす事ができる国王や権力を持つ役人、大金持ちなどには神託を告げて操る事はできないみたい」

「・・確かに。勇者の危険性を警告するならば、私のような国王に直接伝えるほうが確実だ。予備知識なしでそうされれば確実に信じてしまう」

エリックが恐ろしそうに言う。

「わからん・・そんな事して何がしたいんだ?」

シンイチが首をかしげる

「勇者が人々に嫌われ排除されるのを見るのが楽しいのか・・？戦争を起こして弱い人たちが悲劇に見舞われるのをみて喜ぶか・・？はたまた、気まぐれにそういった人を助けて感謝されたいのか？いずれにしろ、無条件で彼らを信じた結果、悲劇に陥った人を何人も見ているよ」

シルフが不快そうに言う。

「風の精霊さま。よく教えていただきました。国の多くの者が信じる宗教の教皇が勇者を悪とし、人と魔族が交わるべからずと公言している以上、表立って味方をする事はできませんが、逆にこの『魔族と交わる事を禁ず』とされた事を逆用して、『敵対する事は彼らに関わる事になる。よって中立を守る』と国民を抑えましょう。」

エリックが笑う。

「なるほど。物は言いようですね」

シンイチも思わず笑ってしまう。

「これからもよろしくお願いします。他の国でもおそらく意見が割れているようですから、先行してわが国から使者を出しましょう。勇者様はしばらくご滞在ください。今の話を伝えたうえ、実際に超常的な存在である風の精霊様から目の前で説明していただければ、彼らに踊らされて勇者に敵対する国はでないでしょう。『好意的中立』を保つように各国に提案いたします」

「何から何までありがとうございます」

シンイチが頭を下げる

「なに。好戦的な前魔王を倒し、魔族の脅威から救っていただいた救世主様に対してのささやかなお礼です」

豪快に笑うエリック。シンイチも釣られて笑い出した。

製紙

「しかし、本当に豊かな自然の国ですね」
見渡す限り森、森、森ばかりである
シンイチは森の国の使者が他の国につくまで数日間滞在することになり、森の国を見てまわっていた。

「我等の先祖は大乱の時に森に逃げ込んだ者たちでした。森に紛れ、隠れ住むうちに集まって国を成したのです。」
シンイチ達に同行する第一王子リチャード・ミールが案内する。

「こうしていると、癖で何か有益なことでもできないかなって思ってしまうけど・・。森の国の産業はやっぱり木なんですか？」
「はい。木材や蜂蜜、弓や矢、そして紙などですね」
「紙ですか・・それはやはり木材から作っているのですか？」
「え？？」
王子が怪訝な顔をする。

「いや、私達の世界では木から紙を作っているので・・」
そうシンイチが言うと、リチャードが食いついてきた。
「ぜ、ぜひその製法を教えてください。今は草から作っているのですが、木から作ることが出来れば・・」
必死の形相である。

「い、いや、私も図でしか見たことがないので・・」
若干引いているシンイチ。
「わかる範囲でいいのです。よろしくお願いします」
リチャードは頭を下げた。

「まず最初に言っておきますが、私は一般人なので紙の製法は殆どわかりません」
シンイチが念をおす
「それでも構いません。木材から紙を作れるというヒントだけでも、研究の価値があります」
王子が紙職人を集めて言う。
「わかりました。では、廃材や木材を集めてください」
職人が言われたものを用意する

「これらをなるべく細かく砕いたチップにして、何かの薬品を入れて分解するとパルプという物ができます。」
密閉した縦に長い筒の形にした岩を道具袋から取り出して、チップを中に入れて蒸して柔らかくするようにと指示する。

「今回は道具袋を使って分けてみます。『木のセルロース部分だけでろ』」
そうすると、木材パルプがでた。

「後は職人さんなら判るんじゃないかな?これを伸ばして水気を切って乾燥させたり、漂白したりして紙にするんです」
食い入るようにパルプを見つめる職人達

「なるほど・・」
「ここさえ分かれば木屑から紙が出来る」
「ありがとうございます。いろいろ研究してみます。魔法で分離するという事も出来るかもしれませんからね」
王子が頭を下げる。

「いえいえ、期待していますよ。森の国で紙が大量生産できるようになれば、我々もどんどん買いますから」

シンイチはあくまで一般人がなんとなく知っているような事を言っただけだったが、彼らにとっては目指す方向を知ることが出来て大喜びだった、

夜

リチャード王子から報告を受けるエリック王

「ふむ・・その様なことがあったのか」

「はい。方向性を示していただけるだけで大助かりですね。後は片っ端から薬品を入れて試してみたり、分離する魔法を開発すればよいのですから」

「勇者は異世界から呼ばれるという。眉唾ものだと思っておったが、そうともいいきれんな」

「その後、有用な情報を教えてくれた礼を金貨でしようとすると、断られた上に条件を出されました」

「条件か・・飲めるものであればいいが」

「それが・・ははは。一刻もはやく紙を安く大量に作れるようにして、ヒノモト国に大量に安価で売って欲しいそうですよ。あと、ヒノモト国の物もどんどん買って欲しいそうです」

「なんじゃと？つまり貿易相手として優遇して欲しいということか・・」

「はい」

「ふふふ。目先の金貨より、将来にわたっての貿易の利を要求されるか。なかなかしたたかなお人だ。先に技術を教えてもらう事で恩を受けてもいる。あなどれんな。」

「はい。王者としての一つの姿勢であるかと。利益を分け与える事で信頼が生まれる。私であればこの技術をわが国に抱え込もうとするでしょう。器の差でしょうか・・」

「器というより発想の差であろうな。森の国をも富ませる事で、貿易の相手として育てる。今までそのような発想はなかったが、彼の世界ではそこまで国家間の外交が成熟しているのだろう」
「・・彼の世界に行って見たいですね」
「ああ。」
二人は話し続けていった。

「ねえシンイチ。わざわざ紙の製法まで教えなくても、ヒノモト国で作ればよかったんじゃない？」
シルフが言う
「うん。木材だけ買ってきて、ヒノモト国で作って紙を売る方法もあるね」
「なんで、そうしないの？そっちの方が儲かるじゃん。シンイチはお人よし過ぎるよ」
シルフが言う
「でも、だとしたら森の国は何を売るの？木材を安値で買い叩かれて、貧乏になるだけだよ」
「・・確かに」
「ヒノモト国だけ豊かになるってのは、戦争の原因になりかねないんだ。一時的には良くても、将来は必ず禍根になる。ただでさえ貿易を一手に握るっていう特権があるんだ。これ以上は必要ないよ。そもそも、森の国が貧乏になったら俺たちの物を買う人もいなくなって、結局は損するだけだよ」
「そこまで考えているんだ・・」
「俺の考えじゃないよ。アヘン戦争の原因もイギリスが中国のお茶を買うのに、中国はイギリスの物を買わないという貿易不均衡が起こった、だからイギリスは売るものが無くなって麻薬を売るようになり、結局戦争で中国はすべてを失った。同じ轍を踏むわけには行かない」
「シンイチはすごいね」

「俺たちの世界がいろいろな経験を積んでいるというだけだよ・・」
（なかなか今の現実世界でも難しい事だけどね。すぐ大局を忘れて自分だけ得になるような行動をするから、全体としてみたら損になっているという状況は今の日本でも起こっているし・・）

その後、森の国は木材パルプの精製に成功し、紙が特産品となった。
今まで捨てていた廃材やチップが紙になるので、大いに潤う事となった。
森の国はこの技術を伝えたのは勇者であるとはっきり公言し、国を富ました勇者に国民は感謝した。
光の聖霊教団の森の国神殿も大神殿とは微妙に距離をとるようになり、勇者に対する悪評などは自然に消滅していった。

侍女

森の国大神殿
大神官は苦悩していた。

「陛下はああ仰っていたが・・リチャード王子を始め、国の貴族はかの勇者と交流しておる。私の孫が帰って来たのは良い事なのだが・・。もしこれらがすべて演技で、あの勇者が世界を破壊する者であったら・・」
震える手で手の中の小瓶を見つめる

「今なら、かの勇者が出発するときに、祝福を与えると称してこの毒薬を聖水として振り掛けるだけで、勇者は呼吸困難に陥って死ぬだろう。もちろん私もその場で八つ裂きにされ、孫を含めた民からは薄汚い裏切り者として永遠に汚名をかぶるかもしれん。それでも・・」
大神官は苦悩する。

「それでも、万が一でも民が害される可能性があるのなら・・」
「シンイチはそんな事をしないよ」
どこかから澄んだ声がする
「誰だ!!」
ベッドから跳ね起きる大神官
いつの間にか、薄い光を纏った小さな妖精がいた
「お前は・・？」
「私は風の精霊シルフ」
妖精が話しかけてくる

「シルフだと・・・初代魔王スパルタクスに力を貸し、魔国を作っ

た邪精ではないか。やはり、勇者は・・」
喚こうとする大神官。
ふいにいい匂いが漂ってきて、心が落ち着く

「落ち着いた？心が落ち着くフローラの花の匂いなんだけど」
「う、うむ。それで、そのシルフが何の用だ」
大神官が聞く
「まず、最初の誤解から解くけど、確かにスパルタクスに力を貸したけど、当時はそれが正しいと思っていたんだよ」
「ばかな！ピザンチウム帝国を滅ぼし、魔王となった者が・・ふぅ」
「はいはい。落ち着いてね。私はあの時、奴隷とされていた魔族に同情したの。今、奴隷とされた人間に同情して、シンイチに協力して解放したようにね」
「協力？？」
「私は今はシンイチに協力しているの。でもシンイチは魔王にはなってないよ。ただの人だよ。それは見ていればわかるでしょ？」
「ああ。不思議なほど魔力を感じない・・」

「そもそも、シンイチは魔王アンブロジアを倒したんだよ。そのまま魔国の支配者になる事も出来たんだよ。もしシンイチにその気があるなら、今頃魔族の大軍勢がすべての国に侵攻しているよ」
「確かにそうだ。わざわざ国づくりなどから始める意味が無い・・」
「つまり、シンイチには世界征服の意思なんかないの。自分の国を持つことで満足していて、世の中をいい方向に発展させようとしているんだよ」

「・・・だが、教皇様が天使様から勇者は悪であると神託を受けたといっておる」
「では、なぜその事を直接あなたに言いにこないの？」
「天使様は教皇様にしかお会いにならない・・」

「つまり、光の聖霊の意思の代弁者だといいながら、一部の者しか信用してないってことだよね」
「・・・」

「私は風の精霊。天使達と同様に光の聖霊から生み出された存在。だけど、ここ数千年光の聖霊様の意思は感じられない」
「・・なんだと？」
「あなた方の伝承にもあるはず。光の聖霊は以前は誰にも声を届けていた。迷いがある者に導きを直接与えていた。しかし、天使達が作られてからおかしくなった。彼らは彼らの意思でふるまい、気まぐれに神託を与えて世の中に戦争の種をまいていた」

「天使様に対して・・」
「その証拠に、魔族との戦いで一度も天使は人間の味方をしていない」
殴れらたような衝撃を大神官は感じた。
「そ・・そうだ。ただ単に魔族と戦えと命じるのみで、どれだけ激しい戦いにも天使様は姿を現さなかった」
「つまり、天使は人間と魔族を戦わせて楽しんでいるの。シンイチが魔族と人間の仲介を行うことで、戦争がなくなるのを嫌っている。同時に、次の戦争の対象としてシンイチを選んだんだよ。それがシンイチを悪だと断定した理由」

「・・私はどうすれば・・」
「とりあえず、しばらくは静観してほしいの。私も光の聖霊の意思を代弁するもの。世界をかけ巡り、停滞し澱んでいる古き物を新しい物に再生させる役割を担う精霊。シンイチの起こす変化を見守り、受け入れなさい」
いつの間にかシルフは神々しい光を放っていた。
「風の精霊さま・・お導きに感謝いたします」

跪いて感謝をささげる大神官。その目から迷いが消えていた。

「・・やれやれ、シンイチは無防備だから苦労するよね。ま、これも私の役割か。気に入らない天使たちの思い通りにさせるわけにもいかないからね」

そう独り言を言いながらシルフはシンイチの元に帰っていった。

ヒノモト城侍女アンリ

シンイチやメアリー達の身の回りの世話をする１０才の犬族の少女である。

可愛らしい容姿をしており、よく動く犬耳と尻尾はシンイチ達に毎日撫で回されている。

本人も自分を奴隷にされそうになった所を助けてくれ、母親の命を救ってくれたシンイチを実の兄のように慕っていた。

今回の各国周遊も無理を言って付いてきたのは、シンイチと離れたくなかったからである。

「ふふふ。これでしばらくシンイチ兄ちゃんを独占できちゃうし」

アンリは旅についてこられてご機嫌だった。

「兄ちゃん。おはよう。朝だよ」

シンイチを起こすアンリ

「・・もう朝かい？まだ眠い～」

「起きないと顔を舐め回しちゃうよ」

アンリが頬を舐める

「ひゃ　心臓に悪いからやめて。起きるから」

シンイチが起きて着替える。その間ずっと子犬のようにじゃれ付いていた。

子供用のメイド服に着替えて、シンイチと一緒に朝食をとる。

犬族は鼻が聞くので、毒見役の役割もあった。人間の鼻には無臭の毒物でも、犬族の鼻にはかすかな異臭がわかる
「うん。問題なし。いただきます」
スンスンと鼻を鳴らして食事をチェックしたあと、美味しそうに朝食を食べるアンリ。
シンイチはその可愛い仕草に癒されていた。

「えっと、今日の予定は・・」
「リチャード兄ちゃんとミール湖で魚釣りだよ。楽しみだね」
無邪気に喜ぶアンリ。

「わぁー。綺麗な湖」
「この湖はこの国の自慢の一つなんだよ。魚も良く釣れるよ」
リチャードがアンリの頭を撫で回す。彼もアンリに癒されていた
「よーし。みんな頑張ろう」
周囲を護衛に囲まれて、シンイチ、リチャード、そしてアンリが魚釣りを始める。

「釣れないね・・」
アンリの犬耳がペタンと垂れる
「おかしいな・・なんでアンリだけ釣れないんだろう」
シンイチとリチャードは大漁だった。

「ぶぅ。もう怒った。直接捕まえてくるもん」
いきなり立ち上がって、服を脱いで全裸になる
「ち、ちょっとアンリ」
シンイチが止めようとするが、そのまま湖に飛び込む
「いっちゃった・・」
「自由ですなぁ」
二人が呆れる。

「やった。一気に3匹」
口に魚をくわえ、両手に魚を掴んで水から上がってくる
「ち、ちょっとアンリはしたないよ。水着くらい着なさい！」
シンイチが焦る
「でも水着もってないし。よし、もっと捕まえてくるぞー」
言うなり再び飛び込む。
最終的にアンリが一番魚を捕まえてくる結果になった。

「アンリすごいな・・こんな特技があったんだ」
アンリを拭いてやりながらシンイチが言う。
「へへん。昔はお母さん病気でミスリも小さくて、ご飯を買えなかったから、川で魚を捕って食べていたんだよ。」
薄い胸を張って威張る
「・・・・」
「・・・・」
（（可哀相な話や・・））
シンイチとリチャードは心の中で泣きながら、アンリの頭を撫で回していた。

夜
シンイチが寝室に入るといつもアンリが遊びに来て、夜中まで話し込む。
「それでね。侍女のお姉さんがこんな事を言ってて・・」
子供だから警戒されることもなく、城のあちこちを好きに歩いていた。
侍女からお菓子をもらったりして話をする

「ふーん。今のところ俺の評判は悪くないみたいだな」
「当然、私のお兄ちゃんだもん！」

アンリは威張る

「はは。それじゃ、もう夜も遅いから、部屋に帰って寝なさい」
「いや！」
「即答?子供は寝る時間だよ」
「ここで寝るもん」
そういうとシンイチのベッドに入る

「・・・しょうがないな・・」
シンイチが添い寝をして、頭を撫でながらあやす。
「へへ。お兄ちゃんがいてくれるから安心だよ。これからもよろしくね」
「ああ。アンリもよろしくね」
そのうち二人は眠りに落ちる。
アンリは今の生活で幸せだった。

地国

「それじゃ、お世話になりました」
シンイチがお別れの挨拶をする。

一週間ほど滞在し、次の大地の国ガイルに向かうシンイチ達

「いえいえ、大したおもてなしも出来ませんで。また来て頂けるのを心よりお待ちいたします」
エリック王とリチャード王子、貴族や神官達が見送る。

「バイバイ。リチャード兄ちゃん。また来るからね」
アンリが明るく言う。
「うん。待ってるよ。あ、これはプレゼントだよ」
木で出来た小さな指輪をアンリに渡す

「これは？」
「僕が作った癒しの指輪。少しだけど、疲れを癒してくれるんだよ」
「ありがとう。とっても嬉しいよ」
とびっきりの笑顔で言う。リチャードは照れた。

【あれは・・】【王子があのような幼女が好みだったなんて・・】
後ろの方で貴族が何事か言っていたのが耳に入り、エリック王の顔が引きつる。
（うむ・・これからは魔族と自然に交わっていく時代が来るかもしれないが・・王子が幼女趣味というのは・・）
また一つエリック王の心配事が増えるのだった。

アンリと護衛を道具袋に入れて、大地の国ガイルに飛んでいく。

「上からみたら広い国だなぁ。一面見渡す限り麦畑だ」
「ここは大陸の食料庫になっているからね～。農業が盛んで各国に食料を輸出しているよ」
「そうか・・、見えてきたな。あれがガイル城か」
麦畑の中に城壁で囲った都市があり、その中央に大きな城があった。

ガイル城の城門前に降り立つシンイチ。

「止まれ。お前達は何者だ。空を飛んでくるとは、魔族の一味か！」
兵士達に止められる
「怪しいものではありません。ヒノモト国の国王、シンイチと申します」
シンイチが頭を下げて言うと、兵士たちはキョトンとして、次の瞬間大爆笑した。

「ははは、シンイチ陛下は、魔王すら倒した勇者だぞ」
「確かに少年と聞いているが、このようなひ弱そうな少年であるはずがない」
「面白い冗談だったな。さあ、怒らないから本当の身分を言いなさい」
幾分子供をあやすような言い方で聞いてくる兵士達。

「ねえ・・この場合、どうすればいいかな？」
シルフに聞く
「アレをやってみたら？癒しの湯の劇はシンイチが考えたんでしょ？」
「アレは恥ずかしいんだよ」
「でもせっかくこんなシチュエーションなんだよ・・ひかえい！ひ

かえおろう。この道具袋が目に入らぬか！！！」
いきなり大声を上げるシルフ
仕方なしに道具袋を掲げるシンイチ
「・・・別に普通の道具袋みたいだが・・」
兵士達は無反応だった。

「ハズした・・」
「もう。どうして道具袋に家紋を書いてないんだよ」
シルフがシンイチを責める。
「そもそも、家紋なんて決まってないでしょ！」
「あ、そうか」
グダグダになるシンイチ達。

「・・どうも怪しいな。君たちこっちに来なさい」
兵士達が怪しみだした。
「ち、ちょっと待ってください。ガイル国の奴隷達でろ」
道具袋から奴隷をとりだす。
一瞬で大人数の奴隷達が現れた。

「ああ・・・ついに帰って来た」
「間違いなくガイル国だ。故郷だ」
お互いに抱き合って喜び合う奴隷達。

「勇者様、ありがとうございます・・」
奴隷達は一斉に平伏してシンイチに感謝した。
「・・・結果オーライ？」
「いや、失敗だと思う」
兵士達はその様子を呆然とみていたが、あわてて城内に知らせを出した。

城内から迎えの騎士団がくる。その間にアンリと護衛も道具袋から出していた。
「門の兵士達が失礼をいたしました。勇者シンイチ様、心よりお待ちしていました」
青い髪をした偉丈夫の騎士団長が跪いて兵士達の非礼をわびる
兵士達は青くなって土下座していた。

「いや、失礼というより当然の反応ですから・・皆さんもすいませんでした」
シンイチが頭を下げる
「許していただけるのですか。勇者様はお心が広い・」
「許すも何も兵士さんは普通の反応でしたよ。さあ、頭を上げてください」
シンイチの言葉でようやく安心する兵士達だった。

ガイル国では、熱烈な歓迎を受けた。
既に用意されてた立派な馬車に乗り、街中をパレードする
「勇者様！」
「我等の救世主」
シンイチが手を振ると民衆は歓声をあげた。

しかし、しばらく進むと神官達がパレードの行く手をさえぎった
「勇者は悪なり！！」
「だまされるな！勇者は魔族と手を組み世界を征服しようとしている」
「勇者の手先となった奴隷達は我が国民ではない。すぐに追い出せ！！」
声高に喚き散らす

「貴様等！邪魔をするな」

騎士団が追い散らして解散させた。
「・・・失礼をいたしました。エリック陛下からの親書で充分に事情は理解しており、彼らにも説明したのですが、一部の者は天使を盲信しておるのです」
騎士団長が頭をさげる
「いえ。こういったことがあると覚悟はしていましたから。ご迷惑をかけて申し訳ありません」
シンイチも頭をさげる

「ふふ。噂通り寛大な方ですな。私は騎士団長にして第一王子のウェルニアと申します。リチャードの従兄弟でもありますよ。彼から伝書鳩で手紙をもらっておりまして、勇者に大して非常に感謝をしておりました。この国に滞在中は私が守ります。なんなりと申しつけください」
「ありがとうございます。よろしくお願いします」
一行はガイル城に入っていった。

「おお、勇者様、ようこそわが国にいらっしゃいました。我等一同、心から歓迎いたします」
謁見の間でガイル王が挨拶する
「ありがとうございます。お邪魔します」
シンイチが応える。

「ささやかながら宴席を設けております。さあ、こちらに。」
宴会場に案内され、ガイル王と並んで上座に座らされた。
ガイル王の隣はウェルニアがすわり、その隣は青い髪の美しいシンイチと同じ年ぐらいの少女が座っていた。
「紹介いたします。こちらは王子ウェルニア。そして隣がその妹で王女フェルニーです」
王子が笑顔で頭を下げる。王女は無表情だった。

「こら、フェルニー。挨拶しなさい」
ガイル王がたしなめる。
「・・・王女フェルニーです」
機械的に頭を下げて、そっぽを向いた。
（???何か怒らすような事をしたのかな・・初対面だよね）
シンイチは訳がわからず困惑した。

麦酒

食卓には豪華な料理が並んでいた。
牛や馬のステーキ。色とりどりの果物や野菜。いい匂いがするスープ。柔らかそうなパン。
食卓を見るだけでこの国の豊かさが分かる。
「乾杯！！」
ガイル王の音頭で皆が杯を傾ける。

かなり濃いワインだったので、シンイチはむせた。
後ろに立っていたアンリがスープの違和感に気づく。
【シルフちゃん。あのスープ匂いがおかしいよ。兄ちゃんに伝えないと】
【任せて】
シルフが姿を虫サイズまで縮めて、シンイチの耳の穴に入って話しかける
「シンイチ、あのスープは飲まないで」
「わかった」
シルフの警告を受けて、スープを飲むのを避ける。

「・・・勇者様はスープに手をつけられないんですねぇ」
突然、フェルニー王女が声をかけてくる
「い、いえ。実はスープの類が苦手なもので・・他の食事が美味しいので気が回りませんでした」
作り笑いを浮かべるシンイチ。
「それは我が国が総力をかけて作り出した最高のスープです。ぜひお召し上がりください」
フェルニーが圧力をかけてくる

（ど、どうしよう。そうだ。）
【シルフ、あの姿を現してスープの中に入って】
【なんで】
【頼むよ】
【なんだか分からないけど、まあいいよ】
姿を現してスープの中に入るシルフ

「あれ？こんな所に羽虫が入っている。すいません。新しいのをいただけますか？」
「かしこまりました」
侍女がすぐに新しいスープに取り替える
フェルニー王女が悔しそうに見ていた。

【シンイチ・・後で覚えておきなよ】
後からシルフに散々文句を言われる事になった。

「フェルニー。宴会でのあの失礼な態度はなんだ。お前は我が国に恥をかかせたいのか」
ウェルニアが妹を詰問する
「あのような男が勇者などと認められません。なにがヒノモト国王ですか。ただの貧弱な少年ではないですか。魔王を倒したのだって嘘に決まっています」
「お前はまたそのような・・」
「勇者は美しく、賢く、強くあらねばならないのです。それがなんです。気品の一つも感じられない」
フェルニーがこきおろす

「美しさと強さはともかく、賢くはあるようだぞ。あのリチャードが新しい技術を伝えられて感謝していた。我が国にも有益な技術をもたらしてもらいたいものだ」

ウェルニアが褒める。

「そのリチャード様が問題です。勇者は卑怯にもアンリとかいう女をあてがって篭絡したそうではないですか」

「あのな・・手紙には三人で釣りをして楽しかったとしか書いてなかったぞ」

「私が何も知らないとでも？指輪をその女に与えたと懇意の侍女が『通信魔石』で伝えて来ているのですよ」

独自のルートから得た情報を話すフェルニー。

「お前は・・緊急連絡用の高価な魔石をそのような事に使ったのか。あれは滅多な事では使ってはいけないのだぞ」

通信用の魔石は電話のような役割をするが、３回しか使えない。一つに２００アルかかるので、本当に緊急時にしか使われない。

「充分それに見合った価値はありましたわ」

フェルニーが言う。

「なるほど・・。勇者に対する態度はそれが原因か。だが諦めろ。父上の命令だ。お前は勇者に嫁いでもらう」

ウェルニアが命令する

「な？アレをみてまだその様な事をおっしゃるのですか」

「アレとはどの点をさすのかわからんが、私が見たところ勇者は寛容で礼儀正しく、妹の夫としてはふさわしい人物だと思うが」

「お　こ　と　わ　り　です」

フェルニーが大声を上げる。

「とにかく、これは父上の命令であり、私にも積極的に反対する理由はない。諦めろ。政略結婚は王族の義務だ。」

そういい捨てて部屋から出て行くウェルニア。

（許さない・・。絶対にこの国にいる間に排除してみせますわ。あいつとアンリとかいう女さえいなければリチャード様と・・）
ハンカチを噛みながら決意を固めるフェルニーだった。

「・・・と、言うわけで、フェルニー王女はシンイチに毒を盛ったみたいだよ」
王女を監視していたシルフが言う
「うーん。変な情報が伝わって妬まれたんだな。アンリの実物を見せたらすこしは誤解が解けるかな」
ベットの上で足をブラブラさせているアンリを見ながら言う。
「キャハハ。どうだかね～。リチャード王子が特殊な趣味を持っていると思われるんじゃない？」
シルフが笑いながら言う
「兄ちゃん。特殊な趣味ってなに～？」
目をきらきらさせながらアンリが言う。犬耳がピコピコと動き、尻尾が振られる。

「うっ。なんでもないよ。アンリは知らなくていいから」
「子供あつかいしてずるい。兄ちゃんなんか嫌い！」
拗ねて布団に潜るアンリ。
（うっ。嫌いって言われると結構くるものがあるな。まさか俺も・・いやいや、俺はノーマルだ）
首を振って邪な思いを追い出す。
「とりあえず、ガイル王から政略結婚の話がでたら、傷つけないように断ろう。」
「そうだね」
そうして滞在一日目の夜はふけていった。

次の日、ウェルニア王子、フェルニー王女と一緒に麦畑をみてまわ

るシンイチ
「上からみても思ったのですが、豊かな国ですね」
「ありがとうございます。私達はこの国が最も光の聖霊に愛されているのではないかと思っていますよ」
「・・・・・」
王子は愛想よく答えるが、王女は無表情で無言を貫いている。

「どうですかな。何かこの国に対してより良くする様な事は思い当たらないでしょうか？」
期待を込めて聞いてくるウェルニア。
「今のところは思い当たらないですが・・麦といえば。そうだ。昨日のお酒はワインばかりでしたよね」
「ええ。他国から最高品質のものを輸入しております」
「麦があるのにビールはつくってないんですか？」
「ビール？」
ウェルニア王子が首をかしげる

「ビールとは、麦から作るアルコールですよ。私の国では一番に飲まれています」
シンイチが答える
「そ、その作り方を教えてください」
ウェルニアが食いついてきた。

「ええと、それでは、芽が出た麦を用意してください」
シンイチが言うとすぐに用意された。
「まず、麦芽を加熱します。麦芽を粉砕して湯に入れて熱すると、糊状になります。それを濾しとって煮沸して、しばらく醗酵させれば一応出来上がりです」
シンイチが説明する。
「なるほど。麦芽が酒になるとは思いもしなかった。さっそく試し

てみます」
ウェルニア王子がよろこぶ

「あくまで一般人の知識なので、いろいろ改良の余地がありますから、試してみてくださいね」
「はは。リチャードの言ってた事がよくわかりますな。細かい知識はなくとも、方向性だけ示していただければ大助かりですよ」
そういって笑う王子。その隣で王女は冷たく勇者を見下していた。

ガイル城に帰ると、ガイル王に呼ばれた。
「シンイチ陛下。実は相談があるのだが、我が娘フェルニーを后としてもらっていただけないかな？」
ガイル王が単刀直入に言う。
「ありがたいお申し出です。しかし、非常に残念ながら、お断りさせていただきたいと思います」
「そうか・・。我が娘があのような態度を取ってしまい、申し訳ない」
ガイル王が頭を下げる

「いえ。フェルニー王女は美しく、后にできる男は幸せでしょう。しかし、私はどの国からも后を迎えられないのです」
「それは？」
「永世中立を掲げる手前、どこかの国の王族の方と婚姻を結ぶ事はできません。あくまですべての国に中立であるべしという国是に背くからです」
「なるほど・・」
「私には既に国で重要な地位についている王妃候補がいます。他国から王妃を迎えると、下手をしたら内乱になる可能性もあります」
「わかりました。それでは今後とも、我が国と末永くお付き合いお願いいたします」

「ええ。こちらこそよろしくお願いします」
そういって握手をした。

「ところで、重要な地位についている王妃候補って誰かな～？」
シルフが聞いてくる
「ノーコメント」
「へへん。当然わたしだよね」
アンリが抱きついてくる
「い・・いや。アンリは妹ってことで勘弁な」
「ぶう」
アンリが膨れる。
「そんな・・・私とはサイズが合わないよ。でも頑張れば合体できるかな・・」
「何の話をしとるんや！」
シルフのボケに突っ込みをいれるシンイチだった。

「・・という訳で、勇者にはお前の嫁入りを断られた。仕方あるまい」
ガイル王がフェルニー王女に言う
「こっちからお断りですわ！！」
ほっとしながらも、プライドを傷つけられて怒る王女。

「お前が勇者様に毒を盛った事は、シルフ殿から聞いておる。その理由もな。幸い何事もなかったので不問にしたが、今後その様なことは絶対に許さん。わかったな」
父親に睨みつけられて縮み上がる。
「わかりました・・」
そのまま退出する王女。

（破談になったのは嬉しいですが、アンリという女をリチャード様

に近づけた罪、許せません。せめて一度ぐらいひっぱたいてやらないと）

そうして城内を探していると、兄と少女と勇者がサロンでお茶を飲んでいた。

「おお、フェルニー。今回の縁談は破談になったが、勇者殿は今後も友誼を結んで下さるそうだ。お前もこっちに来て一緒に茶を飲め」

兄に言われてしぶしぶ席につく。

「勇者様・・一つだけ聞きたいことがあります。アンリと言う女性はどこにいらっしゃいます？」

「ああ、そこでお茶を飲んでいる女の子がアンリですよ」

シンイチが笑いながら言う。

「初めましてフェルニーお姉ちゃん。私がアンリだよ。よろしく」

無邪気に挨拶するアンリ。

ウェルニアは笑いを堪えている。

「貴方がアンリ？で、でも指輪をリチャード様からもらったって・・」

「うん。リチャード兄ちゃんからプレゼントされたんだ。いいでしょう」

粗末な木の指輪を見せる。

（そ・・そんな。リチャード様が幼女趣味だったなんて・・）

今度は別な意味でのショックを受けるフェルニーだった。

山国

「さようなら。また来てくださいね」
ウェルニアたちの見送りを受けて、次の高山の国ヤッホーに向かうシンイチ。

前回で懲りたので、街に入るより先に奴隷を解放して迎えをよこしてもらう。
ヤッホー国の騎士団に迎えられて、ヤッホー城に入った。

「ようこそ、勇者様。ワシはヤッホー国王ヘイホーだ。貴方方を歓迎する」
低い背でがっしりとした髭もじゃの男が挨拶する。
「初めまして。ヒノモト国王シンイチと申します・・？」
シンイチが怪訝そうに挨拶をする

「お察しのとおり、我等は完全な人間族ではない。ドワーフの血が入っておる。そのため、人間に疎まれ、この高山の地に国を建てたのだ」
「そ、そうですか・・」
「なに、気にする事はない。昔の話だ。人間達とわかれて暮らせば迫害されることもない。今ではこの国の鉱物資源や武具が各国になくてはならない物となっておるので、下手に戦争を仕掛けられることもない。そういった意味では、貴方の狭間の地帯に中立国を立て戦争を起こさせないようにするというやり方は正解なのだ」
ヘイホー王がシンイチを認める

「我等の奴隷を魔族から解放していただいて感謝する。ごゆるりと滞在なされるがいい」

ヘイホー国王の言葉で、シンイチは受け入れられた。
国王自ら国営の鍛冶場などを案内する。
そこでは皆が一心不乱に鉄を叩き、剣や武具を作っていた。

「ふふ。勇者殿は今までの国で有益な助言をされたというが、さすがに我等に助言などはできまい」
王が笑う。そこには、自分達の技術に対して高いプライドが感じられた。

「確かに・・俺は鍛冶については何もわかりませんからね」
「ほう。いやに素直だな。わけのわからない口出しでもしてくるかと思ったが？」
「知らない事に対して口出しなんかできませんよ。俺が出来るのはあくまでアドバイスで、それも不完全なものです」
「ふふ。頭でっかちな青二才かと思っておったが、分を知っておったか。人間にしては謙虚だな」
ヘイホー王の機嫌がよくなった。
「気に入ったぞ。明日はわが鉱山につれてってやろう」
そういって一行はヤッホー城に帰っていった。

「ねえシンイチ。馬鹿にされているよ。なにかギャフンと言わせてやろうよ」
シルフが不満そうに言う
「俺は何もいえないよ・・鍛冶なんて一回もしたことないし」
「お兄ちゃんにも知らないことがあるの？」
アンリが聞いてくる
「知らないことだらけだよ・・今まではたまたま上手くいっただけだからね」
「・・つまらない」

シルフが期待はずれしたような顔をする。
「残念だったね。さあ、もう寝よう」
そういってベッドに入る。いつの間にかアンリと一緒に寝るようになっていた。

次の日、ヤッホー国の鉱山を見学するシンイチ達

「ここは金銀や銅が大量に掘り出されておるのだ。通貨にも使われておる」
「へえ。ここで作られていたんですか」
「そうだ。だからこそ、この不毛の地でもわれ等が生きていける。山の恵みだ」
自慢そうに言うヘイホー国王。

金銀の精製場所に案内される。
「掘り出した鉱石の精製はどうやっているのですか？」
「ふふ。我等は大地の精霊の血を受け継ぐ種族。当然魔法に決まっておる」
そういって王が『分離』と唱えて杖を振ると、鉱石の山から金と銀が精製された。
しかし、山のようにあった鉱石に比べて、その量はわずかだった。

「・・・手作業ですか？」
「ああ。土の分離魔法を使える人数はそれほど多くはない。その者たちは皆ここで働いておる」
「・・・では、金貨や銀貨は」
「銅貨に一定の量の金銀を混ぜ合わせ、金貨や銀貨にしておるのだ」
ヘイホー王が説明する。

「・・・もしかして。よかったら、捨てられている鉱石カスを見せ

てもらえませんか？」
「おっ？何かするつもりなのか。ふふふ、見せてもらおうではないか」
そういいながら鉱石の捨て場に案内する

「・・・鉱石を『収納』」
大量にあった廃鉱石の山の一部を道具袋に入れる

「そんなものをどうするのだ？ゴミ同然だぞ」
「ちょっと試して見たいので。『金』でろ。『銀』でろ」
シンイチがそういって取り出すと、かなり大きい金塊と銀塊が出た。
「なんと！！！」
驚くヘイホー王。

「思ったとおりだったな。やはり分離する魔法は完全じゃなかった。かなりの量がまだ残っていたみたいだ」
シンイチがそうつぶやく。
「うむ・・。噂には聞いていたが、その道具袋はすごいものだな。出来れば譲って欲しいものだが」
ヘイホー王が持ちかける

「一応、俺にしか使えないんで。それより試してみたい事があるんです。鉛と動物の骨を燃やして灰にしたものを用意してください」
シンイチの提案により、鉛と動物の骨の灰になったものが用意された。

「まず、加熱してどろどろに溶かした鉛に鉱石を入れて・・」
しばらく加熱すると、鉛の中に金と銀が溶け込んだ。

「金銀が溶けた鉛を入れて、動物の灰の上で加熱すると・・」

道具袋から炉の形にした岩を取り出し、その中で空気を入れながら加熱すると、金と銀の合金が出来た。
「あとは、これを魔法で分離すれば効率よく金と銀ができると思います」
シンイチの伝えた技術をみて固まるヘイホー王。

「・・すばらしい。素晴らしいぞシンイチ殿！！！」
シンイチに力強く抱きつくヘイホー王。
「ちょ・・やめ・・苦しい」
シンイチが気絶するまで抱きしめられた。

その夜、盛大なパーティが開かれた。
もともとこの国は光の聖霊教団の影響が少なく、むしろ大地の精霊を崇めていた。
その最も濃い血を引く魔王ノームの友人であり、新しく灰吹き法という製法を伝えたシンイチはこの国でも英雄視された。

「いや。まったく勇者殿はすばらしい。どうだ?余の子となってこの国にとどまるというのは。」
肉にかぶりつきながら豪快に笑うヘイホー王。

「い・・いや、残念ですが、ヒノモト国に帰らないといけませんので」
「うむ。それでは、余の姫をやろう。何人でもよいぞ」
ずらっと着飾ったヘイホー王の娘たちが並ぶ

「い、いえ、中立を国是としているので、どの国からも姫を后にいただけないんですよ」
必死に断るシンイチ。
「そうか。だが、ただで帰したとなれば、我が国は恩知らずのそし

りを受ける。明日もう一日付き合ってもらうぞ。我が国が総力をあげて作り出した武具で全身を固めてやる」
上機嫌で笑い続けるヘイホー王。シンイチはドン引きしていた。

「動けません・・」
城の武器庫でさまざまな鎧を着るシンイチ
「ふむ・・勇者殿は力がないのだな。いや、賢者としては当然か」
ヘイホー王が言う

「シンイチ殿が持っている武器は軽銀製か・・」
国王が『軽銀の棘』を手にとって確かめる
「ええ。友人が貸してくれたんですよ。これならなんとか装備できます」
シンイチが言う

「うむむ。やむを得まい。軽銀をあるだけもってまいれ」
臣下に命令する
「な?軽銀は国宝ですぞ。よほどの事がないと使ってはならぬと初代国王が・・」
「攻撃的で見境なく侵略してくる前魔王を倒し、われ等が神と崇める大地の精霊の子である魔王ノーム様を即位させ、我が国の魔族コロニーを撤退させ、奴隷を解放した。その上、我等の山の恵みを何倍もする方法を伝えてくれた。これ以上のことがあるか?」
「・・いえ。ございません。」
臣下が頭を下げる。

「では、我等が総力を挙げて勇者殿の鎧を作るぞ」
国王まで参加して、あらゆる職人が軽銀製の鎧の製作に取り掛かった。

天動

3日後、シンイチ用に作りあげた「軽銀の衣」が完成した
「金属で出来ている服なのに、すごく軽いですね」
白銀色に輝く服で、結構格好いい。
「うむ。我々の最高傑作だ。魔法をぶつけられても吸い込んでしまう能力がある」
目の下に隈ができているヘイホー国王が言う。

「本当にありがとうございました。これで外見だけは勇者になったみたいです」
シンイチが礼を言う
「なに、我々のささやかな礼だ。また来るがいい」
ヘイホー国王達に見送られ、次の最果ての国メギドに飛んでいった。

「・・・いけどもいけども砂漠だねぇ・・」
上空から見たら砂漠ばかりである。
「ここは、世界の果てだからね。沈む太陽が近づくたびに熱せられて、常に乾燥しているんだよ」
「沈む太陽って・・んな馬鹿な。地球は丸いんだから、近づくなんてことあるわけないじゃん」
シルフに向かって笑う

「シンイチ何言ってるの?大地は平らで、太陽はその周りを回っているんだよ」
「ハハハ。元の世界でもそんな間違っていた概念があったな。いいかい、太陽や星や月って、見かけ上はそれらが回っているみたいだけど、本当は大地が太陽の周りを回ってて、自転しているんだよ」
「太陽はわかるけど、月や星ってなに?」

シルフがわからないという顔をして聞いてくる。
「月や星って、夜になると見えてくる別な天体で・・」
「夜に?夜になっても暗くなるだけだよ」
「・・・そういえば、この世界には月や星がない。いま気がついたよ。まさか・・・シルフ、もっと高くあがってみて」
言われるままに上昇すると、世界の全体像が見えてきた

「馬鹿な!!!本当に平坦な大地と海しかない。」
世界の端は透明な壁で仕切られていた。
「いくら異世界だからって、こんな馬鹿な・・」
呆然とするシンイチ。
「納得した?それじゃメギド国にいくね」
シルフはさっさとシンイチを連れてメギド国に降りていった。

例によって奴隷を解放し、城に案内してもらう
「小さい城だね・・」
「一番小さい国だからね。街一つといったほうが正解かも」
そんなことを言いながら騎士に案内されて城内へ入っていった

「勇者様、ようこそいらっしゃいました。私はメギド国女王、セレームと申します」
玉座に座っているシンイチと同じぐらいの年の亜麻色をした髪の美少女が挨拶する
「はじめまして。ヒノモト国王シンイチと申します。よろしくお願いします」
シンイチが挨拶を返す。軽銀の衣を纏っているせいか、結構立派な勇者に見えた。
セレームの頬が赤くなる。

「そ、それでは、一緒にこれからお食事でもいかかでしょう。いろ

いろお話をうかがいたいですわ」
「はい。それではご一緒させていただきます」
シンイチはにっこりと笑った。
宴席では、シンイチの武勇伝で盛り上がった。
「まあ・・その時どうなさったの？」
魔王との戦いを話す

「ははは。情けない話、どう切り抜けるかで頭がいっぱいになりましてね。とっさに道具袋の中に魔王城ごと魔王を閉じこめることを思いついたのですよ」
「まあ。そんなこと、常人では思いつきませんわ。さすがですわ・・」
憧れのこもった目でみつめる
「その直後に魔王が袋から出ようと暴れたので、仕方なく心臓を取り出してプチっとしました」
「プッ　ふふふ。誰からにも恐れられた魔王も、勇者様にかかれば虫以下ですね」
「いえいえ、あの時は本当に焦りましたよ」
調子に乗って話すシンイチ。

その後、各国を回って気づいた事をアドバイスしたことなどを話した。
「まあ・・シンイチ陛下は賢者でもありますのね」
セレームがますます尊敬の目で見る。
「いえ、そんな事はないですよ」
シンイチが照れる
「シンイチ様、ぜひこの国にも恵みをもたらしてください」
期待にこもった目で見られる

（しまった・・調子に乗って言い過ぎた。過剰に期待されているな）

「恵み・・ですか？」
「ええ。ごらんになられたとおり、この国にある物は砂漠と、毎日太陽に照らされて塩分が濃くなったせいで魚のほとんどいなくなった海のみです。かろうじて塩などを作って各国に輸出しておりますが、その内実は苦しく、皆が生きるのに必死です」
セレームが悲しそうに言う。

「人口も年々減っており、魔族に攻められなくてもこのままでは滅亡してしまいます。今まで各国を救ってこられた勇者様のお知恵にすがりたいのです。」
頭を下げる女王
「わ、わかりました。あまり期待されても困りますが、なんとか考えて見ます」
プレッシャーを感じるシンイチだった。
「うーん。期待されている分プレッシャーだ。取り合えず塩作りの現場を見てみるか」
塩が作られている砂浜にいってみるシンイチ。

「普通に揚げ浜式製塩法だね・・」
「シンイチ様、なにか改良がありますでしょうか・・」
ついてきたセレームが目をきらきらさせて聞いてくる
「い、いや、まだ何も思いつきません」
自分にかかる期待にプレッシャーを感じるシンイチだった。
「さて、それでは食事にいたしましょう」
セレームの命令で竈が作られる
「あれ？この白い石は？」
竈を作る時に使われた白い石を見る。

「ああ、このあたりでよく取れるんですよ。体を拭く時なんかに使うと綺麗になったりしますね」

「これはもしかして天然ソーダか・・とすれば」
ブツブツと何かを考え始めるシンイチ。
食事の後、竈をどけてみると、天然ソーダの結晶がとけだし砂と混ぜ合わさってたとこに結晶が出来ていた。
「やっぱり・・すいません。この白い石と砂を混ぜ合わせて、熱をくわえてみてください」
シンイチの言うとおりにしたら、冷えた後ににガラスの結晶が出来た。
「やっぱりだ・・だとすると」
道具袋から細い管の形に岩をとりだして、その先に溶けた状態のガラスをつけて息をふきこむ。
そうしてシルフに風を送って冷ましてもらうと、不恰好ながらガラスの瓶ができた。

「うん。小学生の工作みたいだけど、一応できた。」
「これは・・砂からこのような物ができるのですか?」
興味津々でセレームが聞いてくる。
「ええ。これは『ガラス』というもので、これで壷とか杯とかを作ったら美しく仕上がりますよ」
「ありがとうございます!!さっそく研究してみますね」
セレームが喜びの声をあげてシンイチに抱きつく。
美少女に抱きつかれてシンイチは照れた。

夜、あてがわれた豪華な客室で、シンイチは頭を抱えていた。。
「やれやれ・・なんとか期待に応えられたけど、そういつまでもネタは続かないよ・・」
シルフに向かって愚痴を言う
「キャハハ。シンイチが始めた事なんだから、最後までしなきゃね～」
「大丈夫。お兄ちゃんならなんでもできるよ」

アンリがシンイチの頭を撫でる。
「ありがとう。それじゃ、疲れたからもう寝よう」
早めにベッドに入る。
アンリの頭を撫でながら横になっていると、すぐに眠りに落ちた。

深夜、寝静まった後に、美しい少女が薄着でシンイチの部屋に入ってきた。
「シンイチ様・・・シンイチ様」
シンイチを揺らして起こす
「ん・・・？あっ、えっと、セレームさん」
「はい。」
「こんな夜中に、何か急用ですか・・？」
起きたシンイチが聞く。

「ふふふ。野暮なお方。女が深夜に男の部屋に訪ねる理由は一つしかないでしょう」
そういいながら服を脱ぐ
「ちょ！待って」
「待ちません。こんな機会は滅多にないのです。勇者の子種をもらえれば、きっと良い子ができるでしょう」
「子種って言うな。生々しい！」
「女王ともなると、かえって相手に不足するのです。男を集めてハーレムを作るような余裕はないですし、外聞も悪い。ですが、勇者様なら・・」
ポッと顔を赤らめる。
「だーっ。慎みを持ちなさい！！」
「夜に慎みなど不要ですわ。さあ、二人で獣に戻りましょう」
そういいながらシンイチの服を脱がす。

「まってまって。俺には王妃候補がいるんです！ばれたら殺されま

す！」
「ふふ。ここは遠い異国。その方にばれるような事はないですわ」
「それがばれるんですよ。そこにいるチクリ魔が・・・」
ベッドの脇を示す。そこにはシルフがニヤニヤしながら浮いていた。
「あ、私のことは気にしないで、続けて。二人にはちゃんと言っておくから」
笑いながら言う。
「裏切り者！！マジやめて。しゃれになってないから！！」
「風の精霊様の許可も得られたところですし、さあ熱い夜を・・」
裸のセレームが覆いかぶさる。シンイチが観念しかけた時、隣から声がかけられた。

「・・お兄ちゃんとお姉ちゃん、何してるの？」
ねぼけ眼をこすりながら、アンリが起きてくる
「アンリ・・助かった。」
「そ、そんな、勇者様がこのような幼女と・・」
セリームが軽蔑したように言う
「い、いや、誤解ですって！」
「言い訳は結構ですわ。我が国に変態の血を入れるわけにはいきません！失礼します」
バチーンとシンイチをビンタして、セレームは出て行った。

「へ、変態・・？」
「まあ、確かに毎日幼女と一緒に寝てたら変態だよね～」
シルフが追い討ちをかける。
「そんな・・俺は変態じゃないのに・・」
そのまま朝まで落ち込みつづけるシンイチだった。

無双

シンイチが諸国周遊をしている少し前
ボロの服を着て『清光なる剣』を装備したアーシャが皇都に向かう
街道を歩いていた。
「しかし、天使様に勇者として認められたのはよいが、これからどうするべきか」
その様な事を考えてると、後ろから豪華な馬車が来た。周囲を護衛の兵士が取り囲んでいる。
（ちょうどいい。あれに乗せてもらおう）
街道の真ん中にたち、馬車の行く手をふさぐ

「そこの乞食、どけ！」
兵士達から罵声をかけられる
「乞食だと？無礼な。私は真勇者アーシャだ」
清光なる剣を抜いて威嚇するアーシャ
「なんでもいいから消えうせろ！どかないと轢き殺すぞ」
兵士達は恐れ入らない。むしろ余計に怒り出す。

「何事ですか・？」
馬車の後ろから身なりのよい紳士が降りてくる
「おお、ブルージュ男爵。久しぶりだ。私は皇国騎士団副長にて真勇者のアーシャ・カストールだ。卿ともなんどもパーティでお話しただろう？」
そういいながら近寄るアーシャ
「ひっ　臭い。なんだこの乞食は。兵士達。排除しなさい。」
ブルージュ男爵は周囲の兵士達に命令する
「貴様！私がわからぬか？」
アーシャが怒鳴る

「乞食に貴様扱いされる覚えはない。なにがアーシャ殿だ。物狂いめ！」そういいながら馬車に戻ろうとする
思わず近寄ろうとしたら、兵士達に殴られた
「ちかよるな。このき○がい」
その言葉にアーシャは激怒する
「真勇者に対してその様な事を言うとは・・神に代わって天罰を与えてやる」
『清光なる剣』で兵士達に切りかかった。

周囲には兵士達が血まみれで倒れている
「ふふふ。この『清光なる剣』は悪しき者をよく斬るな。まさに真勇者である私の剣にふさわしい」
血まみれで笑うアーシャの前に、腰を抜かしたブルージュ男爵がいた
「い、命ばかりは・・・」
土下座してアーシャを拝む
「ふふ、最初からそうしておればよいものを・・。とりあえず、お前の領に連れて行け。」
そういいながらブルージュ男爵を蹴飛ばして御者席に座らせる
（ふふ。もはや伯爵家次男の立場も騎士団の副長の座もどうでもいい。この剣一本ですべてを切り取ってくれるわ）
馬車の中はアーシャの高笑いで満たされた。

ブルージュ領につく。
「さっさと降りろ。この屑が」
剣を突きつけてブルージュを下ろす
転がるように降りると、必死に館の中に逃げ込んだ
「み、みな出会え。曲者だ！！」
その声を受けて館を警護していた兵士達が出てくる
「ふふふ・・・面白い。もう少しこの剣に血を吸わせたかったのだ。

」
そういって笑う姿は、まさに魔王であった。

館中に兵士の死体が散らばる。
『清光なる剣』は光で出来た剣であり、剣でも鎧でもなんでも抵抗なく切り裂く。
彼の前に対自した兵士は、アーシャの剣の一振りで真っ二つにされた。
「ふふふ、さて、まだ何かするのかね」
部屋の隅に不幸なブルージュ男爵を追い詰めて聞く
「た・・・助けてくれ。わ、私になんの恨みがある」
必死に訴える男爵
「この真なる勇者である私を乞食あつかいしたな」
「そ、それだけで?その姿では仕方なかろう」
「あいにく、私は天使様の加護を得ておる。私に逆らうものはすべて地獄いきだ」
アーシャが剣を振り下ろすと、ブルージュ男爵の体が切り裂かれた。

「・・さて。私に逆らう者の末路が見えたであろう。とりあえず、熱い風呂と着替えを用意しろ」
後ろで土下座して命乞いをしている家臣たちをみて命令する。
この瞬間、ブルージュ領はアーシャに乗っ取られた。

風呂に入って豪華な衣服に着替えると、アーシャは元の貴公子に戻った。
自分達の主人や仲間を殺した敵である事を一瞬忘れて家臣たちは見とれる。
「よいか、まずこの館の宝物と金貨をすべてつかって、領内で新しく兵士を募集しろ」
「そ、それは何のためでしょう」

「もちろん。フリージア皇国のために勇者を排除する。その為の兵団をつくる」
アーシャはこれからの事を思い、笑顔を浮かべた。

「よいな、一週間ほどで戻ってくる。それまでに兵の編成を終えておけ」
生き残った兵士達の中で最も地位が高かった者を兵士長にして命じる。
「アーシャ様はどちらへ・・」
頭を下げながら聞いてくる兵士長

「勇者に対抗するにはこんなちっぽけな領では足らん、周囲の領すべてを平定してくる」
豪華な馬車で御者だけを連れて隣の領に向かうアーシャ
（ふん。一人でそんな事が出来るものか。さっそく皇都に使者をだし、討伐してもらおう）
そんな事を思いながら兵士長はアーシャを送り出した。

一週間後、傷一つない姿で戻ってきたアーシャ。馬車には金銀財宝が山のように積まれている
「ア、アーシャ様・・これは？」
「略奪してきた物の一部だ。他のものは傭兵を雇うのに使うように、それぞれの領の家臣に命令してきた。そのうち兵士がここに集まるだろう」
こともなげに話すアーシャ。
「それで・・この領の兵士達の編成はおわったであろうな」
ギロリと睨みつけられる兵士長

「兵士長は何もしていませんでしたよ。それどころか、皇都に使者をだして討伐軍を要請してましたから、そろそろ軍がくるころです」

兵士長の隣にいた兵士が言う
「貴様！！！！」
その兵士を睨みつけるが、平然としていた
「なるほど・・くく。地位は低くても相手を見極める能力が高い者はいるものだ。気に入った。今から兵士長を処刑する。その後の指揮はお前がとれ」
アーシャが笑う
「この侵略者め！死ね！」
兵士長がアーシャに切りかかるが、アーシャが適当に剣を振ると胴体が切断された
「お前はなんという名だ」
「はっ。兵士オルマンと申します」
「よろしい。では兵士長オルマン。最初の命令だ。そこのゴミを片付けろ」
冷たく命令する。オルマンはその前に平伏した。

数日後
「た・・大変です。皇都から軍が攻め込んできました」
兵士の報告が入る。
「ま・・まだ兵士の編成が終わっていません。他領の兵士達もこちらに向かっている状況で・・」
オルマンが報告する
「ふん。まあいい。兵士達に実戦訓練を積ませるつもりだったが、今回は見ておけ。出陣だ！」
そういうと、兵士たちをつれて皇国軍が見渡せる丘の上に陣取った。
「ど・・どうなさるつもりでしょうか。１０００人はいます。こちらの兵は５０人程度・・」
オルマンが震える声をだす
「見ておけといったはずだ。お前達はここにいろ」
そういうと一騎で軍に突っ込んでいった。

「ぐぁぁ！」
「ぎゃぁぁぁぁぁ」
皇国軍の兵士や騎士の叫び声が響き渡る
たった一騎の騎士の剣が振るうたび、周囲の兵士達が切り刻まれていく。
どれだけ防御を固めた鎧を着ていても無駄だった

「は、離れろ、魔法を使え」
上官の指示で攻撃魔法を使うが、すべて光を放つ剣に吸い込まれて無効化される。

「ははははははは」
騎士の笑い声が響く
「悪魔だ！！」
「悪魔の騎士だ！！！」
そういって総崩れになる皇国軍

「逃げるな！！相手は一騎だ。押し包め」
必死にそう将軍が命令するも、誰も聞かない。
気がつけばその騎士と対面していた。

「貴様！！何者だ！！」
将軍が精一杯の虚勢を張って問いかける
「ふふふ。私がわからぬか。共に汗を流し修行した身なのに。オクルールよ。」
アーシャがそういって兜を脱ぎ捨てる。

「あ・・貴方は、アーシャ殿？」
「陛下に伝えるがいい。周辺の領は私が平定した。それを私の所領と認め、勇者に対して総力を挙げて敵対するのならもう一度わが剣

は陛下にささげられるであろとうな。」
「し、しかし・・」
「今の私は天使様から使命を賜った真なる勇者。この剣にかけ、悪勇者を倒す!悪勇者に味方するならば、天使の名の下にフリージア皇国も滅ぼす」
アーシャは『清光なる剣』を掲げて宣言する。剣から聖光が発せられ、オクルール将軍はその神々しさにおもわずひれ伏した。

(恐ろしい・・この人は一人で軍を破るなんて事ができるのか。恐ろしいが・・この強さは魅力的だ。俺は新たな英雄の出現を目の当たりにしているのかもしれない・・ならば、この人にかけてみるか)
その姿をみてオルマンたち兵士も高揚した。

開拓

フリージア皇都

カストール伯爵は皇国騎士団を連れて皇都にやってきた後、彼らを代表してヘラート国王に謁見していた。
「そうか・・勇者を倒す事も連れてくる事も出来なんだか・・」
玉座に座った国王は肩を落とす。

「アーシャのことは何もいいますまい。もはや騎士となった時に陛下にささげた息子です。しかし、今後の展開次第では、勇者との全面戦争になるかもしれません。しかし、彼ら皇国騎士団はすでに戦意を失っております。勇者の元に道具袋があるかぎり、その思いを程なく全軍が共有するでしょう」
カストール伯爵が事実を指摘する。

「・・どうすればよいだろうか」
すがるような目をカストール伯爵に向ける。
「今、わが息子ドンコイが彼の元に謝罪に向かっています。その結果が程なく届くでしょう。それを見てから動いても遅くないと思います。彼と戦うにしろ和睦するにしろ、状況を整えておくべきだと思います」
「わかった・・。卿の言うとおりだ。伯爵はしばらく皇都にとどまり、我等に協力してほしい」
「かしこまりました。カストール家は常に王家に忠誠を尽くします」
そういって頭を下げる伯爵
（ドンコイよ。これでよいのであろう。後は・・すべてお前次第だ）
そう思いながら退出していった。

カストール伯爵領

カストール城に戻ってドンコイが最初にしようとしたことは、ラスの実を収穫することである。
しかし、現在カストール城には金がない。半分以上の金貨や宝物をカストール伯爵が皇都に持っていったからである。
当然最初に貧民を雇うと金がかかる。
そこでドンコイが考えた方法があった。

ドンコイは昔の悪代官時代のツテで、まず城内の貸金業者やヤクザを秘密裏に集めた。
「ドンコイ様、ご機嫌うるわしゅう。後継ぎ就任おめでとうございます」
そういってワイロを持ってくる業者達

「うむ。だが、後継ぎとなった以上、お前達の悪行を見過ごすわけにはいかん！」
そういって武装した兵士で囲む。
「そ、そんな・・」
「今までワイロを取っておきながら・・」
口々にドンコイを責め立てる

「ふふふ。早とちりするな。お前達を処罰する気は毛頭ない。逆にお前達に堅気に戻ってもらおうと思っておるのだ」
そういって宥めるドンコイ

「カタギ・・ですか？」
「うむ。私は勇者からいろいろな商売のネタを学んだ。このワイロはその事業を行うための投資として受け取ろう。お前達も協力してほしい。おい、アレを持て」

兵士達に命令すると、お椀に入れられた白い物と、狐色をした変な肉がそれぞれに並べられた。

「まず実際に食ってみないとわかるまい。食べてみよ。私も同じものを食べる」

ドンコイが命令する。

「わ・・わかりました」

兵士達に剣をつきつけられて、嫌々ながら食べる悪徳業者たち。

「???」

「これは!!」

『『『美味い』』』

全員がむさぼるように完食した。

「ドンコイさま。大変美味しくいただきました。これはなんでしょうか」

腹をさすりながら業者達が聞く。

「ラスの実とピギーの肉だ」

ドンコイがあっさりという

「ゲェッ!?」

心底驚いた顔で言う。

「心配するな。腹を壊したり体調を崩したりすることはない。今まで我々はそれらの料理法を知らなかっただけなのだ。現に目の前で私も食べて見せたであろう」

ドンコイが笑う。

「た、、確かに・・」

「どうだ。これが広まれば、巨万の富をわが領にもたらすと思わないか」

ドンコイの言葉に業者達はざわめく。

「つ、つまり、我等にこれを取り扱えと」
「どうだ。今の仕事をして嫌われるより、前向きであろう」
ドンコイの言葉に考えこむ彼ら。

彼らも何も好き好んで悪徳高利貸しやヤクザなどをしているわけではない。他に生きる術がないのである。
金と引き換えにさらされる冷たい目。蛇蝎のように嫌われる日々。
憎まれ闇討ちされ死んでいった仲間たち。
目の前の利権に食い込めるのなら、ヤクザを止めても良いと思う者が大勢いた。
「・・・わかりました。ドンコイ様に従います」
業者達が跪く

「お前達は私個人の私兵として動いてもらう。兵士は増やせないからな。まず、お前達の抱えている奴隷をラスの実の収穫に向かわせろ。もちろん解放した上でな。借金はいったんわが家が立て替えよう。現金がないから借用証書にして２０年払いにするから、それを受け入れろ。そうして、奴隷予備軍となっている借金が払えそうにない者たちのリストも提出しろ」
ドンコイの命令で奴隷はゴビ沼地に送られ、そこでラスの実の収穫に働く事になった。

城下町を変装した姿でドンコイが歩く。アンスとハッツも一緒である
一軒のボロ家の前に来る。
「・・・ここが借金を抱えて返済できなくなっている者の家か？」
「はい。貸金業者から確認しました。手配も既にしております」
アンスが言う。
「しかし、いくらアレをやりたいからって、ちょっと露骨過ぎませんか？罪悪感が・・」

ハッツが嫌そうに言う。
「何を言う。すべて丸く収まればよいではないか」
ドンコイが言う。二人はぶつくさ言いながら従った。

「やいやい。借金の期限はとうに過ぎているんだ!!さっさと払わねぇか」
ヤクザの手下のチンピラが家の中で暴れる。注意深く見ていると、安物の皿などを派手に壊していて、人に暴力は振るっていない。

「ど、どうかご勘弁を・・」
痩せた男が土下座して謝っている
「勘弁ならねぇなあ。娘を花街で働かせて返してもらうぞ」
娘を連れて行こうとする

「おとっつあん!!」
「娘だけは・・」
「ええい!!離すんだよ」
父親の手を振り払う。
周囲には貧民町の住人で人だかりが出来ているが、誰もヤクザが怖くて助けられなかった。
「ああ・・おとっつあん」
娘が泣き崩れる

「まてまて!えっと・・ムスメさんを、売り飛ばすとは、あー、穏やかじゃないな」
「そ、そのムスメをつれ　ていくなら、俺たちが相手だ!」
ところどころつっかえながらアンスとハッツが言う。

「な、なんだてめえら」「いいからやっちまぇ」
ヤクザたちが脅す。本職だから堂に入っている

「スケサン、カク・・じゃなくて、アンス！ハッツ！懲らしめてやれ！」
フードをかぶった太った男が言う。
たちまちその場は乱闘になった。

派手な乱闘に見えたが、なぜか二人に対してチンピラ達は一斉に飛び掛ったりせず、一度殴られたら気絶したように倒れたままになったりしていた。
頃合を見て太った男が言う
「もういいだろう！！」
その言葉と共にチンピラ達がさっと後ろに下がり、二人が太った男の両脇に並ぶ。

「ひかえい！」
「ひかえおろう！」
両脇の男が大声を上げる
「この紋章が目に入らぬか！」
一人の男が声をあげると、太った男が上着を脱ぎ捨てる
男の汗臭いシャツにはカストール家の紋章が入っていた。

「このお方こそ、カストール伯爵家の世継ぎ、ドンコイ・カストール様であるぞ。一同の者、頭が高い。控えおろう！」
男たちの声が響き渡ると、チンピラ達が一斉に土下座した。釣られて男や娘、貧民町の民衆も土下座する

「借金を返せぬからといって娘を花街に売ろうとするとは、不届き千万。その男の借金は当家で預かる。借用書をだせ！」
へへェーと頭を下げるヤクザたち。借用書をドンコイに渡す
「なんと・・このような高利貸は許せぬ。当家が立替え２０年払いとする。よいな！」

目の前で借用書を取り上げる。
「へへぇ。お見それしました。おい、者ども退散するぞ！！」
そういって退散するチンピラ達。

「ドンコイ様」
「ドンコイさまぁ～」
男と娘が足元ですすり泣いている
「うむうむ。だが、借金はキチンと返してもらうぞ。ゴビ沼地にて大規模な村を作り、そこで新しい作物を作る。食事も三食食べられ、必要なものも支給する。日が落ちれば村の中ならば自由に行動してもよい。そこでのんびり暮らしながら借金を返すがいい」
「ドンコイ様のお慈悲に感謝いたします」
そういって泣き崩れる男と娘。その姿をみて貧民街の者たちも目に涙を浮かべた。
「他の者達もだ。一から村を作るので、いずれはこのような家より立派な家に住めるようになるであろう。希望するものは後で申し出よ」
そういってドンコイは帰っていった。

「これでいいんでしょうかね」
アンスとハッツが言う。もちろんやらせである。
「この評判が広がれば農地開拓の希望者も増えるだろう。借金が返せない者の救済となり、金貸し達も貸した金はいずれ回収でき、ラスの実の利権にもありつける。いったい誰が困るのだ?」
ドンコイが胸をそらす
「まあ確かにそうなんですが・・あのチンピラ達にあんな事をやらせているのが俺たちだと思うと・・」
アンスが目を伏せる。
「気にするな。そんな事は良くある事だ。カッカッカッ」
ドンコイが高笑いする。二人は微妙な顔をしていた。

そういったことを何回か繰り返すと、新しい村の噂とドンコイの慈悲深さはあっという間に広がった。
農地の開拓を希望するものが集まり、どんどんとラスの実が収穫とピギーの養畜が行われた。

村娘

「ふふふ。笑いが止まらぬな。ここまで大量にラスの実を確保できたとは」
倉庫にうずたかく積まれる米。
「貧民達も感謝しておりました。彼らも腹いっぱいオカユという料理を食べられて、賃金まで払われて。今ではドンコイ様を豊穣の聖者様とよんでいますよ」
満面の笑みを浮かべるアンス。

「ふふふ。まだまだこれからだ。また種籾を巻けば、数ヶ月もすれば大量に実がなり、収穫できるのだ。今まで雑草としてもてあましていたのが、宝の山だったとは。つくづく知らないという事は恐ろしいことだ」
四季がないこの世界は基本的に高温多湿であり、植物が良く育つ。稲はまかれると数ヶ月で成長して種をつける。

「ですが、あまりやりすぎると実りが悪くなると勇者様がおっしゃってましたよ」
ハッツが忠告する。
「わかっておる。もっと貧民を雇って農地開拓するのだ。彼らにも充分報いてやれ」
「わかりました」
二人が言う。彼らはドンコイの右腕として日々忙しく働いていた。

「・・それで、どうだ。そろそろ劇場を作ってもよいかな？」
経済を担当する役人に言う。
「・・・もうしばらくご辛抱ください。ラスの実が食べられる事がわかって、領内では流通しておりますが、まだまだこれから買い手

を見つけないといけないのですから・」
役人が諌める
「・・まどろっこしいな。やむをえん。しばらく劇場は諦めるか・・いや、まてよ」
ドンコイが考え付く。
「決めた。祭りを行う」
いきなり言い出した

「ドンコイ様、祭りとは？」
「ふふふ。ラスの実の収穫祭と、ピギー謝肉祭だ。同時に領内の美少女を集めて芸を披露させて盛り上げる。」
「しかし、少女達に芸などできませんよ」
「なに、可愛ければよいのだ。歌や踊りはヒノモト国の歌姫たちを呼んで教えてもらえばいい。あいうぉんちゅゆ～」
「ド、ドンコイさま。正気に戻ってください」
役人があせる。
「ハッ。こほん。とにかくそれで盛り上げて、商人たちにもアピールするのだ。そうすれば米が売れるであろう」
「わかりました。今では街の者はドンコイ様を慕っておりますから、皆こぞって参加するでしょう」
役人が納得して準備を始めた。

まもなく領内すべての村に布告が出された。
「なになに・・ふむ。村の皆を集めよ」
カストール領内のキエフ村の村長が村民を集める
「三週間後にカストール城で祭りが行われるそうだ。なんでも新しい食べ物がふるまわれて、村々にもその種籾が分け与えられるらしい。村民ふるって参加しろとのことだ。市場で交易も許されるらしい」
そう説明する村長

「祭りかぁ。城で行われるのは初めてだな」
「あの放蕩者のドンコイの野郎にしてはまともな事をするじゃねえか」
口々に言う村民達。
「だが、条件があって、村一番の美少女を連れてこいとのことだ。何か審査をして、上位には賞金が払われるらしい」
その言葉に村民が激怒する

「あのやろう・・」
「絶対後から城に連れ込んで手篭めにするつもりだぜ」
「うちの娘は絶対に連れていかさねぇからな」
今までやってきた事で信用がないドンコイだった。
「やむをえん・・。わが娘を連れてまいろう。村長の義務だ。娘にも我慢してもらおう」
そう言ってため息をつく村長だった。

キエフ村の村長には娘が3人いた。
上から18歳、17歳、15歳になる。
いずれもそこそこ美しい娘だったが、末娘だけは再婚した連れ子だった。
「お前達、父親としては忸怩たるものがあるが、領主様には逆らえん、おそらく・・ドンコイ様の目に止まれば、城に妾として連れて行かれるだろうが、その事を覚悟して祭りに来てくれる者はいないか？」
そういって三人の娘に頼む。

「私は嫌ですわ。あのように太った豚など見るのも嫌です」
長女が言う。
「私も嫌です。私には好きな人がいるんです」

次女が言う。
「ヘルディンがいいと思いますわ。どうせ我が家の血を引いていないのですし」
「そうですね。継母も死んだとこですし、どうせ厄介者。ドンコイ様のお手つきになれば、居場所ができるんじゃないでしょうか」
長女と次女が笑う

「・・その様な事をいうものではない。しかし、一人は誰かを連れて行かねばならないのだ。ヘルディン。一緒に来てはくれまいか？」
村長が血のつながらない娘に頼む
「・・・わかりました。お父様。母が死んだ後も養っていただけた恩をお返しいたします」
そういってヘルディンは人身御供になる決心を決めるのだった。

ヒノモト国にカストール領から使者が送られる
「・・というわけで、盛大に祭りを盛り上げようと思いますので、ヒノモト国にも協力していただけませんでしょうか？」
アンスが使者に立ち、ウンティーネに願い出る。
「いいアイデアですね。喜んで協力させていただきます」
カストール領から運ばれた大量の米と、ヒノモト国の品物が交換され、祭りの一週間前には劇場の歌姫たちの一部も指導のためカストール領に行く事が決定された。

二週間後。
『ラス&ピギー祭』と名づけられた祭りの準備は盛大に行われていた。
「さあさあ、食べていきな。新しい料理『オカユ』だよ。おいしいよ～」

「こっちは『トンカツ』だ。食べて元気をだしな！！」
ゴビ沼地に新しくできた村の元奴隷達が、村々から先行して来た村長たちをもてなす。
彼らはすっかりたくましい体になり、元気になっていた。
市場には魔国からの輸入品やヒノモト国の缶詰などが並び、活気に溢れている。

「これは、どうした事だ。この前村の物を売りに来た時は、このような事はなかったが・・」
キエフ村の村長がいかぶる。
「なんだか街の住人の表情も明るいですね。今はドンコイ様が城代をされているとか」
ヘルディンも不思議そうに思う。
「うむ・・てっきりドンコイ様が苛政をして荒れていると思っていたが・・この明るさはなんだ。貧民街も大分取り壊されているのに、路上に貧民が溢れていない」
不気味そうに村長が言う。
「とりあえず、城で手続きをしよう」
彼らはカストール城に入っていった。
「はい。キエフ村の村長ですね。宿はここに泊まってください。祭りの間の市場の割り当てはこの辺りで・・」
非常にテキパキと受付が行われる。役人達も丁寧な態度だった。
「キエフ村の少女は・・ヘルディン嬢。ほう。これは美しい。かなり期待できるでしょうね。いや、よかったですよ。他の村から来る少女は正直いまいちでしたからね。街やゴビ村の代表は美少女なんですが・・」
笑いながら役人が言う
「ち、ちょっと待ってくれ。街の者は美しい少女を捧げて平気なのか？それにゴビ村とは？」

村長が焦ったように言う。
「捧げる?何のことですか?ああ、ゴビ村とは新しく出来た村で、奴隷や貧民達はみんな解放されてラスの実を作りに行ってますよ」
役人が言う。
「ラスの実か。街中で食べてみたが実に美味かった。しかし、奴隷達を解放して新しい村を作るとは・・」
「以前ドンコイ様が来られたときは、姉様たちに妾になれって迫って、アーシャ様に殴られていましたよね」
二人は顔を見合わせる
「はは。それは演技ですよ。心配しなくても大丈夫ですから。まあ、別の意味で不安になることもありますが・・」
ハッツと名札がついた兵士が言う。
「演技とな・・」
「信じられませんね・・」
二人が疑わしそうな目でみる
「まあ、一週間滞在して街の者の話も聞いて見てください。今回の祭りはドンコイ様の真の姿のお披露目でもありますからね。それでは、ヘルディン嬢は明日から毎朝9時に城に来てください。歌姫からレッスンが入りますので」
そういって兵士は笑った

「どうしましょう」
「とりあえず、参加してみるか。ドンコイ様の真の姿とやらを、じっくり見させてもらおう」
そういって二人は宿に向かった
次の日、ヘルディンは一人で城に訪れると、裏庭の空き地に連れてこられた。
同じような年頃の娘が集められているが、街出身の娘は美しく、村出身の娘は平凡な顔だった。
そうして待っていると、3人の美しい娘が現れた。

「はじめまして。私達はヒノモト国の劇場で歌っている者たちです。今回指導のためにこちらに来ました。これから一週間お願いしますね」
皆にっこり笑う。
３人の構成は人間、魔族、猫族だった

「ど、どうしてここに魔族や獣人族がいるの??」
若干パニックになる娘たち
「はい！静かに。これからじっくり芸を仕込みますからね」
笑顔で言う３人。
それから一週間地獄の特訓をうけさせられた。

祝祭

「はあはあ・・なんでこんな事しなきゃならないのよ」
村々から来た少女が激しいレッスンに不満を漏らす。
彼女達は別に来たくて来たわけではなく、無理矢理押しつけられて来たので、不満でいっぱいだった。

「別にいいじゃない。ドンコイ様が皆を楽しませるために考えた事でしょ。協力しないと」
「そうよ。うちらにできることをすりゃーええ。。ドンコイ様への恩返しじゃけん」
街の代表の娘たちと、ゴビ村から来た少女達が反論する。
彼女達は自主的に参加している分、積極的に特訓を受けてどんどん芸が磨かれていた。

「なによ!!あんた達あのドンコイに尻尾をふるの?そんなに妾になりたいの?」
村の娘たちが見下すように言う

「ドンコイ様の妾ね・・それも悪くないかも。キャッ」
街の少女達が笑いあう
「そんな事恐れ多くて想像もできんよ。うちらにとっては神様みたいな人じゃもん」
ゴビ村の少女はまた違った意味で否定する。

「ふん。あんたら心まで領主に売り渡すなんて、ほんとメス豚ね。ドンコイの豚とお似合いだわ」
ますますヒステリックになる村娘たち

「聞き捨てならないわね」
「ドンコイ様のどこが豚よ。あの福々しい姿をみてそんな事思うのは甘ったれてるけぇよ。うちらにとっては豊穣の聖者さまじゃけんね。それ以上言うならうちらも黙っておれんよ」
二派に分かれて睨みあう。

「ねえ、貴方も無理矢理連れてこられたんでしょ？レッスンなんか無視してサボっちゃいましょうよ」
村娘がヘルディンを誘う。
「貴方も本当のドンコイ様を知ったら、そんな事すると後で後悔するわよ」
「別にしたくないもんは出て行けばいいよ。うちらだけで祭りは盛り上げられるよ。どうせあっちはブスばっかりじゃし」
街娘たちが言う。

「え・・えっと・・」
ヘルディンはどうしようか迷った。
「はいはい。それまで！！」
手を叩く音がして振り返ったら、ヒノモト国から来た歌姫達が立っていた。
「貴方達、口喧嘩とはずいぶん元気が余っているみたいね」
「レッスンの時間を倍にしたら余計な事を考えなくなるかも」
「それがいいわね」
ニッコリと笑う三人。
「ひぃぃぃぃーーー」
それからレッスンの時間が倍になり、毎日終わった頃には何もしたくなるほどしごかれた。

祝祭日当日

カストール城は各地から訪れた領民で賑わっていた。
無料で振舞われるおかゆやトンカツは大好評で、訪れた商人に飛ぶように売れた。
他にも魔具や缶詰、魔国から輸入した服や魔石なども大量に売り買いされた。

ラスの実の精米のやり方やピギーの肉の調理法を各村の村長に教え、種籾やピギーを村に分けるドンコイ。

「ドンコイ様・・その、このような施しを受けて、我々はどうお返しすればよいでしょうか」
村長の一人がおずおずと聞く
「お返し?妙な事を聞くものだな。今までと同じ割合でラスの実も税として納めればよい」
ドンコイがキョトンとして言う。
「いえ・・あの。いかほどドンコイ様に上納をすればと・・」
不安そうに聞く村長。

「ははは・・私も勇者様にまったく同じ事を聞いたものだ。その時に上納など不要といわれた。条件も出されたがな」
「条件と仰いますと・・その、どういったものでしょう」
「ふふふ・・。ラスの実を精製したものを米というそうだが、それをヒノモト国に売って欲しいそうだ。その代わりにヒノモト国の物をたくさん買ってくれといわれたわ」
ドンコイが笑いながら言う。村長たちはいまいち理解できてなかった。

「基本的にはそれと同じだ。お前達は何も考えずラスの実を作り、税を納めろ。そして残ったラスの実を売って、ここで売っている物をどんどん買えばそれでいい。上納など不要だ」

「ほ・・本当によろしいのですか」
「そもそも、私は後継ぎとして正式に認められた。つまり、基本的にはこの領の税収はすべて私のものだ。私個人にワイロを出す意味がない」
「それは確かに・・」
村長たちも納得する。
「わかったら精出してラスの実を作れ。また半年後には収穫祭をするのだからな」
そういってドンコイは笑った。

「いや、意外とドンコイ様も話せるお人だ」
「正式に後継ぎになられて思うところもあったのだろう。若い頃は放蕩をされていた方だが、名君になられるかもしれん」
「いや、我々に新しい作物をもたらしてくれただけで、充分に優秀なご領主さまであろう」
村長たちは感激し、新しいやり方を学んで村を豊かにしようとした。

収穫祭が始まってしばらくした頃

「さあさあ、今からメインイベント。各村を代表する美少女達が舞い踊ります」
アンスの司会で始まる歌劇。
全面には街やゴビ村の少女やヘルディンが並び、バックに地方の村の少女を配置する。
彼女等の踊りや歌で祭りは大いに盛り上がった。

最後にヒノモト国から来た歌姫たちとふんどし一枚のドンコイの歌と踊りが披露された。
普通なら下手で醜いだけのドンコイの歌と踊りだったが、美と醜の

コントラスト効果で滑稽さに変わり、観客達におおいに受けた。
「あっははは、面白れー」
「ご領主子息様が自ら踊って盛り上げてくれるとは」
「俺たちも負けてられないぜ！」
いつの間にか各村の若衆達も服を脱ぎ捨てて、ふんどし一枚で踊りだす。
会場は異様な熱気につつまれていた。

「・・・あれがドンコイ様の真の姿か？」
「なんというか・・」
「やっぱりアホなのでは？」
年長者が多い村長たちからは冷たい視線を浴びたが、若い人間にはドンコイに親しみを持つものが増えた。

「さて、いよいよ最後のイベントです。各村や街から選りすぐられた美少女達でした。皆の投票で順位が決まります」
そういって票を集める。

「お待たせいたしました。三位、カストール城下町代表ネルケ嬢。二位、ゴビ村代表コロンフル嬢。そして注目の一位は、キエフ村代表のヘルディン嬢。おめでとうございます！！」
会場の盛り上がりに流されるベルディン。
複雑な表情をしながらも表彰された。三位までに賞金が支払われる。

「・・一位とな。賞金１００アルは確かに支払われたが、これからどうすべきか。」
キエフ村長が悩む。
彼は未だに娘がドンコイの妾にされてしまう疑念を持ち続けていた。

次の日、カストール城に呼び出される娘たち。
「やはり城に呼び出されたか・・。ダメで元々、ドンコイ様にお目こぼしをお願いしよう。私もまいる」
「お父様。しかし、私は覚悟はできております。村のご迷惑になるようなことは・・」
「心配するな。もしかしたら、お慈悲を賜るかも知れぬ。仮に今までの事が芝居だったとしても、良き後継者としての評判を手に入れつつあるのだ。悪い評判が立つような事はいまさらできまい」
そういいながら登城する。

ネルケとコロンフルは一人できてたが、ヘルディンは父親と一緒に来ていた。
「おお、よく来たな」
そういって迎えるドンコイ
「ドンコイ様」
「ドンコイさま～」
ネルケとコロンフルに抱きつかれてにやけるドンコイ。

「はは。二人とも素晴らしい芸だったぞ。たった一週間でよくあそこまで出来るようになったな」
二人の頭を撫でながら言う。
「だって、ドンコイ様に見てもらいたかったから」
ネルケが頬を染める
「うち達を助けてくださったドンコイ様への恩返しですけぇ。おとっつあんも村の皆もなに不自由ない生活をさせてくれるドンコイさまに感謝してますよ」
抱きつきながらコロンフルが言う。

「うむ。うむ。・・・・ところで、お前達はなんで土下座しておるのだ？」

村長とヘルディンを見て首をかしげるドンコイ
「ドンコイ様、お慈悲を持ちまして、ヘルディンと共に村に帰ることをお許しください」
土下座したまま村長が言う。
「むむ。そこの娘も村に帰りたいと申すか」
「はい・・私も村に帰りたいです」
「残念だな。・・まあ本人がそういうなら仕方あるまい」
あっさりとドンコイが言う
「お許しいただけるのですか?」
村長が意外そうに言う。

「城に呼んだのは歌姫として私に仕えてみぬかと提案するためだったのだが・・」
「妾としてでは??」
「・・・なるほど。そう思われていたのか。安心するが良いぞ。意に染まぬ事を強要するつもりは最初からない。お前達はその美を生かして、領民に元気を与えてほしいのだ。あの祭りでの盛り上がりをみただろう?すぐにとは言わぬが、いずれ劇場を作るつもりなので、その時にはもう一度考えてみてくれ」
「わ・・私が歌姫ですか?」
ヘルディンがおそるおそる言う。
「ああ。その笑顔は私だけではなく領民すべてに向けて欲しい」
ドンコイが安心させるように笑う。

「ヘルディンちゃん。一緒にやろうよ」
「ドンコイさまは変な事するような人じゃないんよ。そんな事する人だったら、借金を肩代わりしてくれた時に最初から私を妾にするはずじゃもん。」
二人が薦めてくる。
「二人とも・・わかりました。その話をお受けいたします」

ヘルディンが言う。
「おお、よく決心してくれた。追って連絡するゆえ、それまでキエフ村で歌と踊りの練習をしておくのだぞ」
そういって豪快に笑うドンコイ。
ヘルディンもようやく笑うことができた。

（ふふ。領主の息子として権力で女を従えていた放蕩時代は、心からの笑顔を見ることはできなかったな。やはり女は笑顔が一番よい）
ドンコイはニヤニヤと笑う。

その後、何人かの少女を加えて結成されたカストール家歌劇団は、ヒノモト歌劇団と長く人気を二分する事になるのであった。。

反乱

光の国聖霊の塔

円卓についた天使達が各国の様子をみていた。

「ふむ・・おもった以上に勇者に対する排斥は進んでいないな」

緑色の髪をした大男が面白くなさそうに言う。

「神の代理人である我等に従わないとは・・最近人間たちに少々甘く接しすぎていましたね」

赤い髪をした少女が不満そうに言う

「人間など所詮我等の玩具。おとなしく踊っておればよいものを、調子にのりおって」

白い髪をした老人。

「ひひひ。災厄をおこそうかのぅ。それとも疫病でもはやらすか。その後に勇者のせいだという事にすれば、あ奴など怒った民たちに八つ裂きにされるだろう」

黒髪の老婆が笑う。

「・・いや。さすがにその様な事を故意にすれば、あのお方の怒りをわれ等が受けて消滅させられるかもしれません」

ウリエルと呼ばれていた銀髪の天使が言う。

「僕達に許された権限は戦争だけだからね。それ以上の行為をするにはお伺いを立てないといけないんだけど・・」

ガブリエルと呼ばれた青髪の天使が言う

「ここ数千年光の聖霊様からの指示はない・・ならば、与えられた権限内に留めておくべきだろう」

ミカエルが結論をだす。

「そうか・・ところで、あの男はどうしているの？」
ガブリエルが聞く
「ふふふ。さすが私が見込んだだけあって、立派に勇者の役をこなしておるみたいだぞ。さすがわが友よ」
ミカエルが言うと、円卓の中央には戦い続けるアーシャの姿が浮かんでいた。

その姿は凛々しくも美しく、まさに真勇者だった。
ただし、やっている事は盗賊そのもの。
各領に侵攻し、問答無用で領主やその家族、兵士を切り捨て、領民から略奪した。
アーシャの軍に参加した傭兵たちも同じ事をしていて、占領地は地獄と化していた。

「ははは、まさに勇者様だぜ」
「こんないい思いができるとはな」
片手に酒瓶、反対側の手に略奪した品を持って、兵士達が歌う。
隣には逃げ出さないように奴隷の首輪を付けられた女をはべらしている
「まったくだぜ。今まで貧乏ぐらしをしていたが、今じゃ勇者様の兵士だからなぁ」
街の広場で焚き火をして、思う存分に人生を謳歌していた。

「アーシャ様、いつまでこのような事を許しておくのです」
勇気を出して諫言する年若い臣下
「ふん。民など知るか。今まで私を持ち上げていたくせに、こちらが弱いと見ると牙をむいてくるのが民というものなのだ。所詮民など奴隷と同じだという事を骨の髄まで教えておかないとな」

兵士達による略奪を見ながら薄笑いを浮かべるアーシャ。

「貴方は・・本当にアーシャ様なのですか？私は皇都にいた頃、貴方様の事を心より尊敬しておりましたのに・・」

臣下が心底失望したようにいう。

この男はその才能を領主に認められ、皇都に留学した事があった。

そこで見た大陸全土に名をとどろかせる強くて高潔な騎士アーシャに単純に憧れたものである。

「ふふ、私は本物のアーシャだ。・・その目だ、私が最も憎むのは。勝手に期待を寄せて、期待が外れると勝手に失望して私を憎み手のひらを返す。そんな裏切り者など必要ない。私に必要なのは私に従う者だけだ」

その言葉を言うと同時に、アーシャはいきなり斬りつけた。

男の首が飛ぶ。

「片付けろ。それから、今日は3人ほど娘を連れて来い」

「は・・はい」

他の家臣たちはすっかり萎縮して命令に従うのだった。

「ふふふ。よくがんばってはいるな。だが・・」

「この男だけではちと弱いのう」

天使達が言う。

「この男のように絶望している者は多々おりましょう。彼らに神託と武器を与え、反乱を起こさせて真勇者に合流させるというのは・・？」

ウリエルが提案する

「そうだな。どうせするならピザンチウム帝国を滅ぼした時以上の大乱を起こすか。魔族と人間の戦争もここ数百年は小競り合い程度だったのでな。溜め込んだ魔法玉もそろそろいっぱいだ」

ミカエルが言うと、他の天使も同意した。

「それでは、各々魔法玉を使って聖なる武器をつくり、適当な人間に武器と神託を授け、国に対して反乱を起こすようにしむけろ。面白くなってきた」

「ミカエル様はどうなされるのです？」

ウリエルが聞く

「ふふふ。私は天使の中で今の時代唯一受肉している存在だからな。フリージア皇国をかきまわしてやるさ」

そういうとミカエルの姿は消えた。

その後、各国で神託と武器を授けられた者たちが現れた。

腹をすかせ、親から虐待を受ける少年。

親に奴隷として売り飛ばされた少女。

魔族に親兄弟を殺され、復讐に燃える青年。

信頼していた相手に裏切られて破産して街をさまよう商人。

失業して路地に座り込む中年。

愛する男と生き別れ、周囲から責められて孤独に陥っている少女。

そういった者たちが疲れきって眠りに落ちた時、それぞれ天使達の夢をみた。

緑髪の天使からは斧を。

赤髪の天使からはムチを。

白髪の天使からは杖を。

黒髪の天使からは玉を。

青髪の天使からは槍を。

銀髪の天使からは弓を。

彼ら６人は各国で反乱を起こしていくのだった。

森の国。

「それで、彼は天使から神託を受けた者だといいはるのか」
街中で暴れ、何人もの市民と兵士を殺していた少年をやっとの事で取り押さえたリチャード王子から報告を受けるエリック王。
「はい。天使からこの斧を授けられ、偽勇者に対抗するようにと神託を受けたと」
緑色の斧を見せる王子。

「・・ならば、なぜ街中で暴れる?」
「それが・・勇者に組みする国など、好きなように切り取って王になってかまわぬと神託が・・」
困ったように言うリチャード
「クソ天使どもめ。もはや奴等は神の使者でもなんでもないわ。わが民を操りおって」
エリック王が激怒する。

「この斧と少年をさらし者にしろ。天使たちの企みもすべて暴露しろ。平地に乱を起こし、平和を乱そうとする天使たちを光の聖霊様の意思に反してすき放題にふるまう化け物と宣伝するのじゃ。真に光の聖霊の意思を伝えるものは風の精霊シルフ様じゃとな」
エリック王が指示する。

「面白そうだね～。その話乗ったよ」
突然声がして玉座の間に妖精が出現する。

「おお、シルフ様。来ていただけたのですか」
エリック王が感激する
「私はシルフであってシルフではないけどね。『シルフィールド』の分身の一人の風の妖精。この国に住んでいるんだけど、協力してあげる。名前をつけてね」
妖精が言う。

「では森の国の守護精霊ということで『フォレスト』というのはいかがでしょう」
リチャードが提案する。
「『フォレスト』かぁ。いいね。これから私が守護してあげるね」
フォレストは嬉しそうに飛び回った。

その後、少年は街にさらされ、市民から石を投げられ息絶えた。
斧は皆が見る前でバラバラに破壊された。
市民達の前で光の精霊教団の大神官が、天使を光の精霊の意思に反する存在と断定し、新たな信仰の対象としてフォレストを紹介した。
「みんなよろしくね～」
市民達の間を飛び回るフォレスト。
市民達は見たこともない天使より、自分の身近に飛び回っている超常的存在である妖精を信じ、森の国から天使の影響は一掃された。

鞭女

大地の国ガイル

どんな豊かな国にも不幸な人間はいる。
１２歳の少女シビデレアはこの国でも最も不幸な人間だった。
今は奴隷として、親に売られた身である。

一年前まではうまくいっていたのである。
父は貧しい小作農で、同じく小作農の母と結婚をしたが、貧しくとも幸せであった。
母が浮気をして、若い男と一緒に逃げ出すまでは。
父はすっかり働く気力を失って酒びたりになり、家はどんどん貧しくなっていった。
シビデレアは小さい体で必死に働いたが、少女の稼ぎなどしれている。
父は妻に良く似て美しくなっていくシビデレアを見るのが辛くなったのか、ことあるごとに虐待した。
それに耐えてがんばっていたが、とうとう父の借金のカタに奴隷商人に売り飛ばされてしまった。

奴隷商人の元での生活は過酷だった。
容赦なく働かさせられ、夜は地下に押し込められ他の奴隷と共に檻に入れられる。
そうしておいて、奴隷市が立つ日には、金持ち達の慰み者として売られていくのだ。
シビデレアは不幸な自分を嘆いて、毎日泣き暮らしていた。

（いつかきっと白馬に乗った王子さまが来てくれて、私を救ってく

れる）
奴隷に許された希望はむなしい妄想のみ。
それでも、いつか奇跡か起こって、誰かが救ってくれると信じていた。
そう信じることしか自分を保てなかったのであるが、ある日奇跡が起きた。

その日、あまりにも酷使されすぎたため、シビデレアは熱を出して寝込んでいた。
近くに迫った奴隷市で売り物にならなかったら損をするため、奴隷商人はしぶしぶ布団で寝る事を許した。
熱にうなされたシビデレアは、不思議な夢を見ていた。

『聖女よ。世をすくう少女よ。わが僕となり、偽勇者を倒しなさい』
夢の中に赤い髪をした美しい天使が出てきてシビデレアにささやく。
「天使様・・」
跪くシビデレア。
『貴方にはこの『雷光のムチ』を授けます。このムチは自分の敵には激痛を、自分の味方には体を癒し快楽を与える力があります。今の境遇を抜けだす力となるでしょう。偽勇者を倒し、国の女王として君臨するのです」
その言葉と共に天使の姿が消える。

シビデレアが起きる。
「なんだ・・・夢か・じゃない！！」
手には真っ赤なムチが握られていた。
「天使様・・ありがとうございます。きっと女王になって見せます」
そういうと、ムチを持って一歩踏み出した。

「なんだ。シビデレア。起きたのならさっさと仕事を・・・ぐぉ！

！」

太った奴隷商人がムチで叩かれて悲鳴を上げる。

激痛がはしり、床を転げまわった。

「ふふふ。ドンクルご主人様。今までよくも好き放題をしてくれましたわね。この豚がぁぁぁ！！」

シビデレアが怪しく笑う。

「な、なんだお前は。み、みんな、アイツを止めろ」

ドンクルという奴隷商人が必死に言うと、雇われていたチンピラが一斉に飛び掛った。

シビデレアがムチを一閃すると、何人もの男達が昏倒した。

「さて、ご主人様。手始めに仲間達を解放してもらいましょうか。」

そういって再びドンクルを打ち据える。

突然、街の中で騒ぎが起こった。

何人もの奴隷の首輪をつけた少年少女たちが叫びながら何の変哲もない家から出てくるのである。

「自由だ・・！」

「助かった！」

そういって街の大通りで抱き合って喜ぶ。

市民に通報され、事情徴収に出向く騎士隊。

「・・それで、お前達は奴隷として働かされていたのか」

騎士隊が事情を確認する

「はい。俺たちの仲間の一人が反抗して助けてくれたんです」

説明する少年達。

「そうか・・わかった。魔族の奴隷を解放するとき、人間の奴隷達も国が管理して待遇を改善するように法律を変えていたのだが、お前達の奴隷の首輪は登録されていない。つまり、非合法の奴隷売買ということになるな。これは捨て置けん」

そういって騎士団長が憤る。
「第一騎士隊出動、目的は非合法の奴隷商人の逮捕だ」
騎士団長であるウェル二ア自らが指揮をとり、目的の家に向かった。

その頃、シビデレアは・・・ドンクルたちに再び捕まっていた。
奴隷達を逃がすまではうまくいっていたのである。
しかし、素人の悲しさ、ムチを振っていたら、自分にムチが絡まった。
とたんに気持ちの良い癒しの魔力が自分に降りかかったが、その隙にチンピラ達に突撃され、縛り上げられたのである。

「ふふふ。この俺によくもこのようなことをしてくれたな・・」
ムチで打たれて真っ赤にはれた顔をしたドンクルが縛り上げられたシビデレアに言う。
「ガキの癖に大層な事をしてくれたじゃねぇか」
チンピラ達がすごむ。
「お前達の半分は、逃げた奴隷を捕まえに行け。その間に俺が調教してやる」
そういって『雷光のムチ』をたたきつけるドンクル。
しかし、雷光もでず、シビデレアは苦痛を感じなかった。
「ちっ。なんだこのムチは。別のをもってこい」
そういって別なムチでシビデレアを滅多打ちにする。シビデレアは激痛にのたうった。

チンピラたちの半数は家を出て行った。
ムチに打たれ、激痛を感じてシビデレアは朦朧としていた。
(天使様・・やっぱり私には女王なんて無理だよぅ・・このままんじゃうのかな)
そんな事を思いながら激痛に耐えるシビデレアだった。

しばらく意識が朦朧としていたら、急に騒がしくなった。
「お前等！！おとなしくしろ。非合法の奴隷売買の容疑で全員逮捕だ！」
騎士たちが奴隷商人の家に踏み込む。
チンピラやドンクルが縛り上げられていった。

「おい！大丈夫か。こんな少女をムチで打つとは・・」
シビデレアを縛っていたロープが切られ、立派な騎士に抱き上げられる。
「私の王子様・・きてくれたんだ・・」
その言葉を最後にシビデレアは意識を失った。
「全く、奴隷商人という輩は救いがたい。この少女は私が直接取り調べるため連れて行くぞ」
そういって城に連れて帰るウェルニア。
侍女に命令して治療を受けさせた。

城の一室で意識が戻るシビデレア
「ここは・・？」
「大丈夫よ。ここはガイル城。貴方はひどい怪我をおってたから運ばれたの」
侍女が優しく言う。
その時、ドアが開き、立派な鎧を着た騎士が入ってきた。
「容態はどうだ」
「今気がついたところですわ」
「話ができそうか？」
「あまり無理をさせては・・・」
侍女が乗り気ではなさそうな声を出す

「いえ・・大丈夫です。私の王子様、助けてくださってありがとう

ございます」
ベッドの上で涙を流しながらお礼をいうシビデレア。
「・・確かに俺は王子のウェルニアだが、大丈夫のようだな。よかった」
そういった笑うウェルニア。シビデレアはその笑顔に魅せられた。

サロンに移動して、温かいお茶を飲みながら事情を聞く
「そうか・・天使の神託があってこのムチを授けられたのか・・」
騎士隊が押収した『雷光のムチ』を見せながら聞く
「はい。天使様は偽勇者を倒し、この国の女王になれとおっしゃいました」
シビデレアがうつむきながら言う

「そうか・・。だが、まだ一般に知られてはいないが、天使はむしろこの世界に害をもたらす存在なのだ」
ウェルニアが言う
「そんな・・」
「考えても見ろ。女王になれという事は、ガイル国も滅ぼせという事だぞ。つまり反乱を起こせと唆しているのだ。お前はこのムチ一本ですべての兵士達を倒すことができるのか？」
「いえ・・そんな事できません」
「そうだろう。成功したとしても何人の人間が死ぬ事か。私は勇者殿も直接知っているが、偽者などではない。この国にもビールという飲み物をもたらしてくれた。天使の神託など忘れて、普通に暮らしなさい」
そうウェルニアは説得する。
シビデレアは下を向いてすすり泣いていた。

シビデレアはどこか妹のフェルニーの小さい頃に似ていた。
（フェルニーもこの位のころは可愛かったのだがな。お兄様と俺の

後をついてきてたっけ）
そんな事を思うウェルニア。

「で、でも、普通に暮らせといわれても、私にはもう帰るところもありません」
そういって泣き出すシビデレア。
「そうか・・よければ事情を聞かせてくれないか？」
ウェルニアが優しく聞く。シビデレアは泣きながら事情を話した。
「そうか・・。帰るところがなければ、侍女としてここで働きなさい」
「で、でも、私だけそんな事になっても・・」
仲間の事を思うシビデレア

「ああ、お前の仲間の奴隷達も悪いようにはしない。帰るとこがない者は、ちょうど新しくできたビール工場があるのでそこで働いてもらう。お前は天使に目を付けられているので、手元に置かねばならんからな」
「王子様・・本当に私の王子様なのですね・・ありがとうございます」
テーブルに伏せて泣き出すシビデレア。
（このような少女まで唆すとは・・。ミール国王からも手紙が来ていたが、天使どもが動き出したようだな。気をつけねば・・）
気を引き締めるウェルニアだった。

「も、もう泣き止みなさい。まだ聞きたい事があるのだ」
しばらくしてウェルニアが声をかける
「なんでも仰ってください。私の王子様」
顔をあげて熱い目で見つめるシビデレア。そうしていると愛らしい少女だった。
「うっ。こほん。つまり、このムチについてだが、奴隷商人の話だ

とムチを振るっても何も起きなかったといっておる」

そういいながらシビデレアにムチを渡すと、ムチから光がほとばしった。

「なるほど・・そのムチはお前しか使えないのだな。どんな効果があるのだ」

「天使様は敵に対しては激痛を、味方に対しては癒しの快楽を与えると仰ってました」

シビデレアが言う

「そうか。試してみよう。そのムチで私を軽く打ってみてくれ」

「え?そ、そんな。恐れ多い」

「あくまで実験だ。私はお前の敵ではない。そうだろう?」

そういって笑うウェルニア

「は、はい。では」

ウェルニアを軽く打つ。ペチっと音がした。

(な・・なんだ。ちょっと気持ちいいぞ)

「ふむ。どうやら癒し効果は本物らしいな。もっと強く打ってみろ」

「はい。えい!」

強めに打たれると、もっと気持ちが良かった。

「もっとだ!!もっと強くだ!!」

「はい!!王子様、もっと姿勢を低くしてください」

ヒートアップする二人

いつしかウェルニアは四つんばいとなり、その体をシビデレアが叩いていた。

「貴方達は何をしているんです!!!!!!!!!!!!!!!!」

サロンに入ってきてその姿を見たフェルニーが絶叫した。

(全く、リチャード様だけではなく、お兄様まで幼女趣味に走るとは。おまけに変態プレイまで・・)

正座している二人に説教しながら、フェルニーは苦悩するのだった。

その後、シビデレアは騎士隊に入り、ウェルニアの侍女を兼ねながらムチの使い方を学んでいった。

１０年間片時も彼の側を離れず、ついに側室として認められることになる。

彼女は奴隷から王妃になりあがったサクセスストーリー「シビデレア姫」として、長く民衆に伝えられていった。

海国

メギド国を出発するシンイチ達。
セレームは別れ際に謝罪してきた
「昨日は失礼いたしました。その可愛らしい子と末永くお幸せに・・」
シンイチに擦り寄っているアンリを見ながら言う
「うん。お姉ちゃん。私とお兄ちゃんの結婚式には来てね」
無邪気にそんな事を言う
「こら！アンリ。皆もそんな目で見ないでください。誤解なんだってば！！」
メギド国の国民や自分の護衛からも若干白い目で見られて、いたたまれなくなった。

アンリと護衛を道具袋に入れて、海の国アトルチスを目指す。
「うわ・・船がいっぱいだね」
「ここは漁業と海運業が盛んな国だからね」
帆船がたくさん港に停留していた。
道具袋から奴隷を解放する。
みな喜び自分の家に帰っていった。

しばらくして海の国の騎士隊が迎えに来た。
「勇者様、お待ちしておりました。ぜひ街の者にも姿を見せてやってください」
そういって、城へと続く道をパレードする。
道の両脇には勇者を歓迎する市民たちで溢れていた。
「勇者万歳！」
「我等を魔族の脅威からすくってくださった勇者に栄光あれ」
そういった歓迎する市民たち。

しかし、そんな中に一人の中年男が潜んでいた。

「偽勇者め、死ぬがいい」

パレード中いきなり群集から一人の男が飛び出し、小さな玉を掲げる玉から無数の黒い矢が飛び出し、周囲の騎士や市民達に無差別に刺さる。

「ぐぁぁぁぁ」

「な、なんだこれは、抜けない」

「いたい・・いたいよう。おにいちゃん」

アンリにもあたり、痛みのあたり泣き出す。

護衛たちが矢を抜こうとしても、実体のない影のようなものだったのでつかめなかった。

見る見るうちに顔色が悪くなるアンリ。

「こ・・これは」

周囲の市民達も倒れ、大騒ぎになった。

「ふふふ。この『呪闇の玉』からでる闇の矢に当たった者は、決して助からずに死んでいく。闇の矢は決して抜けないぞ」

中年の男が笑う

「これは、まずい。いったん道具袋にいれて、闇の矢がない状態で取り出そう。『収納』。」

倒れているアンリや市民達を道具袋に収納しようとするが、道具袋が反応しない。

「な??」

驚くシンイチ

「ふふ。その邪悪な袋は天使様たちにはお見通しだ。聖なる武器を持つ我ら使徒やその武器に傷つけられた者は、収納魔法もキャンセルされるのだ。もはやお前など俺の敵じゃない」

男が笑う。

「天使たちは何を考えてるんだ。無関係な人を巻き添えにして・・」
シンイチが怒る。
「ふん。偽勇者を崇める愚民など不要だ。天使様たちは偽勇者を殺せば、この海の国を私にくださるそうだ。新たなる王のため、人類のため死んでいくがいい」
シンイチに向けて闇の矢を放つ
「シンイチーー」
シルフが必死にかばうが、何本かがシンイチに突き刺さった。

「・・・っと。あれ?痛くない」
シンイチは無傷だった
「あ、そういえば、その『軽銀の衣』は魔法を吸い込む国宝級アイテムだったね」
シルフがほっとする。

「助かった・・反撃だ。出臭石でろ」
道具袋からメタンガスコンロ用の出臭石をだして、地面にたたきつける。
「ふん。そんな石ころなんか・・なに?くさ!!!」
出臭石からとてつもなく臭いう○こ臭がでて、たまらず鼻をつまんで吐く男
「今だ!」
息を止めていたシンイチは『軽銀の棘』を振って男の手から『呪闇の玉』を叩き落す。
地面に落ちた玉は割れ、アンリや市民達に突き刺さっていた闇の矢が消えた。

「こ・・こんな戦い方をする勇者がいてたまるか!!卑怯者」

そう喚きながら兵士達に連れて行かれる男。
「いや・・そんなこと言われてもね」
全身から悪臭を漂わせながらシンイチがぼやく。
「シンイチ・・助かってよかったよ。だけど、しばらく近寄らないでね」
シルフに冷たく言われる。
「おにいちゃん・・くちゃい」
起き上がったアンリも近寄ろうとするが、犬族の鼻にはきつすぎたのか、そのまま逃げるように後ずさりした。

「みんな・・ひどい。せっかく勇敢に戦ったのに・・」
その後風呂に入って臭いがとれるまで孤独だった。

風呂から上がって全身に香水を吹き付けたあと、国王と謁見した
「勇者殿、私が海の国アトルチスの王ポセイドニスだ。わが国民が失礼な事をしてしまった。申し訳ござらん。」
いきなり謝罪されるシンイチ
「いえ、海の国がされたことではなく、彼一人がしたことですから。気にされなくていいですよ。むしろかえってご迷惑をおかけしたしたのかも」
そういって謝罪を受け入れる。

「ありがとう。ふふ、噂どおり寛大な方だな。・・・実は、シンイチ陛下が来られるまで、私は迷っていたのだ。私は敬虔な光の聖霊様の信徒であることに誇りを持っていて、その僕である天使様たちも信じていた」
「は、はぁ。そうですか・・」
若干不安になるシンイチ

「だが、あの男を尋問してみると、天使は勇者を倒せばこの海の国

をやると唆したそうだ。つまり、我等の信仰は天使自身によって踏みにじられたのだ」
怒りのあまり声をあげるポセイドニス

「ここではっきりと宣言する。我等は天使への信仰と光の聖霊への信仰を区別する。光の聖霊は崇めるが、天使はその意思に反する化け物じゃ。二度と天使を信仰してはならん。神殿の天使像もすべて壊せ。わかったな」
謁見の間にいた神官達を睨みつけ命令する

「へ・・陛下。天使像を壊せとは・・あまりに」
「ならば、危害を加えられた民たちに信を問うてみるか。今、騎士たちが事の顛末を市民達に触れ回っておる。ミール国やガイル国での天使の使徒の話もな。今頃神殿に怒った民衆が押しかけているのではないかな？」
「は、はい。すぐに天使像を壊します」

「代わりに彼女を崇めるがいい・・セラフィ様。これからよろしくお願いいたします」
虚空に向かって王が話しかけると、風の妖精が現れた。
「セラフィちゃん。久しぶり～」
シルフが呼びかける。
「シルフ。久しぶりだね～。この国は私が守るから、安心していいよ。天使なんかぶっとばしちゃえ」
そういって抱き合う二人の妖精。
神官達は平伏して彼女を受け入れた。

「あと、実はヒノモト国にも港を作ろうとしているのですが、船がありません。そして、船を何艘か購入したいのです。あと、漁師や貿易商の方も何人か来て頂きたいのですが・・」

そういってシンイチが願い出る
「お安い御用だ。さっそく紹介状を書いておこう。あと、私の娘のリップルを紹介しよう。この子に我が国を案内させよう」
そういってシンイチと同い年ぐらいの少女を呼ぶ。
「勇者様、私は王女リップルです。この国は私が案内しますね」
小麦色に焼けた健康的な肌をした同い年くらいの美少女が笑いかけてくる。
「は、はいよろしくお願いします」
実は結構シンイチの好みのタイプだったので、シンイチは照れた。
「ふふ。挨拶がすんだら、敬語はやめようよ。さ、いこ。」
シンイチの手をひっぱって街につれていく。
アンリや護衛たちはあわててついて行った。

悪商

「えっと、フェーバーさんの知り合いの家って、多分ここだよな。」
港の中でも一際立派な家の前に立つ。表札に「ヴィアベル」と書いてある
「ここは知ってるよ。この港の中でも一番の金持ちで、この街の総元締めをしている人だよ。」
リップルが説明する
「それじゃ入ってみよう」
そういって皆は中に入った。

「アンタが勇者様かい？ふん。うさんくさいな」
開口一番、お茶も出さずに見下したように言う痩せた男。
「初めまして。勇者にしてヒノモト国王のシンイチと申します」
少しムッときたが、丁寧に挨拶するシンイチ。

「フェーバーの野郎は、俺から船を買う時に借金してるんだよ。アンタが払ってくれるのかい？１００００アルになるけどね」
「・・・わかりました。私が立替ますよ」
「ちょっとシンイチ。明らかに高すぎると思うけど・・」
リップルが言う。
「いくらお姫様でも、これは国が決めた法律に従っている額ですぜ。借りた金にはちゃんと利息というものが付くんだ。お父様に訴えたっていいんですぜ」
借用書を出して倣岸に言うヴィアベル。

「リップル。いいよ。はい、１００００アルです」
そういってシンイチが出すと、ひったくるように受け取った。代わりに借用書を受け取るシンイチ。

「これで用は済んだだろ。さっさと出ていきな」
「いえ、陛下から紹介状を受け取っているんですが。船の買取と漁師や海運業者をヒノモト国に誘致したいんです」
そういって紹介状を出す。
「悪いが、それは見なかった事にしてもらおう。なんでわざわざ商売敵をつくらにゃならんのだ。さっさと出て行け」
「ヴィアベル。いくらなんでもその態度はないでしょう。それこそお父様に報告するわよ！」
リップルが腹に据えかねたように言う。

「お姫様。アンタは海のことなんかなんにもわかっちゃいねぇ。素人が口出さないでもらいてぇな。もし国が俺たちに対して強圧的に命令するなら、俺たちは何処にでも逃げられるんだぜ。そうなったら海の国はお終いだ」
「くっ」
「さっさと帰りな」
ヴィアベルが手を振る。

「・・わかりました。いったん帰ります」
「ああ、もう二度とくるんじゃねぇぞ」
その言葉を後ろにシンイチ達は帰っていった。

アトルチス街の茶屋にはいる一行。
「何なのよあの態度。ムカつく！」
シルフが怒る。
「私、あのおじちゃん嫌い」
アンリにまで嫌われていた。

「・・・仕方ないよ。考えてみたら、彼らにとっては自分の商売を脅かす相手だもんな。はいそうですかって協力なんかするわけない

か」
シンイチが言う。
「でも、あの態度はないわよ。仮にも国王が協力せよと命令しているのに、正面から蹴飛ばすなんて。私、お父様に言うわ」
リップルが言う。
「そこまでしたら迷惑をかけるよ。地道に勧誘してみよう」
そういって午後は船の製造元や漁師街の網元をまわる事にした。

「いや・・それはねぇ。いくら勇者様の頼みでもね。ヴィアベル商会の許可がなければねぇ」
「船を売れって?それはちょっとね。うちはヴィアベル商会の子会社なんで、許可がなければ勇者様でも無理ですよ」
何軒もの船会社や漁師の網元をまわったが、皆すげなく断られた。

疲れ果てて再び茶店に帰ってぐったりしていると、痩せた男に声をかけられた。
「あの・・もしかして、勇者様ですか?」
ガリガリに痩せて元気がないようで、自信なさそうに声をかけてくる。
「はい、そうですけど、貴方は?」
「えっと、俺は、一応天使様の使徒です。これをもらいました」
そういって包みを開けると、青く輝く槍が出てきた。男が持つと青い光が洩れる。

「!!!まさか??」
「あの、いえ、勘違いしないでください。勇者様を倒せば国をやるって言われたけど、あの馬鹿の姿を見てすっぱり諦めました。というか、私は元々商人なんで、槍なんか使えないですよ。こんなものもらって、下手したら国につかまるかも知れないし、どうすりゃいいんだか・・」

はぁぁぁーっと深いため息をつく。

「だったら売り払ってしまえば?綺麗で魔力が高そうな槍だし。国宝の『海皇の槍』に匹敵するくらいの価値あるかも。私がお父様にかけあってあげましょうか?」

リップルが欲しそうに言う。

「だめなんですよ・・だって他人が持ったらただの槍になるんですよ。売れたとしても二束三文ですよ。」

「・・そんな事言わなきゃいいのに・・。でもすぐばれるか」

リップルが残念がった。

「まあ、なんにせよ襲うのを諦めてくれてよかった。お名前はなんておっしゃいますか?」

シンイチが聞く。

「元海運商人のセガールと申します。今はヴィアベルの野郎に騙されて破産して一文なしですけどね」

セガールは名乗る

「面白そうな話・・詳しく聞かせてね」

リップルが目を光らせて聞いた。

「え?という事は、ヴィアベルは魔族コロニーと組んでいたの?」

シンイチが聞く

「アイツは表面的には親切な元締めとして振舞っていて、アイツの下で働いている奴や小金がありそうなに声をかけて独立を持ちかけるんです。アイツから船を買って、アイツの運搬の仕事を受け取って指定された日時までに付くという契約を結ぶんですが、何回かその仕事をこなしたら急に魔族に狙われるようになるんですよ」

「つまり、情報がヴィアベルから洩れていると・・」

「私は運良く助かりましたけどね。その時に魔族が笑いながらそう

もらしてました。ヴィアベルに踊らされたまぬけがって」
悔しそうに拳を握り締めるセガール

「そうして、生きて帰ってみたら担保は取り上げられ、家族までアイツに奴隷として連れて行かれて、あてもなく街をさまよっているとこなんです・・」
セガールがうなだれる。

「なるほど・・魔族コロニーが撤退したから、そういう事ができなくなった。あの態度はそれが原因か・・」
シンイチがうなづく。
「許せない!!!!!あいつ、絶対殺す」
今にも飛び出していきそうなリップル。

「待ってってば!!!。証拠も無しにそんな事しても、セガールさんの証言だけじゃ処罰できないよ」
リップルをあわてて押し留めるシンイチ。
「シンイチ!!見損なったわよ。それでも勇者なの!!」
肩を掴んでガクガクと揺さぶられるシンイチ。
「だ、だから、なんとかする方法を考えよう」
そういって押さえるシンイチだった。

「そういえば、その槍ってどんな効果があるんですか?」
セガールに聞く
「はい。これは『風神の槍』といって、風を起こしたり、毒を散したりすることができます」
「シルフとかぶるな・・役に立ちそうにない」
「ちょっと!私が役立たずっていうの?」
シルフが怒る。

「ちがうって！今の状況をなんとかするのにはって意味だよ。どうせ今屋敷に踏み込んだって証拠なんかないし・・証拠？」
シンイチが何かを思いつく。
「そうか！あいつが証拠を隠しても・・。シルフ、セガールさん。協力してください」
二人に頼む
「わたしは～？」
「私は？」
アンリとリップルが聞く
「二人はあいつを見張ってて。なんだかんだ言っても王様の命令を蹴飛ばしたんだから、逃げるかもしれない。まあ安心してよ。勇者の力って奴をアイツに見せてやるから」
そういうと、セガールたちをつれて出て行った。

悪商（後書き）

使徒の人数とかわかりにくかったので、「反乱」を訂正しました。

魔城

「高い高い、怖いですよぅーーーー」
セガールの絶叫が響き渡る。
彼は必死に『風神の槍』を掲げて、後ろから強風を送っていた
「ははは、すぐに慣れますよ。思ったとおりシルフと風の槍のコラボは速いな。今までの倍以上の速さで飛べる」
シンイチが言う。

「早いね。もう魔国が見えてきたよ。あと5時間くらいで新魔王城だね」
シルフが感心したように言った。
海国から出て一日半、途中休憩を挟みながらも飛び続けていた。

目的は新魔王ノームに会いに行くこと。
シンイチは自分にできないのなら知り合いの力を借りようと考えたのだった。
五時間後
すっかり風にさらされて冷え切ったシンイチとセガールは、新魔王城の前に立っていた。

「しかし、本当に会ってくれるのですか?シンイチ様がいくら勇者でも・・いや、勇者だからこそ、殺されるんじゃ?」
セガールが恐怖に震える。
「はは、大丈夫ですよ。ノームさんは話のわかる紳士ですから」
そういってスタスタと門に近寄る
「止まれ。ここは魔王城だ。そこの人間、何をしに来た」
門番たちが威嚇する。

「私はヒノモト国王シンイチです。魔王ノーム様にお願いがあってきました」
そういって取次ぎを頼む。

「シンイチだと・・?前魔王を倒したという勇者か!」
「よくものこのこと・・われ等が相手だ!」
門番が剣を向けてくる。

「ダメじゃないですか・・・」
「おかしいな。門番はあの時に魔王城にいた兵士じゃないのかな・・まあいいや。おほん。私に剣を向けると、後から魔王様から酷い目に合わされますよ。まず死刑は確定ですね」
「なにを!!!」

「たかが門番の分際で、自分の判断で動こうとするな。それがどれだけ国に悪影響を及ぼすか考えてみればわかるだろうが!少なくとも、あの時魔王城にいた者に問い合わせてみるぐらいの事をせよ。それが門番の役割だろうが!」
口調を変えて一喝する。
「こ・・・このやろう」
門番の二人がいきり立つ。
「お前達の身勝手なプライドで自分の将来を無にするか?たかが問い合わせるぐらいの事もできぬ無能か?」
シンイチがピシャリという。

「・・・いいだろう。そこまで言うなら問い合わせてやろう。だが、もし貴様が敵だったら、八つ裂きにしてやる!!」
一人がそういって魔王城に入っていった。
「シンイチ様、そんな事いって大丈夫なのですか?」
「大丈夫ですよ。ノームさんを信頼してますからね。」

そういって笑った。

しばらく待つと、急に城内があわただしくなった。
奥から高級そうな鎧を着た兵士が出てくる
「勇者シンイチ様、お待たせいたしました。魔王様が歓迎されるようです。私はこの者たちの上司で、タータルスと申します。門番の失礼をお詫びいたします」
そういって詫びるがっしりとした兵士。
門番の二人は青くなって土下座していた。

「いえ、いいんですよ。いきなり訪れた私も失礼でしたし。そこの人達はあの時に魔王城にいなかった人ですか？」
シンイチが笑いながら言う
「ええ。ノーム様が魔王になられて、新しく雇われた者です。私はあの時魔王城にいたので、すべての事情は知っておりますが、新兵の中には事情を知らない者もいるのです。重ね重ね失礼いたしました」
そういってタータルスは頭を下げた。

「くんくん・・・なんだろ、どこかで嗅いだことがあるような匂い。あっ、思い出した。あの下着をはいてたの君でしょ！！」
シルフが突然大声を上げる
「下着？何のこと？」
シンイチが首をかしげる
「シ、シルフ様。どうかその事は内密に・・・」
いきなり土下座するタータルス。
シンイチは首をかしげながら、タータルスに案内されて新魔王城に入っていった。

「久しぶりだなシンイチ殿。いろいろな活躍は聞いているぞ」

玉座に座ったノームが暖かく迎える
「シンイチ君、そしてシルフ久しぶり～。会いたかったよ～」
玉座の隣の椅子に座ったシルフィールドが挨拶する。

「二人とも久しぶりです。もしかして、お二人は結婚なされたのですか？」
そういってシンイチがからかう。
「・・・まあ、形だけはな。残った二大魔公が結束しなければならぬのでな」
「あはは、私は実体がないから、合体できないけどね～」
シルフィールドが明るく言う
「なんにせよ、お目でとうございます。お幸せに」
シンイチが祝福する。

「ははは、まずは食事でもしよう。彼らに食事の用意を。共に食べよう」
そういって食事が用意された。
「これは・・ラスの実のお粥にトンカツ。ケセルとピクルの実の缶詰。もうここまで広がっているのですか？」
出された食事に驚くシンイチ。

「ははは。いい物はいち早く取り入れる方針だ。無駄な戦争もなくなって、魔国も景気が上向いている。今まで我等は何をしていたのだろうな。今は人間国向けにもっと売れるような魔具も開発中だ。期待しているがいい」
機嫌よく話すノーム。
「私たちが食べられないのが残念だよ。でもいい匂い～」
シルフとシルフィールドが言う。
「ヒノモト国のほかにも、各国で特産品を作っていますよ。ビールというアルコールや木で作った安価な紙、ガラスという透明な瓶な

どがそのうち魔国に入ってくるでしょう」
今までやってきた事を話す。
「ほう。それは楽しみだ」
食事は和やかにすぎていった。
セガールは付いていけずに固まっていた。

「それで、今までの事を報告するためにわざわざ来てくれたのか？」
食後のお茶の席で聞いてくるノーム
「いえ。実はですね・・」
海の国での一件を話す。
「というわけで、最近海の国の魔族コロニーを撤退した軍に、ヴィアベルとの取引記録が残ってるんじゃないかと思うんですよ。それを持っていったら、あいつを裁けますからね」
「わかった。すぐに調べて手配しよう。こちらにとっては別に隠す事でもないから、すぐ見つかるだろう」
部下に命じて記録を調べると、あっさりと見つかった。

「ふむ・・魔族コロニーには捕らえた船の乗組員を奴隷にし、積荷の荷物の半分を取る。ヴィアベルにはもう半分を渡すやり方をしていたようだな。ヴィアベルとやらは魔族に襲われたといって商人たちから請け負った荷物まで横取りしていたわけか。まあ我々も片棒をかついでいたわけだが」
ノームが書類を見て言う
「これがあれば堂々と処分できますね。あいつに荷物を騙し取られた商人たちや借金を背負わされた船主達も救われるでしょう。」
そういってシンイチは笑った。

次の日、証拠と新魔王ノームの親書を持って帰るシンイチ達
「もう行くのか。もっとゆっくりしていけば良いものを」
名残押しそうに言うノーム。

「いえ、のんびりしてたら逃げられるかもしれませんから」
「そうか。昨日天使どもの事も聞いたが、あいつ等こそ諸悪の元凶。あいつ等と戦う時が来たら全軍をもって駆けつけるから、知らせてくれ」
「はい。その時にはぜひ協力お願いします」
シンイチが頭を下げる

「シルフもまた来てね。思ったとおりシンイチは面白いね～。分身の貴方がうらやましいよ。こっちは平和すぎるもん」
シルフィールドが言う。
「また来るから。次はもっと面白い情報持ってくるからね」
シルフが手を振る。
シンイチ達は再び空を飛んで帰っていった。

「ふふ。人間なのに不思議に気持ちの良い男だ。息子のように思えてくるな」
「私達の間には子供ができないからね～。いっそシンイチを養子にする？」
「残念だが、彼の方が早く死んでしまうな。魔族の寿命の方がはるかに長いのだから」
寂しそうに言うノーム
「そうか・・」
「我々はまだいい。気持ちのいい友人として永遠に記憶に残るだろう。だが、ウンディーネ殿は・・」
「大丈夫だよ。ウンディーネちゃんもきっと幸せになれるよ」
二人はいつまでもシンイチが飛び去った空を見ていた。

「しかし、あれが魔王ノームですか。なんというか、思っていたよりまともな人ですね」
セガールが言う

「いま、貴方が『人』といったように、彼を含めた魔族は『人』なんですよ。決して悪魔じゃありません」
シンイチが笑いながら返す。
「確かに・・。これは根本的に考えを改めないといけないと思いました。同時に勇者を殺そうとするなんて、いかに馬鹿げた事かと思いますよ。国を敵に回す上、魔族全体まで敵に回して、たかが槍一本で何ができるのか」
セガールがしみじみと言う。
「天使は唆すだけで、責任なんか取りませんからね。自分の意思と判断を大切にすべきです」
「確かに。商人はそれがすべてです。騙された私にも責任が幾ばくかはありますね・・」
「失敗したら取り返せばいいんですよ。できれば、この件が終わったら、商人として力を貸してくれませんか」
「もちろんです。せっかく掴んだこのコネを見逃したりしませんよ」
そういって二人は笑いあった。

海風

海の国　ヴィアベルの屋敷
「ちっ。あれから王女の手の者が張り付いてきやがって、うっとうしい」
不機嫌そうに部屋の中をうろつくヴィアベル。
「や、やはり王の命令に従って、勇者に協力した方が・・」
部下がおずおずと進言する

「やかましい！あの勇者は商売の邪魔をしやがった挙句、商売仇になるんだぞ。それでなくても奴隷解放なんかしやがって、今抱えている奴隷の買い手もない状態だ。それに、あんな奴に関わって、下手に探られたら破滅だぞ」
ヴィアベルが不快そうに言う。
「で、ですが、おかげでリップル王女が完全にこちらに反感を持ちました。いくら我々でも、本気で海の国を敵に回したりしたら・・」
「海の国がなんだ！。いざとなれば国をでて、どこかの島に立てこもるまでよ。ふふ、いっそその方がいいかもしれんな。おい、今までためた宝物をドクロ島に移す準備をしておけ」
部下に指示する
「ですが、見張られていますが」
「かまうな。港は俺の支配下にある。堂々と運び出してやれ。いざとなったら逃げるまでよ。」
そういって豪快に笑った。

「姫さま、ヴィアベルの屋敷から大量の物と奴隷が運び出されています」
そう部下から報告を受けるリップル。

「そっか。監視を続けて。シンイチが帰ってくるまで、絶対に船を出しちゃだめだよ。私はお父様に報告するから」
そういって部下に指示する。

「お父様。そういったわけでヴィアベルは叛逆者です。しかも、既に逃げる準備をすすめているみたいですわ」
リップルが父王に報告する・
「だが、今のところは取り締まる証拠がない。下手な事をすれば、港の人間の反感を買ってしまう」
リップルを押さえるポセイドニス王。
「父上までそんな事を。アイツに逃げられてもいいのですか！！」
詰め寄るリップル。

「リップルよ。王とは国内において中立を保たねばならぬ。如何に怪しいと言っても、証拠もなく王女の言葉だけで王の強権を振るうわけにはいかぬ。そんな事をしていたら、民の信頼を失うだろう」
王者の姿勢を見せるポセイドニス。
「・・せめて屋敷を捜索して証拠を探すとか、沖を海軍で封鎖するとか・・」
「それもできん。軽々しく軍を動かすことはならん。監視をつけるところまでで精一杯じゃ」
リップルを諭す王。

「そんな・・それじゃどうすれば・・」
「勇者どのに任せるしかなかろう。しかし、もし王の勇者に協力せよという命に従わず勝手に逃げ出したのなら、アトルチス港から奴の影響を一掃した上で、勇者と海の国に対する叛逆者であると各国に伝えればよい。海の国を馬鹿にしてくれたが、海の国に根拠地を持たないヴィアベル商会など相手にされぬわ。まして各国で英雄視されている勇者にたいしての叛逆者だ。結局どこの港にも受け入れ

てもらえず、末路は海賊となるしかあるまい。そうなったら海軍で殲滅してくれる」
国王は黒い笑いを浮かべる。

「・・・お父様、実は怒っています？」
リップルが若干引きながら聞く。
「舐められてそのままにしておくと国の面子が立たぬわ。どちらにしろ、奴等はおしまいよ。監視といなくなった後の制圧の準備だけしておけ」
そういって兵士達に命令する王だった。

シンイチとセガールがアトルチス城に帰ってくる。
すぐに謁見の間に通された。
「お待たせしました。これがヴィアベルが魔族と結託して情報を流し、商人の荷物を横取りしたり船主達を奴隷として売り渡したりしていた証拠です。新魔王の証明つきですよ」
そういって証拠の書類とノームの親書を渡す。
「シンイチ陛下、よくやって下さった。すぐさまヴィアベルを捕縛せい！」
国王の命令で軍がヴィアベルの屋敷に向かった。

「なに？屋敷には誰もおらなかったと？」
戻ってきた軍から報告を受ける。
「はい。どうやってか軍の動きを察知して、船に乗って強引に出航したそうです。１０隻あまりが従っています」
ヴィアベルの動向をさぐっていた者が悔しそうに言う。
「ぐむむ。おそらく城の者の中にヴィアベルの息がかかったものがいて、通信魔石で知らせたのだろう。すぐに追いかけるのじゃ」
そういう王の命令を受けて、海軍がその動きを追った。

「あ、あそこにいるね」
上空からヴィアベルの船を捜すシンイチたちとセガール。
ヴィアベルの船団は上から探したらあっさり見つかった。

「海軍はあの辺りですか・・この風では、どうやっても追いつけそうにないですね・・」
セガールがうなる
「そうなんですか？」
「ええ、風は順風ですが、ヴィアベルの船団は小型の高速船ばかりです。とてもじゃないけど追いつけない」
セガールが悔しそうに言う。
「うーん。あいつらを道具袋に収納してもいいけど、海軍の面子を潰すしなぁ・・そうだ！」
シンイチが思いつく。
「シルフ、セガールさん。アトルチス海軍に協力しよう。船に降ろして」
そういって、アトルチス海軍の旗艦に降りる三人。

「あれ？なんでリップルがここにいるの？」
シンイチが旗艦にいるリップルに見つけて首をかしげる。
「なんでって、私は艦長だもん」
胸を張るリップル。
「形だけ、ですね。無理矢理乗ってこられたんですよ」
海軍の提督が呆れたように言う。
「・・・まあいいや。セガールさん。『風神の槍』で追い風を吹かせてください」
シンイチが提案する
「そうか！！風を吹かせて船を進められる」
セガールがうなずいて、強風を吹かせる。その風を受けて、どんどん距離を縮める海軍。

ヴィアベル船団が見えたら、今度は逆風を作って船団の帆を破り、動かせないようにする。
ヴィアベルたちは完全に捕縛された。
「ふふふ。シンイチ達はなかなかやるね～。この憎たらしいヴィアベルを捕まえるなんて」
艦長の制服を着たリップルがヴィアベルをにらみつける。
「アトルチス国を舐めた報いをたっぷり受けてもらうからね」
そういってずっとブーツで踏みつけていた。

その後、ヴィアベルへの尋問により、隠した宝物があるドクロ島の場所がわかり、財宝はすべて回収された。
奴隷にされた人々も保護され、セガールの家族やフェーバーの家族も開放された。

「勇者シンイチ殿よ。よくぞこの国から悪商人を駆逐してくれた。感謝するぞ」
そういって上機嫌に礼を言うポセイドニス王
「いえ、セガールさんやリップル王女の助けがあったからですよ」
シンイチが謙遜する

「ふふ。商人たちや奴隷にされた船主に補償をしても、ヴィアベルから没収した財産は余りある。なんでも言ってくれ。褒美をだすぞ」
ホクホク顔でいう国王。
「それなら、ヴィアベルが持っていた船をいただけませんか？」
「そんなものでいいのか。もちろんだ。全隻持っていくがいい。改めて街中で乗組員や漁師を募集するがいいぞ。ヴィアベルの悪行は街中に知らせているから、今回は応募してくる人間が多く来るだろう」
ポセイドニス王はそう言って機嫌よく笑った。

数日後
「それじゃ、ヒノモト国まで彼らをお願いします」
シンイチがセガールにそう依頼する。
「任せてください。これでも元は海運商人。全員を確実に運びますよ」
ヴィアベルから没収した１０隻の船に、乗組員や漁師たちを乗せて出航するセガール。
それにはフェーバーの家族や、奴隷から開放された人も多数乗っていた。
「ふふ。天使には背きましたが、この槍をもらったことだけは感謝しますね。いつでも順風満帆で早くつきますよ」
そういって『風神の槍』を掲げて風を吹かせる。
セガールの船団は順風を受けて、ヒノモト国に旅立っていった。

「さて、そろそろ次の湖沼の国ロブロールに向かおうと思うんだけど、どんな国なの？」
アトルチス港でリップルとお茶を飲みながらシンイチが聞く。
「うーん。湖や沼ばかりであんまり特徴ないかな。海の国とは兄弟国で、そこの王子ラックは私の許婚だよ」
あっさりというリップル。

「そ、そうか・・リップル許婚がいるんだ・・」
若干テンションが下がるシンイチ
「うん。3歳上でね。昔は一緒によく遊んだなぁ。最近は会ってないけど。思い出したら会いたくなってきた」
楽しそうに笑うリップル
「なぜかシンイチがっかりだね～」
シルフがからかう。
「べ、別にそんなことないんだからね！」
なぜかシンイチは焦って言った。

「姫さま、お城にお戻りください。大変なことが起こっています」
城から部下があわてた様子で茶店に飛び込んでくる
「大変なことって？」
リップルが聞く
「湖沼の国ロブロールが天使の使徒に滅ぼされました！！」
使者の言葉に皆が驚愕した。

湖沼の国ロブロール

湖の側に建てられたラグナ街で、一人の青年がこれからどうするか考えていた。
手には銀色の弓を持っている。
「ふふ。この『銀炎の弓』を俺にもたらされたのは、勇者を倒し魔族を滅ぼしこの国の支配者になれというお墨付きを天使様からもらったと同様だ。しかし、慎重に行わなければ他の使徒と同じように国につかまってしまう。どうしたものか・・」

彼の名はベンガンサ。
この国を攻めていた魔族に住んでいた村を滅ぼされ、親兄弟と幼馴染を殺され復讐を誓う者。
魔族を憎み、今まで数え切れないほど戦ってきた男である。

「あれから１０年になるのか・・」
何回も、何十回も思い返すあの日の光景。

ベンガンサは、湖沼の国の辺境にあるヘンザ村の猟師の子であった。
麦を作っている豊かな村で、子供時代は平和に過ごしていた。
「ペンガンサ兄ちゃん。これあげる」
毎日のようにじゃれついてくる３歳年下の幼馴染から、花輪をもらうベンガンサ
「いい加減俺ばなれしろよアリサ。いつも俺ばかりかまって。女の友達と遊んで来いよ」
そういって邪険にするベンガンサ

「兄ちゃん。最近冷たいね」
いじけたように言うアリサ
「家が隣っていうだけで、本当の兄妹なんかじゃないんだから。俺は行くからな」
そういってさっさと狩りに行くベンガンサ。

最近アリサが女らしくなってきて、村で噂されてきたのである。

「ベンガンサは要領いいよな。アリサがあんな美少女になるとは思わなかったぜ」

「幼女を育てて自分好みにすればいいのか。俺も今からしようかな」

そういってからかってくる村の同世代の少年達。

「うるせえよ。アリサは家が隣だから面倒みているだけだ。妹みたいなもんだ」

顔を真っ赤にして怒るベンガンサ

「妹萌え～」「幼馴染萌え～」「リア充もげろ」

友たちが意味不明な言葉でやっかむ。

最近ベンガンサはいつも不機嫌だった

「ふふ。最近アリサちゃんは女らしくなったな。あともう少しすると嫁にもらうか」

夕食の場で父がからかってくる。

「それがいいね。隣だしお似合いだし、お隣さんとうちは長い付き合いだからねぇ」

母は真面目に受け取って笑う。

「兄ちゃんずるい。アリサ姉ちゃんは僕も好きなのに」

１０歳の弟クレットが膨れる。

その様子をみて笑う両親。

ベンガンサの両親とアリサの両親も幼馴染であり、それこそ人生の殆どを一緒にすごしたといっていい。

「親父たちまでそんな事言うなよ。大体アリサは妹みたいなもんだろうが」

ベンガンサが必死に言い返す。

「はは、俺と母さんもそんな関係だったなぁ。２０年くらい前に親

父からそうからかわれて、真っ赤になって反論したものだ」
父親がなつかしそうに言う。
「ちょうど貴方が１５歳くらいだったわよね。急に冷たくなってどうしようかと思ったわよ」
母親が笑う
「ま、もう数年もしたら大人になって、俺の言った事がわかるようになるさ。大切な人間ってのは身近すぎてわからないもんだ」
「ベンガンサ。アリサのことは嫌いじゃないんでしょ？大切にしなさいよ。照れくさいからって冷たくすると後悔するわよ」
二人からからかわれて、ベンガンサは黙って食べた。

「もういい加減につきまとうな。うっとうしい！」
数日後、アリサに冷たい言葉をかけるベンガンサ
「どうして・・どうして冷たくするのよ。おにいちゃん」
アリサが泣く。
「おにいちゃんも止めろよ。俺は兄なんかじゃないんだ！！」
そういい捨てて森の中に入っていった。

森の中を獲物を求めて何日もさまようベンガンサ。
なぜか獲物が取れずに、村から何日もかかるような遠いところまで来ていた。
そうして孤独になると、頭が冷えてくる。

「アリサには悪い事を言ったな・・・。別にアリサが悪いわけじゃないし。村に帰ったらこれを渡して謝るか」
そういって自分が掘った木彫りのアリサの姿をした人形を見る。
「しかし、からかってくるのはなんとかならんかね。アリサを嫁にだって？ウプッ。ありえんだろ。オムツも替えてやった事があるのに」
なんだかんだ言って兄の気持ちになるベルガンサ。

その時、上空に大勢の影が見えた。その中に一つ大きな影がある。
「あれは！！！まさか魔族？こんなとこまで・・」
ヘンザ村の方向に飛んでいく
「まずい！！戻らないと」
あわてて村に戻るベンガンサ。
今までにないくらい必死で何日も走った。
しかし、見えてきたのは火に包まれている村の姿だった。

「魔王様。汚らわしい人間どもはすべて死にました」
魔将が報告する
「ふふ。たまには直接戦わぬとな。しかし、このような辺境の村では戦士などいないか」
魔王アンブロジアが退屈そうに言う。
気まぐれに湖沼の国の魔族コロニーを訪れて、気まぐれにヘンザ村を滅ぼしたのだった。

「しかし、皆殺しですか。今回は奴隷にされなかったのですか？」
魔将が聞く
「奴隷などわざわざいらん。暇つぶしに虫を潰しただけだ」
そういって空に飛び立つアンブロジア。
他の魔族たちもそれに従ってヘンザ村から飛び去った。

その姿を隠れて見ていたベンガンザ。
自分の村を暇つぶしに滅ぼした魔王が憎かった。
しかし、その圧倒的な強さが怖かった。
かなわずとも一矢報いてやると必死に頭が命じても、体が動かなかった。
結果、何もできずに隠れているしかできなかった。

魔族がいなくなった後、一目散に自宅に帰る。
しかし、自宅は全焼していた。両親も弟も焼死体で見つかった。
『ちくしょう・・ちくしょう・・」
彼に残された最後の家族を探して、焼け残っていた隣の家に入る。
中には両親に抱かれる形で血を流すアリサの死体があった。
「ちくしょう!!!」
アリサの小さな体に取りすがって泣くベンガンサ。
父と母の言ったとおり、ベンガンサは失って初めてアリサの大切さを思い知った。

村は全滅していた。
村人達の埋葬を終えたベンガンサは彼らの墓に誓う。
「俺は必ず魔王を倒し、魔族を全滅させる。その為だけに生きる」
そういってベンガンサは夜の闇に消えた。

それから１０年。
傭兵ベンガンサは魔族殺しとして有名になっていった。
ついた二つ名が『１０００体殺し』。
今まで殺した魔族が１０００体を越えるだろうという推測からである。
実際にはもっと殺しているのだが。

しかし、どれだけ魔族を殺しても、不幸のままであった。
あの日から１０年たっても、どの女を見ても感情が動かない。何を食べても美味くない。
ただ魔族を殺して食べて寝るだけの人生。
「アリサ以上の女がいるはずもない。俺の人生はあの時伴侶と共に死んだのだ・・」
そういって絶望の中をさまようベンガンサ。

そんなベンガンサに勇者に魔王が殺されたという話が伝わった。
まさかと思っているうちに、勇者が魔族と講和したということで、
魔族コロニーが撤退した。
殆どの人が喜び祝う中、ベンガンサは自分の復讐を奪った勇者を憎
悪し、さらなる絶望にとらわれた。
（俺は・・何をしているんだ。もはや復讐すらできぬ。アリサ・・）

死ぬより辛い絶望の中で眠るベンガンサ。
その夢に銀髪の天使があらわれ、弓矢を託した。
「ふふ・・面白いぞ。魔王を殺して俺から復讐を奪った勇者を滅ぼ
し、王となれか。よかろう。どうせいつ死んでもいい身だ。いい目
標ができた」
そういって笑うベンガンサ。

その日からベンガンサの新たなる復讐が始まった。

占者

「ふん。今さら魔族などと手を結び、世の中を平和にしようだと？反吐がでる。何人の人間が魔族に殺されたのだ。新魔王が戦争をとめようが関係ない。魔族の最後の一人まで殺しつくしてやる」
そういって街中をあるくベンガンサ。

そう思って歩いていると、光の聖霊教団の神殿があった。
「・・そうだ。光の聖霊教団の教皇は天使の神託を受けて勇者討つべしと命令したんだった。ならば使えるな」
そういって神殿の中に入るベンガンサ。

光の聖霊教団は二派に分かれて激しく議論を続けていた。
「各国は勇者の味方をし、天使を化け物と認定し、風の精霊シルフ様を光の聖霊様の代理人として認めた。各国の神殿の天使像は次々と壊されているときく。天使の使徒でさえあっけなく捕らわれるか、勇者の味方につく者がでる始末。これを期に、我等の信仰も変えるべきだろう」
勇者派が言う

「このようなときだから、我等の信仰が試されているのだ。何人の人間が魔族に殺されたと思っておる。いまさら魔族との講和など考えられぬ。天使に逆らい魔族に組みするものは地獄に堕ちるぞ」
天使派が反論する。

「天使は姿を現さぬだろうが。風の精霊さまはこのように姿を現し、我等を導いてくださる」
勇者派の神官がそういうと、風の妖精が現れる。

「あんた達も天使を早く見限ったほうがいいよ～。各国は次々と私たちの守護をうけているからね～」
そういって飛び回る妖精。
「・・・・だ、だが・・」
動揺する天使派。

「ふん。それくらいで動揺するな。そんな羽虫、俺が殺してやるよ」
野太い声がする。
神官達が見ると、がっしりとした青年が銀色に輝く矢をつがえていた

「だ・・誰だお前は。ここを何処だと思っている。神聖なる・・」
「うるせえ。『銀炎の弓』の矢を受けろ」
ベルガンサが矢を射ると、一直線に風の妖精に向かって飛んでいった。
風の妖精は必死に逃げ回るが、自動で矢がその後を追い、ついに精霊に突き刺さる。
矢から銀色をした炎がでて、風の妖精を焼き尽くした。

「ば・・ばかな。風の精霊様が・・」
うろたえる勇者派の神官
「そんな羽虫ごときが姿を現したぐらいで天使に逆らいやがって。魔族に対する憎しみを忘れて人間を裏切るつもりか。天使に代わって使徒である俺が裁いてやろうか？」
そういって矢を番えるベルガンサ。
勇者派の神官は次々に矢の餌食になって死んでいった。

全身を恐怖で震わしている天使派の神官。
周囲にはさっきまで同僚だった神官達の死体が銀色の炎で燃えている
「あ・・貴方様は・・」
神官が勇気を振り絞って聞く

「天使の使徒。いや、『１０００体殺しのベルガンサ』の方が通りがいいか。魔族に対抗する者だ。お前達は俺に協力しろ！」
そういって命令すると、神官達は一斉に跪いた。

「それでは・・国王を殺すと・・」
神官達の声が震える。
「ただ殺すだけじゃ意味がねぇ。民衆の前で天使の天罰を受けて殺されるんだ」
ベルガンサが言う。

「天罰ですか？」
「お前達は王にこう提案しろ。各国にならって天使への信仰を廃し、風の精霊を光の聖霊の代理人として崇めると。そうして街の広場で今まで神殿に祭られていた天使像を国王自らに破壊してもらうように頼め。そうしてすべての天使像が破壊されたと同時に、俺がこの矢で国王と兵士達を打つ。派手に銀色の炎に包まれて灰になる姿を見せ付けられりゃ、市民ももう一度従順な羊になるだろうさ。そうして混乱している所をお前等が天使の使徒を王として戴冠させれば天使の怒りは収まると言って治めろ。」

「は、はい」
「そうして数日後に俺を王に推薦すりゃ、この国は俺の物だ。お前達も今の立場を守れる」
「わかりました」
「決まりだ。それじゃ準備しろ。今日からお前達の王は俺だ」
そういって暗い顔で笑った。

ロブロール城
「なに？天使を排斥する一派が風の精霊によって罰を与えられ、全

員死んだと?」
新たに大神官になった者がそう報告する
「はい。風の精霊さまは祭りを開き、市民達の前で天使像を陛下自らが壊すべきだと仰いました。そうすれば、皆の前に姿を現してこの国の守護精霊になると仰いました」
「ぐぬぬ・・。そうか。わかった。我が国も風の精霊を崇めよう。皆、準備にかかれ」
そう命令する王。大神官は腹の中で笑っていた。

王が市民を集めて演説すると布告した当日。
街はお祭り騒ぎになっていた。
長きに渡った天使への崇拝に区切りをつけ、新たに風の精霊を崇めるとしいう歴史的転換の日である。
ベルガンサは準備を終え、群集にまぎれていた。

ふと通りの隅を見ると、一つのテントに人だかりができていた。
『世界を見渡す占い師ディオサ』と看板が出ている。
(ふん。またあの女狐がこんな事で商売してやがる。時間もあるし、ちょっと話でもするか)
そういってテントに入った。

テントの中には順番待ちの行列ができていた。
(これだけ並んでたら時間が過ぎるな。帰るか)
そう思って帰ろうとすると、呼び止められた。

「はい。そこの人。貴方の為にここで店を開いて待っていたのよ。心配しなくても今から貴方の時間を取っておいたわ。・・・皆さん、さっきから言っていたように、今から30分の休憩を取らしていただきます」
そういうと、待っている客はテントの外に出された。

「久しぶりね坊や。一年ぶりかしらね」
二人になって対面したとたん、ディオサがくすくすと笑う。金髪の絶世の美女だが、どこか幼い雰囲気もある。

「気持ち悪い女だぜ。始めて会った１０年前から全然容姿がかわらねぇ。魔族なのか？」
会うたびに質問することを聞いてみる。
「さあ、どうなのかしらね」
婉然と笑う。これもいつもの挨拶である

「しかし、なんたって俺に構ってくるんだ。お前は高名な占い師だろう。王や金持ちからどれだけ頼まれても占いなんかしないくせに、俺ら庶民の前に出てきては勝手に占いをしやがって。何を考えているんだ」
不思議そうに聞く

「ふん。王や役人、金持ちや英雄や勇者なんか見飽きているわよ。坊やみたいな志を持つ人間が成り上がっていくのを見るのが楽しいのよ」
そういって笑う。

「まあいい。お前の占いは外れたことはないからな。ほれ、見料だ」
そういって１０アルを渡す。
「いつもの１０倍ね・・」
「それだけ外したくないんだよ」
「わかったわ・・どれどれ」
水晶球をみつめるディオサ

「ふん。今からすることに対しては失敗する要素は今のところはな

いわね。勇者と戦うか・・あら?これは・・」
興味深そうに笑う

「ふふ。なるほど。これなら戦わなきゃならないわねぇ」
楽しげな様子
「おいおい。いい加減に説明しろよ」
いらつくベルガンサ

「あら、ごめんなさい。これは本当に偶然なんだけど、勇者の隣に貴方の大切な人がいるわよ。」
「・・・俺に大切な奴なんかいない」
暗く笑うベルガンサ

「つれないわねぇ。私が何回誘っても断るのは彼女が原因か。まあいいけど、これをもっていきなさい」
意味不明な事をつぶやくと、何かの液体が入った瓶を4つ渡す。

「これはなんだ?」
「記憶を取り戻す薬。一日一回服用すれば、4日後には完全に取り戻すわ。後は彼女に会った時にすべてがわかるわよ」
「彼女って誰だよ。いつも訳ありげに言いやがって。たまには先に説明しろや」
不満そうに言うベルガンサ

彼女はいつも偶然にベルガンサの前に現れ、意味不明な助言をする。
それに従った結果、生きて帰って来れた事が何度もあった。
そういうことがあるので信用はしているが、毎回気持ち悪い思いをする。

「偶然よ偶然。彼女に会ったら魂がわかるから。はい、今回はこれ

でおしまいよ」
そういって退出を促すディオサ

「おい、今日聞きたかったのは・・・」
「わかっているって王様。好きなように自分の人生を楽しみなさい」
そういうと彼女は次の客の相手を始めた。
「・・・すべてお見通しってわけか。本当に気持ち悪い女だぜ」
舌打ちすると、会場に戻っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3978x/

反逆の勇者と道具袋

2011年11月23日17時54分発行